妹尾ゆふ子
YUFUKO SENOWO



翼の帰る処

THE HOME OF THE WINGS

時の階梯

下

4


翼の帰る処
THE HOME OF THE WINGS
4
―時の階梯―
下
YUFUKO SENOWO
妹尾ゆふ子





翼の帰る処（ところ）

THE HOME OF THE WINGS 4

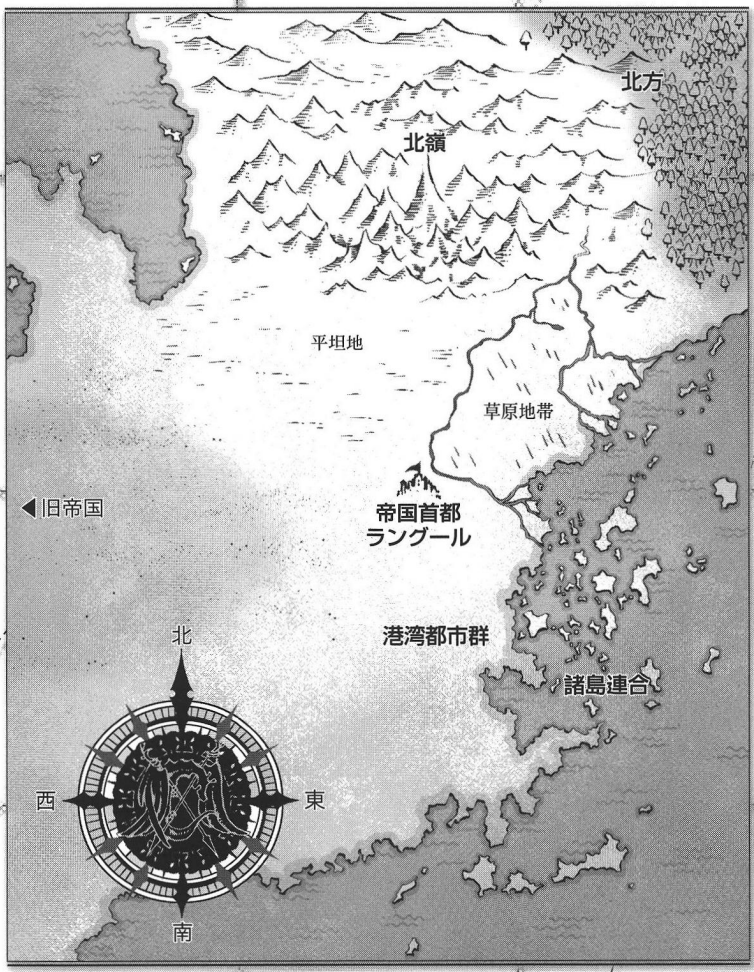
―時の階梯―

YUFUKO SENOWO
妹尾ゆふ子

Illustration/ことき

目次

第四章 7
第五章 121
第六章 233



THE HOME OF THE WINGS



ヤエト

「過去視」の力を持つ帝国の尚書官
病弱な身



皇女

皇帝の娘であり、
北嶺の太守として着任する



ジェイサルド

《黒狼公》に仕えていた騎士



ルーギン

皇女の騎士団長



ファルバーン

アルハンの遺民



ラキニー

皇帝の妹



タルキン

北嶺の民



グランダク

北嶺の民



キーナン

ヤエトの養子



ミアーシャ

《黒狼公》の妹



エイギル

ルーギンの部下



タナーギン

尚書官



スーリヤ

ヤエトが救った少女



スラジャ

《黒狼公》の代官



レイランド

北方ルス公家の公子



ルシル

レイランドの妹



ウィナエ

ターンの預言者



ギスケル

博沙国の民



第二皇子

皇帝の息子



第三皇子

皇帝の息子

セルク……北嶺の民

イスヤーム……北嶺の民

アルサール……北嶺の民

ナオ……皇女の女官

ナグウィン……商人



フェイヤド

叡智の門の番人

第



章

1

預言者と顔をあわせるのは、久しぶりだった。久闊を叙するような間柄でもないが、ではどんな関係かと問われても困る。

敢えていうならば、苦手な相手――といったところか。

「あなたでしたか」

そのせいか、口をついて出たのは挨拶とはいえない言葉だった。

無礼をとがめるでもなく預言者はうなずき、流れるような動作で、ヤエトの背後へ礼をとった。

「お久しゅうございます、皇子殿下」

さすがだ。もう駆けつけているとは。

自分も表敬すべきだという良識が、ヤエトの思考の表層を一瞬かすめ、そして消えた。残ったのは、目覚めてからずっとつづく、なにかに追い立てられるような気分だけだ。

「あなたの神は、なにを望んでおいでなのです」

ヤエトが問うと、預言者は彼に視線を戻して答えた。

「わたしが知るはずがありましょうか。かりそめに、お言葉をお預かりするだけの我が身。なにをお

考えかなど、とても」
「では質問を変えましょう。これから、なにをなさるおつもりです」
「なすべきことを」
「あなたはここにいた。わたしが来ることを知っていた。あなたの神が、そうさせた」
彼女もまた、ここに連れて来られたのだ。未来知の神ターンによって——そう考えれば、ヤエトやファルバーンが神気にあてられたことにも説明がつく。神が、ここにいる預言者に宿ったのだ。
無言のままの相手に、ヤエトは言葉をかさねた。
「理由があるはずだ。今、あなたとわたしがここにいる意味が」
風が、預言者の髪を揺らした。ヤエトをここに導いた魔法のような景色はすでに消えていたが、彼女は、どこか幻めいた雰囲気を帯びたままだった。
「真源へ、参ります」
「ここから……行けるのですか」
「そうです。迷路になっていますが、そこにいるアルハンの贄(にえ)が、道を知っているはずです。彼は真源に通じる地下に住み、ここを通って地上に出たのですから」
預言者の視線を追って、ヤエトはふり向いた。ジェイサルドは間近に立っていたが、暗いせいもあり、表情は見えない。
「覚えているのか」

「いえ……さだかには」
ヤエトは預言者に視線を戻した。彼女は身を屈め、邪魔な石の下にある入口を覗き込んでいたが、身を起こすと、確信をもって告げた。
「その者に、先導させてください」
行くしかないのだろう、とヤエトは思った。正直いって、体力にかなり不安を覚えるが。
「殿下は如何なさいますか」
ふり返って、ヤエトは眉を上げた。そこにいた殿下は、ひとりではなかったのだ。身支度をととのえた皇妹まで来ている。
視線があうと、皇妹はにっこりした。だが、返答を声にしたのは、もちろん第二皇子が先だった。
「行く」
「わたしも行くわ。いいかしら？」
「お心のままに」
預言者は慎み深く頭を下げて答えたが、ヤエトには、彼女の心の声が聞こえるような気がした。どうでもいい、とそれは告げていた。
今、彼女にとって重要なのは、ヤエトひとりなのだ。
「危険はないのか？」
「ございます」

実にあっさりと、預言者は答えた。ふたりの竜種に向けて言葉をつづけたのは、彼女なりの気遣いだったかもしれない。

「わたしの知り得る未来は、狭い範囲のものに過ぎません。ですので、皆様がご無事にお戻りになられるとは、保証いたしかねます。安全をお望みであれば、留まられる方がよいでしょう」

第二皇子は言下にその提案をしりぞけた。

「かまわん。先の保証などというものを、もとより、信じてはおらぬ」

「未来が視えるなら、その迷路とやら、あなたにも案内できるのではなくて？」

皇妹の問いに至っては、もはや身の安全とはなんら関係ない。生来の好奇心に忠実なだけである。

預言者は淡々と答えた。

「行き着く先は視えましても、道中すべてを視ているわけではございません。その者に案内させたことを、その場にいるわたしは存じておりましたし、それで十分でございましょう」

やや気詰まりな沈黙を払うべく、ヤエトはジェイサルドに声をかけた。

「そういうことだそうだ。案内をたのむ」

「かしこまりました。殿もつづけておいでください。ファルバーン、殿のお背中を」

もちろん、ファルバーンもそこにいた。誰も彼もが駆けつけて来ているようだ。

預言者の視線が動き、彼を認めたが、声をかけることはなかった。真源とは浅からぬ関係にあるはずのこの青年にすら、今はまるで注意を払う気がないようだ。

預言者の手から当然のように角灯を受け取ると、ジェイサルドは暗い通路の中に差し入れた。そして、斜めにさしかかる崩れた石をうまく避け、その分厚い身体を通路にねじ込んだ。

無駄に長い身体を折り、不安定な足下を確かめながら、ヤエトもジェイサルドの背を追った。

中は、ゆるやかな斜面になっていた。砂塵が積もっているわけでもなく、意外に瓦礫（がれき）などもない。狭いし、天井も低いから、圧迫感はひどいが、身体をのばせないほど窮屈ではないため、歩きづらさはほとんど感じずに済んだ。

助かると思う反面、不自然にも感じた。

――まるで、誰かが手入れしていたかのようだ。

ファルバーンが、ヤエトにつづいた。その後ろに預言者がいるところまでは、肩越しになんとか見えたが、さらに後ろとなると、もうわからない。後続の誰かが掲げている灯火のおかげで、逆光になってしまうせいもある。

「この通路は知っているか？」

声を低めて尋ねると、ファルバーンは小さく首を左右にふった。

「いえ、まったく」

少し行くと、ジェイサルドが立ち止まった。分かれ道のようだ。

だが、老騎士が足を止めたのは、ほんのわずかな時間のことだった。それまでの一本道を歩いて来たとき以上にしっかりした足取りで、ふたたび彼は歩きはじめた。

道がわかるのかと問いたい気もちを、ヤエトは抑えた。邪魔はするまい。わかってもわからなくても、彼らは辿り着くのだ――行くべきところへ。

しかし、真源とはなんなのか。

北方で軟禁状態にあったときに、ファルバーンに聞いた話では、真源とはアルハンの水源であるらしい。端的にいえば、未だ血を流しつづけているという、穢れた心臓がある場所だ。

思えばアルハンというのも不思議な街だ。豊富な湧き水は、都市をうるおすだけでなく、地下を通ってほかの土地にも達する。その美しく貴重な水が、本来は穢れそのものであることを知っている者は、どれだけいたのか。王族や重臣は知っていただろうが、民はどうか。水を得るには王族の存在が不可欠であるとしか、認識していなかったのではないだろうか。

水が穢れていることは、少なくとも、ヤエトが目にした書物にはしるされていなかった。より充実した書庫で長い時間を過ごしたらしい皇妹でさえ、知らなかったようだ。もちろん、沙漠のはるか西方にまでは伝わっていなかっただけだったのかもしれない。だが、アルハンにより近い、沙漠の東に来た今も、さほど事情は違わないように思える。

巨大な心臓が脈打っているところを見ることになるのだとしたら、かなり気もちわるいなぁ……と想像しているあいだにも、ジェイサルドは次々と道を選んでいく。

そもそも、この通路はなんのためのものなのか。

ジェイサルドはここを通って地上に出た、と預言者は語っていた。すると、彼は真源で暮らしてい

たのだろうか。いや、預言者は「真源に通じる」と表現した。通り道ということか。

――贄だったと聞いたが……。

すべての穢れを背負って殺されるはずだった、という話を疑ったことはない。彼の性格が極端なのは、魔物と名を交換して人間味を減じたせいもあろうが、その生育歴に負うところが多いだろう。

ヤエトの中にはまだ、夢の名残りが響いている。

――サイー、サーディー、サーヤリム。

低く唱えていた人物は、まさにこの通路を歩いたはずだ。

どんな人物だろう、とヤエトは考える。穢れとして廃棄された貴重品を売ろうと考え、実行に移すほどだ、信心は薄かったに違いない。真源にあるものがなにか、という本質的な問題も知らず、おそらく興味もなかっただろう。ただ現世の財貨を得たかっただけだ。この通路に気づいた理由はわからないが、なんらかの形で情報が漏れたのは確実だ。結果、ジェイサルドは地上への脱出路を得た。

かつて、自分が偶然にもこの老騎士に与えた名が、ほかでもないサーヤリムであったことが、少し怖い。これだけの距離を隔てて幻視できたはずはないが、もしや、と思ってしまう。

ひたすら下りつづけながら、やはり暗いのは苦手だ、とヤエトは思った。暗くて古い場所という組み合わせは、無条件に拒否したくなる。しかも狭い。ただならぬ圧迫感は、その狭さと、ここが地下であるという意識から来るのだろう。幸い、足はなんとか動いてくれていたが、そもそも、ヤエトは慣れない乗馬で疲労している上に、ろくに食べてもいないのだ。いつ倒れても不思議ではない。

——まぁ、なんとかなるのだろう。

ヤエトがぶっ倒れるのであれば、預言者が事前に教えてくれるだろう……いや、それとも黙っているだろうか？

不意に、ジェイサルドが口を開いた。

「もう少しです」

「真源ですか」

「いえ、儂の知る場所まで、ということです。真源ではないでしょう」

「やはり覚えていたのですね」

責めるつもりではなかったのだが、ジェイサルドは声を低くして詫びた。

「ご案内はできましたが、意図したものではないにせよ、殿に嘘を申し上げました。面目ない」

「忘れたと思ったものを覚えていることなど、珍しくもない。それに、思いだしたくなかったのかもしれない。望んで戻って来るはずのない場所でしょうから」

ジェイサルドの肩が、ふ、と動いた。緊張をといたような感じだった。

「はい」

短く答えたのみで、老騎士は足をゆるめることはなかった。次の分かれ道はすぐ先に見えているが、もはや惑うことなどなさそうだ。

ヤエトは後ろから来るファルバーンに告げた。

「あと少しだそうだ、後ろに伝えなさい」
ファルバーンにつづくのは預言者だ。彼女に告げる必要があるかは不明だが、それでも、その背後に延々とつらなっているであろう人々にとっては、多少なりとも、心が明るくなる報せであろう。
ついでに、ファルバーンに尋ねてみた。
「なにか、思いだしたりはしないか？」
「残念ながら。……申しわけありません」
「いや、気にするな」
つい訊いてしまうのは、間がもたないからだ。無駄な問いだと自分でも思う。
アルハンを脱出した頃、ファルバーンは幼児だっただろう。断片的な記憶があってもおかしくはないが、そもそも、ここを脱出経路にしたかどうかもわからないのだ。
――どちらが、アルハンに愛着を抱いているだろう。
贄として育てられ、逃げだした男と。記憶も責任もないのに、かつての臣下に糾弾され、民には恨みのこもった視線を向けられる男と。
あるいは、言葉を換えた方がいいかもしれない。どちらがより、アルハンを憎んでいるのか、と。
不意に、光が弱まった。
ジェイサルドが持つ灯火が消えたのかと顔を上げ、ヤエトはその想像がはずれたことを知った。
壁が、ない。天井も、ない。床すら、数歩先で途切れてしまっている。

「迷路は、ここまでです」

かれらが立っているのは、光も届かぬほど広い空間にせり出した、狭い縁のようなものであった。暗く感じたのは、壁や床などの反射光が失われたためだ。

後ろが詰まっていることでもあるし、あまり長く立ち止まってはいられないのだが、正直なところ、足がすくんだ。まっすぐ進めば、落下してしまう。なにも見えないからこそ、そこは確信できた。

暗くなった理屈はわかるのだが、暗さより、暗さをもたらすこの空間が、今は無条件におそろしい。その恐怖には、筋の通った理由などなにもなかった。ただ怖いだけだ。

「……ファルバーン、直進すると落ちると伝えてくれ、念のためだ」

ぼんやりしていたヤエトでさえ落ちなかったとはいえ、危険なものは危険だ。

「こちらへ」

ジェイサルドに導かれるまま、ヤエトは左に歩きだした。おそろしく狭いところを歩いている、とは考えないようにした。壁にふれている左手だけに意識を集中する。足下は、へたに気をやると却ってよろけそうだったので、これも考えないようにした。

一回だけ、ちらりと下に視線を落としてみたが、なにも見えなかった。つまり、ここから床までは、落ちたら終わりと考えてしかるべき距離があるわけだ……考えまいと思うほど、思考はそちらへ傾斜する。身体まで、勝手にかたむいてきた。これでは、命の危機に繋がりかねない。

気を紛らわそうと、ヤエトはジェイサルドに尋ねてみた。

「下に降りる階段でも？」
「いえ。ですが、この先に鎖があります。殿は、儂が背負いましょう」
自分で降りさせたら落ちるだろうといわんばかりである。
それにしても、階段でもなく、梯子ですらなく、鎖が通行の手段とは。ジェイサルドの記憶通り、鎖がそこにあったとして、錆びてもろくなっているのでは——と考えたのを見透かしたように、ジェイサルドは言葉をつづけた。
「予備の綱も持っておりますので、ご安心を」
例によってヤエトは着の身着のままであるが、ジェイサルドはぬかりなく、綱を持って来ているらしい。あればなにかと便利なものだとは、去年から身に染みているはずなのだが、今回も手ぶらである。自分の学習能力のなさには、呆れるしかない。
それから、どれくらい歩いただろうか。
鎖はジェイサルドが記憶していた場所にあった。見たところ錆びている様子はないが、予想よりかなり細い。本来、人間が往来するためのものではなさそうだ。
ジェイサルドはヤエトを背負うと決めているようだが、あの鎖がそんな荷重に耐えきれるのか。
といって、ひとりで降りられる気もしない。なにしろ底も見えない暗闇だ。こころもとないにもほどがある筋力と体力に、運を託したいとは思えない。
「支えられるのか」

「あちらに予備の鈎(かぎ)がありますので、綱も併用いたします」

命綱にするらしく、ジェイサルドは綱の一端を自分の腰に巻いた。もはやヤエトにできるのは、予備の鈎とやらが、しっかりしたものでありますようにと祈ることくらいだ。

準備を終えたらしいジェイサルドに、では、と背を向けられれば、体重を預けて摑まるしかない。どうしてこう選択肢が少ない方へ方へと追い込まれている気分になるのだろうか。つまり、追いつめられているような。

「あまり揺れぬようにはしますが、しっかりお摑まりください」

「わかった」

命が懸かっているのだし、念を押される必要もない。病死は想定内だが、墜落死はあまり予測したことがなく、心構えがなにか違うような気がする……などと益体(やくたい)もないことを考えているあいだに、ジェイサルドは鎖にぶら下がった。

あとはもう、目を閉じて我慢するだけだ。

いや、目は開いた方がいいのかもしれない。視覚を封じてしまうと、ほかの感覚がやたらと鋭敏になるのだ。たとえば、崩れた石が転がり落ちていく音であるとか……壁に跳ね返った次の音がおそろしく遠いが、聞こえたのだからまだましだとか、それが床までの距離かとか、湿った古びた空気があの夜の塔を思い出させるとか、そういえばかすかに異質な匂いがするとか、できるだけ揺れないようにといってもかなり揺れるとか、ジェイサルドに摑まっているだけでも疲れるとか、鞍擦れが意外に

痛みを主張しだしたとか、とにかく際限ない。
下降は永遠につづくかに感じられたが、それでも終わりは来た。
「着きました」
ジェイサルドが屈んだのを感じ、ヤエトはなんとか彼の背から自分を引き剝がした——手が、すっかりこわばってしまっている。うまく血がかよっていないようだ。
「いいぞ」
ジェイサルドが上へ声をかけたのにつられて顔を上げると、綱の端がするすると、光の輪の外へ出て行くところであった。
ふり向いた老騎士は、ヤエトの顔に憔悴を見てとったのだろう。珍しく、少し困った表情をした。
「お休みいただけるような場所が、あるかどうか」
「いや……ここで、暮らしていたのか？　子どもの頃……名前がなかった頃に」
「そうですな」
答えるジェイサルドの声は淡々として、感情の色がなかった。
それを、揺り動かしたかったのかもしれない。ヤエトは、彼が名付けた名を口にしていた。
「サーヤリム」
「はい」
「おまえはもう、名もなき者ではない。ここにいたときとは、違うのだ」

ジェイサルドは眼をみはり、それから、大きく息をした。深い、息だった。
「……殿のおかげです。呼吸が、しやすくなりました」
名を与えないとは、個人として認めないということだ。この場所の空虚さが、それを強調する。さっき底が見えなかったように、今はもう天井も、あの通路からつづく縁も見えない。見上げてもただ暗いだけのこの場所に子どもを押し込めていたのかと思うと、気分が悪くなった。
「苦し紛れにつけた名だが、今は役に立ったようで、よかった」
「今だけではありません、殿。この先ずっとです」
強い口調で答えられ、ヤエトは苦笑した。
「あの名がなくとも、なんら違いはない。わからないのか、ジェイサルドもまた、今は間違いなくおまえの名である、ということが」
「それは、……考え及びませんでした」
「では考えなさい。どちらも自身で手に入れた、おまえの名。昔とは違うと、知っておきなさい」
それにしても、広い。
なにもなさ過ぎて、落ち着かなかった。灯火の届く範囲に見えているのは、床と、かれらが伝って降りて来た鎖が下がる壁だけなのだ。その壁もどこまでも伸びていて、果てがないように思える。
「あの鎖は――」
ヤエトは言葉を切った。ファルバーンが降りて来るのが見えたのだ。預言者を背負っている。

床に足が着くとすぐに、預言者はファルバーンに回していた手をほどいた。いつもの超然とした雰囲気が、少しばかり薄れているように感じられた。さすがに、疲れたのだろう。たとえここで落ちて死ぬことはないと知っていても、だから怖くないというものでもないはずだ。

預言者は向きを変えた。この暗闇の中で、向かうべき場所がわかっているとでもいわんばかりだ。

「参りましょう。ここから先は、わたしがご案内いたします」

断言すると、彼女は床に置かれたままになっていた角灯を手にした。

「それがないと、つづいて来る者たちが――」

「わたしたちが進むのに、必要です」

「待てばいいでしょう」

預言者はヤエトを見た。視線だけで、その場に縫い留められそうだ。

「はっきり申し上げましょう。誰であれ、来るというなら来てもかまいません。ですが、それはこちらの手をわずらわせずに、勝手について来る限りにおいてです。これから行くところへ行かねばならないのは、わたしたちであって、かれらではないのですから。……では、参ります」

反論を許さない、語気の強さだった。

――視たのだろうな。

この先に待ち受けるできごとを、彼女は知っているのだ。

預言者は歩きだし、ヤエトたちもそれにつづいた。預言者の斜め後ろをヤエトが歩き、ジェイサル



ドとファルバーンはどうやら彼の後ろから並んでついて来る。
奇妙な四人組である。ひとりは未来視の預言者、ひとりは過去視の隠居。ひとりは魔物と名を交換した老人で、かつての贄。ひとりは清浄神の恩寵を享け、世が世なら王子だったはずの若者。
未来予知など大嫌いなヤエトが、諾々と、預言者にみちびかれるまま歩いているのも不思議なら、穢れを背負う運命に置かれていた男と、その犠牲の上に成立していた共同体の頂点に生まれた青年が並んで歩いているのも、おかしなものだと思う。今さらといってしまえばそれまでだが、この土地に来ると、その不自然さが際立って感じられた。
前後左右を闇に囲まれてしまえば、さっきまでの圧迫感とは逆に、自分が吸い取られてしまいそうな虚無しかない。自分もこの闇を構成する、名づけようのないなにかに変じていくのではないか——そんなことを、考えてしまう。
ヤエトは歩きつづけた。疲れてはいたが、ほかにどうしようもない。
——あの鎖は本来、水や食糧を運ぶためのものだったのだろうな。
今更確認しても意味はないし、過去に拘泥することで恩寵の力が暴走しても困るので、深くは考えないことにした。真実がどうであれ、第二皇子の部下たちは、あれが大勢の移動に耐え得ないことに気づくだろう。楔を打ち、予備の綱を垂らし、万全を期してから皇子や皇妹を運ぶはずだ。
後続が追いつくのに時間がかかっているのは、そのせいだろう。
預言者が手にする角灯が照らすのは、足下だけだ。天井はもちろん、行く手にあらたな構造物が見

える気配もない。ふり返ると、遠くにいくつかの灯りが見えた。こころもとないほど小さく暗かったが、なんとはなし、ほっとした。

それにしても、未来視とは不思議な能力だ。先がわかるといえば、多くの人は歓迎するだろう。だが、確定済みの未来が不幸なもので、避ける方法がないことを知ってもなお、喜べるだろうか。

彼女が得る幻視は、強く、揺るがしがたいものなのだ。この暗闇の中、一行を案内できるほどの。

――なるほど、床か。

角灯を高く掲げず、ただ提げているのは、彼女が見ているのが床だからだ。よくよく見れば、なにか描かれているようだ。一瞥(いちべつ)して判読はしがたいが、沙漠の装飾文字であろうか。色合いのことなる石材を組み合わせるという、塗装よりも耐久性の高い手法だが、当然、手間は大きい。

手間といえば、これだけの空間を作り上げるには、どれだけ必要だっただろう。人手、技術、時間……そして、それらを行使し得る権力。

「ここが、アルハンのはじまりだったのです」

ヤエトの心を読んだかのように、預言者がつぶやいた。

「はじまり？」

「沙漠は、人が暮らすには酷な土地。この空洞は、もとはといえば、神々の戦いの末に生まれたものだと伝えられているそうです。真偽のほどは、わかりません――ただ、アルハンを興した人々がはじめに住み着いたのがここだったとは、王家に伝わる話です」

ファルバーンは、と思って見返りかけたが、やめた。どうせ、知らないだろう。彼はアルハンの人間であって、そうでないのだ。血は繋がっていても、歴史は断絶している。
「あなたはそれを、誰から？」
「シェンヤ様からです」
はじめて聞く名だった。ヤエトの当惑を気配で感じとったのだろう、預言者は言葉をつづけた。
「そこにいらっしゃるファルバーン様の母君です」
「いつです」
「はじめにお会いしたときです。アルハンが戦火に沈む前でした」
預言者は歩みを止めない。第二皇子やその部下が追いつく気配は、まだなかった。負傷者でも出たのでなければよいがと頭の片隅で案じつつ、ヤエトは問いをかさねた。
「なぜ」
「預言があったのです。沙漠では、ターンの預言者の言葉は重んじられるもの。ですから、わたしはシェンヤ様と若子様をお逃がしすることができたのです」
ひゅっ、とするどい音がした。ファルバーンの呼気であろう。ヤエトもおどろいたが、本人はその比ではないはずだ。
「あなたが？」
「ターンの神の御心のままに」

預言者は答え、そのまま歩きつづけた。仔細を訊いてもよいのか迷いつつ、ヤエトは尋ねた。
「どうやったのです」
「堂々と、城を出ただけです。若子様のお命をお守りするためには、その必要がありました」
「包囲前だったのですね」
「そうです。その後、お連れするべき場所へお連れし、お別れしました。シェンヤ様は、迎えが来るまで留まってくれと仰せでしたが、そうする必要がないことを、わたしは知っていました」
「あなたは――」
言葉は勝手に出て、そして途切れた。
あなたは、そうやって救うことができたのではないか。より多くの命を、都市を――そんなことを問うて、なんになるというのか。
彼女は、そうしなかった。彼女が関与することができたのは、はじめからそう決まっていた部分だけだ。自分がやると知っているから、やる。困難なことでも、なし遂げる。できないことは、しないだろう。できないというより、やらないとわかっていることなのだ。
どうしようもないこととはいえ、苛立ちを覚え、ヤエトは口を引き結んだ。
やはり、ターンの神やその信徒とは、相容れない。
ジェイサルドが尋ねた。
「では、先代が王妃と王子の居場所をご存じだったのは――」

「お伝えはしてありました。わたしが手をお貸ししたのは、それだけです」
一件に先代《黒狼公(こくろうこう)》がかかわっていたとしても、不思議はない。ジェイサルドには、沙漠の悪鬼としての人脈がある。先代の命とあらば、王家に恨みがあっても、母子を保護しただろう。
当事者であるファルバーンは、無言のままだった。
預言者が命の恩人であると知っていたようでもないし、おそらく初耳なのではないか。礼の言葉のひとつも述べるべき場面だが、預言者の告白は、聞く者を感動させるような色がなかった。その素っ気なさは、尚書局に山積された書類の束に似ている——誰がやっても同じ、定型の書式を埋めていくだけの単調な作業だ。理屈は通っていても、感情に訴えかける要素がないのだ。
結局、会話はそこで途切れた。
そのまま、沈黙がどれくらいつづいただろうか。果てもないかと思われる距離を歩き通した末に、ようやくふり返った預言者は、角灯を掲げて告げた。
「出口が見えました。お顔をお上げなされませ」
いわれてみて、自分がやたらと下を見ていたことに気づく。明るいのが床だけなのだからしかたないが、首と背中が、やや疲れた。
「これは……」
思わず、といった体でジェイサルドが声をあげた。
そこもまた、地上にあった通路の入口同様、石壁が崩れていた。本来、塞がれているべきものだっ

たのだろう。その崩れた石の奥に、地上に通じるものよりさらに狭そうな通路が見えた。
「これが真源に通じる道」
預言者の声は、よく響いた。喋りかたを変えたのだろう。
「斥候をやろう」
背後から第二皇子の声がして、かれらが追いついたのがわかった。
だが預言者はその提案を無視し、よく通る声をはり上げた。
「来ます。武器をとりなさい！」

2

なにが、と間抜けな問いを発する暇もなかった。
床から黒い煙がたちのぼったと思うと、それが半透明のなにかになった。なにか、としか表現のしようがない——巨人のようでもあり、あるいは半人半獣、見たこともないような姿をした、なにか、である。一体ではない。角灯の光が届く範囲はすべて、そうした異形の存在で埋め尽くされた。
「魔物！」
声をあげたのが誰だったかはわからない。
「方陣を組め！」

「殿下をお守りせよ！」
「退路を確保っ！」
怒号が飛び交う中、ジェイサルドが動いた。身体ごとひったくられるように、ヤエトは通路の中に押し込まれていた。
「走って！」
ジェイサルドは叫び、さらにヤエトを押し込んだ。真っ暗闇の中にどんどん押し入れられていることに気づいたが、もはや自分ではどうにもできない状態だ。
今度の通路は斜面ではなく階段だ。こんな勢いで押されると落ちる、と思うが、そこはジェイサルドなので、ぬかりなく彼の首元を摑んでいた。落ちる前に首が絞まる計算だ。それも嫌だ。
「半分は幻術です」
ジェイサルドが告げた。
「なに？」
「呪師のしわざでしょうが、半分は実体があります。魔物です」
呪師といえば第三皇子を連想するが、はたして、あの皇子がこんな沙漠の縁でなにが起きているかに注意を払っているだろうか。時宜を見て襲わせる、などという芸当ができるのか。
階段をどんどん下りさせられながら、可能といえば可能だろうな、とヤエトは考えた。《天地輪》を通じ、ヤエトが博沙国に来ていることを知っていても、おかしくはない。ヤエトはおまけとしても、

皇妹が同行しているのだ。滞在中だという話は出るだろう。

あとは、呪師の力がどこまで及ぶかだが、少なくとも都にいながら北嶺の皇女の名を奪うところまでは、やってのけているのだ。距離は、さほど大きな障害にならないと見ていい。

「あれは、倒せるものなのか」

「はい。ですが、たやすくはないでしょう。考えかたも、動きも、人とは違う。予測がつきません。剣を交えるにも困難です」

「なるほど……では、二の君や皇妹殿下の御身が――」

「ご案じめされますな。殿はこの先のことだけ、お考えを」

無論、足下のことだけで精一杯だ。凄い勢いで押されるので、真剣に足を動かさないと、落ちる。預言者はどうなっているのか、後ろから来ているのかもわからない。とにかく必死で階段を下りつづけ、たまによろけて首が絞まりかけたりしつつ、もう限界だ、息がつづかない、と思ったところで足が違和感を覚えた。

――階段が終わった？

「待て」

つんのめりそうになりつつも、なんとか命じて、ヤエトはそろそろと足を前に出してみた。やはり、平坦なようだ。それにしても真っ暗で、なにも見えない。

「底に、着いたかもしれない」

「広さはありますか」
ヤエトは両手を開いてみた。
「少しは」
「では、儂が前に」
ジェイサルドと入れ替わると、老騎士は、少し見て参りますといって先へ進んだ。見るといっても、この暗闇でなにが見えるのか。
じきに、真っ暗な空間を前にただ佇(たたず)むのは、行く先もわからず階段を下りつづけるより、さらに怖い、ということがわかった。やることがないから、いろいろ考えざるを得ず、そしてヤエトは悪い方へと考えるのが得意過ぎるのだ。
たとえば、このままジェイサルドが戻って来なかったらどうしよう、とか。
と、すぐ後ろから声がした。
「もうじきです」
「真源ですか」
預言者の装身具が鳴り、さらに声が近づいた。
「そうです……けれど、そこが最後の目的地ではありません」
もう無理です、とヤエトは答えたくなった。だが、預言者の口ぶりからすれば、無理でもなんでも行くことになるのだろうとは見当がつく。

「最後の目的地とは、どこなんです」
「真源は、そこへ辿り着くための経路に過ぎません。歪みを利用して、飛ぶための」
「飛ぶ？」
はじめに連想したのは、巨鳥の姿だった。だが、こんな地下に鳥がいるはずもない。第一、あれは北嶺の生き物で、今は氷雪に閉じ込められているはずだ。
だが、ヤエトの問いに預言者が直接答えることはなかった。
「追跡者の目をくらます必要がありますから」
なんだかありがたくないご託宣である。
「追跡者とは、呪師ですか」
「はい」
「真源に近づくほど、かれらの力は増すのでは？」
「近づいているのはわたしたちであって、呪師ではありません。それに、真源はかならずしも呪師の味方とは限らないのです」
「と、いうと？」
「力を引き出すつもりで呑み込まれることもある。そういうものです」
「……なるほど」
「殿」

ジェイサルドの声がした。
「この先は、平坦なようです。魔物の気配もございません。参りましょう」
「わかった。しかし、灯りがほしいな」
「灯しましょう」
預言者の提案に、ヤエトはおどろいてふり返った。
「どうやって？」
「角灯に火を入れるだけです」
「ああ……なるほど」
「追われないように消していました。べつに、火を灯す魔法が使えるわけではありません」
つけ足した言葉に、どこかいたずらっぽい響きがあって、ヤエトはなんとなく意外に思った。預言者がこんな風に喋るのを聞いたのは、はじめてだ。真源に通じる暗闇の中でほがらかになるというのも、どうなんだ、とは思うが。
ややあって、預言者は火を入れ直した角灯をヤエトに渡した。そのままジェイサルドに手渡そうとしたところ、いざというときのために両手を空けておきたい、と辞退された。いざというときなど来ないでほしいものだが、もっともな主張なので、そこからはヤエトが灯りを持つことになった。
一行は無言で進んだ。ジェイサルドが、音を聞きたいといったせいもある。無駄口を叩いている場合でもなかった。

だいたい、ヤエトは疲れ果てていて、もうろくに頭も回っていない。こんな状態で真源へ連れて行かれても、あるいはその先にあるらしい謎の目的地とやらへ着いたとしても、彼は無駄に長くて骨張ったお荷物と化しているだけで、なんの役にも立たないのではないか。

どれくらい歩いたのか、時間や距離の感覚が曖昧になって久しい。空気は湿り気を帯びて、なんだか気もち悪い。あたりは変わらず暗いままだが、うっすらと色を変えつづける虹のようなものが見えたり、あるいは複雑な祈りの文様の断片が、曖昧な輪郭をさらに滲ませながら回転しているような気がしたりと、ヤエトはだんだん自分の知覚に自信が持てなくなって来ていた。

前方にほんのりと灯りが見えたときも、そういうわけで、幻覚だろうと思った。

だが、ジェイサルドが身構えるのを感じ、これは違うとわかった。本物だ。

風が動き、預言者が告げた。ヤエトの耳元に、息がかからんばかりの近さだ。

「大丈夫。あれは、あちらがわたしたちを発見したという合図です」

「あちら？」

「ええ。ここに来ることになっていましたから」

預言者の話は、わけがわからなくて当たり前――そんな認識が、すでにヤエトの中には定着しそうになっている。

「誰が？」

預言者はその問いを無視して、ヤエトの横をすり抜け、前に出た。

「先に参ります。その方が、話が早くなりますから。ゆっくりいらしてください」
灯火も持たずに、彼女は小走りに立ち去った。呼び止める隙もない。
ジェイサルドがそれを見送りながら、ヤエトの耳にささやいた。
「あの女、信用できるのですか」
「少なくとも、未来視に関しては嘘をつけないはずだが……」
一応もっともらしく答えはしたが、ヤエトは、その場に座り込みたい気分でいっぱいである。もう、なにもかもどうでもいい。歩きたくない。
ファルバーンが彼の左腕をとった。
「どのみち一本道です、行くか戻るかしかありません。参りましょう。お手を、肩に」
断る余裕もない。ファルバーンの肩に手を回し、体重をかなり預けながら、ヤエトはふらふらと歩きだした。ジェイサルドが自分で背負うと主張しないのは、やはり身軽でいたいからなのだろう。
それだけ警戒している、つまり預言者など信じていないというわけだ。
預言者の後ろ姿は、少しずつ遠ざかって行く。ここで小走りできる体力が羨ましい。自分だって、せめて一日馬に揺られていたのでなければもう少しは……と考えてみたいところだ。しかし、潔く認めるべきだろう。たぶん、これだけ歩いたり駆け下りたりした上で走るのは、無理だ。
今も、ファルバーンに寄りかかっているのでなければ、まともに歩けていないに違いない。
しかし、歩きかたがまともだろうがなんだろうが、かまっている余裕はなかった。着くべきところ

に着かないと、休ませてもらえないのだ。

ヤエトは自分の体力のなさを呪い、ターンの神がもし禿げていないなら禿げてしまえと呪い、嫌なところで襲撃を仕掛けて来たせいで走らされたと呪師を呪い、後ろから容赦なくせっついたジェイサルドのことも少し呪い、そもそも隠居を旅に出させた皇妹を呪い、アルハンへの訪問を許した第二皇子を呪い、だいたい北嶺になんか左遷させた奴がそもそもの元凶なのだと今さらながらに某人を呪い、その負の思念に集中することで、なんとか歩き通した。

ヤエトの主観では、それは永遠とも感じられる道のりだった。歩きだしたときもふらふらだったが、ようやく立ち止まることを許されたときには、支えがなければ立っていられない状態に陥っていた。

なんだかこれは、とヤエトは思った――熱が出たようだ。情けないことだが、過労で。しかし、ここもまだ、休むべき場所ではないらしい。ヤエトは霞む目を凝らし、前を見た。

預言者の影に隠れるように身をすくめているのが、待ち合わせていた人物なのだろう。

――何者だ？

背丈は子どものようだが、顔は老人だ。手も大きい。視線を落としてみれば、足も大きかった。少なくとも預言者の足より大きいのは確実だ。

「多過ぎる！」

声は甲高かったが、はっきりとした共通語を喋っていた。明瞭過ぎて、いっそ異様に感じる。

その異様な叫びに対する預言者の回答は、やたらと世俗的かつ現実的だった。

「金貨なら、渡してあるでしょう」
「報酬ではない、人数だ！　儂の姿を晒すつもりだったな！」
「馬鹿らしい」
答えたのはジェイサルドだった。ぎょっとして預言者の服の裾を摑み、身を隠そうとする相手を見下ろして、老騎士はつづけた。
「そなたの姿なら、前にも見ておる。そちらもそのはずだ。となれば、晒すの晒さないのという話ではないな。平等というべきだ」
「な……なんだとっ！」
その生き物は顔を突き出して叫び、そして引っ込んだ。
ヤエトはまだ呆然としている。幻覚……ではないのだろうと思うが、ではなんなのだ。こんなものの話は聞いたことがない。
ジェイサルドは平然とヤエトを見返り、こう断じた。
「沙漠の小鬼です」
「……小鬼」
「はい。殿にはまだお話ししておりませんでしたかな、沙漠の昔話にあるのです。人を化かして、一夜にして街から街へ移動させる小鬼が、登場するものが」
ヤエトはくらくらする頭を支えようとしたが、身体が揺れているため、手をあてても、支えること

ができているのだかどうか判然としない。発熱した状態で旅をするのは二回目だが、あのときも、ひどかった。皇女の名を呼びに北嶺を目指していた、あの――。

「あ」

不意に情報が繋がった。

間抜けな声を発したせいで、全員がヤエトに注目してしまった。小鬼でさえ、預言者の服の裾をしっかり握りしめたまま、顔を覗かせている。

しかたなく、ヤエトは小鬼を見下ろして尋ねた。

「あなたは、ナグウィンの友人なんですね？」

一夜にして街から街へ――という昔語りとは少し違うが、一瞬にして低地から高地へ移動する能力などというものが、そう何種類もあるはずがない。

ジェイサルドが見たことがあるというのも、そのときだろう。ヤエトを置いて偵察に行ったときだ。もちろんナグウィンは、小鬼自身と面談中だったはずだ。

「誰が友人だ！　あんなのは金貨だ！」

切り捨てられたナグウィンには、同情すべきなのか。それとも商人にふさわしく、財貨にたとえられたことを喜んでやるべきか。

「姿を見られるのを極端に嫌うのですけれど、根は悪い生き物ではありません」

預言者が弁護してやると、小鬼はまたその裾に顔を隠した。大きな足だけは、にょっきりとその端

から覗いているのだが。
ジェイサルドがかすかに鼻を鳴らしたのにヤエトは気づいた。おそらく、善くもないがな、という意味だろう。わざわざ口にしないだけだ。タナーギンならあの大声で、善悪の定義についてぶちかましてくれるのだろうな、と思う。ここには机がないから、壁でも叩きだすかもしれない。
――タナーギン？
なぜ彼を連想したのかと考えて、すぐに気づいた。矮軀のせいだろう。失礼だと思うべきか、失礼と思うことを失礼と考えるべきなのか。矮軀であると思うことが礼を失しているというなら、それこそが差別ではないか。
ぼんやりとそんなことを考えていると、それまで無言だったファルバーンが口を開いた。
「真源というのは、ここなのですか」
「国王陛下がお籠りになられた場所でしたら、この先に入口があります。ご覧になりますか？」
ファルバーンに向けた預言者の眼差しは、あたたかいものではなかった。つづけた言葉もまた、ひどく冷たく、するどい。
「行かれるなら、ご自由に。ですが、我々は先に参ります。時間の猶予がありません」
「それは、ないでしょう」
ヤエトが割って入っても、預言者の口調は変わらなかった。
「これはファルバーン様の問題です。お父上が籠られた場所も、お母上の居場所も、わたしはお教え

できます。お望みでしたら、そうしましょう。ですが、それはこの先のことに関係がありません。はっきり申し上げましょう。これから行く場所を、わたしは予見しています。ですが、そこにファルバーン様のお姿はありません。お姿がないからといって、おいでではないとは限らない――予見の場面で、たまたま、わたしの視界にお立ちになっていないだけかもしれませんから。ですが、暫し道を分たれるのであれば、今が機会かもしれないのです」

再度、ヤエトは口を挟んだ。

「母君は、ご存命なのですか？」

預言者は微笑んだ。少しも心が明るくなるような笑みではないな、とヤエトは思った。

「わたしはただ、ファルバーン様がお望みになればお伝えするようにと、ターンの神からお言葉をお預かりしているだけなのです。お伝えすれば、ファルバーン様は母君の足跡を辿ることがおできになるでしょう。ですが、そのお言葉をお伝えする意味があるのも、今だけ。お選びください。過去か、それとも未来か。血族をとるのか、より多くの民をとるのかを」

ファルバーンは口を引き結んだ。顎に、力が入っている。かなりの辛抱をおのれに強いているのだろう。

ややあって、彼はようやくその口を開いた。

「では、問おう。先とはなんだ。あなたは、我々をどこへ連れて行こうとしている」

遅滞なく、預言者は答えた。

「迷宮のシンリール」
光がしりぞき、ふっと闇が濃くなったように、ヤエトは感じた。

3

「シンリールにまつわる物語なら、わたしも少しは知っている」
夜明け前くらいであろうか。時間の感覚が曖昧になって、よくわからない。ぞくぞくするのは、冷え込みが厳しいせいもあるだろうが、体調によるところが大きい。寒いし、熱い。矛盾する現実に、うんざりする。
ヤエトは野営の火を守るジェイサルドの隣に座り、かじかむ手をさしのべたり、薄っぺらい毛布の内側に戻してみたりを、くり返していた。横になると咳き込んでしまい、うまく眠れないのだ。
空は暗い。空だけではない、沙漠も暗い。
それでも地下のような圧迫感がないだけで、ずいぶん気が楽になった。ついでに体調もよくなればと思うが、そんなうまい話があるはずもなく、ヤエトの熱は下がらない。喉の痛みから察するに、このまま上がるのではないか。経験上、体調の悪化はそういう手順を踏むことになっている。
「子ども向けの本で得た知識だ。問答と迷宮、図書館……翡翠（ひすい）の扉……」
「あまり、お話しにならない方が」

ジェイサルドも、すでにかなりの経験を積んでいる。ヤエトの体調悪化に関して、だ。

彼がぬかりなく持ち歩いていたのは、綱だけではなかった。腰に提げた小袋から、干した果皮だの薬草だのはともかく、小さな碗まで出てきたのには、さすがにおどろいた。それらの道具や水場で拾ったものを駆使し、ジェイサルドは煎じ薬を作ってのけた。まったく嬉しくない味わいなのは、飲む前から予測がついていたが、熱が上がっていたせいもあるのか、不覚にもほろりとしかけた。

ただの食糧ではないのだ。ヤエトのために、持ち歩いてくれているのである。これで味に文句をつけるようでは、ヤエトは自分を恥じねばならなくなる――とはいうものの、猛烈な味だったことは、否定しようもないが。

解熱よりも、とりあえず熱に負けない体力をつけるためのものだというジェイサルドの言葉通り、煎じ薬を服用しても熱は下がらない。だが、飲む前よりは身体が楽になった。

「考えを、まとめたくて」

いいわけがましくつぶやいてはみたものの、それが、喋っていたいほんとうの理由なのかもよくわからない。ただ不安なのかもしれなかった――なにが不安なのかも、やはり、わからないのだが。

「ご無理はなさいませんよう」

ヤエトはうなずいて、咳払いをした。痰がからんで気もち悪い。

「シンリールは迷宮の街。叡智を守ると伝えられる……そうだろう?」

「はい。智慧を求める者はその街を訪れ、番人との問答を経て、迷宮に入ることの可否を得たと聞い

ております。ただ、昨今はそうした流れは形骸化し、写本師たちが集う街になっておりましたな。そこに流れる水は、インクでできているという笑い話もあったほどで」

「実際には清浄な水が流れ、繊維質の葦がよく生え、それを利用した製紙技術が発達した」

「その通りです」

「憧れの街だった……行けることがあれば、と思っていました」

ヤエトは微笑し、そしてまた、咳き込んだ。

あのあと、ヤエトは少しばかり気を失っていたらしい。そういうわけで、彼の意志は完全に無視されたまま、例の小鬼の力で遠方へ飛ばされたのだ。

同じ力で二度も遠方へ移動しておいて、その仕組みを仔細に観察できていないのは、残念だ。小鬼が人に見られるのを厭うにしても、今回は姿を晒していたというのに。

預言者によれば、真源付近を筆頭とする、力が滲み出ている場所――それを彼女は歪みと表現していたようだ――を出発点にすれば、より少ない力でより正確に、小鬼がその特技を使えるのだそうだ。送り先もそうした場所であれば、歪み同士を繋ぐだけであるから、さらに容易になるらしい。

つまり、とヤエトは痛む頭で考えた――北嶺ならば、あの崩れた城趾がそういう場所だということだろう。どこへでも送れるわけではないとは、そういう意味だ。

もっといえば、ナグウィンの諜報活動も、ある程度はあの小鬼に移動手段を負っていたのだろう。金貨一枚は安いものではないが、表向きは商人でも、実は皇帝直属の伝達官である。必要だと皇帝が

判断すれば、いつでも引き出せたはずだ。先年の冬は、ジェイサルドの監視下にあった上、人目を避けての急な逃避行となったため、皇帝の部下と接触できず、資金に苦しんだのに違いない。

小鬼は所詮、小鬼である。勅命という言葉に動かされたりはしないだろう。金貨を要求するのも、ただ黄金のたぐいに目がないだけなのではないか。

そのへんも詳しく知りたいが、あの嫌がりようでは次の機会があるとも思えない。残念なことだ。

送られた先は、小さな井戸がある水場だった。沙漠越えのときには見落とされていたのかもしれないほど、ささやかなものだ。隊商路からも、はずれている、と聞かされた。

隊商とはぐれた者が暫し助けを待つための場所だとも、預言者は語っていた。ここからシンリールまでは、歩きづめにして一昼夜の距離だという。

本来は食糧の備蓄があり、かれらを養ってくれたはずなのだが、シンリールが滅びた今、この水場を見回り、補充をする者も絶えている。焚き付けの束と毛布だけは、かろうじて残っていた。

井戸水は汚染されてはいないと、ファルバーンが保証してくれた。

そのファルバーンは、今は焚き火に背を向けて横になっている。決意の場面は見そびれたが、結局、彼は血族を後回しにして、こちらを選んだのだ。

ふと、ジェイサルドが苦笑を漏らした。

「昨今などと、……もう十年以上、いや二十年近く前のことを」

——そんなに前になるのか。

あらためて考えると、ずいぶん遠い昔になってしまったものだ。昨日のことのように思うわけではないが、何年前という意識は薄い。

沙漠越えは、遠い夢のようだ。沙漠の向こう側での暮らしは、さらに遠い。だが、その遠さは、一瞬でたぐり寄せることのできる遠さだった。分厚い本の頁をめくるにも、一頁ずつではなく、栞を入れた箇所を開くような具合だ。歳月も、距離も、自在に飛び越える。

ヤエトは今、その栞のひとつを目印に、記憶を辿っていた。

――着いたときには、もう燃えていた。

どの都市にも、火は使われた。だが、ことさら炎の記憶が強いのは、シンリールだった。おどろくほど、よく燃えたのだ。紙が多かったからだろう。軍の最後方に位置する荷駄が出発するときも、火勢はまだおとろえていなかった。

彼が着いたときにはもう、名高い図書館や写本工房群は、すべて炎の中だった。かろうじて救えた本は、ほんの十冊程度。脱出を図った住民から押収されたと思しき本が、そのまま火に投じられそうになっていたものを、兵から奪い取って、……それだけだ。

熱風にあおられて舞い散る紙片を追い、かき集めたかった。だが、そんなことができるはずもない。ひとつの都市を陥落させたら、すぐ次へ向かわねばならない。兵馬を養うための補給物資は、街から略奪する以外の方法では手に入らないのだ。輜重隊は、崩れた都市から運べるだけのものを運び出し、先行する軍を追う。余計な荷物を増やす余裕も、無駄に使える時間もない。

たかだか十冊の本でさえ、同僚の尚書官が協力してくれなければ、置いて行くしかなかった。

あのときの無力感と絶望を、ヤエトは長く忘れなかった。そして思いだしてしまった今、深い淵に突き落とされるような心地がしている。あのときと、同じように。

喋りたいのは、そのせいかもしれない。

「二の君や、皇妹殿下は、どうされているだろう……」

あの二人が容易に命を落とすとは思えないが、万一ということはある。だが、ジェイサルドの返事はヤエトの予測しないものだった。

「おそらく、捜索隊を叱咤激励なさっておいでかと」

「捜索隊？」

「殿をお探しするための、捜索隊です」

なるほど、とヤエトはつぶやいた。もちろん、そうなるだろう。魔物が出ようが建物が崩れようが、捜索に向かわざるを得ない兵たちに、ヤエトは心の中で詫びた。

「北嶺で、留守居をしながら語り合った日が、なつかしい。隠居して、昔語りを教えてもらおうなどという話をしていたのは、去年なのに」

「そうですな。ずいぶん遠くまで来てしまわれましたな、殿も」

「殿、などというものになる予定はなかったですが、首尾よく隠居にはなれました」

「お祝い申し上げます」

隠居祝い蠟燭の一本も、灯しておきたいところだ。そういえば、できあがった現物を見ていない。
「あまり、思ったような隠居ではないですが」
――このまま、行方不明で済ませられればなぁ。
隠居を達成した今、次に目指すべきは、行方不明かもしれない。
「では、理想の隠居を追求なさいますか、これからは」
「それもいいですね。まず、部下はいらないので、あなたともふつうに喋りたい」
「今でも十分、ふつうに喋っておいでです」
「わたしは、そうかもしれない。やや、困ったことに。でも、あなたは違う」
「殿のぶんまで、貴族の体面をお守りいたします」
「その殿を辞めたい」
「お望みがかないますように」
ジェイサルドの口調は、おそろしく平板だった。たぶん、無理だと思っているのだろう。非常に残念だが、その公算は高いと考えざるを得ない。
「わたしはまだ眠れそうもない、おまえは少し寝なさい」
「お言葉ながら」
「明日はわたしを背負うことになりますよ。だから、寝なさい。命令です」
「殿をおひとりにはいたしかねます」

「わたしがご一緒しましょう」

言葉を挟んだのは、預言者だった。いつの間に身を起こしていたのか。眠たげな様子もなく、疲れも見えない。まったく、不思議な女性だ。

食い下がるかと思ったジェイサルドは、意外にもおとなしく横になった。彼女は、老騎士の信頼を勝ち得たのだろうか。少なくとも今は、警戒をゆるめてもよいと判断されたようだった。

もちろん、預言者がヤエトを直接害する気であれば、機会はいくらでもあった。たとえば、ジェイサルドが先行してヤエトを置いて行ったときが、好機ではないか。

――あれは、試していたのかもしれないな。

ファルバーンがいるから、ある程度の保険はかけられるし、灯りがないから、実はそう遠くまで行かなくてもわからない。預言者におかしな動きがあれば、一瞬でその場に戻れたはずだ。ジェイサルドはほとんど音を出さないで動いていた――今にして思えば、雑多な道具を抱えてよくあんなに静かに移動できるものだ。

そのほかにどんな機会があったかを頭の中で数え上げていると、預言者がつぶやいた。

「焚き火は、よいものですね」

意外過ぎて、とっさに反応できなかった。預言者がこんな、なんの意味もなさそうな、つまり世間話のようなことを口にするとは、ヤエトは予測していなかったのだ。

預言者の口調も、表情も、言葉通りのものだった。焚き火のそばで、安らぎを感じているようだ。

「ことに夜の焚き火は、心が休まります。熱と、明るさの双方が、慕わしくなりますから」
「人間というものは、基本的には昼間を生きるものですし、明るさは重要ですね」
我ながら散文的な返しである。だが、預言者は気にした様子もなかった。
「明るさは天界のものだそうですけれど。かつて、世界には地上も地下もなかったと申します。天界は永遠に昼、下界は永遠に夜だったとか」
「……なんだか、飽きそうだ」
預言者はくすりと笑った。
「そうですね」
「昔話がお好きなのですか」
「ターンの信徒なのに、と？」
預言者は肩をすくめて、枝先で焚き火をつついた。炎が揺れ、彼女の輪郭もまた揺れる。光と影が入り乱れ、見えないはずの虹が見えた。何本かつらねた腕輪がふれあい、ちりんと音をたてる。
微笑を浮かべ、しかし視線は伏せたまま、預言者は言葉をつづけた。
「ご存じでしょう、ターンにとって過去とは失われつづけるものです。ですから、ターンの預言者になる者は、ターンの御手が届かぬものを、保持するつとめも負うのです。おそらく今、沙漠の神々やその伝承をもっともよく知る者は、わたしなのではないかと思います――生ある者の中では」
「……それは考えつきませんでした。失礼を」

いえ、と預言者は首を左右にふった。

「本来のつとめではありませんもの。ただ、神がわたしたちを支えてくださるように、わたしたちも、微力ながらお支え申し上げたいと、その祈りが届けばと、願ってのことです」

「なるほど……」

そんなことは考えもしなかった――自分が、神を支えるなど。

低い声で、預言者はつづけた。

「あなたとあなたの神は、支え合うような存在ではないでしょう。過去から未来へ……生ある者は、その方向へしか進むことができない。ターンの神とは、どうしても向かい合う。神にとっては、未来こそが記憶の宿る場所、人にとっての過去に近い観念なのですから。けれど、あなたがたは違う。神はあなたの背後に横たわる影、その影の先が消えゆく深い暗闇のようなもの……ふり返ったとて、見ることのあたわぬもの」

ヤエトは黙って預言者の言葉を聞いていた。

たしかに、オルムストは信者を顧みない。信者はオルムストを、その支配する過去をふり返る。だが、そこに見るものは、神ではない。熱に浮かされての幻視の中で、ヤエトは神を視たことがあるが、あれも仮初めの姿に過ぎなかっただろう。ヤエトの過去に深く刻まれていて、かつオルムストにもっとも強力に絆されていたものが、象徴としてとりあげられただけだ。

「ターンの神も、前を向かれればよいのに」

気づけば、ヤエトはそんなことを口走っていた。
はっとしたように顔を上げ、預言者はようやく彼を見た。礼を失したことをいった、とは思ったが、それでも、おそらくそれが正直な感想だった。彼は、預言者の眼を見返してつづけた。
「前を向かれればよい。それでようやく、均衡がとれようというものではありませんか。前を向く神、後ろを向く神、そしてその中間にいる我ら。未来へ向かって歩みつつ、過去をふり返りもする。眼差しの届くぶんだけ、見えていればよいのです。我らは神ではないのですから」
暫し、預言者は無言で彼を見ていたが、やがてまた、眼を伏せた。
「あなたは、お強いのです」
「それは勘違いでしょう」
「いいえ。わたしは存じております。あなたは、お強い」
「ではその言葉、そのままお返ししましょう。あなたこそ、お強い。でなければ、先を知っていてなお、自分の考えを持ちつづけることなどできますまい」
「わたしは――」
ヤエトは手をのばし、預言者の手にふれた。
「重要なところで、あなたはファルバーンに選ばせてくれた。感謝します」
預言者はヤエトの手を見下ろしたまま、ただじっと動かずにいた。やがて、彼女はつぶやいた。
「いえ、わたしはなにも」

「おのれで選びとることの重みを知っていなければ、できないでしょう」

視線を上げた預言者の黒い眸には、炎のゆらめきが光を添えていた。もともと夜空のようだと感じていたその眼が、今はまるで数多の星を擁する銀河のようだ。

ヤエトにその内側を覗かれることを避けるように、彼女は眼を伏せた。

「そうでしょうか」

「なにも考えず、ただ神の告げる未来にだけ身をまかせて生きる人なのかと、そう思っていました。ですが、それは誤解だったのだろうと、今は感じています。あなたはご自身で考えておいでだ。そして、選びとっておいでなのです。そこには苦しみがある。悩みがある。ひとりの、人としての存在がある。すべてが……あなた自身のものだ。神に顧みられることのない、わたしとは違う。未来を知ることのない、ほかの誰とも違う」

ヤエトは重ねた手に力を入れ、預言者の手首を握った。ずいぶんと、ほそい――そう感じた。ちりんと鳴った腕輪の径は、彼女の腕に不似合いなほど大きい。肌は、ひどく冷たかった。彼の手が熱を持っているにしても、ふたりの温度はあまりにも違い過ぎた。

あなたは、と彼はもういちど告げた。

「強いのです。……そんなに強くなくても、よいのに」

「え？」

預言者は視線を上げ、ふたたび視線がからんだ。やはり、とヤエトは思った。

——前に会ったときと、違う。
どこがどうと具体的には指摘できないのだが、どうしても、今までの彼女とは違っている、という感じが拭えない。なにかが決定的に変化してしまったようだ——彼女の中で。
「もっと弱くても、かまわないのですよ。力を託されていても、我々は、神ではない。人なのです」
「それは——」
「これから起きることすべて、神の視点で善しと認めることなんて、人にはできない芸当なのです。あなたは、それを自分に要求しているのではないですか」
「——だとしても、ほかにどうしようもありません」
預言者の口調には、諦念があった。淡々と、ただ認めていた。
「やめてください」
——痛々しくてたまらない。
以前の預言者は違った。こんな——自分の異能で傷つきつづけているような、そんな雰囲気はなかった。彼女はもっと、満ち足りていた。
——恩寵が、呪いになってしまったのだ。
変わらないでくれればよかったのに、とヤエトは思った。それなら、理解できない人物として遠ざけつづけることも、できただろう。
今や彼女は、ただの神の器ではなくなっていた。彼女は人になったのだ、原因がどうであれ。

預言者の表情は、変わらない。仮面をかぶってでもいるかのようだ。
「しるべの星のお役目はお役目として、あなたも人なのです、ウィナエ殿」
「存じております」
「わたしたちは、未来へつづく梯子を上っている。その梯子の先に待つものがなにか、上りだす前からもう決まっていたなんて、考えたくはない。自分の決意で、行動で、人生を築いていくと信じたい。実際、未来は決まっているわけではないといってよい。わたしたちが、変えていくのです。ターンの神の知識によれば、それはもう決定済みのことであっても、そんなものはどうでもよい」
「どうでもよくはないでしょう」
「いえ、どうでもよいのです。どうせ来る未来なんて、案じても無意味だ。神がご存じなのは、しかたがない。神なのですから。しかし、人はそれを知らなくて当然なのです。行く先もわからぬまま、自分で考え、生きていくしかない。ある意味、それは恵みでもあるのではないですか？　あなたがファルバーンにしてくださったことは、それなんです——誰よりも、未来が神の知識通りになると知っていて、それでも、彼自身に選ばせてくださった」
「すべてが、ターンの神のご采配であったとしたら？」
「本人に選ばせろと、ターンが？」
まさか、と鼻で笑いかけて、かろうじて自重した。だが、預言者には彼の正直な感想が伝わったようだ。苦笑混じりに、問い返された。

「……ないと、お思いですか？」
「ないでしょうね」
「あなたはターンの神をよくご存じなのですね」
「神気にあてられて倒れる程度には。……春先に、あなたとお会いして神の言葉を託されたときのことを、今でも、あまりよく思いだせていません」
ああ、と預言者は小さく声を漏らした。
「お倒れになると、わかってはいたのですけれど」
「わたしが倒れるかどうかなんて、誰にでも予測できますよ。ターンの恩寵なしでもね」
預言者は、もう一方の手でヤエトの手をおさえた。
「やはり熱がおありですね。熱いですわ、とても。……もうお休みください」
「あなたが冷たいのです」
「いいえ、……あなたが熱いのです」
それでもまだ、預言者は彼の手をはずそうとはしなかった。あたたかさを求めているのだろうか。ここまで冷えきっていたら、熱を持ったヤエトの手は、心地よく感じられるのかもしれない。
焚き火と違って明るくはないが、熱はある。使い途がないどころか人騒がせな熱ではあるが、今は預言者の役に立っているのだろうか——そんなことを考えながら、彼はつぶやいた。
「あなたには、時がないと聞きました」

預言者の手に、少しだけ、力がこめられた。
「申し上げたかもしれません」
自分はなにを話そうとしているのか。黙った方がよいのではないかと思いながら、訊いた。
「間近なのですか」
「……何日後、と決まっているわけではありません。ただ」
「ただ？」
「ターンのお言葉をあらたにお預かりすることが少なくなると、時間がないのだとはわかります。それに、自分で視る景色も」
「ご自分で？」
「視ようと思って視ることは稀なのです。必要なことは、神からお預かりしますし……それでも、視えてしまうことはあるのです」
「……わかります」
「まだ現実になっていない幻視の未来を数えれば、やはり減る一方で、増えはしないのです」
どう言葉をかけてよいか、わからなかった。
屁理屈をこねれば、彼女の推測を封じることはできるだろう。だが、それでは駄目なのだ。説得される彼女も、説得するヤエト自身も、納得はしないままに終わるようでは。
暫しの沈黙を経て、ヤエトは預言者に尋ねた。

「怖くはないのですか」
「たぶん」
預言者の答は、ひとことで途切れた。たぶん怖いのか、怖くないのか。どちらとも告げぬまま、彼女は黙してしまった。
パチパチと、火がはぜる音だけが聞こえる。今夜は風もなく、沙漠の夜は静寂に満ちていた——あたかも、死者の世界であるがごとくに。
「わたしは、怖いのです」
ヤエトのつぶやきにも、彼女は無言だった。
怖いのだ、と彼は心の内でくり返した。死ぬのが怖いからこそ、預言者を見るのも怖いのだ。死とは、生あるものすべての未来に待ち受けるものだ。預言者という存在を通すことで、死はその輪郭をはっきりさせる。曖昧さを失ってしまう。
だから、怖い。
なかばは、自身の死を連想するせいもあろうが、それだけでもない。
——なさけない。
寒気が背中を駆け上がる。熱い息とともに、ヤエトは言葉を吐き出した。
「怖くてよいのだと、いわれました」
「いわれた、のですか？」

ヤエトはうなずいた。
「死にたくないと思うのは当たり前のことなのだから、恥じる必要はない、と」
「……よいご友人をお持ちですね」
「そう思います」
預言者は微笑み、ヤエトの手を自分の手からはずした。
「もうやめましょう。未来を視ることができるからといって、わたしはなにも特別な存在ではないのです——その日が来れば、終わるだけです。ターンの神の御心からも消え去ってしまう」
「あなたは、出会った人すべてに強い印象を残しています。忘れられることはないでしょう」
「……ターンの神からお預かりするお言葉にも、制限があるのはご存じですか」
恩寵の力の常として、真実以外は語り得ないだろうが、そんなことなら、わざわざ話題にするまでもないはずだ。ヤエトは眉根を寄せた。ターンの神の預言については、詳しくない。つい最近まで、預言者の存在すらまともに考えたことがなかったのだ。
「いえ、寡聞にして存じませんが」
「そんな顔をなさらないで。難しいことではありません、幻視と同じなだけです」
うまくまわらない思考の手綱をとり直し、ヤエトは預言者の言葉を吟味した。
——預言者の死後、訪れる未来については、語り得ないということか。
彼がぼんやりしているのをどう受け止めたのか、預言者はふたたび笑顔を見せた。

「ほんとうに、お休みになってください。明日は長く歩きます。お身体にさわるといけません」
「長生きすると保証していただいたのですし、なるようになるというものでは？」
「長生き？　……ああ、はじめにお会いしたときの。ですが、わたしの保証など、お望みではないのではありませんか？　それに……申しわけないのですけれど、あれは、わたしはあなたが沙漠の民を裏切ったり、亡くなられたりする光景を幻視していない、という意味に過ぎませんよ」
珍しく、やや皮肉っぽい口調で告げると、預言者は立ち上がった。
「どこへ？」
「祈りの時間なのです。大丈夫だとは思いますが、わたしの祈りのせいで、あなたにご負担がかからないとも限りません。念のため、少し遠くへ参ります。あなたは、どうかお休みになってください。火の番はファルバーン様にお願いしましょう」
預言者は身を屈め、背を向けて横たわっているファルバーンを揺り起こした。低い声で事情を説明し、彼女は焚き火をはなれた。起き上がったファルバーンは、まだ少し眠そうな顔をしていたが、それでもまず、早く寝てくださいとヤエトに文句をいう程度には、いつも通りの彼だった。
暗い沙漠へと歩み去る預言者の後ろ姿を見送って、しかし、ヤエトはまだ横にはなれずにいた。
――シンリールか。
燃やし尽くされたあの街に、どんな叡智が残されているというのだろう。焼灼されてなお、失われぬもの――たとえば、石。都市の骨組み。解け落ちた上辺の飾りが剝がれ落ち、内部に隠されていた

貴石があらわになるような情景を、想像してみる。
なにかが、あるのだ。少し焼け焦げたくらいでは変質しない、隠されていた、なにかが。
それは魔法か、奇跡か。あるいは、とけることのない呪いなのか。
ヤエトの思考は、とりとめもなくさまよった。眼の前のささやかな焚き火が、シンリールを包む業火の記憶を呼び覚ます。その火の朱色に、立ち去る預言者の黒い後ろ姿がかさなり、揺らぐ。
――さだめられた死へ向かって、歩いていく……。
彼女を留めることなど、誰にもできないだろう。元来、人は死に向かって歩きつづけるものなのだ。人に限らず、この世に生を享けた存在ならば、すべて同じだ。
神々が永遠なのは、かれらはこの世のものではないからだ――この世ならざるものながら、この世にかかわろうとするもの。この世を観測し、されるもの……。
――歴史を志すのは、自身も神になろうとすることなのかもしれない。
ぼんやりと考えながら火を眺める内に、ヤエトはまどろみの中に落ちていった。

4

「シンリールの迷宮が隠していたのは、智慧の扉です」
ヤエトの疑問に対する答は、そのひとことだった。それですべて説明がついたといわんばかりだが、

いわせてもらえば、呼び名がついただけで本質はまったくわからないままだ。
「なんなのです、それは」
ジェイサルドの背に揺られながらなので、慎重に喋らないと舌を噛みそうだ。
よく晴れて、風もない。この地域にしては、過ごしやすい気候といえるだろう。
預言者は、ヤエトの方を見もせずに答えた。
「智慧の女神が神隠れたまいし扉、と伝えられています」
「神隠れたもう……？」
あまり聞かない言葉だ。答えたのは、ジェイサルドだった。
「智慧の女神は、みずからの智慧を悪神より隠し、守るため、この世から立ち去られたという話がございます。智慧の扉の、向こう側へ」
「ああ……そうか。翡翠の扉の物語、かな」
ヤエトのつぶやきを受けて、預言者がうなずいた。
「そうです。かつて、邪竜の堕天によって生まれた闇の神は、地下異界のみならず、地上までをも我が物にせんと欲し、世界を統べるための秘法を求めたと伝えられます」
――それが、南方王国の覇王と結んだといわれている、闇の神か。
北嶺の民ほどではないにせよ、あまり国とか領土とかいう概念に興味がないらしい南方人たちの歴史の中で、全土を統一した王朝はひとつ。親子孫の三代で絶えた短命な王朝だが、その初代が、今に

覇王の名を残す人物だ。彼はラングールを王都とし、呪師たちをよく使役した。無敵の軍を支えた兵の中には、鬼神の姿もあったという。

昔語りには、その鬼神たちの残虐さや強さを示す逸話が多いのだが、全体として見れば、覇王は個人の武勇のみにたよらず、軍を運用する手腕に長けていたようだった。南方における戦の改革者ともいうべき存在であろうが、惜しむべきか喜ぶべきか、戦に対するその視点すら、王朝が潰えたのち引き継ぐ者はなかった。

今の南方人は、戦をしない。せいぜい、戦士階級の果たし合い程度である。

大規模な戦で大地におびただしい血が流されることになれば、それを贄として覇王の孫娘、親殺しの女王がよみがえり、鬼神の軍勢を率いて地上を滅ぼす――と恐れられているからであるらしい。

「その神は、なぜ、地上が欲しいのでしょう」

「なぜ？」

預言者はヤエトの疑問をそのまま返した。

自分でも、なんだか馬鹿な質問をしたなとは思うが、不思議なものは不思議だった。神とは、自分の職掌――という言葉が適切かはわからないが、とにかく自身の特質と結びついた領域にのみ興味を抱く存在なのではないか？　闇の神は、あきらかに地下異界の支配者として生じた存在である。その神が、なぜ地上を欲しがるのか。

「欲しいから、でしょうか」

ジェイサルドが曖昧に答え、預言者はもっと断定的な口調でそれを肯定した。
「なんでも欲しがる神なのです。なんでも、です」
今回も、彼女が案内に立っていた。シンリールへの道を知っていると宣言したからだ。もちろん、道などどこにもなく、同じような景色がつづくだけなのだが、預言者がわかるというならわかるのだし、道だというなら道なのだ。
今日の預言者は頭から紗をかぶり、見るからに沙漠の民という姿である。砂塵避けの紗を透かして見る預言者の肌は、なんだか青白く感じられた。黒髪との対比で、そう見えるのかもしれない。だが、頬の輪郭や顎の形を見ても、以前の印象よりどこかたよりない。少し、痩せたのではないか。
昨晩の会話については、発熱のせいもあり、どこまでが自分の空想、あるいは混乱した記憶から捏造された幻覚なのか、自信がない。ただ、彼女の手首が折れそうなほどにほそく、冷たかったことは、はっきりと思いだせる。手触りまでよみがえるから、これは夢ではないだろう。
「貪欲な神なのですね」
「ええ。おのれの分を知らず、限りなく求める神です。つねに満たされない幼子のようなものですが、力は大したものですから、智慧の女神も争うことは避けられたのでしょう」
「その女神には、彼の神をしりぞける手段がなかったのですかな」
ジェイサルドのもっともな問いに、預言者は答えた。
「おそらく、もっとも平和的で理にかなう行動が、神隠れたまうことだったのでしょう。神々が相争

われることにでもなれば、天地の理は乱れ、日月が空から姿を消し、大地は割れ、三界のすべてを巻き込む騒ぎとなったでしょうから」

「しかし、戦う以外の方法もあったのではないですか」

ヤエトがつぶやくと、預言者は、できの悪い生徒を諭すように答えた。

「ですから、神隠れたまうこと、でしょう」

ヤエトは少し顔をしかめた。仮にも智慧という言葉で表現される神なのだから、逃げ出す以外の方法を考えついてもよさそうなものだ。意外に看板倒れなのかと疑いつつ、彼は尋ねた。

「民には、どんな恩寵の力が与えられたのですか？」

「民？」

「ですから、シンリールの」

「かれらは女神が神隠れたもうたその扉を神聖視し、迷宮を築き、みずからを真理の守護者、あるいは審判者と呼んでいるだけで……恩寵の力はないと思います。人が住みはじめたときには、女神はもう、この世におられなかったのですから」

額の縦じわが深まるのを感じながら、ヤエトはさらに尋ねた。

「ですが、今朝、おっしゃいましたよね。シンリールに行くのは、罅（ひび）を封じるために助力してくれる神の名を明かすためだ、と」

「ええ」

「誰がそれを知っているのです」
もちろん、といわんばかりの口調で預言者は答えた。
「女神です」
「しかし、女神はその、神隠れたもうたままなのでしょう？」
「はい。ですから、わたしたちがお訪ねするのです」
「お訪ね……」
絶句したヤエトに代わって、ジェイサルドが問いを完成させた。
「つまり、その鎖された扉の向こうにある、この世ならざる場所へ行く、と？」
「そういうことです」
もし並んで歩いていたら、ヤエトはジェイサルドと顔を見合わせただろう。……と、思う。
それまで黙って後ろから来ていたファルバーンでさえ、問うというより、呆れたような口調でつぶやいたほどだ。
「そんなことが、できるのですか」
「はい」
預言者ができるといえば、できるのだろう……そんな思考がごくわずかのあいだに、すっかり身に付いてしまっている。あんなに嫌だったはずなのに。
「しかし――」

「なんでしょう？」

いや、とヤエトは言葉を呑み込んだ。

――なにも扉の奥まで行かずとも、ターンの神なら知っているのではないか。必要な名を。

そう思った直後に、自分が嫌になった。

――なにもかも、神だのみか。

これでは預言者に文句をいう資格もない。ターンが預言者に言葉を、罅を塞ぐために手を貸してくれる神の名を預けていないなら、そうするだけの理由があるはずだ。理由がなくても、教えてくれれば楽なのにという考えかた自体が、堕落である。自分たちで探して来るようにと、せっかく手綱をはなしてくれているのに、進んで制御下に入りたがるとは、なさけないにもほどがある。

ヤエトは不機嫌に預言者を眺めた。

預言者はとくに感情をあらわすことなく、少しだけ前を、出発したときと同じ歩調で進んでいる。同じように恩寵の力に翻弄される同士、なぜここまで体力が違うのだろう。

――基礎的な訓練の差なのか、やはり……。

彼女は預言者としての訓練を積んでいるようだ。同じ恩寵の力を持ち、扱いかたを教えてくれる師が、いたのではないか。昔語りに詳しいとか、神と支え合うとか、祈りの時間だとか。そういう、世代をかさねて来た伝統のようなものを、彼女の行動の端々から窺(うかが)うことができる。

残念ながら、ヤエトには欠落しているものだ。

――羨ましいのだろうか。

そうかもしれない。自分にも、教えみちびいてくれる先達がいれば、……と考えて、ヤエトは小さく息を吐いた。いなかったものは、どうしようもない。今さら、時を戻るわけにはいかないのだ。

吐いた息の熱さに、熱はまだ下がりそうもないなと考えながら、彼は質問を再開した。

「今までにも、扉の向こうへ行った者はいるのですか？」

「います」

即答である。

「だが、戻って来た者はいないのでは？」

ジェイサルドが冷静に質すと、預言者はそれにも即答した。

「それは、わかりません」

「わからぬはずがないでしょう」

「いいえ、わかりません。わたしはあの門を見張っているわけではありませんし。ただ、今回は戻る必要があります」

戻れるではなく、戻る必要がある……とは、実に微妙な表現だ。なにか間違ってるんじゃないのか、ここだろう、ここが保証すべきところではないか、と指さして連呼したい気分である。

「では、戻って来た例は挙げられるのか、とお尋ねすればよろしいですかな」

さすがジェイサルド、と感心したものの、さすがなのは預言者も同様であった。

「できません」
「できぬ、ですと？」
「先にも申しましたが、わたしはあの門を見張っているわけではありません。シンリールを通ったことはありますが、沙漠を渡る旅人として、隊商路を辿っただけ――補給と休憩のため、滞在したに過ぎないのです。扉を見たこともありません。それでどうやって、扉の向こうから帰還した者がいたかいないかを知り得ると？」
「神がお教えくだされば、十分でしょう」
「わたしがお仕えする神は、今までになにがあったかを教えてくださるわけではありません。その必要も、ありません。わたしが知っているのは、ただ、遠からず、わたしはあの門の向こうへ行くということです。知っているべきはそれだけで、それ以上でも以下でもありません」
――行くといっても、道連れありで、ということだろうな。
もちろん、その道連れとは、ヤエトひとりであろう。
アルハンの地下で角灯を手にした彼女の、するどい視線と口調を思いだす。
――行かねばならないのは、わたしたちであって、かれらではないのですから。
あのとき、彼女が見ていたのはヤエトだった。彼だけ、だった。
どうやって隙を突くのかはわからないが、近々ほかの同行者たちを置き去りにするつもりなのではないか。ジェイサルドの質問がやけにしつこいのは、その気配を察しているからかもしれない。

「ほかに、知っておくべきことはありますかな」
「さあ、どうでしょう」
いかにも興味のなさそうな口調である。その気になれば、もっと愛想よくふるまえる人物が、この態度だ。彼女の予定に、ジェイサルドという存在は関与しなくなったのだろう。
ふたたび、ヤエトは大きく息を吐いた。熱い。
――あまり、考えたくない。
正確には、考えられないと表現すべきかもしれない。あるいは、考えても理屈が通るような結論が出そうもないとか。
こんなときに、預言者が道連れというのは、楽で助かるような気はする。先のことを考える必要など、どこにもないのだ。彼女が行くというところに行き、やるということをやる。もしヤエトがもう少し元気であれば、わざと反抗してみるという誘惑に抗しきれなかっただろう。だが幸い、今の彼はなにもかもだるくてたまらない状態だ。
行くというなら行くし、やるというならやる。なにも考えない。
――考えられない。
と、ヤエトは最後を微妙に修正し、また熱い息を吐いた。
今のところ、頭が痛くてだるいだけだ。できるだけ、この状態より悪くならないようにしたい。そのためには、気もちも明るい方へ向けねばならない……ということは、経験的にわかっている。体調

が悪くなると、気分が落ち込んでいくのが常であるが、そこを逆に、気をしっかり持つことで不調と戦う力にすることも、可能ではある。

滅多にうまくいかない、というだけだ。

——悲観的だからな。

「もっと、教えてください」

「ですから——」

預言者の反駁を遮って、ヤエトは言葉をつづけた。

「智慧の女神や、その扉に関する物語を、いろいろご存じなのではないですか？　あなたなら」

「……そうですね、少しでしたら」

気もちが明るくなるかどうかはともかく、少しでも興味が持てるようにしておきたい。その方が、なりゆきで連れて来られてぼんやり立っている、あるいは背負われているだけの状態よりは、役に立つであろう。たとえ病人でも。

「迷宮の番人については、ご存じですか？」

「叡智の門の番人……シンリールの……」

ここまで答えて、ヤエトははっとした。

——ご老人は、おとなしくしていらっしゃいましたか。

ファルバーンの声が、耳によみがえった。あれはもうずいぶん昔のことのように思える。

——叡智の門の番人です。

領内に匿っている、沙漠の民についての話をしていたときだ。気になることはないかと訊いたとき、ファルバーンがまず口にしたのが、叡智の門の番人と呼ばれる老人のことだった。いずれ門に帰ると預言者が告げたのだと、ファルバーンは説明した。シンリールの、とジェイサルドが応じていたのは、叡智の門の番人という通称だけで、どこの出身かわかったのだろう。さすが、沙漠を根城にしていただけのことはある。姿を消していないか調査せねば、という話をしたはずだ。

今の今まで、すっかり忘れていた。

その後、どうなったか？　報告を待つ暇もなく皇妹が訪れ、所領から連れ出されてしまったのだ。

——どうすべきか、迷ったはずだ。

戻る、と預言者が告げたなら、老人は戻るのだろう——自分はそう考えた。それを見張っても、しかたがないと思った。留めることも無意味だし、護衛をつけて行かせてやるというほど親切にもなれなかった。沙漠に戻ってほしいとこちらが頼んでいるならともかく、まったく無関係な話なのだ。

無関係などではなかったと気づいたのは、たった今だ。

間違いない、その老人はもうシンリールに向かっているはずだ。すでに準備万端ととのえて、かれらの到着を待っているかもしれない。門の番人としてのつとめを果たすべく。

ヤエトが番人についてほとんど知らないと判断したのだろう、預言者は教え諭すような口調で語りはじめた。

「智慧を求めてシンリールに集った者たちは、世界知を追求するための学院を創設しました」
「迷宮図書館だ」
「そのように呼ばれていました。ですが、図書館はかれらの活動の成果のひとつに過ぎず、その本質は書物の内にはありませんでした。かれらは扉を開くための手段を求めつづけていたのです——時が経過するにつれ、図書館は大きくなり、都市をなし、写本屋が軒を並べ、製紙業が盛んになり、街の表面は変化していきました。図書館が成立した事情を知らぬ者も、多くなっていたことでしょう。けれど、扉は変わらずそこにあったのです。迷宮化した都市の、最奥部に」
ヤエトの記憶に残るシンリールは、天へと吹き上がる炎と煙、尽きることなく舞い散る紙片、凄まじい熱風に囲まれていた。その奥に扉が隠されていることを、当時は知らなかった。
「……みつかったのですか、扉を開く方法は」
「ええ。問答です」
「問答？」
「それ自体は、早い時期にわかっていました。扉は女神に属するもの。それゆえ、必然として智慧を求めます。ですから、問答によって、揺り動かすことができるのだそうです。挑戦的な問いかけ、次に展開し得る応答——そうした謎掛けの技術が栄えた時代もありました。ですが、それもやはり手詰まりとなりました。数多の謎掛けもまた、成果の一部として記録されつづけはしたようですが」
預言者の語りは淡々としたもので、そのせいか、信憑性（しんぴょうせい）が高いように感じられた。

神話や伝説を聞き歩くときに困るのは、話者の語りが巧み過ぎることだ。話をおもしろくするために手をくわえたな、と感じる部分があっても、その直感が正確とも限らない。本人に質しても、脚色をおこなったのが先代以前の語り手であれば、確認のしようもないし、ほとんどの語り手が機嫌をそこね、口をつぐんでしまう。

何回か失敗して学んだのは、語り手にとって、語りは真実でなければならないということだ。疑われれば、物語はそれが本来そなえているべき力を失ってしまう。聞き手に信じられることで、物語は魔力を得る。聴衆を引き込む魅力があってこその、物語なのだ……と。

しかし、ヤエトは物語の魔法に魅了されたいわけではない。書きしるされないまま消えていった歴史を再構築するための、破片のひとつとしての伝承に、興味があるだけなのだ。預言者もまた、物語には興味がない。彼女は彼女の神のために、失われた過去をかき集めている。双方ともに、興味があるのは現実の過去それ自体だ。預言者がヤエトにとって理想的な語り手であるのも、無理はない。

「しかし、問いかけは近年までつづいていたようですが」

ジェイサルドが口を挟んだ。ヤエトを背負って歩きながら、よくそんな余分な体力があるものだ。

「ええ、燃え落ちて無人になるまでは」

ぼかされていた言葉を、預言者が容赦なく明瞭にした。近年までとは、つまるところ、沙漠越えの軍に滅ぼされるまでということなのだ。

――まだ二十年は経過していないにせよ、十年はかるく過ぎている。

ファルバーンはぎりぎり生まれているとはいえ、皇女はまだ生まれてもいない、昔の話だ。それを近年と呼んでしまう自分たちは、すでに、ひとつ前の時代の人間なのではないか。

沙漠越えを知っている世代、知らない世代。シンリールが燃える前後の世代。

――わたしの中では、シンリールは燃えている。

燃えつづけている。

――この熱は、シンリールを炙る炎の熱だ。

無理矢理、ヤエトは気もちを切り替え、炎上前のシンリールについて考えようとした。記憶を辿りながら、ゆっくりと、つぶやく。

「迷宮図書館の入口では――番人が、問答を仕掛ける。うまく答えないと、入ることができない」

「ええ。そうです」

ヤエトは眼を閉じた。

――すべては、扉を開くためだったのか。

問答で、知識と機転を試したのだろう。扉を開くためには、そういう人材が必要だからだ。

「図書館に入ったことは、あるのですか？」

「はい」

眠気が吹き飛んだ。

「なんのために？」

「……興味があったのです」
珍しく、預言者に躊躇の気配があった。
考えてみれば、彼女は迷いがないという印象が強い。未来を信じているからだろうか、と思う。
不意に、預言者がふり返った。彼女はヤエトと視線をあわせると、尋ねた。
「わたしが興味を抱いては、おかしいですか？」
そんなことを思っていたわけではなかったが、いわれてみれば、珍しいかもしれない——預言者が、個人として興味を持つという状況が、である。
率直に、ヤエトは答えた。
「なにもおかしくはないでしょう。ただ、珍しいとは思いました」
預言者はわずかに眉を上げてから、微笑んだ。向き直ったときには、もういつも通りの彼女だった。
「今、歩いているのは、もっとも古い《太陽の道》にあたる経路です」
「古い、《太陽の道》……？」
《太陽の道》とは、沙漠を渡る隊商路のことである。
「起点がターンの神殿だった頃の《太陽の道》ですわ。ちょうど、シンリールで分岐したのです。あまり大きくない水場が、ターンの神殿へ向けていくつか繋がっていたそうで、昨晩の野営場所も、そのひとつでした。まっすぐ反対へ向いて歩けば、わたしたちがはじめて顔をあわせた場所に辿り着くことでしょう」

「神殿跡ですか」
「はい」
ターンの神殿の廃墟で、預言者やファルバーンとはじめて会ったとき、まさかこんな風に沙漠を徒歩で――ヤエトは背負われて、だが――渡ることになるとは思ってもみなかった。預言者に導かれるがままになるだろうとも、ファルバーンが彼に仕えるようになるとも、想像だにしなかった。
あのときの自分は、沙漠の民をどうすれば救えるか――それだけを考えていた。
それですら、大それたことを自分が引き受けさせられた、と思っていたものだ。今はどうだ、世界を救う方法を探そうとしているではないか。大それたといえば、ここまで壮大な使命もなかなかないだろう。それも、道連れになるとは思わなかった者たちとともに、だ。
ずいぶん遠くまで来てしまったものだ。
「しかし、とても歩いて行ける距離ではないでしょう」
「そうですね。水場も涸れているでしょうし」
ここではじめて気づいたが、帰りはどうするつもりなのだろう。小鬼のわざを使って飛ぶ必要があったのは、シンリールが沙漠の深奥に位置する都市だからだ。ターンの神殿まで、水場がいくつかつづいていたというのは、それらの水場を経由しないとターンの神殿までは辿り着けないほどの距離があるという意味であろう。経路が変化したのも、隊商都市が短距離でつらなっている方が栄えたのだと考えれば、つじつまがあう。ことに、ターンの神殿が崩壊して以降は、敢えてそちらの道を選ぶ必

要性は薄まったであろう。

つまり、ターンの神殿跡までは、ここからかなりの距離があると考えるのが妥当だ。周到な準備をしていても、踏破は難しい。シンリールに先行しているらしい老人も、預言者の言葉を信じて旅立ったのだろうが——なにか独自の知恵でもあるのだろうか。あの小鬼を呼び出す方法でも？

——金貨を握らせれば、運んではくれるのだろうが……。

「少しだけ、休んでもよろしいかな」

ジェイサルドが休憩を提案するとは予想外だったので、ヤエトはおどろいた。

「どうぞ」

あっさり許可して、預言者は頭にかけていた紗を上げた。やはり、その顔色は以前より白く感じられた。ヤエトの視線に気づいたようにふり向くと、彼女は微笑んで告げた。

「わたしも、少し疲れました。……もう若くはないのですね」

そして、ジェイサルドがヤエトを降ろした隣に、自分も腰を下ろした。

寄って来たファルバーンも、大きく息を吐いて地面に座った。

ジェイサルドだけは腰を落とさず、片膝をついてなにやらもぞもぞやっていると思ったら、紙に包んだ粉末をヤエトに差し出して来た。

——なるほど、服薬休憩か。

自分が休むのではなく、ヤエトを休ませるための休憩であろう。抵抗しても無駄なので、ヤエトは

おとなしく紙をかたむけて、粉末を口に流し込んだ。そして、ジェイサルドが差し出した碗から水を飲み、なんともいえない強烈な苦みに耐えた。むせて吐き出したりしたら、同じものがもう一回出て来ることになる。それは避けたい。

「今度は、解熱の成分も含まれています」

返事ができる状態ではなかったので、ただ、うなずいた。舌が曲がるどころか、顔までねじ曲がりそうな凄い味だ。

「なぜ、はじめから解熱薬ではないのです？」

尋ねたのは、ファルバーンだ。ジェイサルドは下を向いている。どうやら、道具袋の中身を整理しているようだ——その中に、ヤエトに食べさせるための珍妙な味のものがどれだけ入っているのか、知りたいような知りたくないような、実に微妙な気分である。

「殿の場合、解熱しようにもしきれないときがあるように感じておりましてな。ただの病ではなく、なにやら不可避な発熱というべき時期がおありで、無理に熱を下げようとしても無駄に終わってしまう。そこで、はじめは熱に耐え得る体力を維持していただくことを考え、その後、熱冷ましをと」

「そんなことが？」

ファルバーンはヤエトに尋ねているようだが、本人にもわからないことを、答えようがない。

袋の口を縛り直しながら、ジェイサルドが告げた。

「殿のお身体が治ろうとする方へ向かっているとき、少しだけ手をお貸しするように考えろ、治療し

ようと思うな、……と姫様よりお叱りを受けたのもあってな」
これには、さすがにヤエトも声が出た。
「姫、とは……王に？」
ひょっとして姫とは皇妹をさす言葉かとも思ったが、はい、とジェイサルドはうなずいた。
「治療を望むのは、あやういと。治そうとはするな、それは無理にも元気にさせようとすることであり、近道のように見えて、逆に消耗させてしまうから、と。……元は、ナオ殿がお話しになったことやも、とは思いますが、納得しましたのでな」
「なるほど……」
「まだ熱はおありのようですが、昨晩よりは、ずいぶんとよくなられたご様子」
これもヤエト自身にはわからないのだが、ジェイサルドの見立てがそうはずれることはあるまい。彼が見当違いなのは味覚くらいだし、それも苦いとか酸っぱいとかいう種類は、理解している。ただ、人が耐え得る限界に挑戦したいのではないかと思うほど、強烈だというだけで。
不意に、預言者が口を開いた。
「欲を、捨てられたのですね」
三人が三人とも、彼女を見た。
預言者はすでに紗をかぶり直していて、しかもゆっくり立ち上がろうとするところだった。まるで表情が見えない。

控えめに砂をはたきながら、彼女は言葉をつづけた。

「昨晩、ターンよりあらたなお言葉を預かりました。シンリールに着く前に授けよとのお告げでしたので、今、お伝えしておきましょう。ジェイサルド殿、あなたの昔の名を我が神が明かすことはできません。ですが、ターンはご存じです――あなたにはそれが不要であることを」

ジェイサルドは無言である。

――不要？

ジェイサルドは名を必要としていた。彼の昔の名は、あの地下から脱出したときにみずから名告ったものだという。呪師の呪いを逃れるために、彼はその名を魔物と交換した。そうして失われてしまった古い名を、ヤエトなら明かしてくれるという期待を抱いて、老騎士は仕官したのだ。

それが、不要？

――わたしに仕える理由もなくなってしまうのではないか？

そもそも、自分にジェイサルドの名を明かすことができるかどうかもわからなかったのだが、と考えて、ヤエトははっとした。その機会があったばかりではないか。ジェイサルドがアルハンの地下から脱出した経路を逆に辿ったあのとき、思いついていれば、過去を視ることができた。

彼がみずから名告ったという名を、この耳で聞くことができただろうに。

もちろん、皇妹や第三皇子もいる場所で、堂々と恩寵の力を使うわけにはいかないが、ごまかしようは、あったはずだ。それなのに、ヤエトは思いつきもしなかった。それどころか、新しい名がある

のだから大丈夫などと、ほざいてしまった。
ジェイサルドはどう思っただろう。まさか、なにも気づかなかったということはあるまい。
戸惑っている内に、ジェイサルドはヤエトに背を向けた。
「お捆まりになってください」
「少し、歩いてみます」
「先ほどの解熱薬、じきに強い眠気が来るはずです。どうか、お捆まりに」
なんとなく謀られたような気もするが、どうせ自分で歩こうとする方が皆の迷惑になるのだろうし、しかたがない。おとなしくヤエトが背負い直されているあいだに、預言者はファルバーンに告げた。
「ファルバーン様、あなたにも」
「わたしに、ターンの神が？」
「はい。おのれを信じて生きよ、と」
少し間を置いてから、ファルバーンがつぶやいた。
「それができていないように見えるからこその、ご助言なのでしょうね」
少々ひねくれた答を、預言者はあっさり打ち返した。
「わたしは神のお言葉をお預かりするのみ。思し召しまでは、わかりかねます」

5

シンリールは、なかば砂に埋もれかけていた。

それは一種の荘厳さすら感じさせる情景だった。ここに踏み込むのは野暮というものではないか、と思ったほどだ。

黒く煤けているだろうと予測していた壁は、日差しを受けてきらめいていた。まるで、銀粉でもふり撒かれたかのようだ。だがその正体は、風に吹きつけられた砂粒だ。煤で汚れた遺構を磨き上げたのも、骨格を残すだけになった街を徐々に埋め尽くそうとしているのも、砂なのだ。

硬質の砂は研磨剤のようなものだ。街の外壁は砂に痛めつけられるため、補修をくり返さざるを得ない。ヤエトもそれを、知識として知ってはいた。《黒狼公》領でも、沙漠に近い地域では、砂対策を予算に組み込むことを許していた。

だが、今こそヤエトは知った。これが沙漠の深部、その本来あるべき姿なのだ、と。

沙漠の支配者は、生き物ではない――砂なのだ。人のいとなみなど存在しなかったかのごとく、すべての痕跡を消し去る、絶対的な力。

静かに、そして美しく、シンリールはその姿を消そうとしていた。文明の死が、そこにはあった。

「……沙漠は、凄いな」

思わず漏れたつぶやきに、答える声はなかった。

壁の直下まで来てようやく、ジェイサルドはヤエトを降ろしてくれた。壁には大きく崩れた様子はないが、本来の偉容を失いはじめているようだった。砂が積もっていくことでも、高さは失われる。やがては、この壁自体も沙漠の一部となり、消えてしまうはずだ。

ヤエトはそっとその表面を手で払った。やはり、煤は残っていない。業火に包まれたことなど、なかったのではないか。はじめから、ここには誰もいなかったのではないか。

作り話だと思った方が、まだ納得がいく。だが、すべては現実にあったことなのだ。世界の図書館と呼ばれていたことも。それを支えた人々がここで生まれ、育ち、死んでいったことも。

――考えるな。

ヤエトは壁にもたれ、眼を閉じた。失われた過去を想えば、意識を持って行かれてしまう。必要もないのに過去を視て、消耗するわけにはいかないのだ。

「大門は、こちらの方角にあったはず」

ジェイサルドがファルバーンと話し合っている声が聞こえる。

「埋まっているようです。掘らないと入れそうもないですね」

「といって、登るにはまだ高い。道具もなしに掘るよりは、楽な道かもしれぬがな」

「しるべの星は、どう思われますか」

ヤエトは眼を開けて、そちらを見た。預言者は、壁まで少し距離を残した位置で立ち止まっていた。壁を、見上げるようにして。さすがに疲れているのか、返答までには時間があった。

「番人の姿はありませんか」
「探して参りましょう。ファルバーン、殿をたのむ」
「わかりました」
だが、ジェイサルドが歩きだすより早く、声が降ってきた。
「ほうい、番人をお探しなら、ここだ」
全員が上を見た。
すぐに声を発したのは、預言者だった。
「見てらしたのですか、お人の悪い」
壁の上からこちらを見下ろしているのは、ふわふわとした髭をたくわえた老人であった。会ったことがあるはずだが、ジェイサルドをして、登るにはまだ高いといわしめるほどの距離を隔てていては、相貌を判ずることもできない。第一、まともに顔を見たのは、一回きりのはずだ。
「いやいや、声を聞きつけてようやく回って来たところだ。南門のところにいたのでね」
老人の声ははっきり聞こえたが、髭と同じく、どこかふわふわとした印象があった。
「やはり、ここが大門ですね」
「いかにも。いや、大門があった場所と呼ぶべきだろうかね、この現状では」
「こちらが正しい入口なのでは？」
「開かぬものは、どうしようもなかろうよ。南門に来なさい。儂も行こう」

ふい、と老人は姿を消した。壁の内側に引っ込んだのだ。言葉通り、南門へ移動するのだろう。
「南門は、どちらですかな」
「大門は東ですから、左手の方角へ向かえば。距離はさほどでもないはずです、街の真南にあるわけではないので。……できれば大門から入りたかったのですけれど」
「なぜです？」
ヤエトの問いに、預言者は微笑して答えた。
「できるだけ、古い時代の通りにしたかったのです。その方が、叡智の扉に――女神の御心に、近づきやすいのではないかと。ですが、無意味なことなのでしょうね。女神が神隠れたもうたときには、まだこの街はなかったのですし。古いといっても、所詮はその程度のものに過ぎないのです」
ひとつ息を吐くと、預言者は顔を上げ、宣言した。
「番人の指示に従いましょう」
――古いといっても、その程度……か。
ジェイサルドが背負いなおしに来たが、ヤエトはそれを断った。
「倒れたら拾い上げてください。そろそろ体力を温存してもらった方がいいでしょう」
「ご命令とあらば」
「命令です」
意外だったのだろうか、ジェイサルドは眼をしばたたき、それから一礼した。

「仰せのままに」
「両手が空いていれば、倒れたらといわず、倒れる前に拾ってもらえそうだ」
「無論です」
いうまでもない、という口調で返された。
ヤエトは壁に手をついて、よろよろと歩きはじめた。砂に足をとられるし、鞍ずれがまだ治っていないので注意しないといけないが、歩けないほどではない。
この先、なにがあるかわからないのだ――荒事になるとは限らないが、預言者が、ジェイサルドの同行になにも言及していないことが、妙に気にかかりはじめていた。
ファルバーンについては、あれほどはっきり、不要といってのけたのだ。ジェイサルドは彼女の予見の視界にいたのではないか――だとしたら、彼の力が必要になる局面が、あるのかもしれない。
それに、と彼は考えた。
――未来知の幻視は強力ではあるが、現実に起こり得ることの一部分を切り取っているに過ぎない。番人との会話が、それを物語っている。彼女は、シンリールで番人と再会することを知っていた。だが、どの門から入るという知識はなかったのだ。
預言者は、つねに正しい。だが同時に、間違ってもいる可能性もあるのだ。
それを踏まえていなければ、彼女の幻視の視界の外から、足下をすくわれかねない。思考停止に陥り、預言者にすべての判断を預けきってしまわないよう、留意すべきだろう――その兆候は、ヤエト

を含めた全員にある。

——知っているということは、おそろしいことだ。

預言者が会いに行こうとしている、智慧の女神という存在など、その最たるものではないのか。全能ではなくとも、全知には近いはずだ。その女神が直接争うことを避けたという魔王は、逆に全知より全能に近いものなのかもしれない。

すべてを欲しがる神。なんでもできるくせに、満たされない。哀れで傍迷惑な神だ。

ふと、かつて北方で幻視した男の姿を思いだした。ルシルの前のア＝ヴルスだったという、いかにも孤独そうな男……。彼も、まったく満たされていなかった。あれだけの力を持ちながら。

——いや、彼に限った話でもないか。

力が欲を生むのか、それとも欲の強い者が頂点に立つのか。およそ権力者は、満たされるということを知らないかに見える。かれらの心はうつろなのだ、人を圧する威勢を誇りながら、内実は虚無が支配する。あの、空洞の塔のようなものだ。

権力の座は、絶対の孤独の上にのみ保持される。権力者が民のことを親身に考えるのが困難なのは、だからかもしれない。かれらがいるのは、他者が入り込む隙などない場所なのだ。支配層の端くれとなった今、ヤエトも心に塔を建造しつつあるのかもしれなかった。

——皇女も、孤独だろうか。

わかちあえぬ秘密と、責任と。ひとりで背負おうとするほど、孤独は深まるだろう。

それは嫌だな、とヤエトは思った。

皇女に理想を見ているのかもしれないと考えた、その理想の姿と絶対的な孤独は、相容れない。

繋がりを断ち切るのではなく、ひらかれた存在としての支配者を、どうやら彼は夢想しているようだった。そこにいる皇女は硬直した権威に座するのではなく、手をとりあい、声をかけ、笑いあって進んで行く——そういう存在らしかった。

我ながら、ずいぶんと都合のいい夢をみるものだ、とは思う。そんな風にうまくいく可能性など、無にひとしいだろう。

それでも、行けるところまでは行けたら、と思わずにはいられないのだが。

——とにかく、目先の用事を片づけてしまわねば。

魔物が溢れてくれれば、国だの王だのいっている場合ではなくなってしまう。

扉の向こうに隠れたという女神は、古い時代に属する神らしい。ひょっとすると、世界を切り裂いた竜の堕天より前の神なのかもしれない。

すると、女神自身に助力を請うことが可能なのではないか？

そんなに甘くはないのだろうな、と思いながらヤエトは預言者を見た。彼より少し前を行く預言者の背は、いつもと変わらず、すっと伸びている。

女性にしては、かなりの長身だ。なんの脈絡もなく、皇女が羨ましがりそうだな、と思った。頭からかぶった紗の下で揺れる長い黒髪も、金髪の皇女には、羨望の対象たり得るだろう。黒は、沙漠の

民にしても珍しい髪色だ。ほとんど色のない景色の中では、ひどく目立つ。

そういえば、皇女は預言者に直接会ったことがないのではないか。神出鬼没の預言者だが、北嶺にまでは姿をあらわしていないはずだ。会うときが来るとすれば、預言を告げる必要が生じてのことだろう——ターンは皇女になにを託すのか。

とりとめもなく考える内に、次の門に着いた。よく考えてみれば、声が届く程度の距離なのだ。近くて当然だし、だからこそ、ジェイサルドも彼を歩かせてくれたのだろう。

大門がほとんど見えなかったのと違い、砂に埋もれはじめてはいるものの、こちらの門はまだ形が見えていた。見上げれば、全体は壮麗な弧を描いており、随所に祈りの文様が彫られていた。直線で構成されて飾り気のない街壁とは、好対照である。

門の最上部には石彫の飾り文字がとりつけられているが、あちこち欠け落ちて、ほとんど文字としての体裁を留めていない。それでも、推測は可能だった。見えない破片をおぎなって、本来あるべき姿を取り戻すくらい、過去視の恩寵などなくてもことたりる。

「ウィータ、シャリヤ、デ、ウーリヤ」

そっとつぶやいてみた言葉は、慣用句として残ってはいるものの、本来は今の共通語とは違う言語に由来するであろう、どこか異質な響きを残している。

問え、考えよ、そして開け——図書館をあらわす銘文としてもちいられ、日常の会話で口にされることは滅多にない。どこの図書館にも掲げられている言葉ではあるが、ほとんど記号のようなもので、

言語としてはあまり機能していないのだ。

ここが、その起源に違いない。

——開くのは、本の頁をだと思っていたが。

預言者から聞かされた話を総合すると、本来、開くという言葉が示していたのは、智慧の女神が姿を隠した扉と解釈するのが順当だ。

頭上から、ふたたび老人の声が降って来た。

「くぐるときに気をつけてな、へたにさわると落ちて来るぞ」

夢想している暇などなかった。預言者はすでに門をくぐっている。ヤエトは無駄な長身を屈めて、慎重に門を通った。

門自体に、かなりの奥行きがあった。崩れているのは飾り文字ばかりではない。沙漠特有の華麗な連続文様の彫刻や、色石を使った象眼細工も、剝落が激しい。もちろん、それら装飾がとり付けられている本体も、劣化が進んでいる。ぱらぱらと落ちて来るのは、風に吹きつけられた砂粒だけでなく、門や街壁を構成している煉瓦や石材自体の砕片であろう。

この場所に、これだけの建築資材を運ぶのに、どれだけの費用がかかったことか、想像するだけでも目が眩みそうだ——そしてその財力も、労力も、すべては砂に潰されていく。本来、ここに存在してはならなかったとでもいうように。

「殿、ここで立ち止まられては危険です」

ジェイサルドにうながされ、ヤエトは自分が立ち止まっていることに気づいた。あわてて歩きだしたが、いつの間に、なぜそうなってしまったのかは、よくわからなかった。過去の幻視にとらわれていたわけではないのだ。

なにか、人が立ち入ることを拒むような空気があった、と彼は思った。

見えない障壁のようなものだ。身体ではなく、心が拒まれた。来るなといわれているかのようだった。これ以上進むな、と。

――これも、智慧の扉のせいか？

異様な雰囲気に気圧されているのは、ヤエトだけではなかった。最後に来たファルバーンも、門の真下で立ち尽くしていた。門の重みをその肩に、背に、感じているかのような表情である。

「ファルバーン」

ヤエトが呼ぶと、青年ははっとして眼をしばたたき、急いで門を抜けた。

そこへ、上から声が降って来た。

「昔日の栄光も今はなく、不便なことのみ多かりき、といったところですな。……かたがた、ようこそシンリールへ」

壁沿いの階段を下りて来たのは、先ほどの老人だった。ふわふわとした髭をしごくと、老人は一同を順に見た。

「しるべの星、お久しぶりですな」



彼がまず声をかけたのは、預言者だった。預言者はわずかに頭を下げて、それに応じた。
「はい。……ついに、ここで見えることになりましたね」
「まさしく、ここでしたな」
老人はその温顔をジェイサルドに、次いでヤエトに向け、優雅に一礼した。
「はるばるお運びいただき、恐悦至極に存じます、公よ。街はご覧のありさま、満足なおもてなしもいたしかねますが、粗餐の準備がございます。こちらへどうぞ」
姿勢を正してから、ファルバーンにも声をかける。
「泉の子よ、そなたも参られよ。ただし、酒を水にはせんでくれよ」
はは、と笑って老人は踵を返し、街の中へ向けて歩きだした。ヤエトはファルバーンに尋ねた。
「そんなことができるのか？」
「ご老人の冗談でしょう。やってみたこともありません」
「殿が酒を勧められたときにでも、やってみればよい」
ジェイサルドの提案に、ファルバーンは少し考えてからうなずいた。
「そうですね。試すだけは、やってみましょう」
「なんの話だ」
「殿がご存じかはわかりませんが、沙漠では、酒を勧められて断るのは大変な無礼とされています。ですから――」

「無礼でもなんでも、飲めないものは飲めない」
ジェイサルドは眉根を寄せた。
「ですが、おそらく、あの老人の助けなしには、扉へ辿り着くことも難しいのでは」
「ああ……そうだろうな」
シンリールの別名は、迷宮都市である。街の大部分を占める図書館の建物自体が、迷宮なのだ。外縁部の店や工房、居住区域を除くほぼ全域が、図書館だったのである。街自体が迷宮であったと標榜しても間違いではなかろう。
——これに関しては、過去形ではないな。
依然として、シンリールは壮大な迷宮である。
内部は、外壁ほどには砂に浸食されていなかった。砂が積もっている方から積もっていない方へと、必然として、街の奥へ進むにつれて地形は下っていく。
老人はときどき足を止め、道を確認しているようであった。
街並は、どこもかしこも同じに見えた。街路は狭く、建物の形状や大きさは似通っている。高さもさほど変わらない。長くつづく道は少なく、見通しはきわめて悪い。
——内部に砂が積もっていない理由は、これかもしれないな。
これでは風も通りづらいだろう。日当りも悪い。あまり住みやすい街ではなさそうだ。
「こちらです」

老人がひとつの建物の入口で足を止め、どうぞ、と開いた扉を手で示した。
預言者が、まず扉をくぐった。なんの躊躇もない。ファルバーンが、少し遅れてそれにつづいた。どうやら、ジェイサルドと視線をかわし、どちらが先かを決めていたようだ。
こういうところだけは、妙にうまく連携をとっているらしい。こういうところとは、つまり、ヤエトをいかに守るかという配慮について、だと思われるのだが。
「殿、どうぞお先に」
番人がまさか、ヤエトの暗殺などたくらむまいとは思うが——第一、そんな気配があれば、預言者が黙っているなど考えられない。かれらが警戒しているのは、それ以外の可能性なのだろうか。ほかの勢力が、物陰にひそんでいるとか。あるいは、建物が崩れるとか。
崩落については、現状、打つ手はなさそうだと考えつつ、ヤエトは建物に入った。そこには小さな部屋があり、すぐまた扉があって、向こう側にあるのは中庭だった。中央に井戸があり、その周囲にわずかながら、緑が茂っている。
——この井戸の水は、飲めるのか？
ファルバーンを見ると、青年は預言者を追い越して、井戸に近づいていた。帝国が投じたのは呪毒ではないだろうから、ファルバーンであっても浄化は難しいのではないか。
後から入って来た老人が、ゆったりとした口調で告げた。
「毒消しは済んでおりますでな、きれいなものです。ご安心めされよ」

ふり返ると、老人は笑みをたたえてヤエトを見上げていた。そこにはなんの底意もなさそうだった。皺の中に埋もれそうな小さな眼は、街を満たそうとしている砂とよく似た、淡い色である。

ヤエトをみつめて、老人はくり返した。

「どうかご安心を。害意など毛頭ござらんよ。なにしろ、宿願を果たしてもらわねばならんのですからな、これから」

少し間を置いてから、ヤエトは尋ねた。

「あなたの宿願を果たすのが我らであっても、かまわないのですか」

「大門が通れなければ、南門から入るまで」

さらりと答えられ、思わず苦笑してしまう。

「なるほど。ところで、解毒の方法をご存じだったのですか」

「シンリールには、この世のありとあらゆる智慧が詰まっておるのです。しかるべき条件を揃え、索引を引く方法を知る者が調べれば、とけない謎はない。解毒の法も、はじめからあったのです、この図書館に。ただ、必要な道具と材料はなかった。まず街を出ないことには話がはじまらず、そして出てしまえば、戻ることも、なかなかできはしなかった。解毒を果たせたのは、つい数日前のことになりますか……それも宿願といえば、そうですな」

最後は低くつぶやいて、老人はどこか遠くを見るような眼をした。

かるく頭をふると、老人は一同に着座をうながした。井戸の近くに石造の卓があり、木枠に織物を

張った折りたたみ式の椅子が五脚、周りに並べられていた。卓には瓶子や杯、皿が置かれている。

全員が座ると、老人は瓶子を手にし、まず自分の杯にその中身をそそいだ。

「そこの井戸の水ですが、儂から飲みましょう」

勢いよく杯を煽ると、老人はそのまま着座し直した。

一同を見回し、にこりとする。

「少し、時間を置かねばわからぬでありましょうからな。話を進めさせていただくとしましょう。儂はこの迷宮の最後の番人、名はフェイヤドと申します……ああ、覚えていただく必要はござらんのでな、番人と呼んでいただければ結構。ただ、名告りあう必要があるというだけです、この場の作法で」

ヤエトが戸惑っていると、預言者が口を開いた。

「この都市に入るとは、智慧の扉の力が及ぶ圏内に入るということ。名告るのが慣例です」

「では――」

門をくぐるときに抵抗を覚えたのは、そのせいだろうか。

本来なら、あの門を入る時点で、名告りを求められたはずだ。問いかけを持たない者がこの街に入ることは、許されなかった。だからまず、門で名告り、問いかけを明かさねばならない――それが、ヤエトが本で読んで得た、シンリールについての知識だった。

おそらく形式的なものであっただろうが、本質も、そこなわれてはいなかったのだろう。名告ってこそ、扉の勢力圏に存在することを認められる。そういう手続きだったのだ。

少しのあいだ、預言者は、ヤエトが言葉をつづけるのを待っていたようだった。だが、彼にはその気がないと見てとったのだろう、彼女は言葉をつづけた。

「番人は当然、扉に名を知られているのですけれど、人に名告らせるのに自分が名告らないわけにもいかないでしょう。わたしもあらためて名告りましょう、しるべの星ウィナエ、と」

次は自分だろうと、ヤエトは手短に名告った。

「ヤエトです」

称号は、面倒なので省略した。どうせ《黒狼公》といっても隠居なのだし、新興国に過ぎない真帝国の貴族位など、この街では語る意味もないだろう。

それよりも、とヤエトはジェイサルドを見て尋ねた。

「この街に来たことは？」

「ございます」

「今の名で？」

「はい」

「では、名告り直してはどうか」

「……は？」

「よい機会です。名告り直しなさい。その名が本質に合致しているか、智慧の扉が判断してくれるのではないですか」

「しかし」
「なんの話です？」
尋ねたのは、番人だった。ヤエトがジェイサルドを見ると、老騎士はゆっくりと答えた。
「儂が、鬼神と名を取り替えたという噂話は、ご存じかな」
「そりゃ知っとる。有名な話だ、沙漠の悪鬼が人ならぬものの名を借りたというのは」
「借りたのではない。交換したのだ。それゆえ、世に知れている儂の名は、本来、鬼神の名なのだ」
番人は眼をしばたたいた。少しのあいだ、ジェイサルドを凝視してから小さく息を吐き、告げた。
「鬼神の索引を見ればわかる」
「索引？」
ヤエトが思わず問い返すと、番人はうなずいた。
「仔細はともかく、名のみであれば、索引で十分であろうよ。その名が鬼神の名として記録されているか、調べることはできる」
「その名もなにも、今現在、名告っている名だ」
「鬼神のものだったのだろう？　なら、載っている」
「ちょっと待ってください」
ヤエトは老人たちの会話に割って入った。
なんだ、という顔で揃ってふり向かれると、いえなんでもないです、と首を引っ込めたくなったが、

そんな場合でもない。
「その索引というのは、なんでも載っているのですか？」
「索引は、本に辿り着くための手引きに過ぎん。すべての正解がしるされているのは、本だ」
「いったい、誰が。どんな方法で調べ、記録するというのです」
「ああ、最近は本が勝手に書く」
ヤエトは自分の耳を疑った。
「本が？」
「最近はな」
——ということは、昔は違ったというのか。
内心、そう考えたのを読み取ったかのように、番人は言葉をつづけた。
「昔は違った。が、さらに大昔はそのようにして本が生まれた」
「本が……」
「と、伝えられておる。智慧の扉の前に立つ者は、問答をくり返すものだ。そういう決まりでな。その問いかけの答が、扉から与えられるということはない。問うのも人、答えるのも人だ。だが、問答が進むと、いつのまにか正しい答が本にあらわれた、というのだ」
無茶苦茶な話である。だが、番人の表情はもちろん、口調もいたって真面目で、冗談をいっているようではない。

「どんな問いにもですか」
「そんなわけはない。正しい問いかけに限られる」
「なにをもって正しいとするのです？」
「唯一無二の答があるのが、正しい問いだ。それ以外は、曖昧な問いとしてしりぞけられる。曖昧な問答は人のもの、正確な問答は神のもの。よって、神に近い問いをかければ、答が得られる」
納得できるような、できないような、不思議な定義だ。
番人はそこで肩をすくめ、瓶子を手にして立ち上がった。
「とはいえ、長いあいだ、本が勝手に書かれるようなことはなかったのだ。だから、蔵書のほとんどは、人が問い、人が答えたものの記録だった。さ、そろそろよかろう、杯をとりなされ」
まず預言者の、次いでヤエトの杯に、番人は瓶子をかたむけた。それからファルバーンに顔を向けて、静かに、しかしはっきりと要求した。
「名告りを」
「ファルバーン」
水が、杯にそそがれる。最後に残ったジェイサルドに、番人は瓶子を掲げて見せ、首をかしげた。
「どうなさるね？」
「鬼神の名がその本にしるされているのであれば、儂の名がみつかるかもしれん」
ごく、ゆっくりと。考えながら喋ってでもいるかのように、ジェイサルドは答えた。瓶子を掲げた

まま、番人が髭を揺らしてうなずく。
「……交換する前の名、ということか」
「かもしれん、と考えていた」
「それを名告るのかね？」
「いや、……まず、その本がこの世に存在するのかを、問いたい。燃え尽きていないのかを」
「あるべきものであれば、あるだろうよ。扉がしるす真実は、あの程度の火では燃え尽きぬさ」
一端、番人は言葉を切った。
ちらりとヤエトを見て、ご存じかね、とでもいいたげにつづけた。
「石の本であれば、それはもう」
もちろん、初耳だった。
――石板か。
製紙や製本の技術で有名になった街だから、そんなこととは想像だにしなかった。沙漠の奥という立地条件で、まさか石板に文字が刻まれているとは、誰も思わない。
だが、シンリールの原点となっているのは、智慧の女神の門だ。扉の向こうに隠れたとはいえ、神の力は残っていたのだ。門ができた頃には、まだ人のいとなみなどなく、当然、製紙技術もなかった。それでもまず、世界の叡智を集めた図書館として、この街は始まった――そこには、人ならざる力でしるされた、驚異の書物が存在していたからだ。

その後、人が本を書きしるす時代が、長くつづいたのだろう。そして、それが当たり前になると、石板の存在はその影となり、忘れられていったのだ。少なくとも、外部には伝わらなくなった。

——石板なら、残る。

不意に、心が明るくなった。この街に着いてから——いや、ここを目指さねばならないと知って以来、ヤエトはずっと薄闇の中にいた。炎に包まれた都市が、熱風に煽られて舞い散る紙片が、彼の心を暗くしていた。過去の炎は光であって光ではなく、ヤエトの心を照らすことはなかった。終わりのない、滅亡の夜に引き戻されたかのようだった。

番人の言葉こそ、その闇に差す一条の光であった。

「では、すべてが燃え尽きたわけではなかったのですね……」

思わずつぶやいたヤエトに、番人は微笑を向けた。

「そういうことですな」

だが、あれは一夜の悪夢では終わらない。

——そうであれば、どんなによかったことか。

長い夜が明けたとしても、見えてくるのは被害の全容だ。なかったことにはならない。時は、戻らない。絶対に。

——前を見よう。前へ進むしかないのだから。

ヤエトは顎を引き、姿勢を正した。

当人を差し置いて自分が喋るのも妙なものだが、一応、彼はジェイサルドに剣を捧げられた主君であり、しかも名付け親でもある。この問題を、素通りするわけにはいかない。

「この者の今の名は、本来は鬼神のもの。ここで名告り直したとして、鬼神がこの世にあらわれ出るための梯子をおろしてやることに、なりはしませんか――あらためて申し上げるまでもないとは思いますが、今、魔界との距離は狭まり、彼我を隔てる壁は薄くなっています。なにを契機に、それが地上に姿をあらわすことか……」

番人は瓶子を置き、ふむ、と顎髭を撫でた。

「それはたしかに、ないとは断言できませんな」

「いまひとつ。万が一、その索引に彼が鬼神と交換した、かつての名がしるされていたとしましょう。人としての名であるにせよ、今は鬼神がその名を使っていることになります。とすれば、それを名告り直すこともやはり、鬼神とこの世にある分身たる彼を紐づけることになりかねない」

「なるほど、なるほど」

「ですから――」

そこでヤエトは言葉を切った。切らざるを得なかった。

彼は番人から視線をはずし、預言者を見た。預言者も、彼を見ていた。

――あなたの昔の名を我が神が明かすことはできません。ですが、ターンはご存じです。

熱が下がらないまま服薬し、いささか朦朧とした状態ではあったが、彼ははっきり聞いていた。ジ

ェイサルドにと、預言者が神から預かった言葉を伝えたのを。
——あなたにはそれが不要であることを。
彼は眼をしばたたいた。
なんだこれは、と思った。なぜか、真っ先に浮かんだ感想がそれだった。
はじめて預言者に会ったとき、彼女はもっと違っていた。神に預けられた言葉が現実になることを、予見に今が追いつくことを、至上の喜びととらえているのではないか——そんな風に感じたのを、今も覚えている。どこか、人ならぬ者のような印象を抱いたことも。
だが、今の彼女は違う。
——まるで、現実が予知に追いつくのを、恐れているかのようだ……。
黒い双眸に光はない。暫しの後、彼女は眼を伏せ、ごく小さな声でつぶやいた。
「そういうことだったのですね、ターンのお言葉の意味は」
「ほかにもなにか預言が？」
ヤエトが問うと、預言者は微笑して答えた。
「いえ、これだけです、この件に関しては」
「どういうことですかな」
番人に答えたのは、ジェイサルドだった。
「ここに来る前に、ターンのお言葉を賜ったのです。儂の昔の名は、もう必要ないものだと」

「ああ……なるほど。そうなりましたな。呼べばあやういものと考えざるを得ぬのでは」
ジェイサルドは杯を手にした。それを見て、番人もあらためて瓶子を取る。
「では、名をいただきましょうか、あらためて」
「よかろう。この場においでのかたがたに、証人となっていただく」
――諦めるのか。
自分で提案しておいて――これしかないだろうと考えた挙げ句の結論だというのに、それでも、ヤエトはなにか理不尽な痛みを心に感じていた。
失われた名前は、名なしとして育ったジェイサルドが手に入れた、はじめての名だ。彼にとって、それは特別なものだったはずだ。手の届かないその名への執着を、断ち切ることができるのか。
そして、それが正しいことなのか。
今さら思い惑うヤエトの前で、ジェイサルドははっきりと宣言した。
「これより先、儂は殿より頂戴した名を名告ろう。サーヤリム、と」

6

人生とは、取り返しのつかないことの集合体である。
それも当たり前だ。過ぎ去ったことはすべて、取り返しがつかないものなのだから。あやまちであ

ろうと、正しい行為であろうと、過去は動かすことができない。そこから学ぶべきを学んだら、もう考えるだけ無駄である。先へ突き進むしかないのだ。

それにしても、どうも間違ったと感じることの方が多いのは、自分だけなのだろうか。あのときああしていれば、こうしていれば、とばかり考えているようだ——とはいえ、その場に戻ったとしても、また同じように選択するのだろうが。

——それこそが、自分の救われなさだな。

ため息をつき、ヤエトは周囲を取り囲む建物を、その輪郭で切り取られた空を見上げた。それから視線を下げ、前を行く預言者の背を眺めた。

「殿？」

問われて、ジェイサルド、とまず考えてしまうのはなんとかならないかと思う。

サーヤリムと百回ほど唱えれば、間違えなくなるだろうか。せめて違和感は消えてくれないか。

少し足を止めてしまったが、とくに問題があるわけではないと説明するのも億劫で、ヤエトはそのまま歩きだした。ジェイサルド……ではない、サーヤリムも黙ってついて来る。

街路は風の通り道だ。街壁の外とは比較にならないものの、その風の中にも砂粒は混ざっている。見上げた空が黄ばんでいたのも、そのせいだ。灰色の敷石の上にも、砂が流れている。これらの石は、どこから運んだものなのか。まさか石板と同様、勝手にあらわれたのではあるまい。

——人為が沙漠に沈むのはともかく、神意はどうなるのだろう。

都市が完全に姿を消したところを、ヤエトは想像した。そこには、積み上げられた石板が残される。渦巻く砂にも摩滅することはなく、消えた都市と、そこに住んでいた人々の墓碑であるかのように、石は静かにそこにある――くだらない妄想に過ぎない。だが、沙漠に林立する巨大な石板群という想像上の光景は、彼の心をとらえた。

街路と見せて、これらがすでに、くだんの石板なのかもしれない。あるいは今、砂の下に見え隠れしている石畳のひとつずつが、実は、問答に反応して生まれた奇跡の石板なのかもしれない……そんなことはないと、誰に断言できるだろう？

番人だって、すべてを知っているわけではないはずだ。かれらは扉とも、扉の向こうに姿を消した神とも繋がりはなく、ただ勝手にここに住み着いていただけなのだから。

――恩寵という鎖に繋がれてはいない。

奇跡とも、呪いとも、そもそもこの地で隠れたという神とも、シンリールの民は無関係だ。それでも純粋に知を求めて集ったかれらを、羨ましいとも、愚かだとも思ってしまう……。

いつの間にかうなだれ、足下だけを見て歩いていることに気づき、ヤエトは顔を上げた。

ファルバーンは、預言者と並んでいる。といって、会話があるわけではない。ふたりのあいだには、通じあうものが感じられなかった。不仲にも見えないが、親しみもない。徹底した無関心といえば、かれらを包む空気をあらわせるかもしれない。疲れのせいもあるだろうが、どちらもすっかり自身の内にこもってしまっているようだ。惰性で足を前に進めているようにも見える。

先頭を歩く番人は番人で、会話などできそうもない。道案内をするあいだは声をかけるなと前置きされたが、いわれなくても彼の邪魔をする気にはなれない。周囲と隔絶した境地に没入しているのが、わかるのだ。声をかけても無駄だろう。彼の感覚は、扉の場所を探すというその一点にのみ向けられているのだから。

番人にいわせると、扉はこの世のものであってこの世のものではなく、つまり、つねに同じ場所にあるとは限らないのだそうだ。

そんな馬鹿なといいたくなるが、そもそもこの街に辿り着いてから、そういう話しか聞かされていないような気もする。なんでも調べられそうな索引があるとか、勝手に本が書かれるとか……にわかには信じがたい内容ばかりではないか。

ともあれ、扉の出現によって、街路がわずかにずれるのだ、というのが番人の解説である。どこをどう見ても建物の並びは等間隔、ただ行き止まりが不規則にもうけられているとしか思えない街並から、微妙なずれを見分け、その方向と距離を計算する——それが、扉の位置を特定する方法らしい。

恩寵のような特殊な能力を必要とするわけではないが、正確な記憶と観察力、そして長年に亘る経験がなければ、つとまらない役ではあるだろう。

だから、彼はここに戻ったのだ。

——問いかけを抱く者が、門に辿り着けるように。その案内をするために。

この、廃墟に。

外からは、かがやくばかりに磨き上げられているかに見えたシンリールも、内部には煤が残っていた。街壁と違い、砂が直接吹き付けていないせいだろう。どれも同じに見える建物に、こびりついた煤の多寡が、わずかばかりの個性を与えている。建物同士が投げかける影と、煤の黒とが混ざりあい、街はまるでその中央に闇を抱えているかのようだ。

番人が、不意に声を発した。

「やっと見えた」

ぐっと腰を伸ばして背筋をまっすぐにしても、番人の背は預言者より少し低い。徐々に強くなりはじめた風にはためく衣は、元は白かったのだろうが、やや古び、黄ばんでいた。

「急ぐがよかろう。あの角だ」

ファルバーンは歩調を変えたが、預言者は急ぐそぶりも見せない。おかげで、ヤエトは彼女の隣に並ぶことになってしまった。預言者の横顔を見て、ヤエトは少なからず不安を覚えた。ひどく疲れている様子だったのだ。

「大丈夫ですか」

声をかけられたことにおどろいたように、預言者はヤエトを見た。それから、目元をわずかにゆるめ、ゆっくりと微笑んだ。

「大丈夫です」

「どこか、具合が悪いところでも？」

いえ、と彼女はかすかに首を左右にふった。
「疲れただけです。皆、同じでしょう。……あなたも」
もちろん、疲れやすいという点においてヤエトは自信があるし、当然のことながら今現在も、しっかりと疲労困憊をきわめている。他人の身を案じている場合ではなかろう、とも思いはする。だが、皆同じというところには、反論したい。
「急がねば、消えるぞ」
番人が静かに宣言した。ようやく預言者も小走りになったのを見届けて、ヤエト自身も走りだした。傍からどう見えるかはわからないが、本人の意識の上では、今の全力に近い速度である。
「ほれ、急げ」
番人が立っているのは、大きな建物の角だった。
ファルバーンも、その角で立ち止まっていた。ひとりで先行してもよいものか、迷ったのかもしれない。眼差しは、まっすぐに路地の奥へと向けられていた。彼の眼にも、なにか不穏なものが見えているのだろう——ヤエトが見ているものと同じかどうかは、知る由もないが。
角を右へ曲がった路地の奥が、やたらと暗い。その闇の中に、どうも虹のような色がある。はっきりとは見えないが、ふつうに弧を描いているわけではないようだ。渦を巻いているような気もする。
「……あれが？」
誰も口を開かないので、ヤエトが尋ねることになった。

「いかにも。扉にふさわしい問いを持つ者だけが、あれを開くことができる」

――あれ……。

どこと特定できない場所にある扉が、確固たる建造物としての姿を持っているだろうと想像していた自分が、馬鹿だった。

もちろん、それはこの世のものではなかった。物質ではない、というべきか。

なにかがあるのは確実だが、手でふれられるようなものではない。ふれたいとも思わないが――それは、渦だった。光を吸い込み、すべての色を漆黒の闇へと練り混ぜていく、混沌の門だ。

――どう見ても、禍々(まがまが)しいのだが。

智慧の女神がみずから身を隠したという物語が事実なら、もう少しは神々しく、かがやかしくてもよいのではないか。子ども向けの本には、智慧の女神の扉は翡翠でできていると書かれていた。だが、そんな硬質な美しさは見当たらない。変転と混乱、不規則。そこから感じられるのは、貪欲さだ。

「早うしなされ。消えてしまえば、もう入れぬ。扉が視えるのは、一回きりだ。次はもう、探し当てても、ないも同然ですぞ」

番人は急(せ)かすが、どうしても足が動かない。

「では……あなたには、視えていないのですか？」

「そういうことだ」

ならば、門がこんなにも不吉な姿をしていることを、知らないのではないのか。たとえば、門が変

質してしまい、智慧の女神が隠れたもうた世界へは通じなくなってしまっているのだとしたら？
——あれが通じる先は、魔界なのではないか？
ひょっとすると、開きだしているという魔界の蓋、罅それ自体なのでは？
少し後ろで、唸るような声が聞こえた。
「これは……おかしい」
「おかしい？」
「引かれる……」
ふり返ると、老騎士の相貌は見たこともないような苦悶に歪んでいた。
引き結んだくちびるの端からかろうじて、息を押し出すように、告げた。
「儂が……儂の、中から……」
とっさに、ヤエトは手をのばし、老騎士の肩を摑んだ。そして、ほとんど額をつけんばかりに顔を近づけ、彼の名を呼んだ。
「サーヤリム！」
はじめて、するりと新しい名が出た。
「殿……」
老騎士の身体は小刻みにふるえている。
「おまえはサーヤリムだ。ここにいる皆が知っている」

必死に語りかけつつ、ヤエトは考えていた。
――呼ばれているのだ。
魔物が、ついに名前を交換した相手をみつけたのだ。
――あの扉のせいか？
疑いつつ、ヤエトはもう一回、名を呼んだ。
「サーヤリム！」
老騎士はふるえるばかりで、答えることもできない。
――駄目だ。
無力感に襲われながら、ヤエトは必死に考えた。
なにか方法はないのか。
ジェイサルドという名と、もうひとつの忘れられた名。交換されたふたつの名は、どちらも魔物のものであり、目の前にいるこの老騎士のものでもあるため、双方は強い結びつきを得ることになった。
そして今、老騎士はその支払いを迫られているのだ。
この様子を見れば、わかる。
――新しい名を与えただけでは、駄目だ。
その場しのぎに過ぎない。
やはり、命名した時点で改名させておくべきだったかもしれない。そうすれば、ヤエトはもちろん、

周囲の者も、本人も、サーヤリムという名に馴染んだだろう。

だが、この場に至ってようやくの改名では、彼という存在の上っ面を覆ったに過ぎないはずだ。それが神のようなものによっての名付けならともかく、ヤエトはただの人である。恩寵の力があるにはあるが、名付けにかかわるものではない。

老騎士の口が、かすかに動いた。サーヤリム、と新しい名をつぶやこうとしているのだろう。だが、声にならない。

「早うせい」

番人は、異変に気づいていないかのようだった。だが、そんなわけはない。知っていて、それでも扉を選べと示唆しているのだ。

ヤエトはファルバーンを見た。

「たのむ」

「……は？」

「わたしは扉へ行かねばならない。この者を、たのむ」

青年が口を開けて反論するのを待たず、ヤエトは番人の方を見た。

「あなたは索引を引けるのですね？」

「できる」

「では、この者の古い名を探し出してください。それが今、魔物が名告っている名であれば、やはり、

使いようがあるかもしれない」
「しかし、ターンが――」
「神がなんといおうが、知ったことか！　できる限りのことはするものだ。そうせねば後悔する――ジェイサルド」
ヤエトが名を呼ぶと、老騎士は眼をみはった。
自分でも馬鹿げたことをしているようには思ったが、それでも、ヤエトは言葉をつづけた。
「戦え。おまえの魂魄が魔物の名より軽いなどと、相手はぬかしたそうだな。だが、長く魔物の名を使いつづける内に、おまえは魔物のような力を得たともいっていた。ならば今、その名にふさわしいのは元の持ち主ではない。おまえだ。人の名を名告って久しい魔物など、ちぎって捨ててしまえ。もともと、魔物と交換した名を名付けたのも、おまえだろう。魔物にとっては、名付け親のようなものではないか。おまえが負けるはずがない。だから、戦え。戦って、勝て」
自分の柄ではないと思いつつ、彼は最後までいいきった。断言しなければ、意味がない。
――こういうのは、皇女の仕事だ。
ヤエトはむしろ、無理なことを命じられる側で、だからこそ知っている。そんなことできるかと思いながらも、全力を尽くさざるを得なくなることを。力を、ふり絞る羽目になることを。
向いていないのは重々承知の上で、命じた。
「かならず戻る。だから、それまでに、おまえも勝っておけ。よいな」

——皇女ならば、こうだろう。
表情まで思い浮かぶような気がした。生きて帰れ、と皇女のくちびるが動いた。紫の眸が、黄金の巻き毛が、まざまざと眼前に浮かび、そして、消えた。
ヤエトは扉と称されるものを見、腰につけたシロバの羽を握った。
——かならず戻る。
「……承知、つかまつりました」
ジェイサルドにうなずいて見せると、ヤエトはもうひとりの同行者に目をやった。
「ファルバーン、妙なものが来たら浄化してやれ」
青年は不服そうな顔ではあったが、それでもうなずいた。これを扉に連れて入るのも、放っておくことも、どちらもできないと納得したのだろう。
「人外のものに変化することがあれば、わたしが始末します」
そんなことになってほしくないし、可能かどうかも疑問ではあったが、ヤエトはうなずいた。それが、今の自分の仕事だと思ったからだ。
「たのむぞ」
そして、前方にある暗い渦を凝視した。
行かねばならないのだ。
どうしても、彼は手に入れる必要がある——罅を塞ぐために力を貸してくれる、神の名を。

「問う！」

唐突に、預言者が叫んだ。

ほとんど彼女の存在を忘れかけていたヤエトは、おどろいてつんのめりかけた。

預言者は、彼がよろけるのを知っていたかのように、即座に手をさしのべ、摑んだ。先夜と同じく、彼女の手はひどく冷たかった。

「わたしたちは、ふたりで行く運命なのです」

預言者の声は深く、そして低かった。おそらく、ヤエト以外の誰にも聞こえなかっただろう。

「どういうことです」

「そのままの意味です。この先を、わたしは知っているのです。ただそれだけです」

さっきまでの憔悴ぶりが嘘のように、預言者は生き生きとしていた。

彼女は微笑み、そしてするどく前を見ると、叫んだ。

「我らは問う、神の御名を！　開け、扉！」

預言者の言葉に応じるように、暗い虹が一気にひろがった。それは回転し、螺旋状にあたりを包みながら、ヤエトと預言者をその中に呑み込んだ。

第五章

1

なにが起きたのかもわからないまま、ヤエトはただ呆然としていた。

禍々しい黒い渦が一気に広がったと思ったら、なにも見えなくなってしまったのだ。視界が失われただけではない、すべての感覚が奪われたように感じた。

びっくりし過ぎて声すら出ない。呼吸できているのかも、あやしいほどだ。

――暗い。

ひょっとすると、ジェイサルドが魔物に呑まれてしまったのではないか――彼の手によって、一瞬にして人生終了状態に持ち込まれてしまったのではないか、といったような想像を、少しだけもてあそび、うち捨てた。

そんなはずはない。

これは扉の中、あるいは向こう側なのだ――だが、その向こう側とは、いかなる場所なのか。

ただ漠然と、この世ならざる場所であろうとは思っていたが、詳しい説明は受けなかった。訊こうとも、思わなかった。

――ここは、どこだ？

はっとしたのは、手に力を感じたからだ。
預言者が、握った手にこめた力を強くしたのだ、とわかった。それは、はっきりと感じた。励まされるような心地がして顔を上げると、暗闇に、預言者の横顔が浮かんでいた。その顔は、雲間から覗いた月のように澄んだ、冷ややかな光を帯びている。
「……問う」
預言者のつぶやきは、強い風にさらわれるようにして遠ざかった。
「しるべの星」
ヤエトが呼びかけると、預言者は彼を見た。くちびるが動き、少し遅れて、ささやく声が耳元を流れた。撫でるように、そっと。
「わたしたちは、行かなければ」
「どこへ？」
ヤエトはあたりを見渡した。
——なにも、ない。
ふと思いついて、ヤエトはおそるおそる視線を落とし、そして後悔した。そこには、なにも見えなかったからだ。
「行きましょう」
答にならない言葉が、ふたたびヤエトの耳を撫でた。預言者が手を動かす。と、彼女の手に摑まれ

たヤエトの手首があらわれ、そこから腕、肩、と身体の各部が順に闇から浮かび上がった。
おどろいて見上げると、さあ、とまた手を引かれた。
その動きで、ヤエトは立ち上がっていた——預言者より少し高い位置から彼女を見下ろしている自分が、虚空に浮いているわけではなく、地面のようなものを踏みしめて立っていることに気がついた。いつもの、びらびらと邪魔な袖が風にはためいているのも見えた。
彼は、眼をしばたたいた。視界の隅で前髪が揺れ、耳をくすぐった。
徐々にあらわれはじめた景色は、沙漠のものだった。ただ淡い灰色に見えた砂が黄味を帯びはじめ、あたりからは闇夜の暗さが払われていく。凄まじい速さで、容赦のない光が視界を支配し、今度は白光が世界を染めた。
あまりのまばゆさに、ヤエトは眼を閉じた。
「しるべの星」
呼ぶと、また、手を引かれた。
「惑わされないで。すべて、幻像です」
「だが、なにも……見えない」
我ながら、情けないことこの上ないとは思うが、どうしても身動きできない。
——なんだ、これは。
ただ、見えないからというだけではない。そんな理由ではなかった。

心が剝き出しにされたように感じた。なにも隠すことができず、すべてをさらけ出すしかない。動けば傷つき、ふれれば折れ砕けてしまいかねない。いや、確実にそうなる。

自分が、壊れる。

不安に押し潰されそうになっていたとき、またしても、預言者の声が聞こえた。

「行きましょう」

——無理だ、動けない。

答えた言葉も、声にはならなかった。それでも、聞こえたのだろうか。

「でも、あなたは行くでしょう？」

預言者は語尾を上げた。やわらかく。

いつものように、既知の事実を確認しているのではない。彼女は、ヤエトの決意を問うているのだ。答えねばならなかった。

「行く」

簡潔に、それだけを彼は口にした。

言葉は重みを持ち、不意に彼は自分が実在していると感じた。声を発するための口や舌、喉からはじまって、身体のすべてが再構築された。剝き出しの心や崩れやすい魂だけでなく、血肉をそなえたヤエトというひとりの人間が、あらたに生まれ直したようだった。

預言者が微笑む気配がした。

目蓋を閉じてもなお、彼をさいなむように降りそそいでいた圧倒的な光が、わずかにやわらぐ。
「わたしは、しるべの星。道標となる者」
声は彼の周囲を囲むように、ぐるぐると螺旋を描き、足下から頭上へと駆け上がった。
預言者の声は、そよ風のようだった。そっと、やわらかに彼を包み、そして消えた。
「信じて」
その声に誘われるように、ヤエトは眼をひらいた。
ふたたび、世界が姿をあらわしていた。
今度は沙漠ではない。荒野だ。鈍色の雲に覆われた暗い空と、草も木も生えぬ荒れ果てた土地。視界はどこまでも開けていたが、遥かな地平は靄に覆われ、はっきりとは見えなかった。
荒漠としたその景色の中央に、巨大な扉があった。
それはなにか青味がかった金属でできているようでもあり、あるいは石で作られているのかもしれなかった。扉を両側から支える太い柱には、植物が巻き付いているかに思われたが、よく見れば、それは精緻な彫刻であった。さらに目を凝らすと、細工の表面には貴石が象眼されており、瑞々しい新芽からよく育った大きな葉、そして色を変え、あるいは萎れた蔓に至るまで、こまかな表現がほどこされていた。
色のない風景という印象は、またたく間に極彩色に書き換えられていく。
「幻像です」

預言者の声が、耳元で響いた。

そうなのだろう、とヤエトは思った。漆黒の闇から白熱する光へ、そして無彩色から極彩色へ。変転してやまぬのがその証拠だ。

それにしても、なんとあざやかに美しいことか。そして――。

「寂しい景色ですね」

彼が言葉を発したとたん、扉の外形が音をたてて崩れた。それは砂塵に帰し、風に舞って消えた。

残ったのは、なんの飾りもない扉と、それを支える柱だけだった。

――これが女神の扉か。

今、この目に映っているものも、おそらく幻影なのだろう。

ここは異界なのだ。かれらが知る現実、生を享けた世界とは、ものごとの法則が違う。概念が違う。その違うものを理解し、認識の狭間を埋め、受け入れるためにあらわれるのが、幻像なのだ。

そう考えると、先刻からヤエトを襲っていたものは、彼の心構えの弱さをあらわしていたようでもあり、ますます情けない気分になった。

預言者は、揺るぎなかった。先を知っているからだろうか。

――知っているのです、ただそれだけです。

預言者の横顔は、変わらず冷静だ。どんな表情も浮かんではいない。

ヤエトの視線に気づいたように、彼女は顔を上げた。

「扉が、見えますか？」
「見えますね……同じものかは、わかりませんが」
「階段は？」
たしかに、扉の前には階段があった。その階段の段の高さが常識的なものだとするなら、扉は思った以上に巨大である。人を縦に三人くらい積み上げても大丈夫そうだ——その情景を想像してみたところ、予想以上の無意味さだった。人を縦に積み重ねる必要性は、あまり、ない。
くだらないことを考えたせいで、なんとなく落ち着いてきたかもしれない。
「見えます」
「あれが、わたしたちにふさわしい大きさになるまで待つことになります」
「なるほど」
ということは、扉が巨大なのではなく、段が低いということか。距離感もよくわからないので、どちらか判別つけがたい。
「そのためには、話をしなければなりません」
「問答ですか」
「必ずしも、問答である必要はないのです。あれは図書館の人々の願望に過ぎません。かれらは智慧を求めていたから……だから、問答に傾斜していったのです」
「ああ……なるほど」

問いがあれば、答がある。その答を扉から得ることで、図書館は成長した。扉は無差別に智慧を求めていたかもしれないが、シンリールの民は違う。問いが必要だったのは、扉ではない。答を求めるために問いかけが必要だったのは、シンリールの人々なのだ。

風が吹いて、預言者の髪を吹き散らした。装身具がふれあい、ちりちりと儚い音をたてるのを聞きながら、ヤエトは尋ねた。

「なんの話をすればよいのです？」

「……ただ、会話をすれば。扉は孤独ですから——言葉のやりとりに、興味があるのです」

「そういうことですか」

それでますます、問答が重んじられたことの意味もわかる。問答は、ひとりではできない。問う側と問われる側の、ふたりが必要になる。問答が扉の刺激に有効であるというのは、シンリールの民が獲得した経験則なのだろう。

しかし、漫然と会話するだけで、扉の興味を惹けるものなのか。なにを話題にするかについて考えはじめると、意外となにも思い浮かばない。

暫しの沈黙の後、預言者が口を開いた。

「これを、お話しするかどうか、ずっと迷っていたのですけれど」

「なんです？」

ヤエトがうながすと、預言者は眼を伏せた。

「わたしがはじめて幻視を得たのは――未来を視たのは、まだ、ほんの子どもの頃でした。……あなたは？」
「そうですね……わたしも子どもだったかな。ほんの、と表現していいかはわかりませんが」
「よく覚えていますか、その、はじめての幻視を」
「いや、そうでもないと思います」
それまでも、ぼんやりと日常ではない光景を視てしまったという感じはあったが、決定的だったのは、あの古い塔に上った夜だ。それが強烈過ぎたせいだろう、さらに前の幻視体験については、曖昧な記憶しかない。
「そうですか。わたしにとっては……はじめて視た未来は……とても、印象深いものでした」
「どんな内容だったのか、聞かせてもらっても？」
「夜でした」
預言者はそうつぶやいて、少し時間を置いた。
彼女がどんな子どもだったか、ヤエトには想像もつかない。幼い少女というと、どうしてもまず妹を連想してしまうのだが、自制という言葉とは無縁だった妹と、つねに自分を抑制しているように見える預言者とでは、共通点が見当たらない。せいぜい、髪が黒いとか、性別が女だとかいう程度だ。
「夜なのに明るいと思ったら、わたしは焚き火を見ていたのです。その光だけでなく、熱も感じとれました……とても、あたたかくて。心が休まった……」

そういえば、野営したときに、預言者は焚き火についてそんな話をしていた。
「昔から、焚き火がお好きだったのですね」
「いえ、そのときは、まだ。心が休まったのは、未来のわたしですから」
「なるほど」
ヤエトの幻視とはずいぶん違う。
——自分がいるか、いないかの差だろうな。
彼が過去視の力を行使するとき、そこに自分自身はいないことの方が多い。自分がいないときに起きたなにかを、客観的に眺めているからだ。その場所に行かねばならないという制限はあるが、ある意味、おそろしい能力である。体験しようがなかった過去を、確認できるのだから。
預言者の未来視は、自分が体験することに限られるのだろうか。
——きっと、そうだ。
だから、自分の命が尽きたらもうその先はわからない、というのだ。それ以上のことを知っている場合は、彼女自身が幻視した光景ではなく、ターンの神に未来を示す言葉を託されてのことだろう。
難しい能力だな、とあらためて思う。主観的にしか、なりようがない。ヤエトの過去視も、その場に居合わせた人物の感情を読み取ることはできるが、それはやはり、他人のものに過ぎない。自分自身の感覚として体験する預言者とは、かなり違うはずだ。
「そして、声が聞こえました。ターンの神も、前を向かれればよいのに、と」

どこかで聞いたことがあるような言葉だった。
それは——と、ヤエトはいいかけた。だが、口がわずかに開いたばかりで、声にはならなかった。
ごく静かに、預言者は言葉をつづけた。
「なにも考えず、ただ未来を認めるのではなく、自分の考えを持っている、あなたは強い……と、その声は告げました」
——なんだって？
まさか、そんなことはあるまいと否定する間もなく、つづく言葉がヤエトを叩きのめした。
「そんなに強くなくてもいい、神ならぬ身で、すべて善しと認めることなど、できなくてもおかしくないのだから」
預言者はヤエトの方に顔を向け、そして、視線をあわせた。
呆然として言葉もない彼に、彼女は告げた。
「ずっと、その言葉が支えでした」
——こんなの、反則だ。
はじめに感じたのは、それだった。なにが反則なのかはわからない。だが、これはない、と思った。
今になって、こんなことをいわれても、困る。
預言者は言葉をつづけた。
「強くなろうと思ったこともありました。強くなくてかまわないなんて、ひどい。そう思ったことも、

ありました。否定されているように感じて、否定し返してやろうと思った。だから、わたしは頑張れたのです――最近になって、ようやくわかりました。あれが、わたしの支えだったのだと」

「あの」

「はい」

「無粋だとは思うのですが、それはやはり、わたし、なのですかね」

「もちろん、あなたです」

答えて、預言者は笑った。彼女がこんな風に笑うところを、見たことがあっただろうか。

今なら少女時代を想像することもできそうだ。

笑顔を消さぬまま、預言者はまた視線を落として語りはじめた。当時を思い出しているのだろう、表情、あるいは全体の印象が、少し若返ったようだった。

「誰だろう、と。ずっと、不思議でした。いつか会うとわかっていたけれど、いつなのか……それは、わからなくて。わたしの幻視にそのひとがあらわれたのは、はじめのそれだけ。以後、姿をあらわすことも、声を聞かせてくれることもなかった」

「そうだったのですか」

「あなただと知ったのは、お会いする直前です。《黒狼公》との会談を持たねばならない、そう告げる幻視が次々とあらわれたとき、実際にあなたとお会いして、お話ししている場面が見えて――ああ、このひとだったのか、と思いました」

「わたしで、すみません」
どうしても謝罪したくなったのは、期待はずれと思われるのが怖いせいだろうか。とっくに通り過ぎた話なのだし、預言者が幻視の人物に過剰な期待を抱いていたとしても、彼が謝るのは筋違いだろう。彼女の生きかたを左右しかねない重要な幻視に登場したのは、彼の責任ではない。
もちろん、語った内容には責任を持つべきだ——もっとも、彼の意識の上では、それを語った相手は成熟した女性であり、童女に聞かれているとは思いもよらなかったのだが。
「いいえ、あなただからよかったのです。沙漠の民を帝国に預けるのは、不安でした……その不安を捨てることができたのは、未来を信じていたからではありません。信じたのは、あのひとでした。あのひとは……いいえ、あなたなら、信じられると思ったのです」
わたしには視ることのできないその先も、と彼女は小さくつぶやいた。
「ご期待に、沿えたでしょうか」
おそるおそる尋ねると、預言者は視線を上げた。
「あなたがくださったものに、お返しできることが……なにかあれば、と思います。あなたはわたしに、自尊心を与えてくださったのです。わたしがわたしとして生きること。ターンの預言者にはもっとも難しい生きかたを、あなたが教えてくださった」
「ですが——それは、あなた自身がそう生きておいでだったから」
「どちらが先かは、論じる意味もないでしょう。あなたが教えてくださったから、わたしはこういう

生きかたを選ぶことができた。わたしがこう生きたから、あなたにあのように評価していただけた。どちらも正しくて、間違いではありません。そうでしょう？」

「……そうですね」

「ずっと、お会いしたかった。幻視の光景が現実になることを——焚き火の光と熱が本物に、あのとき聞いた声が、あの夜が、すべてが自分の身に実際に起きるのを、待ち焦がれていました。来ないでほしいと思ったことも、ありました。現実になってしまえば、もうそれを待つことができないから」

「過去に、したくなかったのですか」

「そうです。そうなれば、消えてしまうように感じるのです。おそらく、ターンの神がそのようにお感じになるからでしょうね」

それで、とヤエトは静かに尋ねた。

「実際には、どうでした。消えてしまいましたか？」

「いいえ。消えませんでした」

「そうですか」

「一生、忘れることはないでしょう」

どう答えるべきか迷い、それでも無言でやり過ごすわけにもいかず、ヤエトは答えた。

「光栄です」

預言者は笑み、そして扉の方を向いた。その横顔は、今までのようにただ表情がないのではなかっ

た。静謐でありながら、満ち足りたことを示していた——あるいは、もうなにも望むものはない、という境地を。

なぜか不安になり、ヤエトは彼女に呼びかけようとした。

が、先んじて、預言者が声をあげた。

「開きます」

2

開くというより、それは世界が崩壊するような現象だった。

すべての景色がひび割れ、砕けていく。

音はなかった。

静かに、しかし容赦ない速度で、扉以外のなにもかもが消えようとしていた。空や雲、果てなくつづくかに見えた荒れ地などが、見る間に失われていく。

砕けた空の奥には、どこまでも深い夜空が覗き、星辰が青白い光の尾を引きつつ巡る——と思うと、それもまた割れて欠け、すべてを覆うような巨大な月が姿をあらわした。満ちていた月は、凄まじい勢いで細くなり、そしてただ暗いだけの空間が残された。

いつの間にか、扉はかれらの至近に存在していた。階段はちょうどよい高さ、扉自体も大きめでは

あるにせよ、人を積み重ねたらつっかえる高さにはなっている。肩車くらいなら、なんとか通れるか……とまた余分なことを考えてしまった。

こういうのは、冷静といってかまわないだろうか。それとも、動揺し過ぎているだけなのか。

ぎゅっと手を握られて、ヤエトはかたわらに立つ預言者に注意を戻した。真っ暗なのに、彼女の姿は余すところなく見えた。その横顔の輪郭も、黒髪も、白い喉も――その喉と、くちびるが動いた。

「われらは問う」

彼女の声が、言葉が、あたりを駆け巡った。明白に形があるわけではないのに、それはまるで、質量をそなえているかのように風を切り、唸りをあげて飛び、扉の表面を叩き、そして散った。

見えたわけではないが、正しくそのように作用したと、ヤエトは知った。推測したわけではない。ただ、知っていた。

叩かれた扉は、形を変えた。

巨人とでもいえばよいのだろうか。青黒い肌に剛毛を生やし、まるで金属でできたかのような姿に、燃える炎を思わせる双眸。逆立つ髪は白、額からは一本の角が伸びている。三日月のように反り返ったその角は、あらゆる光を包含して虹のごとくかがやいていた。

――ああ、これか。

シンリールの街路で彼が見たあの虹は、この角だ。

――つまり、これが……叡智の扉？

この、魔物のような存在が？

炎の眼が預言者を、次いでヤエトを凝視した。巨大な口が開き、尖った歯が見えた。

「答が得られるとでも思っているのか」

声は、意外にやわらかだった。鐘を鳴らすような声でも出るのかと――いや、むしろ人語を喋るのかどうかあやしいとまで思っていたせいで、ヤエトは返事をするどころではなかった。

当然、答えたのは預言者だ。

「もちろんです」

彼女の声は、確信に満ちていた。ついさっき、扉を叩いたのと同じ強さで、声ははなたれた。

「誰に問うているつもりだ」

「智慧の女神に」

それは笑った。今度こそ、鐘のような声音だった。叩くというより、がらんがらんと地面を転がしていったような音だ。やかましいばかりで、耳に心地よくはない。

「智慧の女神に、見えるか！」

「見えません」

「では、なにに見える」

預言者は答えなかった。答えず、問い返した。

「おまえは、なんなのです」

たしかに――少なくとも女神には見えない、とヤエトは思った。ここには女神がいるはずではなかったのか。これもただの幻像で、質問者の覚悟を問うているのだろうか？

「見た通り、魔物だよ」

甘い声で答えると、魔物はまた大声をあげて笑った。今度は鐘を割り砕くような声だった。

預言者が黙っているので、ヤエトが尋ねた。

「なぜ、魔物がここにいる」

魔物はまた声の調子を変えた。からみつくような、蜜のように甘い声だ。

「おまえらは、なにを探しに来た？　女神だろう」

実際に、包み込まれるような感覚があった。ここでは、声は力を持つのだと思った。声は声でなく、気もちなのだ。思念、あるいは意志の力がそのまま聞こえているのだ。

――この声に負ければ、逃げられなくなるのではないか。

言葉はそのまま、聞く者を捕える檻なのだ――犠牲者がどんな運命を辿ることになるかは、考えたくもない。

預言者が、強い調子で答えた。

「いいえ、探しに来たのは女神ではありません。問いへの答です」

ほんの一瞬だが、魔物は勢いを失ったように見えた。だが、すぐにまた言葉を発した。ゆっくりと、ひとつも聞き違えることのないように。

「女神はいない。食らってしまったからな」
預言者はヤエトの手をはなした。そのまま、ほんのわずかしかない距離を詰めて魔物の間近に立つと、淡々と宣告した。
「愚かな。魔物風情が、心得違いもはなはだしい。女神を丸呑みにしたとて、おのがものにはできるまい。おまえはここから動けない、そして女神の責務を受け継がされてしまった」
「なにをいう」
「おまえは問いには答えねばならない。いかなる問いであろうとも。嘘もつけない」
「嘘くらい、いくらでも――」
「虚妄は、口にできるまい」
預言者は魔物の鼻先に指を突きつけ、そのまま言葉をつづけた。
「恩寵の力を与えられたようなもの。おまえは、問われたことに嘘では答えられない」
魔物は笑った。
「思いたいように、思うがよかろう。食われる覚悟があるならな」
――食われる？
不穏な言葉が飛び出した。見るからに、女神の力を得て問いに答えるより、のこのこやって来た人間を頭から呑み込んでしまうといわれた方が、納得できそうな風貌である。いや、嚙み砕く方が似合うかもしれないが、細部はどうでもよい。

預言者は暫し無言のまま魔物を見上げていたが、やがて、つぶやいた。
「神よ……」
その呼びかけが、どの神に対してなされたものかは、ヤエトにはわからなかった。彼女が奉じているターンに向けたのか、それとも、眼の前の魔物が食らったという女神にか。
預言者は眼差しを強くし、ふたたび声をはりあげた。
「貪食の魔物に用はない。畏れ多くもおまえが食らったと思い込んでいる、おまえの中に隠れたもうた女神に問う」
「思い込んでいるのではないさ」
「おまえは女神に利用されたのです。もとより、魔物は魔界のもの。魔王もまさか、求める女神がおのが領土に隠れ潜んでおいでとは思うまい。それも、魔物に食われる体で、その体内に隠れたもうたとは、想像だにせぬであろう——聞け、魔物よ！」
預言者の額が明るくなった。
——はじめて会ったときのようだ。
だが、少し様子が違っていた。額に宿った光はかがやきを増し、預言者の輪郭が透き通って、消えてなくなるかと思うほどになった。
これでは、まるで彼女自身が星になったかのようだ。
「聞け！　これは我が神より預かりたまいし言葉。はじめの、そして終わりの言葉」

預言者の姿は光に溶けた。

その声も、音というより、光そのものとしか感じられなかった。もはや耳ではとらえ得ない。ただ意味だけが叩き付けられる。

「シュラヤよ、出でまし、教えたまえ。我が力もて、今このひととき、御身を隠したもう。それゆえ、我が子らに智慧の光を！」

光は見る間にひろがり、あたりの闇を払った。ヤエトもであったが、同様に身動きひとつしない魔物を包み、圧倒的なまばゆい白の内に、すべてを溶かしてしまった。

その白よりなお明るいものが、やがて視界に生じた。

童女の姿を、それはとっていた。

肩口を撫でる髪は銀の色、肌は磨き上げた黒檀のように黒い。華奢な身体を覆うのは、虹色にかがやく貴石をつらねた飾りである。絢爛とかがやくその瓔珞は、生きた植物でつくられているようでもあった。小さな芽が葉となり、蔓が巻き付き、蕾が開いて満開の蜜をしたたらせ、その黄金のかがやきが枯れ朽ちた葉の黄色へと変化して、やがて落ちて消える——生成されては枯死していく、一瞬たりとも同じ形に留まらない、それが女神の衣装であった。きれいに揃えられた銀の髪にも、花飾りがあらわれたり消えたりをくり返している。

だが、女神が眼を開いたとたん、すべては印象を薄め、視界の外へ飛び去った。

切り下げた前髪の下にかがやく女神の双眸は、翡翠のような色をしていた。だが、翡翠と似ている



のは色だけだった。女神の眸は、どこまでも底のない深甚さをそなえ、闇をたたえていながら、抑えきれない光をもたっぷりと含んでいた。それ自体が、ひとつの世界であるかのように。

「問え」

女神は告げた。童女のような外見に似合わない、低い声だった。ささやくように小さいのに、響きは明瞭だった。

「神の名を」

ほとんどなにも考えるゆとりなく、ヤエトは口走っていた。自分が声を発したというより、考えだけを、強制的に取り出されたような感じだった。

この容赦のなさ、自身の意志が追いやられて傍観せざるを得ない感じは、北方で体験したあれに似ていた——ターンの器となったときの、あれだ。

翡翠の眸が大きくなる。近寄っているのか、それとも女神が巨大化しているのか。

ふたたび、どうしようもなくヤエトは口にした。

「世界の罅を塞ぐために……魔界の蓋が開くのを防ぐために、力を貸してくださる神の名を」

まるで眸の中に吸い込まれていくようだ。それしか見えないし、感じられない。

「選べ」

「……選べ？」

なにをだ、と当惑するヤエトに、預言者が告げた。

「条件に合致する名が多過ぎるという意味です。問いはひとつ、答もひとつという決まりのようですから」

預言者は声だけで、姿はもちろん、気配すらない。

選べと命じられたせいか、ヤエトは自分自身を感じることができるようになっていた。

――預言者は？

声は聞こえたが、姿が見えない。そもそも、女神以外を見ることが難しいのだ。

「あなたの姿が見えません……」

「今はただ、正しい問いをお考えください」

「あなたも一緒に」

「いいえ、これは救い主様、あなたのなさることです」

「だが――」

ヤエトは口ごもった。条件に合致する名が多過ぎるとは、そんなにも多くの神が協力してくれる可能性があるということか？

「――それはつまり、天界出身の、母神の堕天以前から存在する神の名が、すべて候補にあがってしまうということだろうか」

答はない。

なんとなく腹が立ち、ヤエトは姿のない預言者に向かって叫んだ。

「ここまで、ふたりで来たことには、意味があったのでしょう？　なら、どうしてここで投げ捨てるような真似をするのです！」

それでも、返事はなかった。

――駄目だ、そんな場合ではない。

こんなわけのわからない異界にいるのは、この問いに答を得るためだ。預言者には後刻、いくらでも文句をいうとして、今は融通のきかない智慧の女神の相手をせねばならない。

誤解のない表現を考えようと少し苦労してから、ヤエトはそれを諦めた。さっきの調子で心に想うことを抽出されてしまうなら、こまかい部分は、さほど重要ではないだろう。そもそも、相手が人の言葉で思考や理解をおこなっているかも疑問なのだ。

焦点をあわせるべきは、言葉の選択ではない。問いそのもの、願いの本質だ。

――問いは、願いに似ているのだな。

不意に、彼はそう悟った。

尋ねるということは、その答を願うということだ。どんなに途方に暮れて、正答に至る手がかりもなく、ただ問うしかないときでも――それでも、問う者は心に抱いているはずだ、理想の答を。

その理想が、願いだ。

心を強く持ち、願いを明白にすること。それが、神に問うということなのではないか。

きっと、そうなのだ。

ヤエトは顔を上げ、また少し遠ざかったように感じられる翡翠の眸をみつめた。その顔の周囲に咲き乱れる花々を、萎れてうなだれる蔓を見、あるいは実る果実の芳醇な香りを、風にそよぐ葉のささやきを、植物の中を駆け巡る水の音を感じとった。

女神は世界であり、世界は女神だった——すべてが、そこにあった。

答を、彼はその世界に求めた。

「その中で、わたしの声と願いを聞き届けてくださる神を、お教えください」

「ひとつの名を」

女神の声が響いた。それは、水面に落ちた一枚の葉からひろがる波紋のように、一点を中心として徐々に大きくなり、ヤエトという存在を揺さぶり、やがて消えた。

その波紋の残響で、彼の視界がふるえた。

「すでに、知りおろう」

女神の言葉はそれだけだった。

——すでに？

彼が知っている神の名が役立つのだとしても、どれと示してもらわねば意味がない。

ヤエトが不満を述べようと口を開きかけたとき、預言者の声がした。

「質問者は、ふたり」

そんな道理が通るのか疑問だったが、肯定の意志が女神の眸から伝わった。

「北の湖、天に通じる鏡、イザモルドが名付けた精霊は、協力を惜しまぬであろう――ひとたび、大地のあるじより懇請を受けたれば、拒否もできぬ。ただし、その者の力では、鰯を塞ぎきることはかなわぬやもしれぬ」

低いその声は、ヤエトの存在そのものを揺り動かした。散らばりそうになる自我と思考とを必死でとりまとめ、彼は尋ねた。

自分で考えついたというより、どこからともなく浮かんできた問いだった。

「闇の御子とは、いかなる存在なのです？」

「問いは、ひとつ」

「答もひとつ――ですが、わたしのはじめの問いには、答らしい答をいただけませんでした」

女神はヤエトを注視した。視線の圧力に、ヤエトはたじろいだ。圧殺されるかと思うほどだった。

「もはや十分に、報いた」

それが、女神の返答だった。

異論を唱えることもできない。胸が苦しい。喉も痛い。呼吸ができない。手で押さえようとしたが、どこにも手の存在を感じられなかった。もしや、自分は女神という圧倒的な存在に吹き飛ばされ、とうに消えてしまっているのでは――いや、それなら苦しいはずがない。

預言者の声が聞こえた。

「魔物の腹より外にお出ましになられたのも、我が神のお力あってのこと。かくのごとき機会、二度

はございません。それでも、十分に報いたと？」

それも、ひどく遠いように感じた。

だが、暫くすると、女神の眼差しが弱まった。彼は深く息を吸った。身体の中に、夏草を思わせる芳香が満ちた。まるで、草原にいるようだ。揺れる草の葉になった心地がする。

女神は眼を閉じていた。その髪が、非在の風に揺れている。よく見れば、それは流麗な飾り文字のようにも思われた。なんと書かれているかは、今のヤエトには読み取れない。だが、髪が揺れるたびに世界の真理がひとつあらわれ、そして消えていくのが、彼にはわかっていた。

わかるのに、わからない。

——視えるものは、理解できる限りのもの。自分の知覚が、可能な限りの翻訳を終えた情景だ。

同様に、聞こえるものもそうだろう。女神の姿と言葉、どちらもヤエトには把握しきれない。だが、眼に映ったと感じられれば、その一面だけは、理解できているのだ。聞こえたのなら、それもきっと、わかるはずの情報なのだ。

再度、彼は尋ねた。

「御子とは、いかなる存在なのです」

「……あれは、欠けたるものであろうと思う」

「欠けたるもの？」

「考えよ。世界が引き裂かれてより後、生じた神のすべては、対である。しかるに、御子はどうか」

――そうか。

オルムストとターンがそうであるように、邪竜と呼ばれる母神の堕天後は、対になる神しか生まれなかったはずだ。だが、魔王だけは違う。対になる神がいるとは、聞いたことがない。

「欠けたるものは、求めつづける。おのれを満たすものを」

それは、とヤエトは問いたかった。闇の御子の、その欠損を満たすものとは、なんなのかと。

だが、その想いは言葉にならなかった。さすがに、これ以上の問いに、答のあろうはずもない。

ふたたび開いた女神の眼には、ヤエトの姿が映っていた。おかげで、彼は自分の外形を取り戻すことができた――もうずっと、預言者が発した白光の中に消えていたのだ。

「そなたらの望む結末のみが、智慧ある者の考えとは限らぬと、心得よ。これで、しまいだ」

視界を埋めていた女神の姿が、徐々に遠ざかりはじめた。ようやく、女神以外を見るという選択肢が与えられ、ヤエトはあたりを見回した。

だが、預言者の姿はない。

「……しるべの星？」

答も、なかった。

沈黙は、そのまま静寂に通じた。そのあいだにも、女神の姿は少しずつ遠ざかりつづけている。翡翠色の大きな眼も、今は眠たげな目蓋を支えかねるといった風情であった。

女神はささやいた。

「もう行け、人の子よ。ここは、そなたらが長居をしてよい場所ではない。仮初めならぬ解放がおとずれる日が来れば、また会うこともあろうか……」

語尾が揺れ、光が弱まり、気配が遠ざかる——そこでようやく、ヤエトは自分が今まで満たされていたことを知った。

至福の中にいたことに、気づいたのだ。

女神の注視を受け、言葉をかわす体験を、ほかに表現のしようがなかった。女神にただ圧倒されるだけではなかった。女神は彼の存在をはっきりと認識し、受け入れてくれたのだ。でなければ、会話にはならなかっただろう。

神に受け入れられていた、そしてその稀少な時間が終わってしまったと知ったとき、ヤエトは身の内に虚無を感じた。完璧な美が、真実が、そこにあるべき正しさが——すべてが失われていくように感じた。指のあいだから砂がこぼれ落ちるように、留めるすべもなく。

——こんな神もいるのか。

背を向けたまま、なんら反応を示さないオルムストとも、彼を器として使ったターンとも、違っていた。ひとことでいえば、女神は彼らに対し、一方的な扱いをしなかった。対等とまではいわないが、少なくとも相手の存在を認め、理解する姿勢があった。

相対していたあいだはわからなかった。女神はやはり、人に過ぎないヤエトには、把握しきれない存在だった。だが、少し距離を置いてみればわかる。

女神は彼を認めていた。

——神に認められるとは、存在を容認されるようなものなのか。

ここにいてもよい、生まれてもよかった、存在することが正しく、当たり前のこと——無理なく、心の底から思えていた。

それこそが、至福の正体だった。

女神は闇の奥に遠ざかり、もはや輪郭もさだかならぬ影となっていた。子どものように、その影を追って走りたいという衝動に駆られ、しかし、ヤエトはそれを堪えた。

追いつくことはできないだろう。対話は終わった。現実からは失われ、過去となり、記憶となった今、女神の影は美しい幻想に過ぎない。

それより、預言者だ。

「しるべの星、どこです？」

答はない。光はどんどん薄れて消えていくのに、同行者の姿は戻らない。

不安になって、ヤエトは彼女の名を叫んだ。

「ウィナエ！」

やはり、答はなかった。

ふたたび、彼は預言者を呼んだ。

「答えてください、ウィナエ！」

彼は走った。その背を、甘い声が追った。

「逃さぬぞ、問う者よ」

魔物の声だ。

ふり返りたい気もちをなんとか抑え、ヤエトは足を速めた。足先が、踵が、くるぶしまでもが砂にとらわれ、そのまま倒れかける。

——幻像だ。

ここは、彼の生まれ育った世界とは違う。砂と感じられるものは砂ではなく、魔物が彼の行動をとらえるための罠なのだ。

ふと、女神の記憶がよみがえった。風にそよぐ夏草の香り、明るい草原を胸に抱いて、ヤエトは地を蹴った。広い空、巡る水、命……胸に浮かんだ言葉は、どれも女神のそなえるひとつの面を暗示していた。女神の智慧とは、世界の存在そのもの、すべてを肯定する心なのだ。

意味もわからず、ヤエトはそう確信した。

夢で理解したことが、目覚めてみれば理屈が通らず、苦笑して忘れ去るしかないように——今、彼が得たと信じたものもまた、ここを出てしまえばなんの意味ももたなくなるのかもしれない。

それでも、今は意味があった。

女神は世界である。魔物ごとき、その足下に及ぶべくもない。

あの翡翠の眼差しを思い起こせる限り、彼を消し去ることはできない。丸呑みにすることも。

――だが、いつまでもつづくわけではない。

女神の視線は、まさに加護と呼ぶべき力をそなえていたが、その効果を過信するわけにもいかない。魔物の呼びかけに捕えられる前に、ここを脱出せねばならなかった。

ヤエトは周囲を見回した。前後左右にとどまらず、上を見、下を見た。

めまぐるしく変化する景色のどこにも、預言者の姿はない。

「しるべの星！」

遠くに光がまたたいた。あれも魔物の罠かもしれないと思いつつ、それでもヤエトはその光を目指して走りつづけた。すぐに身体が重くなり、息が切れはじめる。心臓が、もう限界だと訴えている。なけなしの体力をふり絞って、ヤエトは走った。これも気のせいなのか、それともほんとうに身体に負担をかけているのかはわからないが、止まったら最後と感じていた。

魔物の笑い声が空を渡る。重たい雲がわき上がり、あたりが薄暗くなったと思うや、雷鳴が響いた。不気味な光が明滅し、周囲の様相は一変した。果てのない沙漠と見えていた地面は奇岩のつらなる岩山へと転じ、ヤエトは足を止めざるを得なかった。走れるような地形ではないのだ。

これも、あの魔物の力なのだろう。逃げなければと気ばかり焦るが、その方法がみつからない。

――ただ、今回は戻る必要があります。

生きて扉の向こうに戻らねば、せっかく智慧の女神から摑んだ情報が、無駄になってしまう。

あたりはどんどん暗くなっていく。ヤエトが追っていた光は、遠いままだ。それどころか、少しず

つ弱まっているように感じる。くり返す明滅の、暗くなっている時間が長くなっているようだ。
「ウィナエ！」
ヤエトは叫んだ。
不意に足裏に地面の感触がなくなり、落ちる、と感じた。
すべての景色が消え、ヤエトは走りだした。地面がないのに走るというのも妙な話だったが、意識の上で、前に進もうという強い気もちがあったせいで、走っているとしか考えられなかった。なにも見えなくなったことも、障害物がとり除かれたと解釈できた。
彼をみちびく光は、まだ見えている。
「ウィナエ！」
預言者の名を呼びながら、彼は走った。走りながら、手をのばす。
一瞬、認識が混乱した——自分はここから逃れるために走っているのか、それとも預言者に救いの手をのべるためなのか。
のばした手に、手がふれた。
「ここです」
見えたのは、手だけだった。それも、手首の腕輪から少し、肘の手前までしかない。あとは闇に溶けてしまい、輪郭どころか、そこになにかがあるのかどうかもわからない。
「手しか、見えない」

思ったことが、そのまま口からこぼれ出た。
預言者が苦笑するような気配がした。
「それだけでも、見えてよかった」
「……そういうものですか」
「わたしの声も、聞こえるのですね」
「はい」
「そうですか」
預言者の声は、静謐そのものだった。どこか、女神の声に似ていたかもしれない——ささやくようなのに、明瞭だった。ヤエトを揺さぶる、強さがあった。
その声は、告げた。
「では、ターンの神にお預かりした言葉を、あなたにお伝えしましょう」
「……今は、それどころでは。後ろから魔物が」
「大丈夫、あなたは無事に扉の向こうに戻ります」
「それが預言なのですか」
「ええ、そうです。これは預言なのです。あなたは無事に、扉の向こう側にお戻りになるでしょう」
預言者の言葉はいつも通りだったが、ヤエトはそこに込められた事実に気づき、はっとした。
魔物の笑い声が、空を渡る。あたりを包む闇よりもさらに暗い雲となり、そのあいだを雷鳴が轟く。

黄金色の光がヤエトの視界を照らすが、やはり、預言者の姿はない。
見えるのは、茫漠たる荒野のみ。
「――あなたは、どうなさるのです」
「お別れです、救い主様」
預言者の声は、落ち着いていた。
不意に、すべてが腑に落ちた。
――知っていたのだ。
はじめから、彼女にはわかっていたのだ。扉の向こうに行くことも、そして自分は戻れないということも。
握った手に、ヤエトは力をこめた。
「なぜ、そんなことを。ともに帰りましょう」
「先ほど、女神をお隠ししたときに、ターンの神がわたしを器としてお使いになりました」
「ええ、それはわかります」
「女神をお隠しするためには、膨大な力が必要でした。わたしはもう、人の姿をとることはできないでしょう。あちら側へは戻れないのです」
「……そんな」
ターンがそんなことをするまい、とは断言できなかった。そして、神に器として使われるのがどう

いうことかも、ヤエトは知っていた。ほかならぬ、ターンのおかげで。

ただ言葉を発するだけでも、どれほどの負担だったか——神の力をもって、別の神を包み隠す行為ともなれば、人の身では支えきれまい。それも、推測はできる。

認めたくないだけだ。

「最後のお言葉を、賜りました。お褒めいただきました、よくやったと」

ゆっくりと、ヤエトは視線を落とした。まだ、預言者の手は彼に握られて、そこにあった。だが、もう腕輪も見えない。手首がようやく認められる程度だ。

「……ウィナエ殿」

「死ぬわけではないのです。ここに留まるだけです」

「ウィナエ殿」

預言者の名を呼び、彼は手に力をこめた。

声にも。

「わたしの言葉をお忘れですか、しるべの星。あなたは、そんなに強くなくていい。泣いたって……わめいたって、いいんだ」

預言者は、微笑んだ。なにも見えなかったが、ヤエトはそう感じた——彼女の、あの諦念に支えられた淡い笑顔が、暗闇に浮かんだような気がした。

「少しだけ……弱音を吐いてもいいですか」

「どうぞ」
「今、わたしは、心がかるくなったようにも感じているのです。いつ終わりが来るかと怯えるのも、これでおしまいですもの」
ヤエトには答える言葉がなかった。
淡々と、預言者はつづけた。
「現実がひとつずつ幻視に追いついて、未来が過去になっていく中で、とうとう、現実になっていない幻視は、あれだけに——はじめの幻視だけに、なってしまった。そこから先は、ターンの神が直接にみちびいてくださる未来しか、わかりませんでした。だからずっと、怖かったのです」
無理もない。逃れようのない死と直面しつづけるなど、どんな英雄でも耐え得ぬであろう。
だが、ヤエトがなぐさめの言葉を口にする前に、すうと息を吸う音が聞こえた。吐息とともに、声が聞こえた。
「怖かったのです。……死期が近いと感じる以上に、未来がわからなくなるのが、……怖かった」
思いがけない言葉に、なにも考えることもなく、問い返してしまった。
「未来が、ですか」
「ええ。でも、……もう、楽になれます。やはり、あなたが褒めてくださったほどには、わたしは強くなかったのです」
迷ったが、ヤエトは思った通りを答えるしかなかった。

「強いですよ、やはり」
「あなたがそうおっしゃるなら、そうなのかもしれません。少なくとも、あなたをお逃がしするお役に立つ程度には、強くなければいけませんね」
「……感謝します」
そんな言葉を口にしたいわけではなかった。
だが、いうべき言葉が、ほかにあるというのか。
ターンを罵倒し、預言者を慰め、ともにここで死のうとは、いえない。一時の同情に流されて、本来の役目を忘れるわけにはいかなかった。
――戻る必要がある。
「いずれ、あなたはわたしを呪うことになるかもしれません」
預言者の声からは、彼女の想いを窺い知ることはできなかった。
「なぜです？　それも預言ですか」
「いいえ、違います。それでも、そう思う理由はあるのです……でも今は、先のことなど思い悩む暇はありませんね。さあ、わたしに役目を果たさせてください。しるべの星として、最後まで」
預言者にうながされるまま、彼は歩きだした。
魔物の声は、聞こえない。空は今も不吉な光に満ちていたが、雷鳴もかすかになっている。地面の感触も戻り、景色も少しずつはっきり見えるようになっていた。

それとは逆に、預言者の手は徐々に薄れはじめていた。
——握っているのに。
握ってから、はなしていないのに。
あたりが明るくなるにつれ、預言者の手は輪郭を失い、透明になっていく。
「このまま進んで」
耳元で、声がした。
はっきり聞き取れるのに、そして耳元で聞こえているという感覚があるのに、同時に、その声はひどく曖昧で、遠かった。遠過ぎた。
「忘れないで。わたしを強くしたのは、あなたです」
ふり向いても、預言者の姿はなかった。そればかりか、その動きで預言者の手がはずれ、二度と摑むことができなくなった。
「ウィナエ！」
答はない。
再度、ヤエトは預言者の名を叫んだ。
「ウィナエ！」
その呼び声に応えるように、雷鳴が轟いた。
「逃れられると思うか、愚か者めが」

魔物の声が響き、あたりが真っ暗になった。
そして、足下が割れた。

3

気がつけば、地面に転がっていた。目に入ったのは、石畳の街路に、砂。口にも砂が入り、噛み締めた歯のあいだで、ざりりと嫌な音がした。
「……！」
誰かが、なにか叫んでいる。
頭が痛い。いつもの頭痛ではなく、これはどうやら、打ったようだ。
地面に手をついて上体を起こそうとしたが、おや、と思うほど手が動かなかった。腕に、まったく力が入らないのだ。重い荷物を長時間持ち過ぎたときの感じに似ていた。
――なにも持っていなかったと思うが……。
彼は身体を持ち上げるのを諦め、転がり直した。頭を打たないよう、慎重に。
遠くから声が聞こえた。
ああ、と思う。
――ジェイサルドだ。

ここがどこで、自分が誰なのか。とっさに思い出せないのに、他人の名前はわかるとは。妙な話だ、と思う。同時に、それも自分らしい、とも。

「……！」

また、誰かが叫んでいた。

どうせ、早く起き上がれとか、そういうことをいわれているに違いない。なんとか動かそうと、不甲斐ないおのれの手を見下ろして、気がついた。

——手。

なにかを握っていたはず、と感じるのと、それがなんだったかを思いだすのが、ほぼ同時だった。少し前まで、この手は預言者の手を握っていた。しっかりと、摑んでいた。

握りしめる動作をしようとこころみて、失敗した。痺れたように、手に感覚がない。

——こんなことだから。

摑んでいたものを、失うのだ。

——預言者は？

はっとして、ヤエトは飛び起き——ようとして、これも果たせずに終わった。力が入らないのは手だけではなかった。身体のどこもかしこも、まったく思うようにならない。

まるで生まれ直したかのようだ。

気づけば、ぼんやりと前を見ていた。地面に転がっているから、前といっても見えるのは空だ。

狭い空である。両側に、背の高い建物が並んでいるせいだ。砂が舞い飛ぶ空は、黄ばんで見えた。
――シンリールだ。
思いだした。彼はシンリールに戻って来たのだ。
まだ記憶が混乱している。
――どこから？
扉の向こうから。
智慧の扉、という言葉が浮かんだ。同時に、とてつもない喪失感に襲われた。あざやかな翡翠色が視界を染めて、意識もなにもかも、すべてその記憶の中に同化していこうとする。ふたたび、なにひとつ不足することのない至福の空間へ、戻ろうと……。
どこか遠い、ここではない場所を求めて
「殿！」
ジェイサルド、と答えようとして、はっとした。
――いいのか？
相手はほんとうに、ジェイサルドなのか？
彼が知る、あの老騎士の声ではあるが、その名を呼んでもかまわない状況なのか。戦って勝ち取れと命じたのは自分だが、結果、どうなったかまではわからない。
――もし、魔物に乗っ取られていたら？

記憶が時系列に沿って整列しはじめるのを感じながら、ヤエトは必死で手を動かし、身体を捻り、どうにか自力で上体を起こすことに成功した。

そして、預言者の言葉をあらためて思い起こすことになった。

――大丈夫、あなたは無事に扉の向こうに戻ります。

彼女を通じてターンが保証し得るのは、預言者という存在が体験し得る世界――すなわち、あの扉の向こうの世界でのできごとまでだ。この世から彼女が消え去った今、ターンの恩寵も効力を失ったと考えるべきだろう。

つまり、ヤエトがこの先、どこまで生き延びられるかは、無明の闇に沈んでいるということだ。

――ここで終わりなんじゃないのか。

真面目にそう考えざるを得ない光景が、今、彼の前にはひろがっていた。

二度は視えないといわれていた、あの暗い虹の渦が、じわじわとあたりを浸食しはじめている。街路の一部が、まるで溶けたように輪郭を滲ませ、闇の中にしたたり落ちていく。

渦の中心部には、なにか尖ったものが見え、虹の形を歪めていた――あたかも、世界を隔てる皮膜を突き破ろうとしているかのように。

来る、とヤエトは叫ぼうとした。

しかし、口を動かすどころか声をまともに出すことも、彼にはできなかった。ひゅう、と息が漏れただけだった。

虹の螺旋が砕け、世界が歪んだ。けたたましい音が鳴り響く。空気が割れているのだ、とヤエトは思った。天が落ちたかのような衝撃が大地を揺るがし、三日月に反り返った一本角が、ぼう、と太い音を鳴らしながら現世に顕現した。

その角の横に、ぐいとあらわれたのは、銀色の爪である。爪もまた、角と似た形をしていた。黒い指は、ただ黒いのではなく、すべての光を吸い込んでしまう底なしの黒だった。異界ではあまり強い印象を残さなかった魔物の面貌は、不吉なほど美しい。閉じた目蓋は、なめらかな額と高い鼻梁が落とす影に囲まれている。名工の手によって刻まれ、磨き上げられたかのような造形美だ――だが、それは不動の彫像などではない。

――わたしだ。

世界を引き裂き、この世にあらわれ出ようとする魔物の姿を、なすすべもなく見守りながら、ヤエトは思った。

――これを引き連れて来てしまったのは、わたしだ。

絹糸のような白い髪が、裂け目から流れ込む異界の風にたなびく。

おそらく、女神を食らうことで、魔物はその様相をも引き継いだのだろう。黒檀の肌に白銀の髪をした少女の姿から、黒と白という色を受け継いだ。だが、それは色にとどまり、かがやきまでは奪い得なかったのだ。

それらの色は借り物に過ぎず、魔物の本質ではないのだろう――どんなに美しくとも。

もう一本の手が、ずるりと伸びた。顔のすぐ脇から、である。あり得ない角度に、あり得ない位置で出現したその手は、まっすぐに来た。ヤエトめがけて。

まったく逃げも隠れもできない状況である。

魔物の手は巨大で、彼くらいの体型の人間なら、三人は楽に束ねて摑めそうである。全身をあらわすには、ここはずいぶんと窮屈そうだ。街路にびっちりと詰まってしまった魔物の姿を想像すると、少しはおかしみもある。だが、身体をふるわす程度の動きで、建物は崩されてしまうに違いなかった。

不思議と、怖さは感じなかった。身体が麻痺しているのと同様、心も硬直し、感情が生まれる余地すらないのだろう。おかげで、見苦しくない最期には、できそうだ。

だが、その爪先がヤエトのもとに届く寸前、赤いものが空を飛び、魔物の指に刺さった。

魔物の口が開き、おおお、と声が出た。

「殿！」

ヤエトは首を捻り、駆けて来るジェイサルドの姿を認めた。

駆けながら、ジェイサルドは手をふりかぶり、また、なにかを投げた。

――紙？

無造作に畳んだ紙にしか見えないそれは、ジェイサルドの手をはなれるや、朱に染まり、凄まじい速さで魔物に向かって飛んだ。今度は、銀の爪の根元に刺さる。

見る間にわずかな距離を詰めたジェイサルドは、裂帛の気合いとともに、魔物に斬りつけた。

魔物の指が一本、あっさりと落とされる。
——なんだこれは。
大気が震動した。
魔物が声をあげている——だがそれは、苦痛の叫びのようではなかった。人の耳にはとらえ得ない音域での、呵々大笑。それが、ヤエトの感じたものにもっとも近い。
根元から、ふたたび指が生えた。落ちた指の方は、不快な臭気をはなつ液体を滲ませながら、巨大な芋虫さながら、地面をのたうっている。その輪郭は不定形に歪み、溶け、なにか別のものに変じようとするかに見えたが、途中でその動きを制され、やがて静かになったかと思えば、蒸気を発して消え失せた。
そのあとに、はらはらと紙が舞い落ちた。
「何奴」
問うたのは、魔物の方だった。異界で聞いたのと同じ、やたらと艶やかで甘い声だ。
「ご同類よ」
答えた声も、口調も、ジェイサルドのものである。老騎士は、ヤエトと魔物のあいだに立っていた。どこにも力みの感じられない後ろ姿だ。手にしているのが抜き身の剣でなければ、気楽な散歩の途中といった風情である。
もっとも、なにをやっても剣呑になってしまうジェイサルドのことだから、散歩のついでに魔物退

治をしたとしても、そう意外ではない……かもしれない。
「獲物を横取りされる趣味はないのだがな」
魔物が眼を開いた。
あれは炎だ、と思う。あの眼差しは、熱そのものだ。すべてを焼灼し、灰燼（かいじん）と帰する力だ。
「後先をいうならば、儂が、先だ」
ジェイサルドの口からこぼれ出たのは、とんでもない返しである。魔物は眉根を寄せた。
「先に見つけておいて、逃したなら、そちらの落ち度であろう」
「こうして追いついた以上、好きにさせてもらう」
魔物は鼻先で笑った。
「好きにさせると思うのか」
「どう思われようが、知るところではない」
応じる声は、魔物の艶やかな声に比べれば、いかにも無骨で、耳障りが悪い。魔物の声が、すべてを包み込むようであるのに反して、ジェイサルドの声は、なにもかもを削ぎ落して断ち切るようだ。
――なんにせよ、人ではない。
今の彼に、サーヤリムなどという、おとなしげな名は馴染まない。単身そこに立っているだけでも、危険さが伝わるような存在だ。
ジェイサルドの背に、わずかに力が入った。

きいん、とするどい音がして、ジェイサルドの剣が消えた。いや、それは今、頭の高さに掲げられ、両手で支えられていた。魔物の爪をはじいたのだ——と、ヤエトが理解するまでに、少し時間が必要だった。

「なるほど、同類か」

魔物はすでに首までこちらに出ている。その巨大な顔の両側には、不自然に両腕が並ぶ。世界の境界を突き破り、引き裂くために、頭と両手を突き出した姿勢にも見えるが、それにしても位置に違和感がある。その奇妙さは、魔物の首が少しずつかたむいて横になり、顔が地面と水辺になるに至って、動かしがたいものとなった。

顔を横たえたまま、魔物はにやりと笑った。

「しかし、同格ではあるまいよ」

挑発めいた言葉を無視して、ジェイサルドは地を蹴った。

魔物に斬りかかるつもりだとばかり思っていたので、前のめりの姿勢からいきなり後ろへと跳躍し、ヤエトを抱え上げたのにはおどろいた。

「御免」

同時に雷鳴が響き、砂煙が舞い上がる。

飛び散る砂礫に、街路に敷き詰められた石が割られたのだと気がつき、天上から飛来したかに見えた銀光は、魔物の爪が描いた光の軌跡だと知った。そのままの場所にいたら、ジェイサルドもろとも、

ヤエトもあの爪に串刺しにされ、あるいは巨大な手で潰されていたことだろう、というところまで把握したのは、砂煙が少しおさまってからだ。

魔物の眼は、相変わらず燃えている。視線で発火することさえできそうだ。

事態を把握できていないヤエトを抱えたまま、ジェイサルドはさらに後方へ跳んだ。

「番人！」

ジェイサルドが叫ぶと、答があった。

「ふたつだ。暫し」

あまり遠くもないが、近くもない——おそらく頭上からの声だと気づいて見上げるあいだに、ジェイサルドがまた大きく跳んだ。

派手に砂が舞い、あたりの空気が塵を含んで白っぽく染まった。

おおおお、と魔物は吠えた。その声は街路を渡る内に消えるどころか大きくなり、やがて異界で耳にした雷鳴のように、どろどろと轟いて、あたりを席巻した。

今や魔物は半身を異界から引きずり出し終えていた。両手を地面に突き、角が生えた頭を反らす。陽光を浴びてかがやくその姿は、やはり彫像めいていた。

今も、あの魔物の内には女神がいるのだろうか。この魔物こそが、智慧の扉と呼ぶべき存在なのか。

幼い日、読みふけった物語に登場した智慧の扉は、翡翠でできていた。だから、別名を翡翠の扉といったのだ。だが彼が異界で見たものは、扉の形をとっていようがいまいが、そんな色ではなかった。

翡翠色だったのは、女神の眸である。白銀の髪、黒檀の肌、翡翠の眸——魔物とは、まったく違う。

魔物の双眸は今、凶悪なほどの光を帯び、あたりを睥睨（へいげい）している。

地面に降ろされて、ヤエトは我に返った。いささか手荒い扱いだったため、腰に走った痛みに、思わず声をあげたが、ジェイサルドは彼を顧みなかった。

反りのある剣を構え直すと、老騎士は地を蹴り、次いで、壁を蹴った。

ヤエトはあっけにとられていた。

ジェイサルドは、壁を走っているではないか——たしかに、それくらいせねば、魔物の頭はおろか、肩にも届かないだろう。だからといって、実際にやるか？　と、問いたい。

そのままの勢いで空を飛び、ジェイサルドは魔物に斬りつけた。あまりの速度に大気が色を変え、燃え上がったかのように見える。

魔物は笑った。

大口をあけ、哄笑（こうしょう）した。

「痛い、痛い！」

少しも痛くなさそうな口ぶりである。ジェイサルドはすでに空中で身を捻り、着地している。そして、また後ろに跳躍した。魔物は手をふり上げている。

「痛い痛い、痛い、痛い！」

勢いよく横にふった手が、ジェイサルドの胴を薙（な）いだ——と見えたが、老騎士は寸前に、建物の壁

にとりついていた。まるで蜘蛛である。とはいえ、さすがに長時間そのままでいることはできないらしく、また壁を蹴った。空中でひらりと身を捻る様は、猫に似ていた。

とにかく、人間のする動きではないし、相手も同じだ。飛び回るジェイサルドの動きを追って、魔物は顔を真後ろへ向けた。梟かと思ったのもつかの間、そのままぐるりと一周するに及んで、梟などではないと納得するしかなかった。この世のものではないのだ。常識にとらわれていては、把握しきれない。

ここに至ってようやく、ヤエトは気がついた。

――逃げなければ。

どちらが勝つにせよ、こんなところにいたら、勝敗が決する前にかるく巻き込まれて、命を落としかねないではないか。

手を握ったり開いたりしてみた。さっきよりは、少し感覚が戻っている。

扉の向こうから戻って来る必要があるのです、と預言者は告げた。たしかにその通りだ。だが、戻っただけでは意味がない。物見遊山が目的で、扉の向こうへ行ったわけではないのだ。行って、戻って来た彼には、使命がある。

――ずいぶんと、曖昧なご託宣ではあったが。

結局、女神の口からは具体的な名を聞くことはできなかった。

それでも、すでに知っている神の名のどれかが正解たり得ること、それとは別に、罅を完全に塞ぐ

ことはできなくとも、確実に力を貸してくれるであろう神が存在することを知り得たのは、収穫といってよいだろう。

その情報を誰にも渡さず、このまま死ぬわけにはいかないのだ。

ヤエトは膝を引き上げ、脚を曲げてみた。

――よし、動く。

戦闘に参加するのは無理でも、いきなり跳ね起きて駆け出すくらいはやってのけたいところだが、とても無理そうだ。

人の領域を超えた戦闘がくりひろげられているすぐ背後で、やれ膝が曲がった、指が動かせたと喜んでいるのでは、あまりにもあんまりだという気はした。だが、残念ながら、それが現実である。

できるだけ目立たないように、ヤエトは肘と手を使って少しずつ身を起こし、そのまま這いずるようにして後方へ移動しだした。

ジェイサルドの間断ない攻撃は、魔物がこちら側の世界へ完全に姿をあらわすのを妨害する目的があるのかもしれない。世界を引き裂いたあの場所が、そのまま魔物の半身をとらえる枷(かせ)となっていた。

「痛い痛い、痛いよ痛いよぅぅうう！」

魔物の叫びが、耳を叩く。すべての思考を押し流しそうな勢いがある。なにしろ、声が大きいのだ。意識から、完全に追い出すことはできそうもない。

――考えろ。

どうせ、動く方はじりじりとしかできない。それも継続はするが、やらないよりは、という程度の行為に過ぎない。身体が役に立たないなら、頭を使うしかないではないか。記憶を整理し、繋ぎあわせるのだ。見落としはないか、有利な発想は生まれないか。

ジェイサルドが、ヤエトのすぐ前に着地した。魔物の爪を剣で防いだものの、そのままはじき飛ばされたようだ。

声をかけようかと思ったが、言葉が選べず、迷っているあいだにジェイサルドは腰からなにか取り出し、魔物に向かって投げつけた。

短刀のたぐいだろうか。いや、これは――。

――呪物か。

出会い頭に投げていたのも、これだったのだろう。見た目は折った紙に過ぎないが、どういう仕掛けなのか、あの金属めいた肌に深く突き刺さっている。

切り落とした指を消滅させたのと同様、魔物の再生力、あるいは動く力を奪う効果があるようだ、とヤエトは考えた。大きな図体に見合わず、魔物の動きは速い。その動きが、たまにちぐはぐな感じになるのは、あの呪物が刺さったせいだろう。短時間、狭い範囲で魔物の能力が減衰し、そのせいで、本来の力が発揮できなくなるのだ。

さらに後ずさりながら、ヤエトは考えた。

――番人を呼んでいたな。

ジェイサルドに答えた声は、あのふわふわとした髭の老人のものだったと思う。それなら、ジェイサルドはまだ敵ではない可能性の方が高い。

だが、ファルバーンが姿を見せないのが気にかかる――もし、ジェイサルドが魔物に変化するようであれば、自分が始末をつけると宣言していたのだ。あの若者がこの場にあらわれないのは、どういう意味を持つのだろうか。

それに、番人のあの答は？

そろそろ手が痛くなってきた。立ち上がれるかどうか、試すべきかもしれない。

と、そこへまた、ジェイサルドが降って来た。ぎょっとして見上げるヤエトの腕をとり、しかし顔は魔物の方へ向けたまま、叫ぶ。

「走って！」

なんという無理難題。

立ち上がれるかどうか試すどころではない。いきなり本番、しかも全力以上を要求された。

――とにかく、立つところからだ。

幸い、ジェイサルドが引っ張り上げてくれたので、立つための第一段階は、突破できてしまった。次は脚にちゃんと力を入れ、重心をとらねばならない。まっすぐ立つ必要はない。多少ふらついていようがどうしようが、前のめりになれば勝手に足が出て、記念すべき第一歩を踏み出すことができるはずだ。運がよければ、よろけた身体を支えるために、二歩目が出る。

それなりの運を摑めたようで、かなりあぶなっかしい体勢ながら、ヤエトはなんとか歩きだすことができた。ひいき目に見ても走っているとはいえなかったが、這いずるよりは、ましだろう。魔物とジェイサルドに完全に背を向けることになり、戦闘の状況はわからなくなったが、どうせ見ていてもわけがわからないのだ。見守っていれば安全なわけでもなく、そもそも、どちらかがヤエトを直接に狙って来たら、避けられる可能性など皆無である。

今は、少しでもこの場から遠ざかるのが重要だった。

「番人！」

ジェイサルドの叫びに、ふたたび、頭上から返事があった。

「ひとーつ、……次でよかろう」

「承知」

低く答えた声が、意外と近くから聞こえ、ヤエトはおどろいて見返った。すぐ後ろにジェイサルドの背があって、相手も肩越しにこちらを見ていた。

にや、とその口の端が吊り上がり、ジェイサルドはヤエトの背を押した。たまらず、ヤエトは一気に三歩ほど進んだ。倒れずに済ませるためには、足を前に出すしかなかったのだ。

ヤエトはさらにもう一方の足を前に出し、出しつづけ、おお、と自分で感心した。

これなら、走っていると主張できなくもない。かなり図々しいとは思うが。

そのまま走りつづけていると、今度は魔物の声がヤエトを追って来た。

「痛い痛い痛い、ひもじい、ひもじい、ひもじいよ！」

声は少しずつ甲高くなって、まるで子どもが泣き叫んでいるかのようだ。

ずず、となにかを引きずるような音がしたかと思うと、ジェイサルドがヤエトの横を滑って行った——どうやら、また魔物の爪を剣で受けて飛ばされ、その勢いが止まらないようだ。ジェイサルドはふたたび、ヤエトの腕を掴んで、引いた。

今度こそ倒れると思ったが、まだ運が残っていたようで、ヤエトはなんとか足を前に出すことができた。これで今日の運は使い切ったのではないだろうか。

もう少し走れば、道が交差する場所に着く。そのまま直進すべきか、右折か左折を選ぶべきか。なんにせよ着かないことには、とヤエトは必死で足を動かした。気づけば、ずいぶんまともに動けるようになっている。

ようやく交差点まで辿り着いたと思ったところへ、ジェイサルドが追いついた。

ヤエトに並ぶと、くるりとふり返り、魔物に宣告した。

「ひもじいなら、自分の指でも食ろうておれ」

まさかと思ってヤエトも後ろを見ると、魔物の指は何本か落とされていた。今度はさっきのように消え失せもせず、といっておとなしく落ちたままにもならず、地面を這い回っている。正直いって、これは食べる気など起きないだろう——いや、そんな問題ではない。

魔物は、あの異界との接点ごと移動できるのだろうか。依然として、あらわれているのは上半身だ

けだが、ヤエトの気のせいでなければ、はじめに見た地点からはずいぶん移動している。指を切り落とされても、まったく堪えていないようだ。

「そいつは答を得た」

魔物はヤエトを指さしたが、その手に生えている指は一本きりだった。残りはすべて、ジェイサルドが切り落としたらしい。痛いと叫んでも無理はないだろうと思うが――。

ゆっくりと手を地面に突いて、魔物は進んだ。見えているのは腹のあたりまでである。その位置が、ゆるりとこちらに近づいて来たから、それより出て来る気はないのだろう。

――扉だからか。

あちらとこちらを繋ぐ役目を担っている以上、完全に出て来るわけにもいかないのだろう。そういえば、あちら側でも、魔物はろくに動かなかった。

「だから、食べる。食べて、答をとり戻す」

――魔物の本性は、貪食……。

だから、女神を食べた。だから今、ヤエトをも食らおうとしている。

食べることで、答が手に入るとでも思っているかのようだ。はじめから、魔物自身のものですらない、問いの答を我が物とするため、魔物は問う者を追う。腹におさめた女神の智慧を、ひとつも逃すまいとして。

傍からは、ヤエトは魔物の燃える双眸に射すくめられ、身じろぎもできない状態に見えるだろう。

実際、そういう一面はある。だが、思考までもが硬直させられてしまったわけではなかった。むしろ、こちら側で息を吹き返して以来、最高の速度と密度で、ヤエトは考えていた。

そして、結論した。

「眼だ」

佇立（ちょりつ）するジェイサルドの腕を摑み、ヤエトはくり返した。

「奴の眼だ。あれは、借り物ではない」

白銀の髪も、黒い肌も、ヤエトが異界で目にした女神の姿から、引き継いだ属性に違いない。角は女神にはないものだが、あれは魔物自身の一部でありながら、異質なものであるように感じた――おそらく、世界を繋げる扉の機能を表象するのが、あの角なのだ。

魔物の外貌でもっとも印象的で、かつ女神にはないものとなれば、あの燃えるような双眸以外、考えられない。

「ひとつだけ、お答え願います」

ジェイサルドは、ゆっくりと剣を構え直しながら告げた。その動きで、ヤエトの手は彼の腕からはずれた。

老騎士は、言葉をつづけた。

「しるべの星は、待たずともよろしいか」

「彼女は、来ない」

簡潔な応答に満足したのか、ジェイサルドはうなずき、地面を蹴った。そのまま、また壁を駆け上がるのかと思えば、今回ばかりは、そうではなかった。

彼は助走をつけた身体の勢いすべてを剣に乗せ、それを魔物へと投擲（とうてき）した。

魔物はもちろん、手を挙げてそれを防ごうとしたが、剣は魔物の分厚いてのひらを貫通し、そのまま左眼に突き立った。そして、真紅の光をはなった。

それは、剣ではなかった。先ほどからジェイサルドがたびたび投げていた、赤い色の呪物だった。

――目くらましか。

剣と見せて、魔物の油断を誘ったのだろう。剣は魔物の攻撃を防ぎ、その身を傷つけもしたが、魔物の力を削ぐことはできていなかった。だから、魔物も甘く見て手をかざし――貫通された。

今度こそ、魔物は絶叫した。

その声が合図だったかのように、魔物の左側、今まさに傷つけられた眼の側の建物が、一気に倒壊した。巨大な魔物よりさらに丈の高い建物が、崩れたのだ。

砂埃の中に、光の筋が見えた。虹色の、しかし魔物が発するような暗い色ではなく、清澄さをそなえたその光は回転し、瓦礫を包み込む螺旋のように回転すると、目も眩むような白光をはなち――そして、消えた。

魔物ごと、その一角はぽかりと空いて、密に建ち並ぶ迷宮都市の中に、不条理な感じのただよう広場を作り出していた。

——なにがあったんだ。

眼を狙えと示唆したのはヤエトだが、それはただ、魔物を傷つけたに過ぎない。今の光は、世界の繋がりを操作するような、そういうものだったのではないか。ジェイサルドが使っていた、紙を投げるたぐいの直接的で素朴な呪術とは違う。もっと大規模で緻密な——かつてヤエトが眼にしたことがないほどの、人為による不思議の実現。それが、今、彼の眼前でおこなわれたのだ。

「殿、よくお戻りくださいました」

はっとしてふり向くと、ジェイサルドは彼の足下に跪いていた。

「……ジェイサルド、なのか？」

「ご命令通り、この名を勝ち得てございます。殿にいただいた名も、そのままに」

まだ鞘を払ったままの剣を、老騎士は地面と水平に捧げ持ち、頭(こうべ)をたれた。帝国の騎士たちが使う直剣とは違い、反りのある剣には不似合いな所作である。

だが、本人はなんの疑問も抱いていないように、いつか見たような姿勢をとり、いつか聞いたような言葉を告げた。

「あらためまして、人外の名も含めて、我が剣と命を捧げます。お受け取りください」

「……受けよう」

ほかに、どう答えようがあっただろう。

面を上げたジェイサルドは、ヤエトを見て微笑した。ほっとした、というように。

「お待ち申し上げておりました」
「ファルバーンはどうした」
気になっていたことを尋ねると、ジェイサルドは眼を伏せて答えた。
「アルハンに。浄化の効力が切れては、一大事ですゆえ」
「そんなに早く切れるものなのか？」
「いえ――」
ジェイサルドが言葉を濁していると、背後から声をかけられた。
「早くはないのです、公よ」
ふり返ると、そこに立っていたのは迷宮の番人であった。
顎髭を撫でながら、老人は言葉をつづけた。
「異界では、時の進みが違いますでな。そういうこともあろうことは思っておりました」
ヤエトは老人の顔をまじまじと見、次いで、立ち上がって剣を鞘に戻したジェイサルドに尋ねた。
「今は、いつだ」
「新年祭まで、あと十日ほどと心得ます」
――ひと冬、まるごとか。
今度こそ、ヤエトは呆気にとられ、声も出なかった。

4

「扉が開く予兆を得てすぐ、放鳥しました。北嶺を目指すものと、殿のご領地を目指すものと、一羽ずつです。伝達官殿は隠居所においでですし、代官が報せをやるあいだに、北嶺へ向かった雪鳩の方が、着いてしまうかもしれませんな。殿のご帰還が姫様のお耳に入るまで、数日はかかるとお考えください」

「そう急くこともない。五日後には、補給物資を運んで騎士が来る約束……いや、四日だったか……やはり、五日か？」

ふたりの老人に挟まれて、ヤエトは粥を食べていた。

味については、言及したくない。

「今年は雪がかなり降りましたそうで、雪解けが進むにつれ、洪水の危険が高まっているとか。竣工なったばかりの用水路が、どれだけの効力をもつか、いささか不安な面もございますれば、殿の代官と、若殿のご命令にて、各所にて水量監視がおこなわれております。北嶺王のご下命もあり、上流は北嶺の騎士団による見回りが強化されました」

粥を口に運ぶヤエトの右から、ジェイサルドが報告する。そのきびきびとした口調とは対照的に、左から聞こえる番人の声は、かなり、のんびりしていた。

「それで思いだした、砂嵐が増える時期だから、鳥を使っても移動は難儀になるやもしれん」

そもそも、ヤエトに向かって話しかけているのか、独り言ちているのか、わからないくらいだ。

「時期が時期です。迎えが参りましたらすぐに、殿には都の方へご移動願うべきかと。北嶺の騎士団も、今年は少々早めに出発する予定だと聞いております」

「公がみつかったらもう雪鳩は置いて行ってもらえんのかな。よければ、今後も都合してもらえんかの。大丈夫とは思うが、扉がまた開きでもしたら大変なことになるだろうて」

交互に喋ってくれているのは、まだ良心的と思うべきだろうか。それにしても、あまり心休まる状況ではない。

――ひと冬、過ぎてしまった……。

その事実が未だに受け入れられない。せめてこれが、長年住み慣れた都であるとか、せめて北嶺か《黒狼公》領であれば、気候で判断できなくもないだろう。だが、ここは沙漠の迷宮都市、ヤエトに判断のできようはずもない。

すべて嘘でした、や～いひっかかった、とでもふざけてくれれば気が楽なのに、と漏らしたところ、ジェイサルドが真面目な顔で、や～い、とつぶやいてみたのが妙に怖かった。それから即座に、これまた本気としか思えない表情で、殿に近づく輩を片端から斬り捨てでもせねば、すぐに破綻するでしょうといわれた。今のは冗談だから忘れろ、と念を押さざるを得ない。

いっておかないと、やりかねない。それが、ほんとうに怖い。

結局、ジェイサルドは精神的な死闘の末、魔物と完全に名を交換することになったそうだ。魔物は

かつての名、すなわちジェイサルドを捨て去り、ジェイサルドの方は、とうに記憶から失せていた古い名と、完全に訣別した。

取引がうまくいったのは、番人の活躍によるところが大きい。彼はジェイサルドが魔物と交換した名をつきとめた。本来は人の名だったものだが、魔物との交換により、魔物の名として石板に刻まれていたのだ。石板を削ってその名を抹消することを、条件として提示したのだという。

魔物は、人よりもずっと、名前の魔法に支配されやすい存在である。だから、おのれの名を隠しておきたいという欲求も、強い。

ジェイサルドという名は、すでに有名になり過ぎていた。それも、魔物にとっては嬉しくない要素であっただろう。手放すならば、地上に刻まれた名の方は消してやるぞという取引は、魅力的なものだったに違いない。

名前を調べろという指示のおかげだ――と考えたジェイサルドは、ますますヤエトへの信服を深めたようだ。実際に名前を調べ出した番人の手柄だろうに、そこは軽視しているのが不思議だ。

魔物の名を獲得し、人としての名を失ったジェイサルドは、それではただの魔物になり果てたかといえば、そういうわけでもなかった。

以前よりさらに、人がましさが薄れてしまったかもしれませんが、と本人は語る。

――ですが、殿にいただいた名がございますゆえ。

あの名があるから、人でもいられるのだという理屈らしい。

よくはわからないが、もとより呪術や魔物の話は、理屈ではないのだ。いや、ヤエトが知らない理屈で動いている、という方が正確だろうか。

本人が、自分はまだ人だと認識できていて、周囲もそれを認めるにやぶさかでないのなら、敢えて否定する意味もない。そのまま受け入れればよい、とヤエトはその問題についてはそこで考えるのをやめた。なにしろ、考えねばならないことが、山盛りあるのである。

隠居とはいえ、ヤエトは四大公家の一員であり、皇女の副官でもある。世間的には、真上皇帝の寵臣でもある。行方不明になりました、そうですか……では済まされない。

失踪事件の当事者が、穏便に社会復帰を果たすのは、意外に難事業であるらしい。

今までにも、ヤエトはたびたび姿を消しているのであるが、たとえば第三皇子の邸から消えたときは平の尚書官であって注目されるはずもなく、もっともヤエトの消息を気にするであろう皇女が人事不省の状態で、それどころではなかった。表向きは療養中ということにして北方を訪問したときは、皇女の許可を得ての隠密行である。

今回は、それらとはまったく状況が違う。

魔物の襲撃に遭遇した直後の失踪で、彼が姿を消した理由を知る者は、誰もいない。

もっといえば、ヤエトの体面がどうこうより、彼を生死不明の状況にしてしまった第二皇子と皇妹の立場が、大問題なのである。

博沙国からの第一報は、砦に残っていた伝達官によって、皇女にもたらされた。地上への退路を開

いて第二皇子や皇妹の無事は確保されたが、激しい戦闘により、通路の一部が崩落。魔物は地下に封じ込めることができたものの、その間に、ヤエトと彼の部下、ならびに預言者の四名を完全に見失ってしまった。捜索をつづけるのも容易なことではない。

皇女はみずから見分におもむきたがっただろうが、季節は厳冬。北嶺を出入りするだけでも、命がけとなれば、そこは自重せざるを得ない。しかも、捜索すべきは地下である。鳥の利点も通用しない。さぞ悔しかっただろうとは、容易に推測できた。

だからといって、伝達官を即座に《黒狼公》領に戻し、代官とキーナンに依頼という名の命令をくだし、ナグウィンを案内に立てて捜索隊を派遣させたのは、やり過ぎではなかろうか。

不思議なのは、皇女がその捜索隊を向けたのが博沙国ではなく、アルハンでもなかったことだ。ターンの遺跡を起点とする古い隊商路を辿るよう命じられた捜索隊は、それなりの労力と時間がかかりはしたものの、シンリールへと辿り着いたのである。

もっとも、捜索隊がそこで発見したのは、ジェイサルドとファルバーン、そして行方不明者の名簿には記載されていなかった老人一名、だったのだが。

捜索隊は雪鳩を放して《黒狼公》領へ連絡、伝達官を通じて皇女と代官、キーナンが相談の上、ヤエトは本格的に隠居生活に入った、しかし極秘に、という噂をそれらしく流すことで意見が一致した。

アルハンで行方をくらませたのも、これは好都合と魔物の襲撃を利用した、……という流れなのだそうだ。

もちろん、第二皇子と皇妹にも根回しはしたそうだし、捜索隊の案内をつとめたのがナグウィンだから、皇帝も一連の顛末は知っていることになる――すなわち、世界の罅を塞ぐ方策を得るために、預言者とヤエトが異界へ旅立った、ということを。

なんとか碗を空にすると、ヤエトは食器を置いた。

「もう、このまま隠居でよくはないか」

せっかく、隠居所に引っ込んだという話になっているのだ。世を拗ねて、一切の交渉を断ち――この際、皇女の伝達官も放り出してしまえば、夢の隠居生活を達成できそうではないか。

なにが素晴らしいといって、このお膳立てを周囲がしてくれた、という事実ほど素晴らしいものはない。自分では、とてもこううまくはいかないだろう。

ジェイサルドは神妙にうなずいたが、なぜか番人に笑われた。

「それには、もっと沙漠の奥地にでも行かんとなぁ。いっそ、向こう側に戻ったらどうだね」

「向こう側……」

その言葉で、ヤエトは異界を連想してしまったのだが、老人の意図したところは違ったようだ。

「生まれ故郷に戻るというなら、誰も止めはせんだろ。生きて戻れるかはともかく」

「なるほど」

「隠居所が領内にあるんじゃ、隠居しきれんさな」

気安い口をきくようになった老人は、口調ばかりでなく、内容の方でも遠慮をしなくなった。

自明の、しかし考えたくなかった事実を突きつけられて絶句するヤエトに、にやりと笑って言葉をつづける。

「あんな遠くから、頻繁に騎士を寄越すほどだ。考えるまでもなかろうよ。公のお帰りを待ちわびて、帰らぬならこちらから迎えに行くくらいの覚悟がおありなのだろうさ。容易には、隠居などさせてもらえまい。せいぜい恰好をつけて、引きずり出されておあげなされ」

えらく難しいことをいわれた。

「恰好をつけて、ですか。ちょっと、想像がつきませんが」

「いろいろあるだろう。内密にしておいて、派手に登場するとか」

「しかし、もう報せは届いてしまうのですし」

「迎えに来るのは、巨鳥に乗った騎士でしょうしな」

ジェイサルドが追い打ちをかけてくれた。たしかに、そうなるとしか思えない。

そもそも、もし隠し通せるのであれば、このまま隠居という路線も選択可能なのに、わざわざ派手に登場などという芸当をやらかす必然性がなかった。

「違う、違う。都に行かれるのなら、そこでの話。隠居と噂されていた、ひょっとすると死んだのではないかともいわれていた《黒狼公》が、鳴り物入りで再登場したら、さぞ評判になるでしょうて」

「そんとなことをして、なんの得が」

「人間、損得ばかり考えていると、耄碌(もうろく)しますぞ」

ああそう、と流してしまいたかったが、ふと思いついた。
「派手といえば、あれはどういう仕掛けだったのです。さっき、建物が崩れたでしょう」
「ああ、あれは用意しておったんですわ」
番人につづいて、ジェイサルドもうなずいた。
「殿のご帰還に、多少の荒事は生じるものと、調べがつきましたのでな」
多少の荒事という表現の控えめさを云々したくなったが、そこは堪えることにした。もっと興味を惹く話がありそうだ。
「調べがついた、とは？」
「扉から、戻って来た場合について、です」
ジェイサルドが答え、番人が言葉をおぎなった。
「過去の記録を、総ざらいしましてな」
「記録が、あったのですか」
番人は鼻を鳴らした。ここをどこだと思っているのだ、といわんばかりだ。
ジェイサルドが、低く告げた。
「戻って来た者の記録は、やはり、ほとんどなかったのですが、皆無ではありませんでした」
「とは申せ、魔物の毒牙にかかるのをまぬがれた者は、おらなんだのでな。生還者の記録はあっても、その者がいかなる体験をし、答を得たかは、謎のままと」

すると、ヤエトはかなり幸運だったことになる。いや、幸運などという言葉では済まないだろう。歴史上、唯一の存在になってしまったのだから。

「殿がお戻りになったときに、魔物を撃退するための方策を考えまして、現時点で最善を尽くした結果が、あれです」

「建物を？　しかし――」

「この街には、いくつか、ああいう仕掛けがあるのですわ。敵軍を袋小路に押し込めて、どーんとな。万が一にそなえての、仕掛けですわ」

「特定の石を抜くと、崩れるようにできているそうです」

「それは凄い」

――ただの仕掛けなのか？

あのとき、魔物を消し去った力は、石が崩れただけの仕掛けではないように感じたが、それについては、番人はなにもいわなかった。知らないのか、知っていて黙っているのか。

――知らないのかもしれない。

「攻めてくるのは、人だけではなかったわけですね」

「繋がりやすい土地であるとは、伝わっておりますがなぁ……この世ならざる、どこかと」

ただ繋がりやすいだけなら、小鬼が直接ここに送って来ただろう。繋がりやすいのは、やはり、あの門に限られるのではないか。そして、本来は、不必要にそちらと繋がったときに、出て来たものを

帰らせるためのなにかが、用意されていたのではないか。
番人がそれを黙っている必要などないのだし、失われた技術と知識であろうと推察して、ヤエトはうなずいた。
「なんにせよ、おかげで助かりました」
「二度と、なにかの役に立つことなどあるまいと、思うておりましたがの」
街路に敵兵を誘い込むことなく、シンリールは陥落したのだ。
輜重隊として後から到着したヤエトには、当時、どんな風に戦闘が進んだのかはわからない。だが、シンリールの守りは薄かったものと思われる。たしか門は開いていたし、火災を逃れようと出て来る者は、大勢いたのだ。
守りの薄さを誘いと判断して、皇帝は兵馬を都の内に入れさせなかったのではないか。
「わたしには、大いに役立ちましたよ」
「都合のよい場所に誘導せねばならんのでな、そちらの鬼神の騎士がうまくやってくれた方を、褒めてくださらねば」
鬼神の騎士とは、ずいぶんな名前がついたものだ。もっとも、かつての通称が悪鬼というくらいだから、ジェイサルドは気にもとめない。平然と、かぶりをふった。
「できることを、したまでです」
「そもそも、儂があれを使うことを思いついたのは、『殿は戻ると仰せになったゆえ、絶対にお戻り

になる、ついてはご無事のご帰還をお手助けする方策を教えろ』と迫られてのことですしの」

番人はくるりと眼をまわして見せたが、迫られたというのは控えめな表現で、実のところ、脅迫されたに近いのではないかとヤエトは思った。

「約束を守れて、わたしも安心しました」

「殿はまだ、お約束を残しておいでしょう」

「なんでしょう？」

にこりともせず、ジェイサルドは告げた。

「姫様のもとに、お戻りになりませんと」

ヤエトはまじまじとジェイサルドの顔を見てしまった。なぜ、ジェイサルドに、そんなことを、いわれねば、ならないのか、と語を区切って問い詰めたいくらいの気分である。

ジェイサルドは顔色もなにも変えず、やはり平然としている。

「皇女殿下は、こちらにお見えになりますかなぁ」

のんびりと尋ねたのは、番人である。どうやら、皇女を見てみたいようだ。ため息を押し殺し、ヤエトは答えた。

「もし、おいでになったら、お叱りせねばなりませんが、……そうはならずに済むでしょう」

「なぜです？」

「新年祭まで、日が短過ぎますし。ところでジェイサルド、王の騎士から、最新の状況についての説

明はなかったか？」
「書き付けを、お預かりしております」
はは、と笑って番人が立ち上がり、背伸びをした。
「少し散歩をして来ようかの。儂に用があれば、いつもの井戸のあたりに来てくだされ」
ジェイサルドと老人は目を合わせ、お互いに意が通じたという顔をした。そのまま、老人はその場を立ち去った。
ヤエトがいるのは、この街に来たときに案内されたのと、よく似た風情の中庭である。同じといわれても、あれとは別の場所だといわれても、そうですか、としか答えようがない。
自分がこの都市のどこにいるのか、まったくわからないな、とヤエトは思った。
そもそも、帰還した場所がどこなのかも、判然とはしないのだ。あの扉は移動するものだ。入ったところと出たところは、当然、違う位置だろう。
今日、ヤエトが見ていたあいだに限っても、はっきり移動していたわけだし。
「どうぞ」
ジェイサルドが取り出したのは、ミアーシャからの文であった。ヤエトはわずかに眉を上げたが、中をあらためるのが先だろうと、まずはそれを開いた。
もっとも重要な情報から、ミアーシャは書き起していた——第七皇子の河口封鎖は未だに継続中、これはもう、戦になるだろう、と。

まず結論を持ってくるあたり、さすがだと思う。ヤエトがこれを読むのが、急迫した状況である可能性が高いことを鑑みてのことであろう。

つづく文章で、ミアーシャは、そう結論するに至った経緯、まず貴族社会における最新の勢力図を、完結にまとめていた。

完全に勢いを失った《白羊公》家に代わって台頭したのは、第一皇子を支持する勢力である。《白羊公》家の傘下となっていた泡沫貴族の内、さほど深い繋がりがなかった者は、第一皇子に鞍替えをしていた。継承問題にはほぼ無関心な《灰熊公》が、名目上のとりまとめ役となっているが、実際にこれを動かしているのは、それなりには名家の内に入る、《赤犬公》家か、《青狐公》家あたりである。どちらが主導するかで揉めたりもするし、最大勢力であるがゆえの動きの鈍さもあり、組織された勢力という段階には至っていない、というのがミアーシャの評価だ。

一方、センヴェーラ妃と《白羊公》家に残された最後の皇子、第七皇子のもとには、縁故のほぼすべてが集結。一族郎党うち揃い、都からは、ほぼ姿を消したという。これが意外にあなどれない数である上、第七皇子がそれまでの温厚さを捨て去り、集まった一族を掌握。弱腰で優柔不断の大人たちを服従させ、強硬策をとっているらしい。

《銀鷲公》家は第二皇子支持の姿勢を崩しておらず、これと親交の深い貴族たちも不動の構えとなり、こちらの勢力は、増減なし。

第六皇子は、ここへ来て南方の諸藩王をまとめようと動いているらしい。当然、生粋の帝国貴族の

支持はなく、成果の方は未だ未知数といったところ。
表向きはおとなしくしている第三皇子は、裏で第六皇子の勢力と接触しているらしい気配がある、確証はないが――と、ミアーシャは書き添えていた。
新年祭に、第七皇子が来なかったとしたら、討伐が命ぜられるであろう。
来たとしても、やはり戦になるであろう。一触即発の状況で、第一皇子側と第七皇子側が揃うのだ。些細なきっかけから、本格的な戦闘に発展しかねない。たとえ双方が我慢しきったとしても、不慮の事故という形をとって、どちらかの陣営がどちらかに攻撃を仕掛けたことになり、なし崩しに戦端がひらかれて、そのまま戦となるだろう。
具体的な根拠は書かないまま、ミアーシャは文を結んでいた。
――戦は、儲かるものなのです、儲けかたを知っている者にとっては。
この一文で済まされても、ヤエトは納得した。せざるを得なかった。
ミアーシャが開戦ありと判断しているなら、皇帝には、第七皇子を許す心づもりはないのだろう。
文の最後に、皇女の添え書きがあった。
――これが新年祭前の、さいごの文になるであろう。そなたの帰還が間に合うことを祈る気もちと、間に合わねばよいと思う気もちがある。どちらにせよ、今回はよく自重し、前の轍は踏まぬよう留意するゆえ、案ずるな。ジェイサルドには申し含めてあるが、もし新年祭が始まってからの帰還であれば、そこに留まって難を避けよ。

それだけだった。
「……残念なことだ」
しみじみと、ヤエトは口にした。
「お読みいただいたら焼却せよ、とのご伝言ですが」
「情報を共有したい。目を通しておくように」
「では、失礼を」
ジェイサルドは書面に目を落とし、そのあいだに、ヤエトは杯に残っていた水を口に含んだ。
ぬるいと感じて、実感した。春なのだ、と。
「残念とは」
「うん？」
「戦になることが、でございますか」
「……そうだな、そういうことに、なるのだろう」
曖昧な口調のせいだろう、ジェイサルドはわずかに眉を上げた。
「違うのですか」
「いや、違いはしないが、正解でもない。……といった感じかな」
戦になるのは、もう避けられない――第二皇子にそう聞かされたあの夜、すぐに諦めてしまったのは、ほんとうに正しいことだったのだろうか。

なにか、方法がなかったのか。
そんな風に考えるのは不遜なことかもしれないが、それでも、どうしても思ってしまう。
――自分だけのことでは、ないのだろうな。
ヤエトひとりでは、防げない。そこまで思い上がってはいない。ただ、事態を冷静に俯瞰できる者は、何人もいたはずなのだ。そのほとんどが、これは手の打ちようがないと諦めてしまったのだろうと思えてならない。
皆が諦めざるを得ない勢い、というものは存在する。いわば、どうしようもない、という状況だ。それは、どんな権力者にも変えられない、世の流れである。賢者の智慧も、戦士の力も、豪商の財力も。この世のどんな力をもってしても、ひとたび動きだしてしまった流れを堰き止めることなどできはしない。必死で棹を差し、櫂を漕ごうとも、舟は舟に過ぎない。流れをさかのぼり、あるいは大波で転覆することをまぬがれたとしても、流れ自体を変えることはできないのだ。
――あれは、なんなのだろう。
それこそ、損得の勘定など吹き飛ばされてしまうような、なにかがあるのだ。興奮と感情、そして衝動に支配され、支配するもの。
「許容しなければならないのだろう、とは思う」
「戦を、ですか？」
「そこに至る流れをだ。人は、孤独ではいられない。世の流れを気に入らなくとも、ある程度は受け

入れるしかないだろう……と」
「なるほど」
ただ、とヤエトは言葉をつづけた。
「すべて受け入れるべきでもない。譲れないところは、譲らない。そのために、世の流れに押し潰されることになろうとも」
少し考えてから、ジェイサルドは尋ねた。
「殿が、お譲りになれないこととは、なんでしょうか」
「空を見てみるといい」
答えながら、ヤエトは顔を仰向けた。
四角く切り取られた中庭の空は、不自由さの象徴のようだ。どこまでもつづいているはずなのに、ここからの眺めは、ひどく限られている。
「今、ここから見えている空だけを、空と思ってしまうのは、人にはよくあることだ。だが、だから空は広くない、と否定するようなことは、わたしには認められない。わたしは、空がどこまでもつづくことを忘れたくない。おのれで区切ってしまっていることに、自覚を持ちたい。その限界を、必要があるときは捨てられるようでありたい」
暫し、ジェイサルドは空を見上げて無言であった。
「正直に申し上げて、殿のお考えを理解できたかどうか」

「心の自由を失うことだけは、認められない……という意味だ」
「なるほど」
ヤエトは中庭に視線を戻した。
意識しなくとも空はあり、どこまでもつづいている。必要なとき、思いだせればよい。それよりも今、なおざりにできないのは、人の世のことだ。もうじき乗り込むことになる、都の状況だ。
「七の君のことは、どうにもならない。だが、それに乗じて誰がなにを狙うかは、調べておく価値がある。宮廷外部にも、いろいろと動きがあるはずだ。……戻ったら、すみやかに調査を」
「かしこまりました」
「それと、遅くなったが、よくやったな」
「……は」
「ジェイサルドという名を、ふたたび呼べる日が来て、わたしも嬉しい」
騎士が答えないので、ヤエトはそちらを見た。視線があうと、老騎士は少しだけ口を歪め、答えた。
「お約束、いたしましたので」

5

番人に案内を請い、ヤエトは迷宮都市の深部を歩き回っていた。

迎えが来るまで、元《黒狼公》としての仕事などできるはずもなく、皇女の副官としても同様である。であれば私人として、つまり隠居として、おのれの好奇心を満たすという欲求に素直に従っても問題ないだろう。

幸い、番人もヤエトの要請を好意的に受け入れてくれた。はっきりいえば、引きずり回さんばかりの勢いであった。

残念ながら、紙の本はその大部分が焼失してしまっていたが、それでも、ほんの一部は残っていた。迷宮都市を訪問して問答をおこなった者の全記録など、適当に開いた頁からつい読みふけってしまい、それで初日がふっとんだほどだ。

気がついたら番人はどこにもおらず、辛抱強く待っていたジェイサルドには、ようやく殿が現世にお戻りになった、という顔をされた。

「興味深い内容でしたか」

「いや、感心してしまって」

「どのようなことが？」

「着衣や、言葉の訛りまで、とにかくこまかい。ただ、表音に使用している文字が、わたしの知らないものなのが残念ですね。前後の文脈から、発音を示していることはわかるのですが、いったいどういう音なのか……」

近くは都市の内部から、遠くは沙漠の外の国々から。さまざまな理由で、さまざまな年齢と地位に

ある者が、智慧の扉を訪ねていたことを、ヤエトは知った。

その中で、実際にあの世界へ——女神の神隠れたもうた異界へと受け入れられた例は、ヤエトが目を通した範囲には存在せず、その時期には、例の神与の石板の出現も記録されていないようだった。

世界は神々とその力から隔てられ、驚異や奇跡も遠いものとなっていたのだろう。

今や、薄皮一枚で分けられている程度なのかもしれない。でなければ、ヤエトと預言者は、あちら側へは行けなかっただろう。

預言者のことを考えると、心の中に穴が空いたような感じがした。

ひとことであらわすならば、喪失感なのだろう。対になる神の恩寵を得た者同士という、あの不思議な感覚は失われてしまったのだ。

ウィナエ以外にターンの預言者は存在しないのではないか、とヤエトは考えていた。先のことにばかり気をまわす、あのお節介な神が、黙って我慢するはずがないのである。もしも、神の言葉を託すべき人物が彼女以外にもいるのなら——きっと彼女は、こう告げることになっただろう——わたしには、時間がないのです。先のことは、しかじかの者に……と。

家族がいれば、その誰かが未来視の恩寵の力を受け継いでいるかもしれないが、どうもうまく考えることができなかった。ごくふつうの家庭で育つ預言者を想像できなかった、といってもよい。

だが、彼女を指導する者はいたはずだし、その師が実の親であっても不思議はないし、兄弟姉妹がいるならば、ウィナエの跡を継ぐことも可能だろう。彼が想像できないだけのことなのだ。

——いずれ、また、来るのかもしれないな。

あらたな預言者があらわれる日が来る可能性も、考えておくべきだろう。

——だが、それはウィナエではない……。

救えなかった、という想いがわき上がり、胸に空いた穴からこぼれていくようだ。その穴が塞がらない限り、ずっとつづくのだ。それと気づかぬあいだに、漠然とした哀しみに溺れてしまいそうだ。

生き延びるということは、なぜ、これほど疲れるのだろう。

ヤエトは本に視線を落として、つぶやいた。

「疲れていることこそ、生きている証なのかもしれない」

もちろん、その発言は即座にジェイサルドを刺激し、奇怪な味の飲み物を供されることになった。番人にも同じものを勧めて、遠慮されたことがあるらしい。

眠くなりますという説明通り、飲むとすぐに強い眠気に襲われた。ジェイサルドに背負われ、心地よい揺れを感じながら、寝台に着くのを待たずにヤエトは寝入ってしまった。

深い眠りの底で、彼はシンリールの街路を歩いていた。ヤエトはひとりだった。影だけが、彼の同行者だった。その影はたまにウィナエの姿をして、やわらかな声で彼に告げた。

——忘れないで。

夢の中で、シンリールの街はどんどん空へと伸び上がり、果てもなく高くなっていく。白々とした月を串刺しにせんばかりの勢いだ。

その月の表面に女神の貌が浮かび、翡翠の眸がすべてを照らしだした。
——真実は都合のよいものばかりではない。そなたらの望む答が、正答とも限らぬ。
月を見上げ、ヤエトは尋ねた。
——では、都合の悪い真実とは？　望まれざる正答とは、なんです？
女神が答える前に、シンリールの塔は月に至り、すべてが粉々に砕けた。
目覚めたとき、ヤエトはなにやら見捨てられた気分になっていた。途方もない孤独を感じると同時に、それはひどいな、と自分で思った。
——ずっと待っていてくれた者がいるというのに。
戻るかどうかすら判然としない彼を、忠実に待ちつづけていたジェイサルドには、とても告げることができない。いや、老騎士に限らない。
孤独とは、語り得ぬものなのだ。
深く息を吐き、これだけを、ヤエトはつぶやいた。
「異界への往還を果たすことで、わたしは前のわたしとは少し変わってしまったらしい」
無言のままのジェイサルドに代わり、番人が答えた。
「この世にある限り、変わらぬものなどございますまいて。あるとすれば、それはこの世のことわりの外にあるもの。変わってしまったと仰せなら、それはそのまま、人としてお帰りあそばしたということで、変われば変わらず、変わらざれば変わるという仕掛け。ご案じめされますな」

翌日は、迂闊に適当なものを手にとる前にと、索引を見せてもらうことにした。たびたび番人が話題にするので、気になっていたのだ。

索引とは、智慧の門を刺激すると生じる石板を、整理するためのものだそうだ。石板のままでは扱いにくいので、解読した内容を紙にしるし、分野別に綴じて、探しやすくしたのだという。地下深くの倉庫に保管されていたため、焼失をまぬがれたようだ。

その倉庫には、索引以外にも奇書のたぐいが納められていて、ジェイサルドが魔物と戦うときに使った紙は、そこにあった書物から、使いかたを学んだのだという。使役者の血を吸って、短時間の契約を果たす精のようなものを使うのだそうだが、そもそも精とはなんなのか、がヤエトにはわかっていない。ジェイサルドと番人は顔を見合わせ、答えたのは番人の方だった。曰く、魔物のように本来は異界に属する存在であるが、この世とも密接な関係があり、しかし実体は持ち得ぬもの、それが精なのだそうだ。

わけがわからない、というのがヤエトの感想である。必要があれば後日また調べよう、と心に留めておくことにして、その話はそこで終わらせた。

呪術にも興味がないわけではないが、基礎知識のない自分が、いきなり珍奇な内容を理解できるとは思えない。時間の無駄とはいわないまでも、ほかにもっと読んでおくべきものがあるだろう。

迎えが来るまでに残された時日は、そう長くない。すでに雪鳩をはなってあるのだし、北嶺の騎士が糧食を運んで来る約束があるのだから、ヤエトの帰還はじきに皇女の耳に届いてしまう。そうすれ

ば、翌日には迎えが来ると覚悟すべきだろう。
シロバは元気かなぁ、とヤエトはぼんやり考え、次いで、あの雛たちはどうしているだろう、とも考えた。もう成鳥と変わらぬ大きさになってしまっているのではないか。部屋に入れるわけにはいかないだろうな……と思うと、もの寂しい。
いらぬ方へ彷徨い出てしまった思考をなんとかこの場に戻し、ヤエトは索引の束に視線をやった。手にとってみてもよいかと尋ねたところ、かまいませんがと前置きをして、番人は問い返した。
「索引よりも現物をご覧になってはどうかね」
もちろん、ヤエトに否やのあろうはずもない。番人の案内で、三人は石板がある場所へ向かった。
「これがその、勝手に生じたというものですか」
番人が語っていた石の本は、建物の中に並んでいた。
見たところ、なんの変哲もない黒い石の板である。形は不揃いで、冬を目前に枯れ落ちた木の葉が、地面を埋め尽くす様に似ていた。ただし、これは朽ちないし、風に舞うこともない。厚みは大人のてのひらほどもあり、許可を得て持ち上げてみたところ、ずっしりと重かった。縁は不定形で、注意せねば怪我をしそうだが、表面は鏡のように磨き上げられ、覗き込む自分自身の顔が、ぼんやりと映って見えるほどである——もっとも、こまかく彫り込まれた文字で、その顔はいくつにも分断されていたのだが。
「この街ができて以降のものと思えば、少ないようにも見えますがな。索引が作られて、しかるべき

場所に整理されたものも含めて、この倍量ほどですわ」
「量の多寡は、どう評すべきかわかりません。多いようにも思えます、神与の真実と考えれば」
――この世にあるべきものなのか、とも思うな。
神の智慧は、往々にして人には過分なものでもあり得る。恩寵がしばしば、祝福よりは呪いと感じられるようなものだ。
「ふむ。では、まだまだ少ないと思う儂なぞは、ずいぶんと強欲なのでござろう。ああ、そのへんは崩れやすそうですし、お気をつけて。出て来るときは、層の下に出るようでな、押し上げられていくばかりでもう、あぶのうてかなわんのですわ」
層とは、堆積した石板をさす。
世界の真理は、ただ積み上げられているのだ――それも、下から。
文字は古いもののようだった。今の共通語の基礎となっている、沙漠の古い言語をあらわしているのだろうとは見当がついた。見たことのある字形で、古王国の文字ともいくつか共通する部分がある。抽象的な概念をあらわす文字を、古王国はここからいくつか借りているのだ。
――辞書が必要だな。
「よく、魔物の名前を探し出しましたね。それに、削り取るのも大変そうだ」
「地上とかかわりのあった魔物の名は、索引化が済んでますからな。実のところ、ここから探し出したわけではないのですわ」

「索引化か……是非やってみたい」
笑って、老人はヤエトを見た。
「その石板、なにが書いてあるかおわかりですかな」
「いえ、残念ながら」
「安心しました。これが読めるといわれたら、腰を抜かしてそのままぽっくり逝きますわ」
「では、読めなくてよかった」
番人はまた笑い、ヤエトの肘を親しげに叩いた。
「読める者がおれば、儂も安心して終えることができるんですがな、この人生」
ヤエトは、手にしていた石板を、ゆっくりと元の場所に戻した。
「伝えたいものがあるのは、幸せなことかもしれません」
「ほう……そうですかな」
「自分の中で終わりにはできない、だいじなものを、見出し得たということですから。儚くも短い、人の一生で」
笑顔をおさめ、番人は問い返した。
「たとえ、伝える相手がおらずとも？」
「……いるでしょう」
敢えて、ヤエトは答えた。

これを敢えてと思うのには、理由がある。
古い知識や技術の継承者を探すのが困難なのは、シンリールに限らない。どこでも、同じことだ。財貨や名誉の獲得に通じなければ、それもしかたがない。
だが、シンリールの場合、問題はもっと深く、どうしようもないところに起因している。
——帝国に、根絶やしにされたからだ。
たしかに、石板は火に耐えただろう。水に毒を投じられても、関係ないだろう。だが、人は違う。シンリールの住人は、逃げようとすれば殺され、逃げなければ焼かれ、あるいは渇き、悶え苦しんで死んでいったのだ。
番人が生き延びていることの方が、奇跡といえた。
「他所者に教えよと？」
「生を享けた場所が、それほど重要ですか」
老人は黙った。
つらなる石積みを眺めて、ヤエトは言葉をつづけた。
「重要なのは、そこではないでしょう。同じ文化を——いや、文化という言葉は違う、なにかもっと本質的な、意義とでもいうべき部分を理解し、心が通じる者が必要なだけです。そして、そうした者が今はまだ、みつからずとも、それでもあなたは伝える努力をすることはできる」
もし努力をおこたれば、この黒い石板はすべて、不思議な遺物になり果ててしまう。意味を失い、

ただその形骸のみが残るのだ。解読を志す者があらわれたとしても、そのとき、手がかりがどれほど残っているだろう？　沙漠の西に戻ったとしても、神託の文字が記録、研究されているかは疑わしい。

「……どうやって伝えると」

「書くのですよ」

ヤエトはふり返り、老人を見た。

何歳くらいなのだろう。ジェイサルドよりは年配に見えるが、ここまで独力で辿り着いたほどだ、まだまだ矍鑠（かくしゃく）としたものである。気力も体力も、ヤエトよりよほど充実していそうだ。

無言の相手の手をとり、ヤエトは同じ言葉をくり返した。

「書くのです。あなたが知り得たこと、伝えたいこと、終わらせたくないことを、書くのです」

「書く……」

「文字を作りたもうたのは神だという説がありますが、わたしはそうは思わない。神には、文字など必要ないのですから。神は永遠で、滅びない。知識を失わないように記録する必要が、どこにありますか？　文字が必要なのは、人なのです。だから、文字を作ったのは人だ。そして、これらの石板は――神与のものでしょうが、人のためのものなのです。女神は、ただ知る者としてだけ終わるわけにはいかなかった。智慧が智慧であるためには、分け与える必要があった。だから、人にわかるように、伝わるように、こうして文字の形で智慧をくだされたのではありませんか？」

吸い寄せられるように、石板の山の方を見た番人につられて、ふたたび、ヤエトもそちらを見た。

多いか、少ないか。やはり、量の多寡は問題ではない――そこに在るということ自体が、この石板の価値なのだ。

神は未だ世界を忘れておらず、かつまた人の世から完全に断ち切られているわけでもないことの、これは、証明なのだ。

「限られた生の、その向こうまで、届けたいものがあるならば。我らは、梯子をかけねばならない。階段を、つくらねばならない。次に来る者が、その先へ上れるように」

暫しの沈黙の後、番人は口を開いた。

「作っていた梯子をへし折られれば、心も挫けるというものだ」

「そうでしょうね。ですが、ほんとうに？　あなたの心は挫けてしまい、それきりですか？　違うでしょう、あなたは項垂れたままではないはずだ。上を向き、先を望む心をお持ちです。でなければ、先ほどのようなおっしゃりようは、なさらないでしょう」

安心して死ねないという言葉が含んでいるのは、未来への期待だ。完全に諦めていたら、その発言には至らない。やまない願いがあるからこそ、老人はここに戻って来たのだ。

「……書くといっても、あまりにも多い」

つぶやいた番人に、ヤエトはうなずいた。

「まずは、一文字。そして一語。どんな長大な物語も、はじまりは同じです」

積み上げられた石板を眺め、番人は微笑んだ。

「そして命が果てるまで、完結を知ることなく書き綴れ、と」
「人の営為とは、そういうものではないでしょうか」
番人は頭を左右にふった。
「いやいや、つまらぬ話でお心を煩わせてしまったようで。お忘れあれ。それより、この部屋はなんだか底冷えがするのですわ。老骨にはいささか堪えますのでな、そろそろ、外へ戻りましょう」
たしかに、冷える。しんとして、その静けさが妙によそよそしくて。ほかの場所より、空気があきらかに清澄で、そのぶん冷たく感じられた。
外へ出てから、ヤエトは番人に告げた。
「もし、ここに留まられるなら、食糧を運ぶ手筈をつけます。わたしがここを発つ前に、心を決めていただけると、ありがたいですね」
「ありがたいとは、こちらの台詞です」
笑って、番人は空を見上げた。
つられて顔を上げると、空は褪せた水色で、なぜか胸をしめつけられるように美しいと感じた。いつの間にか日はかなり傾いて、もう少しで街を囲む壁の向こうに沈むだろう。街路は長い影に支配されて暗さを増し、すでに夜の気配をただよわせていた。
——夢の光景に、似ている。
長さを増していく影に、ヤエトは視線を落とした。

やがて夜に浸される街を、月は照らすだろうか。足下に落ちる影は、彼とともに歩みつづけるだろうか。自分であって自分でない、同じ輪郭を持ちつつも本質から違う存在、それが影だ。ふれあうことも、できているようで、できていない。

不意に、預言者の不在を実感した。

彼女はもういない。

この世界に戻って来ることは、二度とないのだ。

ずっと無言だったジェイサルドが、進み出て、告げた。

「殿、お身体にさわります。夕餉（ゆうげ）の支度をしますゆえ、屋内へ」

気がつけば、番人はとうに歩きだし、後ろ姿はかなり遠くなっていた。

その足取りを見て、彼はここに残るだろうとヤエトは感じた――ヤエトが提示した支援を受けるかはもちろん、おのれの知識を書き残して伝えるかどうかもまた、別の問題として。

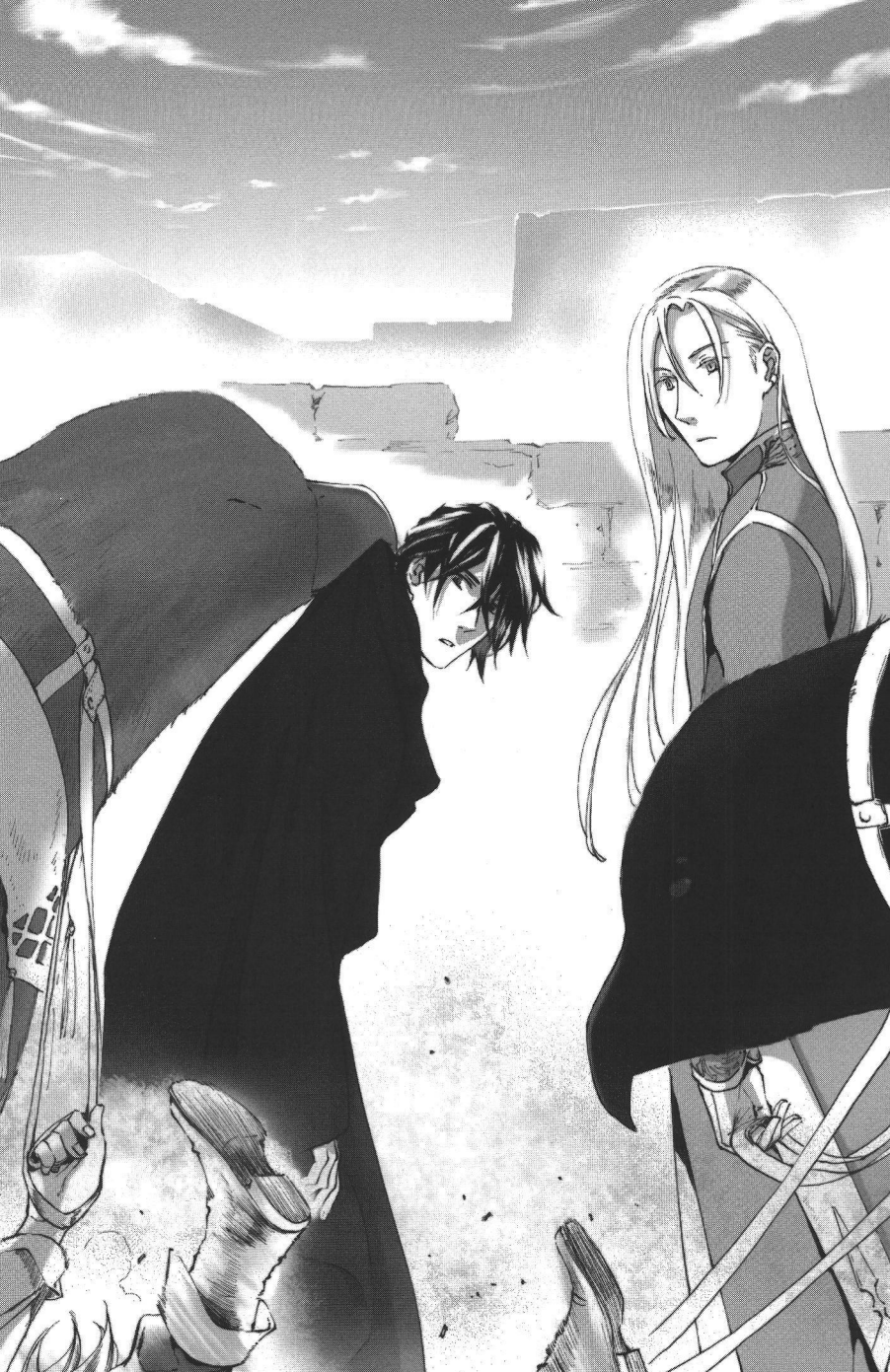
彼は、残る。へし折られた梯子を据え直したこの場所から、二度と動くことはないだろう。

6

迎えに来たのは、ルーギンだった。

新年祭での都行きを控えている時期に、まさか彼が来るとは思っていなかったので、ヤエトは大い

におどろいた。
「なぜあなたが、こんなところに？　大丈夫なのですか」
尋ねながら、シロバに頭を突つかれて盛大によろけ、しかし即座に襟首を嘴（くちばし）で支えられて、倒れずに済んだ。こういうのも自給自足というのだろうか、とヤエトはどうでもいいことを考え、それから、引き綱を持っていたアルサールの方は、シロバの急な動きに重心を持って行かれて、無事では済まなかったことを知った。
起き上がったアルサールに、ルーギンは自分の鳥の引き綱も渡した。さりげなく、容赦ない。アルサールは自分が乗って来た鳥と、ルーギンのハーマン、そしてヤエトのために連れて来たシロバと、三羽の引き綱を握りしめ、二度と醜態をさらすまいと身構えている。
ルーギンはヤエトの襟に噛み付いたままのシロバの嘴を、こつんと叩き、目線で鳥をおとなしくさせた。おそらく、行儀が悪いぞとでも伝えたのだろう。シロバはあっさり引き下がった。
それからようやく、騎士はヤエトを見て、呆れたように指摘した。
「大丈夫ですかというのは、……それは、わたしの台詞じゃないかな」
たしかに正論である。
「大丈夫でした」
おとなしく答えたつもりが、大笑いされた。
「先生は、おもしろ過ぎる」



「過ぎますか」
「まったくもって。ジェイサルド、鳥を繋げる場所をアルサールに教えてやってくれ。それで先生、わたしには酒とはいわないから、水くらい貰えませんか」
「あちらに」
街路に張られた綱を辿って歩きだすと、ルーギンに問われた。
「それはなんです？　その綱は」
「目印です。生活に使っている場所に、わたしが迷わず戻れるように」
「まさかとは思いますが、ひとりでふらついていたのですか？」
言外に、ジェイサルドがそれを許すとは思えない、という含みがある。実際、説得するのは手間だった。ヤエトはそのときと同じ理屈を口にした。
「危険はないですし、それぞれに、見たいところが違ったのでね。迎えが来るまでのあいだに、効率的に作業しよう、と話し合ってこうなりました」
「効率的に、なにをしてたんです」
「本を読んでいたんですよ」
当たり前のことを問われて、ヤエトはおどろいた。そして、ようやく気がついた――ルーギンは、この都市が巨大図書館であるという認識が薄いのだろう、ということに。
「先生はともかく、ジェイサルドも？」

「ええ。これからの戦闘では、魔物を相手にすることも増えるでしょうから。弱点や、有効な戦術を探すための資料の宝庫みたいなものです、ここは。もともと、この街はすべて、図書館だったといっても過言ではないほどですから」
「……先生にとっては、宝の山か。じゃあ、もっと長居をしたいくらいでしょうね」
「よくわかりますね」
「わからないはずがないでしょう」
「残念ながら、長居をするわけにはいかないことは、わかっています」
「心得ておいでのようで、なによりです」
ふざけたように一礼して、それからルーギンは、鼻の上に皺が寄るほど顔をしかめた。
「どうしたんです」
「それも、わたしの台詞ですよ。いったい、どうしてこうなったんです。旅行に行くなら、せめて現世のどこかにしてください。連絡もつかない異界に行くなんて、とんでもない」
「……べつに、行きたくて行ったわけでは」
「いいや、わかりませんね。先生のことだ、きちんと隠居するにはまず現世を捨てるところから、なんて考えたんじゃないですか？」
「なるほど、たしかにそうかもしれません」
一理あると納得していたら、長いため息をつかれてしまった。

「先生、今のは冗談です。笑いとばすところです」
「そうでしたか、それは失礼。……まぁ、それくらいしなければ浮き世の雑事から解放されないことは実感していますが、だからといって、より効果的な隠居生活を追求するために異界へ行くなどという奇矯な選択はしないでしょう。いくらわたしでも」
「……やりそうですけど」
「いやいや。あれは隠居が住む場所ではありません。少しも気が休まりませんし」
「真面目に検討していそうなのが嫌なんです」
ずいぶん偏見を持たれているようだと考えたところで、綱の終端に辿り着いた。木戸を開けてみたが、中庭には誰もいなかった。門番は地下の書庫で作業をしていることが多い。今日もそうなら、北嶺からの迎えが来たことも気づいていないだろう。
水差しはあったが、水を汲み置いているわけではない。井戸に釣瓶を投げ入れたら、ルーギンに肩を叩かれた。
「自分でやります」
「いや、――」
疲れておいでしょうし、という言葉を口にするゆとりもなく、横に押しやられてしまった。綱を手にとりながら、ルーギンはヤエトの方を見もせずに告げた。
「先生は、体力を温存していてください。できるだけ早く発ちますから」

決定事項のように宣告されたが、もちろん初耳である。
「しかし、あなたがたや鳥たちも休憩させないと」
「ですから、必要なだけ休憩したら、すぐに」
「わたしだったら、一晩は休みますが」
「残念なことに、一晩も休まなくても問題ない程度の体力があるのでね、わたしの場合」
答えながら、ヤエトの三倍くらいの速さで釣瓶を引き上げられては、納得するしかない。そうだ、と思いついて水差しを差し出そうとしたが、ヤエトの心遣いは空振りに終わった。ルーギンは上を向き、引き上げた釣瓶からそのまま開いた口へと水を流し入れたのだ。
しかもそれに留まらず、残った水は頭からかぶった。
「……大丈夫ですか」
思わず訊いてしまったら、真顔で問い返された。
「なにがです」
「いや……そんなに濡れて、身体が冷えませんか」
「冷やすために、やってるんです。ちょっと日差しがきつ過ぎた」
「はぁ」
ルーギンは濡れた髪を耳にかけ、勧められるのも待たずに椅子にかけた。気もち悪くないのだろうか。本人はいささかも気にとめることなく、で、と話を進める。

「首尾はどうだったのです。行方をくらました成果は、それなりのものでしたか？」
「それが、いささか曖昧なもので……。まだ、どう判断すればよいやら」
協力してくれる神の名を、直接、教えてもらえたわけではないのだ。
「では、ご不在だった日々は、無為に過ごされたと」
「なにもしていないという意味では、その通りかもしれません」
「収穫もなく」
ヤエトは答えなかった。
今はまだ、確とは意味がわからない——だが、なにも教えられなかったわけではない。問いへの答えはあったのだ。人であるヤエトには、女神の意図するところが摑めないだけの話であろう。しかし、それを説明するのは困難だ。いかにも言い訳がましく感じられるのも、不本意である。
気づけば、ルーギンは頬杖をついてヤエトを見ていた。額やこめかみに、透明な雫が飾られている。淡い色の眼は、ヤエトを透かしてさらに向こうを見通しているかに思われた。彼の方がよほど、異界から帰還した旅人のようだ。
ややあって、騎士は静かに告げた。
「ここは、ずいぶん遠い」
「は？」
「北嶺の空も、容赦ないですけどね。でも、鳥に与えられている加護のせいか、風はもちろん、空気

自体がやさしいのです。だが、沙漠の空は違いますね。《黒狼公》領や、博沙国の手前のあたりでは、それほど感じませんでしたが……ここは、過酷だ」

「鳥たちは大丈夫なのですか」

心配になって尋ねると、騎士は夢みるように笑った。

「たぶん。ただ、長居させたいとは思えないな。だから、できるだけ早く発ちたい」

「わかりました……休養をとらせるよりも、ですか」

「休養をとらせて、北嶺に戻るならね。それならよいのだけれど、都へ行くのでは……」

言葉を濁し、ルーギンはちらと視線を動かした。木戸が開いた音がして、ふり向くと、ジェイサルドとアルサールがいた。

「少し休んだら、都へ向かうそうです」

ヤエトが告げると、ジェイサルドはわずかに眉を上げて意外に感じたことを示し、アルサールは眉を下げて安堵の表情になった。実に対照的である。

ルーギンに同行したのが強面の騎士でないのは、余分の鳥を連れて来るために、やはり生粋の北嶺人の方が安心できるからだろう。戦闘力だけでいえば、ジェイサルドが合流するわけだから心配はないし、実のところ、アルサールだとて戦力としては一人前であることは保証済みなのだ。なにしろ鍋釜包丁が、立派な武器や防具に見える腕前である。ただの厨房助手ではない。

「包み焼きを持参しました。あぶりましょうか」

今は厨房助手の顔で問う少年に、ヤエトはうなずいた。
「そうだな、久しぶりに熱いのを食べたい」
アルサールに竈の位置や火熾(ひおこ)しの道具などを教えてから、ジェイサルドはヤエトに尋ねた。
「門番を呼んで参りましょう」
「ああ、そうだな。たのむ」
「すぐにも」
一礼して、ジェイサルドはさっと姿を消した。
ルーギンが眼をしばたたき、中庭をぐるりと見回してから、ヤエトに視線をあてた。
「今のはなんですか。消えましたよ」
「ちょっと、本気を出したようですね」
ルーギンは肩をすくめて答えた。
「放っておくと、どんどん人じゃなくなりますね、あの老人は」
「人ですよ」
ヤエトの短い答えになにかを感じたのか、失礼、とルーギンは低く告げた。
それから、アルサールに声をかけた。
「すぐ戻って来るだろう。人数分、用意しなさい」
「はい」

アルサールは手際よく作業を進めている。いい匂いがして、ヤエトは自分が思いのほか空腹であることに気がついた。久しぶりの包み焼きである、熱いのを食べたいなどといわず、すぐにも食べさせろというべきであったか、とすっかり食欲の方に注意が向いていたのだが、ルーギンの声が彼を厄介な問題へと引き戻した。

「では、即座に世界の罅の問題のために動かねばならないとか、当座の行動が制限されているとか、そういうことはないのですね」

「わたしですか？」

「もちろん」

ほかに誰がいる、といわんばかりの態度である。

「……そうなりますね。まだ、その問題に関しては、なすべきことが明確になっていませんから」

まさに水をかけられたような心地で、ヤエトは答えた。ルーギンから、いや彼以外の全員からすれば、ヤエトは何十日も失踪していたのである。その失踪と引き換えに得た情報が、よくわかりません、では呆れるばかりであろう。

あの異界での経験は、時間としては計測できない、人が体験すべきではないようなものだった——ヤエトはそう感じているが、それこそ、彼自身にのみ理解し得る感覚であるに過ぎない。誰かに説明したり、わかりあったりということは望めない、個人的なものだ。

「それでは、当面はその問題の優先順位を下げていただきましょう」

「……状況は、よほど悪いのですか」
「座ってくださいよ、先生。落ち着いて」
そういわれると、自分が妙に浮き足立っていたように感じられる。おもに、久々に食べられる包み焼きのせいで、という気がしないでもなかったが、ヤエトはおとなしくルーギンの言葉に従った。
「落ち着けという言葉が必要になるほど、なのですか」
「一触即発ですね。思いがけず、一の君が、やる気満々でいらっしゃる」
「一の君が……」
ほとんど接点がない第一皇子だが、堅実な性格だと聞いている。つまり、やる気を起こすほどに、勝ち目があり、勝てばおいしい状況になるという計算があるのだろう。
「三の君が踏野郡を完全に掌握し、青鉄の原料輸送に障害がなくなったのですよ。工人はもちろん、都にいるのですが、かなりの勢いで青鉄の武器を作っています」
「陛下がそれをお許しになったのですか」
「そういうこと」
「それで、三の君が踏野を掌握したというのは？」
「太守の残党狩りを終わらせたのですよ。北嶺も手伝わされましたよ、鳥で上空からの監視を。ただ、戦闘には手を出すなと陛下がご下命くださったので、監視だけで済みました」
「それは……しかし、ずいぶん速い」

太守の首を落としたときは、即座に追討することを諦めたはずなのに。

「そりゃ、あの場には鳥がいませんでしたからね。鳥を使えたら、草原の民なんていくらでも狩れますよ。あの地形では、隠れるところなどないも同然だ。叢（くさむら）に潜んでも、上空からは丸見えです」

「ああ、なるほど」

「交戦は不許可でしたから、こちらも高度をかなりとったので、下から弓を射ても届かない。楽な任務でしたよ」

「王は、ご不快のご様子では？」

「陛下のご命令ですからね、淡々とこなしておいででしたよ」

「そうですか」

「鳥を使えたのは厳冬期が過ぎてからですから、ごく短期間です。吹雪がやんだところを見計らって外に出るにしても、七日以内に戻れなくなったら困りますし、気候がよくなってからという約束は、王がご自分でとりつけてくださいました。陛下から」

第三皇子にではなく、という意味だろう。兄にたのむより父親に願い出た方が確実だろうし、皇女も気が重くならずに済んだはずだ。

「聞き入れていただけて、よかった」

「まったくです。ま、実際の指揮はわたしが執りましたし、姫様は北嶺からお出になっていません。三の君を姫様の視界に入れるのも、その逆も、できるだけ避けたかったのでね」

「関係が悪化したのですか？」
　ルーギンはここで、にこりと笑った。
「先生が姿を消されたときに、魔物があらわれたというではないですか。呪師のわざがあったに違いない、とね。ラキニー姫が、三の君の関与を取り沙汰なさったのです。内々に、ですが。おかげで、姫様の雰囲気が怖いのなんの……」
　それはひょっとして、皇妹の策略なのではないか、とヤエトは思った。誰かに責任転嫁せねば、皇妹がその怖い雰囲気の対象者となってしまいかねないのだ。もちろん、皇妹には姪などものともしない力があるわけだが、それでも、敵意を向けられるのは鬱陶しいだろう。
　ほんとうにそうなら、第三皇子は災難であるが、あれはあれで同情が必要な人物ではない。
「まぁ、もう発見されたのですから、よいではありませんか」
「発見とは？」
「わたしが、現世で」
「ああ。それはそうですが、だからといって、大変だった時期がなかったことにはなりませんよ。姫様はもちろん、ラキニー姫も殺気だってしまわれて、それはもう」
「皇妹殿下がですか？」
「姫の庇護下から、かどわかされたようなものですから。売られた喧嘩は忘れないわ、と。もう怖いったらないです」

たしかに、それは怖そうだ。

「しかし、……わたしが姿を消す消さないとは関係なく、皇妹殿下ご自身が襲われたわけですし」

「それは別勘定、かな」

皇妹の第三皇子に対する好感度の冷え込みに、自分の失踪は関係しないのではないか、とヤエトは話をつづけたかったのだが、あっさり否定されてしまった。

「別、とは」

「とくに問題になさっているそぶりは、お見せになりませんよ。もちろんね。ただ、だからといって水に流す、忘れてあげる——なんてことは、起きっこない。わたしの勘だけど、重要な局面を待って叩き落とし、上から見下ろして笑ってあげる、くらいのことは考えておいででしょうね」

「……三の君にご同情申し上げる日が来るとは、思いもよりませんでした」

「なにいってるんですか。同情なんて、いりませんよ。ラキニー姫には、いくらでも好きにやっていただけばいい。わたしも仲間に入れていただきたいくらいですね」

「上からにっこりの、ですか？」

「突き落とすところから、きっちりと」

帝国一の美女と華の騎士が、並んで笑顔を見せる——絵面は美しいし、蠟燭屋あたりは芸術的衝動に駆られかねないが、ヤエトとしては、ふたりに見下ろされる立場にだけはなりたくなかった。

「……想像したくないです」

「ですから、旅行なさるにしても、消息を絶つようなことは困るんですよ」
「まったくです」
「反省の色が見えませんよ、それ」
「よくいわれます。どうやったら反省していると信じてもらえるんでしょうね」
「反省したらいいんじゃないですか」
投げやりな応答をして、ルーギンはわずかに視線を動かした。ふり向くと、ちょうどジェイサルドが番人を連れて戻って来たところであった。
会話が途切れるのを待っていたらしいアルサールが、卓に皿を並べた。あらためて、包み焼きのいい匂いが鼻孔を刺激し、どこかへ消えていた食欲が、呆れるほどの速度で現場復帰を果たした。
とはいえ、いきなりかぶりつく前に、礼儀をわきまえたふるまいをせねばなるまい。ヤエトは立ち上がって、紹介をはじめた。
「将軍、こちらがこの街の番人、迷宮の守護者です。番人殿、こちらが北嶺国将軍閣下でいらっしゃいます」
「こちらの偏屈が、お世話になりました。本日、引き取りに上がりました」
「偏屈……」
ついに、目指していた路線が認められたわけだが、釈然としない。なぜだろう。
「急いでおいでのようだね」

あっさり気味の感想を述べると、番人は席に着いた。即座に、彼の前にもアルサールが皿を置く。ジェイサルドもそれに並んで椅子にかけたため、気づけば、立っているのは給仕のアルサールとヤエトだけ、という状況である。

さっさと座って包み焼きを食べよう、とヤエトは気もちを切り替えた。面倒な話は、これからいくらでも聞けるのだ。聞きたくなくても聞かされるのだから、今はまず、食事を楽しみたい。

熱々の包み焼きを手にとる。かぶりつくと、肉汁が口の中にひろがって、火傷しそうなほどであった。保存用に、やや濃いめの味つけになっているが、それがまた、実にうまい。

「庇護下から攫われたとは、むしろ、二の君がお考えになりそうなことですが」

ジェイサルドの疑念を、ルーギンはあっさり打ち消した。

「二の君は、尚書卿は望んで姿を消したのだと考えておいでだからね。むしろ、呪師の襲撃は、都合のいいように利用されただけ、とのご判断だ」

野菜は食感を失わず、といって青臭くもなく、肉や粉を練った皮の部分と調和した味わいだ。肉と皮だけでは、こうはならないだろう。香料も、北嶺の食卓で出されるものより強めかもしれない。ジェイサルドの薬臭い食事ばかり食べさせられていたヤエトには、天国のような香りである。

「では、特段の関係悪化はないと」

「そうなるかな。二の君は三歩くらい引いた位置にいるよう、実に注意深くふるまっておいでだ」

「ほかの皇子様がたは」

「関係良好、というほどの組み合わせはどこにも見当たらないね。残念だ。ああそうだ、ニャイヤーラ様が、父君が治めておいでの南西のご領地へ行かれた。お加減がお悪いそうだ。六の君もお見舞いに行かれて、今はそちらでご一緒だとか。新年祭には、六の君だけは都においでになると聞いているが、どうだかね」
「戦乱を避けようとのお考えですかな」
「そう思っていない者は、誰もいないよ」
「……そこに、我々はこれから行くわけですね」
包み焼きを食べ終えたヤエトがつぶやくと、ルーギンはまさに花がほころぶように笑顔を見せた。
「そうです」
なぜ、そんな笑顔なのだろう。
疑念が顔に出たものか、ルーギンは笑みを消して言葉を継いだ。
「ああ、先生だなぁ、と思いました」
「……なんで」
素で疑念を抑えきれずに問うと、騎士は首をかしげた。
「なぜでしょう。でも、ああ、先生らしいことをいわれたな、と思いました」

第



章

1

都は涼しかった。体感的には、涼しいを通り越している。つまり、寒い。
「まだ春って感じじゃないでしょう、これは」
口をついて出たぼやきに、呆れたように返したのはルーギンである。
「これでもずいぶん、あたたかくなったんですよ？」
「どこがですか」
「だって今年の冬は寒さが厳しくて、長くて――」
そこでルーギンの声は途切れた。どうしたのかと視線を向けると、騎士は困ったような笑顔を見せ、長いため息とともに、告げた。
「――ほんとうに、この世にいなかったんだな、先生は」
しみじみと、今さら納得されても、対応に困る。
そういえば積雪量が凄いという報告は受けていたな、とヤエトも今になって思い出したから、今さら具合では似たり寄ったりのところなのだが、それにしても、だ。
ヤエトが乗せられた馬車は、夏用のものとは違い、しっかりと密閉された構造である。だから、今

はさほど寒くはないのだが、乗り込むときが寒かった。

沙漠の夜の方が、冷え込みは厳しかったはずだ。しかし、あれだけの質と量の書物を前にして、暑いの寒いの体調がどうのと、いっていられるはずがないではないか。今は、向かっている先に希望も期待も持てないからこそ、少しの寒さも耐えがたく感じるだけであろう。

それにしても、とヤエトは思う。正装とは、不便な慣習だ。夏は暑く、冬は寒い。今は、正装がそこまで苦にならない季節のはずだが、派手なばかりで薄っぺらい上着では寒くてたまらないのが現実だ。外套を羽織りたいほどである。

できれば外套より布団の方が望ましい。ついでに、寝台に戻って寝て過ごせたら理想的だが、寝るだけなら、のこのこと都まで来る必要もなかったわけで。

「……隠居したい」

全員が、なにをいっているんだこの隠居は、という顔をした。

同乗者の顔ぶれは、ルーギン、キーナン、伝達官である。はじめて皇宮へ上がるため緊張しているはずのキーナンはもとより、滅多に表情を変えない伝達官にまで呆れ顔をされたのは、少々堪えた。

――いや、考えかたを変えろ。

空気をなごませたと思えばよいのだ。その観点からすれば、なかなかうまくやった、と自分を褒めてやってもかまわないところである。故意に狙ったわけではないが、結果がよければ問題ない……と、考えられる性格ならよかったのになぁ、とヤエトは心の底から思った。

こつこつと窓を叩く音がした。小窓の外に、騎馬で並走しているジェイサルドの姿が見えた。

硝子部分は嵌め殺しで、その少し上に開口部がある。そこを閉じている板を引き下ろすと、窓は塞がれてしまう。板は二枚重ねで、一枚だけ下げれば、馬車の中は真っ暗になる。外から中を窺うこともできなくなるし、硝子を狙って石を投げられたり矢を射られたりしても大丈夫、という仕掛けだ。

設計者という人種は、おおむね心配性なのかもしれない。あるいは、馬車の買い手が心配性なのだろうか。たとえば、ヤエトの身の安全を過度に案じる性向がある、この老騎士のように。

開口部が窓より高い位置にあるため、座ったまま馬上のジェイサルドを見上げるには都合がよい。これも、設計者の想定の内であろう。

「この先、混み合っているようです」

ジェイサルドが報告すると、ルーギンが口を出した。

「どこも護衛を増やしているだろう。混雑は例年の比ではないはずだね」

もちろん《黒狼公》家も例外ではない。馬車と並走しているのは、ジェイサルドひとりではなく、《黒狼公》の騎士団が、隊列を組んで前後をかためている。武装も礼を失しない範囲で本気である。つまり、これはいつでも戦える集団なのだ——ヤエトと伝達官のふたりを除けば。

邸の守備にも、十名以上の騎士を残しているはずだ。いつの間に増員したのかと問えば、シンリールでヤエトを待っているあいだに、と来た。定期的に来ていた北嶺の騎士を通じ、家宰や、都に残していた騎士団の副団長に文を送ってもらえるよう、手配したのだそうだ。

ヤエトが戻って来なかったらどうするつもりだったのだとも思うし、戻って来なければ来ないで必要になったのだろうな、とも思う。ヤエトがいなくても、《黒狼公》家にはキーナンがいる。俸禄の手配はどうするのかと問えば、戦になれば報賞が出ますからご心配なく、と返された。

ヤエトは、勝たねばならないな、とつぶやくしかなかった。

——勝って、しかも生き延びていなければ、報賞など、なんの意味もない。

死ねばおわりだ。しかし、それをジェイサルドに告げても無益だろう。顔色も変えず、俸禄を支払う必要もなくなりますな、と答えるに決まっていた。

戦になるのだ。

その感覚を、ヤエトは未だに受け止めかねていた。

これ以上ないほど浮世離れしていたのだ、情勢の変化について行けなくても当然ではあるのだが。

小さな窓から見える範囲だけでも、都の雰囲気が一変していることはわかる。

馬車が進んでいるのは貴族の邸宅が建ち並ぶ一帯だが、どこも門扉をしっかり鎖し、警護の兵を配していた。金属製の柵だけだった門の内側に板を貼り、門自体を強化しているのも見かけた。幸い《黒狼公》邸は、さほど改修の必要はなかったらしい。もとより心配性のジェイサルドが決めた物件である、建物自体はもちろん、塀も門扉もしっかりとしたものだ。購入後、大きく手を入れたのは、例の屋上の鳩舎と、鳥が出入りしやすいように工夫した露台くらいのものである。

家宰によれば、もとから仕えている召使いたちは無論のこと、あらたに雇用した騎士やその従者の

頭数まで計算した食糧三十日分を備蓄、井戸が汚染された場合にそなえて北嶺産の氷を氷室にぎっしり詰めて保管、などといった準備もしているようだ。

「殿、お加減は？」

時間がかかるが、具合はどうかというのがジェイサルドの用件だろう。

帰って寝たいと返したら、ジェイサルドがどう応じるかに少し興味がなくもなかったが、ヤエトは大人になることにした。

「大丈夫です」

またしても全員が、ご隠居様の大丈夫は意味がないから、という顔をしたような気がするが、だったらどう答えろというのだ。もう駄目だ、死ぬ、とでもわめけばいいのか。

ジェイサルドだけは、まったく表情を動かさない。隠居の戯言（ざれごと）にいちいち反応していたら身がもたない、といったところか。

「歩くには、まだ遠そうだしなぁ。いっそ、馬に乗り換えますか」

提案したのはルーギンである。わかっていない、とヤエトは思う。

――これだから、馬乗りは。

馬に乗っても、ヤエトのなけなしの体力がすり減るだけだ。ギスケルいうところの、ヤエトを乗せてくれる程度に心のやさしい親切な馬がいないと、そもそも話にならない。

「……戻りましょう」

気がつくと、そんなことを口走っていた。今度はジェイサルドもわずかに眉を上げ、意外そうな表情を見せた。

が、ヤエトは押し切ることにした。なかばは、自棄（やけ）である。

「このままでは時間を無為に使った上、疲れ果てるだけです。戻って、鳥を使いましょう」

ルーギンが笑った。

「先生は、たまにとんでもないですよね」

「たまにで済むなら結構。ジェイサルド、おまえは騎馬で先行しなさい」

「ご一緒つかまつります」

予想通りの反応だが、シロバにそうそう無理はさせられない。沙漠から都への移動も、二人乗りだったのだ。それに、伝達官やキーナンもなんとかする必要がある。鳥不足という問題さえなければ、キーナンはさっさと北嶺に連れて行き、いざというときに乗れるように仕込んでおきたかったのだが、今、それをいってもしかたがない。

言葉に詰まったヤエトに代わって、ルーギンが話を引き取った。

「そうしましょう。伝達官殿は、わたしが引き受けますよ。若殿は、部下と同乗していただけばよい。隊を分ける必要があるな。全員を乗せる鳥はないし、馬も確保しておきたいから、一部はそのまま城へ向かわせた方がいい。ジェイサルド、邸へも連絡を」

「承知」

ジェイサルドが馬首を巡らせた。ルーギンはさっと腰を上げ、呆然としているヤエトの頭越しに、板を戻した。なにごともなかったかのように座り直すと、彼は完全無欠の笑みを浮かべて、告げた。

「先生は、諦めてジェイサルドを乗せてやってください」

反論しても時間の無駄になりそうだと予測せざるを得ない、そんな口調であり、表情である。ため息をごまかすように、ヤエトは思ったことを口にした。

「鳥を使うことに、反対はしないんですね」

「発案者が、なにをおっしゃいますやら」

まさか実現するとは思わず、実のところ、勢いだけで口走ってしまったと、白状すべきだろうか。

ルーギンは、あの笑顔のまま言葉をつづけた。

「いいんじゃないですか。なかなか爽快でしょうしね、行列の頭上を飛んで行くのは。伝達官殿、姫様にお伝え願えますか」

伝達官は基本的にはヤエトの依頼しか受け付けないはずなのだが、今回は応用篇として受け止められたようだ。小さくうなずいて、呼吸をととのえだした。

いつも思うのだが、ヤエトはルーギンのようにはなれないだろう。呼吸をするように命令をし、人が自分に従うのを当然と感じるようには育てられていないのだ。むしろ、命令を聞く側である。

――それに、全体を考えることもだ。

今、ヤエトは自分の都合しか思いつかなかった。もちろん、警備の都合などを考えるのに慣れてい

るかどうかの差もあるだろうが、隊列をどうするといった問題は、まったく念頭になかった。自分の駄目な点だ、と思う。向いているのいないのと御託を並べてよい立場ではない。

――隠居したい。

隠居なのに隠居したい。

ヤエトが不条理なおのれの心境に悩んでいるのも知らず、いや知っているのかもしれないが、ルーギンは話を先に進めていた。

「上空から一望すれば、各家の隊列の規模もわかります。全体の布陣も見えるかな」

「布陣」

思わず、くり返してしまったヤエトに向かって、ルーギンはうなずいた。

「もう始まっているのですか」

尋ねたのは、キーナンだ。そういえば、とヤエトは思った――この子に、馬を買ってやらなければならなかったのだ。鳥の騎乗を仕込むより、そちらが先だった。やはりこれも、今さらだが。

「その問いには、なにが、というのを特定しないと答えられないね」

ルーギンの言葉に、少し躊躇を見せたものの、結局、キーナンは尋ね直した。

「戦は、もう始まっているのでしょうか」

「戦端が開かれているかどうかならば、それは、まだでしょうね。ただ、備えは確実になされているし、どこの誰が、どういう準備をしているかを知るのは、有益なことです」

「情報ですね」
「そうです。正確な情報を得ることと、妥当な推測をすること、結論と適切な指示を迅速に行き渡らせること。どれが欠けても、勝ちは遠のくものですよ――《黒狼公》、あなたはまだ若い。今回はおとなしくしていなさい。年長者の指示をよく聞き、よく見、よく考えるのです。身体を動かすよりも、知りなさい。感じなさい。それが武人としての糧になります」
武に逸るなという意味でもあるようだが、キーナンにはちゃんと伝わっているのだろうか。
少年は恐れよりも期待に満ちているように見える。
「功名を立てる必要はない、ということです」
ヤエトが口を挟むと、ルーギンは笑った。
「たしかにね。キーナン、《黒狼公》家の家長であるとは、窮屈なことかもしれない。わたしが君の年齢であれば、きっと苛立つだろうとは想像がつく。でもね、君は武勲を獲得するよりも、目指さねばならないことがある。わかるかな？」
「……お教えください」
「些細なものであれ、落ち度を見せぬということだよ。大貴族は、功績を加算する必要などない。むしろ、減算されぬことを注意せねばならない。《金獅子公》が、よい手本になるでしょう。あの人は、損になることは絶対にしないからね」
伝達官が、大きく息を吸った。

「……厩舎の用意はある、早く来るようにと」

北嶺国の一行は、皇宮に滞在中である。鳥を休ませるための場所は確保済みなのだろう。皇女以外は《黒狼公》の邸で引き受けてよいのだが、情勢も鑑みて、というのがルーギンの説明だった。

——つまり、いつ戦になってもよいように、ということだ。

貴族にも向いていないが、それ以上に、ヤエトは戦向きの男でもない。今の彼にできることといえば、せいぜい周りに心配をかけないように、吐かず倒れず発熱せず、を頑張るだけだ。

馬車は大きく旋回して走り出した。完全に動けなくなる前に方向転換を決めたおかげか、進みは順調である。これなら、邸まではすぐだろう。

「はじめて鳥を使ってから、まだ一年しか経っていませんが、都の民も、鳥の姿には慣れたと考えてよいでしょうか」

ヤエトの問いに、ルーギンは肩をすくめて答えた。

「そうですね。地道な努力が実を結んだかな。うちの使用人も、逃げ出さなくなった」

去年は、昔語りから抜け出して来た化鳥の姿が、大騒ぎを引き起こしたのだが。

——変化の過程は、つねに意識の外にある。

当たり前につづく日常など、幻想に過ぎない——どれだけ経験しても、人はそれを忘れてしまう。どんなに学んでも。思い知ったつもりでいても、失われるときに気がつくものだ。

邸に戻ると、もう準備を終えた鳥たちが中庭で待っていた。

もちろん、ジェイサルドも準備を終えていた。武具をいくらか外して軽装になっているのが、乗る気満々の証拠である。

ため息をついて、ヤエトはシロバの嘴を撫でた。

「悪いがシロバ、たのむ」

シロバは、ヤエトの手に嘴の端を少しだけ擦りつけるようにした。

一時はすっかり他者と意志の疎通ができなくなっていたシロバだが、今はずいぶん回復したそうだ。ルーギンが横でくすりと笑ったのも、シロバがなにか伝えたからだろう。

確認したいようなしたくないような気もちでいると、ジェイサルドが口を開いた。

「鳥が、なにか？」

「武装を軽くするなど、馬鹿にされた気がするそうですよ、シロバは」

「なるほど。無礼と思われたか、しかし、儂が少しでも身軽にしておらねば、殿がお許しくださらぬであろうからな」

あっさりヤエトになすりつけて、ジェイサルドはシロバの前に膝をついた。

なにをするのかと思って見ていると、老騎士は鳥の巨大な嘴に額をつけんばかりの姿勢をとった。

「儂を気に食わぬのは知っておる。儂も、そなたとは合わぬ。だが、精一杯抑えておるのだ、ひとえに殿の御身をお守りするためである。儂は殿の剣であり盾であると心得よ、ただの武装に過ぎぬとな。そなたが殿の翼であることを、儂も堪えておるのだ。わかるな」

シロバは嘴を鳴らした。ジェイサルドの頭など、ひと嚙みでちぎれてしまいそうだが、老騎士は老騎士で、いよいよもって正体不明、落ちた頭を拾ってまた据え直すくらいのことはやりそうである。

ジェイサルドが立ち上がり、シロバがそれを油断なく見守る様は、話がついたというより、天敵同士が立ち会いのきっかけを摑もうとしているかのようだ。正直いって、ヤエトの胃に悪い。

「シロバ」

声をかけてみたものの、どうつづけてよいのかわからない。鳥を相手に言葉を失う状況に追い込まれるとは、思いもよらなかった。

ヤエトの当惑をよそに、シロバは地面にしゃがんだ。つまり、乗れといっているわけだ。

逆らう勇気もなく背に乗ると、シロバは立ち上がった。ヤエトがずり落ちないよう、きちんと平衡をたもって立つ気配りが、ありがたい。それからシロバはジェイサルドを見て、また嘴を鳴らした。

「御免」

ジェイサルドが断りの言葉を告げたのは、はたしてヤエトに対してか、それともシロバへのものなのか。ともあれ、老騎士はヤエトの後ろにまたがっていた。

ヤエトが胃の痛くなる場面を通過しているあいだに、ルーギンは伝達官を鳥に乗せるという任務をこなしていた。抱き上げて座らせたのだろう。その向こうではキーナンが、自力で鳥にまたがるという偉業をなし遂げたようだ。

「先導はわたしが」

ルーギンが告げて、伝達官の後ろに飛び乗った。

「出発！」

号令にあわせて、シロバが勝手に飛んだ。ヤエトは手綱をしっかり握った。

みるみる地面が遠くなり、尖塔の群れる都ならではの景色が眼前にひろがった。ここに来たときも見ているし、そろそろ慣れてもよさそうなものだと思わなくもない。だが、この壮麗な光景が魅力を失うことがあるのだろうか、とも思う。

ラングールの美は、混沌の美だ。人が生きて、暮らす美しさだ。

実際に飛んでみると、タルキンがかつて語ったように、塔がどこにあるか、空気の流れはどうなのか、そういったことが知識として重要なのも理解できた——とはいえ、ヤエトはすべてをシロバにまかせているので、上空だからと単純に直線的に移動できると期待してはいけない、と曖昧にとらえているだけだが。熟練の乗り手であれば、そこも考えて、鳥が楽をできるように経路を組むのだろう。

今、その役目はルーギンが請け負っている。

将軍閣下も忙しいな、とヤエトは他人事（ひとごと）のように考えた——失踪した隠居を迎えに行き、首根っこを摑んで都に引率した挙げ句、皇宮への飛翔（ひしょう）である。最後の要素は完全に予定外のはずだ。

都育ちで地理に精通しているとはいえ、地上の道と空とでは、まったく勝手が違うはずだが、それらを擦り合わせた立体的な地図が、彼の頭の中にはできているのだろう。ヤエトには、無理だ。地図は読めるし、方向音痴ではない……と思うが、空間的な位置の把握があまり得意ではない。

そういえば、ルーギンは一回歩いた経路は覚えるといっていたし、博沙国の城塞に滞在したときも、あの迷路のような建物の内部を迷わず歩いていた。

武人には、それも必要な素質なのかもしれないな、とヤエトは思った。指揮官となり、兵をたばねる立場であれば、なおさらであろう。地理を把握することは、戦の基本である。

鳥たちが短い飛翔を終え、皇宮の中庭へ向けて下降を開始してもなお、ヤエトはそんなことを考えていた。つまり、こうして上空から見下ろしてもなお、皇宮内部の構造が、自分にはさっぱりわからないという事実を噛み締めていたわけだが。

——構造がわからないと、警備の計画もできない。

いざというときに皇女を逃がすための経路くらいは、把握しておいた方がよいのではないか。しかし、それも、出発点がどこでも対応できるようにするという問題がある……。

そんなことを考えていたおかげで、着地したときのヤエトは、眉間（みけん）にくっきりと縦皺を刻んだ渋面になっていたようだ。

「なんだその顔は」

大股に歩いて来た皇女は、去年のように女装をしてはいなかった。その点に、まず、ヤエトはおどろいた。

「ご無沙汰しております」

神妙に膝をつこうとしたヤエトに、皇女は手をふった。

「構うな。それより早く来い。話がある」
「お支度は、よろしいのですか？」
皇女は眉を上げ、尊大な表情をつくった。そんな顔をすると、皇帝と親子だな、と思う。
「これで十分だ。おまえまで、女官たちのような小言を申すな」
ルーギンが、横合いから口を挟んだ。
「姫、たしかにお届けいたしました」
「ご苦労だったな」
「慌ただしくて申し訳ありませんが、一回、空へ戻っても支障ないでしょうか」
皇女はうなずいた。
「行け。だが、時間はないぞ」
「心得ましてございます。では」
一礼すると、ルーギンは大股に鳥の方へ戻り、ひらりと騎乗した。入れ替わるように、伝達官がこちらに歩いて来た。それを待たず、皇女は歩きだした。
「なんだ」
「は？」
「今度は、なにやらおもしろそうな顔をしておる」
そんなに表情に出ていただろうか。ヤエトは気を引き締めて答えた。

「久々にご尊顔を拝しましたもので」
「わたしの顔が、おもしろいか」
「いえ、そのようなことは」
おもしろいのは、顔ではない。
行方不明からの発見、帰還という状況である。ある程度の連絡はとれているにせよ、もっと感極まったやりとりがあっても当然と予測していた。だが、そうはならなかった。ルーギンの申し出にしても、意図を問いただすなどして時間を浪費していない。
信じて、迎え入れる。信じて、自由にさせる。
——度量がある。
小娘相手にそう感じてしまい、しかも、それを嬉しく思っている自分が、おもしろいのだ。
「どうだかな」
「わたしが戻ると信じてくださって、ありがとうございます」
「……まったく、そなたは度し難いな」
言葉を返しながらも、皇女は足を止めなかった。よほど急いでいるのだろうが、そもそも歩幅が違うので、ついて行くのに支障はない。
「度し難い者をも従えてしまわれるだけの、ご器量をお持ちでいらっしゃいます」
ふん、と返事とも鼻息ともつかない音をさせて、皇女はさらに足を速めた。屋内に入って暫く歩く

と、北嶺の騎士が守る扉があった。皇女の姿を見ると、さっと開く。まるで第二皇子の采配でもあるかのように、すべてが速い。

当然のようにヤエトの後ろに付き随っていたジェイサルドを見もせず、皇女は言葉をつづけた。

「そなたの騎士は同席を許す――ご苦労、誰も通すな。ああそうだ、ルーギンが戻って来たら通せ」

命令は、扉を守る騎士に向けられたものである。騎士は一礼して、静かに扉を閉めた。

その間に、皇女は部屋の奥にある椅子に腰をおろした。

地上階ながら、皇宮には珍しく、中庭に面していない部屋である。内密の話をするための場所であろう。相変わらず、ヤエトには皇宮の全体像が把握できていないため、上空から乗り込んだにもかかわらず、ここが全体のどのあたりなのかは判然としない。

「座れ」

命じられるまま、ヤエトは皇女と向かい合う位置に腰掛けた。ジェイサルドも、その隣に並ぶ。

伝達官は、閉め出されているようだ。これはそう珍しい処置ではない。彼女が皇女の言葉を届ける任を果たすべき対象、すなわちヤエトはこの場にいるのだから。

キーナンはどうしているのだろう。そういえば、把握していない――気にかけてやるべきだったとは思うが、もう間に合わない。扉は鎖されてしまった。

名家ではないにせよ、生まれも育ちも貴族のキーナンは、ヤエトよりよほど礼儀作法を心得ている。皇宮に上がるのがはじめてでも、基礎はあるのだ。うまくやれよと心で念じるのみで、ヤエトは養子

のことから頭を切り離した。
「心得ておろうが、そなたは行方不明だったことを隠していた、ということになっておる」
「はい」
なっておるもなにも、実際、その通りである。念を押されるまでもないから、本題はこの先だろう。
案の定、皇女はヤエトが想像していなかったことを口にした。
「探りを入れて来る者もあろう。そなたは、わたしの命を受け、避難民の受け入れ態勢をととのえていた、と思わせるがよい」
「避難民、ですか」
「そのために、自領の辺地をゆるゆると巡察していたことにせよ。実際、代官には話してあるし、準備もさせておる。いささか遠いが、北嶺では話にならんし、博沙は土地が痩せている。とても大人数を受け入れられる状況ではない。草原は、太守の残党狩りを終えて表向きは平穏とはいえ、民心は帝国にない。都が揉めれば、これ幸いと蜂起しかねぬ状況だ。とても民草を連れては行けぬ」
――もう、開戦は必至なのだな。
ここに至って、まだそんなことを考えている自分が、少々なさけない。いくら、紛うかたなき行方不明から現世に戻って来たばかり……といっても、そろそろ腹を据えるべきであろう。
「皇宮を開放するわけには？」
「ここか」

一瞬、皇女は眼をみはったが、すぐに眉をひそめ、考えこむ表情になった。
「ことが起きてからでないと、住み慣れた土地をはなれようという者は少ないでしょう。それだけの長途ともなれば、なおさらです」
「陛下にお話ししてはみるが、皇宮は戦に適した構造ではない……と、思う」
——守りきれないか。
皇宮は、広い。それもなにか、だらしのない広さなのだ。全体的な設計思想もなく、その場の勢いと流れだけで、建物が追加されていったような。無秩序にして無計画、それは都の姿と同じである。
少し考えてみれば、ヤエトにもわかる。皇宮は、戦うための城ではない。
「船も使えませんね」
確認のつもりで口にすると、皇女は表情を消した。
「七の兄上は、船でおいでになった」
海賊たちを配下としたという噂が事実であれば、本格的な水軍を引き連れて来たと見るべきだ。都は大河に面しているから、生活に舟を使っている民も多いし、皇帝の水軍も一応は存在する。だが、戦力としては、かなり不確かだ。
皇家の軍は騎馬の軍、騎士の軍が主体である。主戦場は都の外の平野に持って行きたいところであろう。もちろん、第七皇子の方は、河で戦いたいだろうが。
「とにかく、希望者だけでもそなたの領地へ移動させる。わずかでも、救いたい」

「はい」
「そこで、そなたはその者たちの先導をつとめてほしい」
なんとなく、そう来るような気がしていたので、ヤエトはすかさず言葉を返した。
「お断りいたします」
「命令だ」
「わたしには騎士の剣もございませんが、案内人の杖も持ちません。道もわからなければ、民を守ることもできぬのでは、役に立ちません」
皇女もヤエトが同意しないと予測していたのだろう。まったく動じることなく、言葉を返す。
「役に立たぬと申せば、ここにいても、役には立たぬであろう」
「意外に、お役に立つこともあるかと存じます」
「それを決めるのは、そなたではない。わたしだ」
にらみ合っていると、外から声がした。
「失礼します」
扉を開けて入って来たのは、ルーギンだった。
「どうだった」
「下流に、船団が増えています。今朝までは見えなかったものです。遅くとも昼前には着くでしょう」
ルーギンの言葉に、皇女は息を吐いた。大きく、深く。

「陛下に――いや、ご存じであろうな」
皇帝が、第七皇子の動向を見張っていないはずがない。間諜をはなち、伝達官を派遣し、すでに詳細な情報を手に入れているだろう。
あの男は為政者である以前に軍人である。軍属の支持があったからこそ生き伸びた。たぐいまれな統率力はもちろん、指揮官としての力量があってこその、沙漠越えである。そして、皇家の戦は情報戦から始まると決まっているのだ――皇祖の昔から。
口をつぐんでしまった皇女に、容赦なくルーギンが告げた。
「七の君が剣を鞘から抜きはなたれるのが本日これより間もなくであったとしても、おかしくはない状況です。ご覚悟を」
「わかっている。ヤエト、許せ」
「なにをでございましょう？」
「先ほどの案は、破棄だ。そなたを先導役に押し立てれば、人が集まると考えてのことだったが、もはや、それが仇となりかねぬ。ここまで切羽詰まれば、逃げる決意をかためる者も多くなる。迅速な行動も望めぬ上に、護衛の兵もたりぬであろう。それでは、戦を逃れる役には立たぬ――むしろ、無駄に戦場を混乱させることになりかねぬ。残念だが、そなたも都に留まれ。そして、そなたの判断で民を守れ。たのむぞ」
「……かしこまりました」

事態はヤエトの想像よりずっと先に進んでいる。追いつけ、とヤエトは自分に命じた。
――そして追い越せ、予測しろ。
ここから先は、もう戦場だ。

2

新年祭に列席するのは、これが二回目だ。だから、とくに変だとも感じはしないのだが。
――見慣れていれば、どんなにか異様に映るだろうか。
それは、想像するしかない。
皇帝を囲む親族の列は、大いに減っている。皇子がふたりも消えたのだから。その母である女性も、姿をあらわすまい。そして皇子の数が減ったぶん、皇女は中央に近くなった。
第七皇子もまた、皇帝への距離が近くなったひとりである。すでに所定の位置に座っていたが、以前とは、かなり印象が変わっていた。どこかのんびりした微笑は消え、硬質な仮面をかぶったような表情である。
去年は玉座の右側に第一皇子が、そして母后を同じくする第四、第五、第七皇子が並んでいた。左側に、残る第二、第三、第六皇子と皇女という順だったのだが、そのままでは左右の均衡がとれないからだろう、今年は第三皇子が右側に移動していた。

《白羊公》は、姿が見えない。席次をずいぶん後ろに下げられたのだろう。皇子の傅伯（ふはく）という立場を失った今、《白羊公》の家格からいえば当然のことだ。

ヤエトは隠居したものの、皇女の副官という扱いなので、立ち位置は先年と同じである。《黒狼公》家の代表としては、キーナンが別の場所に立っている。もちろん、貴族の中では最前列だ。ほかに《銀鷲公》や《金獅子公》も並んでいる。かれらに並んで立っているのは、馬狂いの《灰熊公》であろう。短く刈った髪と髭は金褐色で、少し白髪が交じっている。顎がしっかりしているのは、馬乗り一族の証とされるらしい——ギスケルが授けてくれた、どうでもいい馬知識のひとつだが、たしかに顎が立派である。長さではなく、幅が。

去年同様、きらきらした衣装を纏った官吏があらわれた。

「お静まりを！　真上陛下のお出まし！」

皇家の人々が立ち上がった。もちろん皇女も立ち上がる。

変わったといえば、皇女の姿こそが目立った変化の第一であろう。重たげな頭飾りや、腰を締め上げる帯、長い裳裾（もすそ）のどれも身につけていないばかりか、すっきりとした男装である。もちろん、生地は上質なのだろうが、華美な印象がないどころか、ひとことでいうなら地味な装束だ。式典には粗略過ぎるといわれかねない。豪華であると主張できるのは、腰に佩（は）いた剣の鞘くらいのもので、これは大粒の貴石で飾られている。しかし、中身はしっかり実戦用のものに違いない。

——どうせなら去年より身長が伸びたとか、そういう変化ならよかったのに。

くだらないことを考えながら、ヤエトは皇女の頭を見下ろしていた。そういう、のんびりした感想を抱いて当然の状況であればよかったのに、と思いながら。

身長の三倍ほどありそうな長い裾を引いてあらわれた皇帝は、ゆっくりと玉座に向かっている。玉座の後ろには皇妹が立ち、兄の到着を待っていた。今年はまだ竜気を発していないようだ。状況次第では、彼女が全力を発揮することもあるだろう。今すぐ走って逃げた方がいいのかもしれない。

ふと、皇妹の視線がこちらに流れ、ヤエトをとらえた。紫の眼をわずかにほそめただけで、皇妹は視線を皇帝の方に戻した。

――無事を確認しただけ、と思っておこう。

眴せ(めくばせ)ひとつで、裏の意味だの含みだのを憶測しても、しかたがない。自分をそうやって説得しておかないと、怖い想像がどこまでも突っ走りそうだ。

玉座に辿り着いた皇帝は、皇妹と視線をあわせ、笑顔を見せた。

それが非常に珍しいものに思え、ヤエトは眼をしばたたいた。

皇妹も笑みを返していた。なにやら共謀者めいたその笑顔の交換は、たしかに、この兄妹のあいだでは見たことがない種類のものだった。

皇帝が向きを変える。ゆったりとした動作で、会場を見渡す。

広間は、静まり返っていた。

――雪が降っているみたいだ。

舞い散る雪片がすべての音を吸い込み、世界が無音になっていく、あの感じに似ている。
「去りにし一年は――」
その静寂を払い、皇帝のくちびるから、言葉がとびたった。
久しぶりに、竜種の声の力を感じた。背筋がぞくりとし、心が揺さぶられる。いきなり、魂の底まで届く。
「――あまりに不幸であった。今日この日、年をあらためることでもまだ、その連鎖を断ち切ることはかなわぬであろう」
ヤエトは眼をみはった。
おそらく、広間にいる誰もが同じ驚愕に襲われていたであろう。
予祝のための集まりで、いきなり、凶事の予告である。
皇帝の視線が、つと動いた。
「青浪王(せいろうおう)」
「はい、陛下」
第七皇子は皇帝の方に向き直った。ふわふわとした綿毛のような髪は、まだ少年らしさを残していたが、声は低く、もう子どものものではない。体格も、去年よりぐっと大人びたように思える。
「そなたが、帝国に叛旗をひるがえすとの噂がたっておる」
「陛下は、その噂をお信じになるのですか」

不遜な返事である。第一皇子はわずかに顔をしかめ、第三皇子は憐憫めいた表情を見せた。玉座のこちら側にいる皇子たちの表情も確認したいところだが、横目ではとても見えないし、きょろきょろするわけにもいかない。

皇女がどんな表情でこれを受け止めているかも、ヤエトには見えない。

「噂を信じはせぬ」

短く返すと、皇帝は手をひろげた。

ゆっくり、まず右手を。そして左手を。

「だが、彼方此方より集められた情報を精査すれば、おのずと真実は立ち上がるもの。わたしには百の耳、千の眼が仕えておる——」

第七皇子は無言である。皇帝と視線をあわせたまま、身動きもしない。

皇帝はそのまま言葉をつづけた。

「——青浪王、そなた、王の座をしりぞくつもりはあるか」

「ございます」

「ほう」

「帝国より封じられた王位、封土はお返しします。代わって、わたしはみずから立ち、あらたな国を建てようと思います。わたしは真帝国を捨てます」

昂然と、第七皇子は宣言した。

即座に兵士が動くかと思ったが、それはなかった。皇帝が制止したのだろう。曖昧に挙げた手が、それを語っていた。

「ここで、そなたを斬って捨てることもできるのだが？」

「わたしが戻らなければ、ほかの者が立つだけです。いっそ好都合です、復讐を誓って、皆が結束を固めるでしょうから」

皇子の頬は、わずかに朱を掃いたように色づいていた。だが、声音は冷静である。

こうなることを覚悟していたのだろうが、それにしても、いい度胸だ。

「そなたは領土を捨てるのではなかろう。我が物顔に、居座るつもりであろう。違うか」

「答える必要を感じません。わたしはもう、あなたの息子ではない。部下でもない。わたしに従う者は、皆そうです。我々は、真帝国を認めない」

「滅ぼすつもりか」

「この歪んだ支配から、皆を解放します」

「誰が、それを望むというのだ」

「わたしが。……もはや、この場に留まる必要もない。次は、戦場でお会いしましょう」

礼もとらず、第七皇子は踵を返した。

彼の配下がつづく。

「行かせろ」

皇帝の命令が、まるで皇子の後を追うようでもあり、あるいは先んじて道を開くようでもあった。貴族たちが左右に分かれる様が、皇子のための動きには見えなかったのだ。あくまで、貴族たちは皇帝の命に従った――皇帝の言葉がかれらに場所を譲らせたのだと、そう感じられた。

よく見れば、一部の貴族は皇子に従って広間を去って行く。その動きもまた、皇帝の言葉に守られているようだった。

誰も、なにもいわない。怖いほどの、静けさだった。

――ここで伐ってしまえばよいのではないか。

復讐戦にはなるだろうが、だから戦が熾烈になる、とは限らない。

第七皇子が倒れれば、担ぐべき旗がなくなる。《白羊公》は決断力の乏しい男であるし、とても皇家に対抗できる器ではない。本心では降伏を望んでいたとしても、おどろかない。周囲の状況からそれを決断できないまま流されているのだといわれれば、皆が納得するはずだ。そういう男なのだ。皇子の母親は気がふれたという噂であるし、人が去る理由にはなっても、留めることはできるまい。

皇帝だとて、その程度のことはわかるだろう。

――なにを考えているのか……。

遠ざかる第七皇子の背を見送る表情からは、なにも読み取ることができなかった。

――あの皇子のことも、信じてはいないのだろうな。

誰も信じない皇帝は、しかし、皇女のことは愛しているといった。末息子には――愛情は、ないの

だろうか。

皇子と彼の部下が去ってから、皇帝は、あらためて一同を見渡した。

「戦の鐘は、うち鳴らされた。大いなるひとつ神に、加護を祈れ。神のすべての御名に、その化身に、与えられし恩寵に、すがりつけ。これより先、おろそかにしてよい幸運などひとつもないと知れ。帝国の子として、戦うがよい。全身全霊をもって生き伸びよ、我が民よ。我が騎士たち、我が剣よ、我が盾よ！　戦え、そして勝て！」

応、と声があがった。あちこちから、次々と。絶え間なく、声はつづいた。

満足げに、皇帝はうなずいた。

「抜剣！」

叫びながら、みずからも、すらりと剣を抜きはなった。

金属がふれあうときの、あの独特の音が広間に響く。呼びかけに応じる声同様、次々と、途絶えることなくその音は連続した。おそろしく長く感じられたが、ほんの一瞬だったのだろう――気がつけば、全員が剣を抜き、高く掲げていた。

その場に居合わせている人間で帯刀していなかったのは、ヤエト自身の他には礼部の官吏と、皇妹くらいのものだろう。なんとなく皇妹と視線が合うと、彼女はにこりとして見せた。

やはり、竜気を使っている様子はない。

――不要なのか。



戦へ向けて心を合わせるために、介入する必要などない。それが今、この光景なのだ。

皇帝が声をはりあげた。

「敵の血を！」

「血を！」

広間がどよめいた。ふだん、あれほど足並みの合わない貴族たちが、一斉に叫んでいた。

「逆らう者に死を！」

「死を！」

剣を高く掲げ、皇帝は叫んだ。

「勝利せよ！」

それに応えたのは、もはや言葉ではなかった。おおお、という叫びが耳を圧し、剣がふられた。ヤエトの前に立つ皇女も剣は抜いていたが、ふり回してはいなかった。よく見れば、皇子たちも同様に、剣を抜いて高く掲げるまではしても、あまり派手にふり回し、雄叫びをあげたりはしていないようだった。

それでも貴族たちの叫びはつづく。皇帝が、天を衝くような勢いで剣をふり上げると、興奮はさらに高まった。空気の色まで、変わっていくようだ。

——まるで、竜気だ。

貴族たちが気炎を上げるたび、微弱な揺れが生じる。それが幾重にもかさなって、巨大なうねりと

なっているのだ。ヤエトには、広間全体が揺れ動き、窮屈な矩形から逃れようと身もがいているかに感じられた。

はっきりいって、気もちが悪い。

皇妹が力を解放しなくても、居やすい場所とはいえない。吐いたり倒れたりする前に、皇帝がかれらを静かにさせてくれることを祈るくらいしか、今の彼にできることはなかった。

皇帝は、頭上に掲げた剣を水平にし、左手を刀身に添えた。

「我が剣を、一の皇子に託す！」

最高責任者に任ずるという意味だ――第七皇子討伐のための軍の。

第一皇子はみずからの剣を騎士に預け、皇帝の前に跪拝した。

「立て、沃野王」

無言で、第一皇子は立ち上がった。

生き写しとは以前からいわれていることだが、今日の彼は、父親と似通った部分がひときわ目立っていた。黄金の巻き毛の下から皇帝を見上げるその眼は、厳しい。何者をも許容しない眼差しだ。

――あの頃の皇帝と、そっくりだ。

沙漠越えの頃――まだ若く、生き延びるために祖国を捨て、沙漠の都市を蹂躙することを選んだ、あの男と。覚悟の決まった顔なのだ、とヤエトは思った。少なくとも今このとき、第一皇子はすべてを引き受ける決意をしたはずだ。未来に残すのは、兄弟と争ったという悪名となるだろうか。それと

も、分裂しかけた真帝国を建て直した、英雄としての評価か。どちらにせよ、彼は選んだ。

「取るがよい」

皇帝はすでに剣把を握ってはいなかった。上向けた両のてのひらに剣を載せ、第一皇子に差し出していた。

一瞬の間があり、第一皇子は剣を握った。彼はその剣を両手で握り、胸の前に立てると、くるりとふり向いた。そして貴族たちに向かって、宣誓した。

「不埒な叛逆者を倒し、ともに勝利する日まで、この剣が鞘の中で安息を得ることはないと誓おう。ともに、勝利を摑まん！」

またしても広間の空気が沸き立つのを感じ、ヤエトは自分の体力に不安を覚えた。このまま、少しずつ削り取られてしまうのではないか。

皇帝が、手を挙げた。

「平和の年ではない。だが約束しよう。勝利の年だ！」

一瞬の静寂の後、わっと歓声があがった。今までに倍する興奮の渦に叩き込まれ、ヤエトは激流に翻弄される舟になった気分である。それも、さざ波ひとつで転覆しかねない、葉っぱの舟だ。

不意に、袖に重みを感じて見下ろすと、皇女と視線が合った。

「大丈夫か。真っ青だ」

「今は、それどころではありません。わたしのことなど、ご放念を」

「ジェイサルド、おまえの主人をどこか安全な場所で休ませろ。伝達官も連れて行け」
「ご配慮、かたじけのう存じます」
本人の意向を無視して話し合いは決着した。ヤエトの体調のこととなると、誰も彼もが意気投合し過ぎなのではないか。
――いっそ、もっと有名になってしまえばよいのか。
呪われた芝居が、国中の誰も知らぬ者はないほどになり、誰もが尚書卿のお身体が大事という理由で仲良くなってくれれば、戦など起きずに済むのではないか――そんな馬鹿なことを考えているあいだに、ヤエトは広間から連れ出されてしまった。

3

宣戦布告したも同然の状態で皇宮を去った第七皇子だったが、即座に戦闘開始となったわけではなかった。
皇帝側はまず、第七皇子に味方する貴族の邸を鎖し、門地を没収した。それぞれの領地と都を結ぶ道には、伝達官を通じて即時に指令をはなち、物資や人員の移動を禁じた。
帝国が道の整備に力を入れるのは、しっかりした道があれば、裏道が発達しづらいからだと聞いたことがある。物資を運ぶために必要不可欠な馬車は、舗装された道なら高速に行き来ができるが、悪

路では話が変わる。車輪がはまりこみ、脱輪し、果ては道幅がたりずに通行不能などという場合もある。帝国の兵が迅速に行動するための駅逓制は、同時に、帝国にとって不都合な者の通行を制限するための制度でもあるのだ。

これで、第七皇子の手勢は容易には移動がかなわなくなり、糧秣の輸送も困難になったわけだ。第七皇子側も、その程度のことは計算済みのはずだ。手勢の多くを占めるのは、金品で雇われたと噂される海賊王たちである。略奪はお手のもので、当然、物資は現地調達で、と考えているだろう。皇帝側は、沿岸の拠点防衛のために、戦力を分散せざるを得ない。

いつ、どこで実際に戦が始まるのかは、ヤエトが予測できるような問題ではなかった。

「河が自由に往来できるのでは、街道封鎖の意義も薄い」

言葉を発したのは、北方の公子レイランドである。木材の売買に河を使っていたようだから、水運を重視するのは自然な発想だろう。

相づちを打つべきか、ヤエトが判断しかねていると、レイランドは勝手に言葉をつづけた。

「ア＝ヴルスの力を使えば、あの軍船を一掃することも容易なのに」

かれらが立っているのは、いくつもの尖塔を擁する皇宮の中でも、第二位の高さを誇る塔の屋上である。大河に並んだ船団がはっきり見える状況であれば、そんな感想が漏れるのも、やはり自然なことなのだろう。

だが、ヤエトにとっては、あまり気分のよいものではなかった。

北方の現人神、ル＝シル・ル＝ウル・ア＝ヴルスは、レイランド公子の妹である。ヤエトが北方で出会ったその少女は、異能の力を疎まれて家族に見捨てられ、隔離され、名を呼ばれることすらはばかられる存在となっていた。

放っておいた妹を、自分の都合よく利用しようとする発案に、好意を抱けるはずもない。

「どうでしょうか。ア＝ヴルスの力は、北方に属するものにのみ強くはたらくと聞いていますが」

「大河の大河たるゆえんは、すべての河川がこの一本に集まるからだろう。北方からも、ここに流れ込む河がある。その水量を増やし、怒濤の勢いで川筋をくだらせれば――」

「その程度、呑み込んでしまうでしょうね」

対岸が霞んで見えるほどの大河である。指摘するまでもなく、自明のことだろうと思うのだが、レイランドは納得しなかった。

「水妖を使えば、逆巻く波をもって軍船を沈めることもできるだろう」

「距離があって小さく見えますが、かなり大きな船ですよ。あれが沈むような波が来れば、都も沈みます。こちらの被害も甚大だ」

「そなたは水妖の力を知らぬのだ。あれしきの船、雑作もない。それに、襲う相手は選ばせる。狙わぬ相手には飛沫ひとつもかけずに済ます」

「なるほど、北方で命じられた水妖が、河をくだってここに来るのはともかく、船はどうやって指定するのです。大河のどこにどんな船が浮かんでいるか、あなたの妹姫には、わかるのですか。それに、

さすがに北方からここまで、命令が通るとも思えませんが……」

たしかに北方では、ア＝ヴルスたるルシルは無敵であろう。だが、はるかに距離をへだてた南方の都にまで、その支配力が及ぶとも思えない。それが可能であれば、北方はとうに一帯を征服し、栄華を享受する一時代を画していたであろう。だが、そんな伝承は存在しない。

レイランドは不服そうに口を歪めただけで、反論をつづけることはなかった。

不服といえば、ここにこうしてヤエトといること自体、公子の望むところではないだろう。

レイランドは武器の扱いにそれなりに自信があるらしいし、皇女にいいところを見せたいとも思っているはずだ。帝国貴族の世界がそうであるように、北方諸侯のあいだでも、男子が戦に参加しないのは恥とされても、おかしくはない。公子は客の立場であるから、主の危機を見過ごすのも礼儀に反する、といったところか。

だが、客扱いは表向きのことに過ぎない。彼の本来の役割は、人質である。

公子の身に万一のことがあれば、セルクの首が危ないのだ。セルクが北方で害されれば、即刻、戦になる。積年の恨みがある上に、先年の襲撃で双方が痛手を負ったばかりだ。互いに、相手を許せない理由があり、復讐の火を熾すのは容易過ぎる状況である。死力を尽くした殲滅戦になるだろう。

絶対に、回避せねばならない。

というわけで、レイランドは病弱なヤエトのお守りをするという名目で、城に残されている。それくらいの体裁はととのえてやろう、という配慮だ。

公子もその程度の理屈はわかっているだろうが、この隠居さえいなければ――ということも、どうしても思ってしまうらしい。

――ま、若いということだな。

さほど若くないヤエトの方はといえば、あちこち出歩かなくて済むのは助かるな、と思える程度に怠惰である。顔をつきあわせて楽しい相手ではないのはお互い様として、どうせ一緒にいなければならないのだから、過ごしやすくしたいものだ……とも思っている。

過ごしやすくしたいから、こうして見晴らしのよい場所へ連れ出してやったりもしているのだ。でなければ、こんな高いところに誰が好んで上るものか。そもそも、上ったらかならず下りねばならないのである。……帰りのことを考えると、膝から力が抜けそうだ。

帰路の苦難から気を逸らすためにも、ヤエトは戦の話をつづけることにした。

「公子は、船での戦のご経験がおありなのですか」

「あるといえば、ある」

――ないといえば、ない。

勝手に頭の中で表現を置き換えて、ヤエトは話をつづけた。

「敵は百戦錬磨の海賊どもと聞き及びます。公子が軍を率いるお立場であれば、どのように戦を？」

レイランドはわずかに目をほそめ、無言になった。

水妖とやらが軍船を襲う光景を想像しているのかもしれない。

ややあって、レイランドはひとつ、息を吐いた。
「軍を率いる立場に立つことなど、ないでしょう。先ほど申し上げたことは、ご放念ください」
ヤエトは唖然とした。
いましがた、なにやら勇ましい台詞を吐いたばかりではなかったか。内容ばかりか、言葉遣いまで急に馬鹿丁寧になって、気もちが悪い。どうしたんだ、と思う間もなく、殿、と背後から声をかけられた。ジェイサルドだ。
「伝達官殿が」
皇女の伝達官は側に控えているし、直接ヤエトに声をかけるはずだ。となると、他の竜種が伝達官を寄越したに違いない。誰の伝達官だ、と思いながらヤエトはふり向いた。
なんとなく見覚えがあるような、ないような、黒衣に紫の肩衣をつけた伝達官が、階段を上りきらない位置に立っていた。ヤエトが見守る内に、伝達官は残りの段を上がりきった。そのままこちらに歩いて来るあいだに、伝達官はすっかり見知った外貌に変わっていた——皇帝である。
——暇なのか！
そんなはずないだろうと思ったが、戦の指揮は第一皇子の仕事である。意外と、皇帝は暇なのかもしれない。少なくとも、表向きはそうでないと皇子の面子が立たない。
皇帝の手元で音がしたと思うと、右手に扇が開いていた。伝達官が竜種の意を体現するときに、もちいる小道具である。その扇はヤエトの眼に、不吉の前触れのように映った。

「陛下の御意を賜って参りました」
語る声がすでに皇帝のものなのだが、そう聞こえるのは、おそらくヤエトだけだろう。
ともあれ、宣言されたらもう相手を皇帝と同じに扱うしかない。ヤエトは一礼し、ちらとレイランドの様子を窺った。公子はヤエトと同じように頭を下げている。
公的には皇帝の寵臣で、帯剣も直言も許されているヤエトと、蛮族から預かった人質の態度が同じではまずいので、ヤエトは後ろにまわした手を動かし、レイランドが察してくれるのを祈った。
幸い、公子は頭が悪いわけではないらしく、ゆっくりとではあるが、跪拝する姿勢をとった。
「そちらは？」
「北方諸侯領より、北嶺王がお預かりしている客人の、レイランド公子です」
「ほう」
ヤエトはレイランドの方に向き直った。異邦人の公子に現状を認識させるなら、今しかない。
「公子、こちらは皇帝陛下の伝達官にあらせられる。帝国の風に慣れない身ではわかりづらいだろうが、陛下ご自身がこちらにおいでになると考えなさい。ご挨拶を」
わずかに顔を上げかけたが、レイランドは堪えた。そのまま、さらに頭をたれる。
「北方より参りました、レイランドと申します」
伝達官は、鷹揚にうなずいた。
「直言を許します。公子レイランド、北嶺王より話は聞いています。見聞を広めるために、同行を願

い出たとか」
「はい」
「このようなことになっては、自由に見聞きすることもかないませんね。残念に思います」
皇帝の声なのに、喋りかたは妙に丁寧で、気もちが悪い。そんな風に認識しているのはヤエトだけなのだろうが、さっきのレイランドより、はるかに……怖い。
そもそも、こんな事態にしたのは、息子に喧嘩を売った皇帝ではないか。残念だなどとほざく資格があるのかをヤエトが判断していいなら、黙れといって階段から突き落としたいところだ。
それができたら気もちがいいだろうなと想像を進めていると、なぜかルーギンの爽やかな笑顔が脳裏に浮かび、そんなことをしたら突き指どころか、反動で先生が屋上から落ちますよ、やめておいた方がいいんじゃないかな、という声まで聞こえてきた。
自分の想像力が具体的過ぎて怖い。
「ここまで来ること自体が、得がたい機会ですので」
「……聞いたところによれば、北方の者が南方に来るには、追放される必要があるとか」
ヤエトは眼をしばたたき、レイランドを見た。レイランドはまだ姿勢を崩さず、深く俯いたままだった。風が彼の髪を吹き散らしている。
ゆっくりと、伝達官がその前へ進み出た。ヤエトは横に退いて、場所を空けざるを得ない。
レイランドの前で、伝達官はぱちりと扇を閉じ、その先で彼の頭を突いた。

「面を上げよ」
レイランドは動かない。低い声で、ヤエトは叱責した。
「公子、仰せのようになさい」
「……失礼ながら、申し上げます」
低い声で語りつつ、ゆっくりと、レイランドは顔を上げた。表情は、静かだ。
その鼻先を通り過ぎて、扇は公子の顎をとらえた。さらに顔を上向かせ、伝達官は命じた。
「話すがよい」
わずかに声が強く、厳しくなっている。怒っている……というわけではあるまい。
「我ら北方の者にとって、南方は呪われた地。悪神の血により穢れた、不浄の土地です。追放されねばならぬというのは、そこから来た話でしょう」
失礼きわまりない内容を、レイランドは顔色も変えずにいってのけた。胆力があるのか、自分がやっていることの意味がわかっていないのか。
「して、そなたの眼には、どう映るのか」
伝達官は扇を動かさない。レイランドの顎を上げさせたままだ。公子はそれを払い除けようとはしなかった。
――慣れているのではないか。
ふと、そんなことを感じた。あのルス公ならば、人を人とも思わぬ扱いをするだろう。ルシルへの

仕打ちは、とても許せるものではなかった。

——ルシルだけでは、なかったのかもしれない。

うまく生き延びるための如才なさを身につけてはいても、レイランドも根本のところで傷つけられているのではないか、とヤエトは思った。自分は傷つけられて当然の存在である、という諦めを抱いていたとしても、おかしくはない。

無駄に逆らわず、相手を刺激しないようにつとめるのは、彼にとって自然な態度なのだろう。そこに権威を感じたときは、とくに。厳しい内容を口にしながら、態度を抑制することで、本人にとっては均衡がとれるのだろう。相手を試してもいるに違いない。

伝達官もまた、姿勢と表情のどちらも崩すことなく、静かに言葉をつづけた。

「伝え聞くところと比べて、如何か。己が眼で見たこの土地は、やはり、不浄の地か」

暫し、その場に沈黙がおりた。今日も風は強いが、風向きの関係か、新年祭の日ほど寒くはない。それでも、佇立しているだけでは血がまわらず、指先から冷たくなっていく。

おそれながらと割って入りたいところだったが、ヤエトは黙ってその場を見守った。

見聞を広めることができるような状況ではないと、まさに皇帝自身が伝達官の口を借りて告げたばかりである。そこを突けば、相手の理屈に不備があることは指摘できる——が、正しいからといって勝てるとは限らないし、勝つことが正しいとも限らない。

皇帝がレイランドに求めているのは、その人物をあらわすことだ。何者か、を語ることだ。

かすかに息を吸ってから、レイランドは答えた。

「我がルス公領は、永く北方の盾を自負して参りました。邪悪な魔王から同胞を守る壁であることに、迷いはありませんでした。ですが、北嶺で日を過ごす内に、それは間違いだったのではないかと思うようになりました。我らは外の世界を見もせず、聞きもせずに過ごし、それで善しとして来た。拒否し、隔てた。ふれればこの手が腐り落ちるとでもいわんばかりに。知ろうとすることすら、せずに来た歳月は、あやまちではなかったのか。都への同道を許されたとき、わたしは希望を抱いていました。世界は我々が思うよりも、ずっと美しいのではないか、と――」

そこで、レイランドは言葉を切った。

顎を扇よりも高く上げ、視線もまっすぐに伝達官に向けて、断言した。

「――希望は裏切られました。やはり、ここは不浄の地でした」

伝達官は、わずかに眉を上げた。ヤエトに視えているのは、皇帝の顔である。とくに不快げでもなく、さりとておもしろがっているとも思えない。誰かに似ていると考えて、思いあたったのは、第二皇子だった。顔立ちよりも、表情のなさが似ているのだ。

表情と口調の抑制を崩さず、伝達官は質した。

「不浄とは」

「悪神の力が、地に満ちております。いいえ、地だけではありません。水も、風も、すべてに悪神の呪いを感じます」

「呪いか」
「滅びるがよい、と」
はじめて、伝達官の表情が動いた。口もとに、笑みが浮かんだのだ。
「そうか。さほどに神は地上を憎んでおるか」
その言葉は、妙に深く響いた。つい最近、こんな口調で皇帝が喋るのを聞いたばかりだ、とヤエトは思った。
――第七皇子に対してだ。
滅ぼすつもりか、と問うたあのときも、やはり皇帝はこうではなかったか。
――滅ぼされたいのか？
まさかと思いながら皇帝の横顔を視ていると、その顔がくるりとヤエトの方を向いた。まともに視線が合ってしまった上に、相手が今度こそはっきり笑顔に、それも嫌な感じの表情になったので、ヤエトは視線のやり場に困った。今さら逸らすわけにもいかず、そのまま見返していると、皇帝の姿をした伝達官が、口を開いた。
「尚書卿、そなたはどちらが正しいと思う。この古い土地に根付く神は、この地上を呪っていると申す、この者と。いや、神はこの地上を愛していると申す者と」
「……まことに申し訳ありませんが、わたしごときには、それを判断するだけの知見が不足しているとしかお答えのしようがございません」

「かまわぬ。そなたの知見とやらの及ぶ限りで答えよ」
今度はヤエトがなにか披露する番だと思われているようだ。芸人ではないのだから勘弁してほしいところだが、命じられてしまっては、逃げ場もない。
「北方では悪神と呼ばれる神は、当地では黒の御子、あるいは闇の御子と呼ばれると仄聞（そくぶん）します。どちらにせよ、明るいものを連想させる名ではありません。ですから、あまり人にとって喜ばしい神ではないのかもしれません――ですが、呪いであれ愛であれ、そういったものが存在するならば、その神はずいぶんと、人に近いものなのではないかと思います」
「人に近い、とは？」
「神と人とを隔てる第一のもの、それは力であろうと思います。人にはふるい得ない、まさに人外の力。それが神を神たらしめるのです。力自体に善悪はなく、是非もありません。それを人が見聞きし、感じ、尊貴なものと思うか、遠ざけるべきと思うか――自分たちを利するものであるか、害するものであるか、それ次第で判断するだけなのではないか。そうは、お思いになりませんか」
伝達官は、尊大にうなずいた。
「力に善悪是非はない。利害はある。それは神であろうとなかろうと、大差ない話だ」
「御意に存じます。竜種の力をお使いにならずとも、陛下が陛下であらせられる、それだけでそこに力はある。そしてそれを尊べば順良なる帝国臣民になり、尊ばなければ叛逆者への道を辿る」
「神もまた、とらえかた次第ということか」

「ご賢察、畏れ入ります。あらためて申し上げるまでもないかとは存じますが、しかれども神は神、力の量はもちろん、質においても、人を凌駕（りょうが）するに違いありません。人のことわりで善と呼び、悪と呼ぶ。そのどちらであれ、呼び名が生じるということは、かかわりが生じているということに同じ。すなわち、なかったものとして存在を無視することはできません。そして、そのかかわりから類推される神の特徴が、先ほど申し上げたことなのです――人に近い、情というものをそなえている、と」

暫し、沈黙がおりた。

伝達官の上に宿っていた皇帝の姿が揺らぎ、そして消えた。

ぱちんと音がして、伝達官が扇をあらためて閉じ直したのだと気づいた。

「始まりました。陛下より御用を承りましたので、これにて失礼」

なにが始まったのかと問い直すより早く、伝達官は姿を消した。まだ跪いたままのレイランドと顔を見合わせていると、袖が重くなった。

見下ろせば、長い袖を引いていたのは、皇女の伝達官だった。

「戦が、始まりました」

ふたたび、レイランドとヤエトは顔を見合わせた。どうしよう、と互いの顔に書いてある。始まったといわれても、では自分たちはなにをすればよいのか、わからない。ふたりとも、戦で果たすべき役割がないからだ。

沙漠越えでさんざん戦闘を経験したヤエトでさえ、輸送が主任務の部隊と同行していたから、仕事

といえば、ひたすら荷物の管理である。少なくとも今ここでは必要なさそうだ。

――なにか仕事がある方が、気は楽になるのだが。

隠居と人質という組み合わせでは、隠居と未亡人より動きづらい。これが皇妹なら、皆が忙しくしているあいだに楽しいことをやっちゃいましょうよ、と駆け出す気がするが、レイランドでは無理だ。そんな気性かどうかという問題以前に、自由に動けないからだ。よほど混乱が進めばともかく、今は皇宮の敷地から出ることすら、レイランドを帯同していては不可能である。

「場所は」

ヤエトの問いに、伝達官は答えた。

「中州の砦です」

先年、第三皇子が一時配流された場所だ。この塔からも見えるはずだ、と思い当たるより、ジェイサルドが動く方が速かった。

「ジェイサルド、様子はどうだ」

「いささか距離がございますので、仔細にはわかりかねます……船に囲まれているということしか」

戦場は選ぶ物だ、とルーギンに聞いたことがある。なりゆきで剣を交えるなど、論外である。いつ、どこで戦うかを選べないようでは、敗北を覚悟するしかない。

となると、今回の戦場を選んだのは第七皇子側である可能性が高い。水戦を得意とする海賊王たちを配下に引き入れ、軍船をつらねて大河を遡上（そじょう）して来たのだから。

「橋はどうなっている」

中州の砦からは、大河の両岸にのびる長い橋が架かっているはずだ。南方人の手による、石造の橋である。ここを真帝国の都にさだめてから、補修工事をおこない、街道と同様の扱いになっているはずだ。そのあたりは、第三皇子が配流されたときに、書類を眺めて確認した。

「……かなり煙が上がっています。落とされているかもしれません」

すると、都からの増援は難しい——ここまで考えて気がついた。

「……鳥なら」

皇女ならすぐさま考えつきそうなことだった。橋が落ちても、鳥なら行ける。思いつくと同時に、ヤエトは屋上の端へ足早に近づいていた。ジェイサルドが見ていた方角へ、視線をやる。

——いた。

黒い影が、上空を旋回している。六羽だ。この距離で見えるのだから、北嶺の巨鳥たちと考えて間違いない。六羽も送り出しておいて、皇女が自分だけ皇宮に残るはずがない。絶対、あの中の一羽に皇女が騎乗している。

ジェイサルドの言葉通り、煙が上がっている。船に隔てられ、橋はもちろん、砦を直接見ることもできなかった。中州の砦には、あまり高い塔がないのだ。煙がどこから上がっているのかも、ここからでは判断できなかった。火をかけられているのかもしれない。あるいは砦側が、火矢で応戦しているのかもしれないが——。

「あんなところに姫を行かせたのか！」
いつの間にか隣に並んでいたレイランドが、叱責するように声をあげた。
「誰も行かせてはいないでしょう」
第一皇子の命令を受けてはいるかもしれないが、ふだん鳥を使わない人間が、その発想にすんなり至るはずがない。つまり、皇女から申し出たと——自分から行ったのだと考えるべきだ。
「出撃する、と」
ふり返ると、伝達官がすぐ後ろまで近寄って来ていた。
——この人が元気なら、皇女も元気ということだ。
不意に、そんなことを思った。
伝達官の死が竜種に大きな衝撃をもたらすのであれば、逆もまた同じだろう。いや、それ以上かもしれない。だから、彼女が無事に、いつものように無表情に立っている限り、皇女は無事なのだ。
「王ご自身が？」
「はい」
「落ちる！」
レイランドの叫びにふり返ると、一羽が急降下しているのが見えた。
「……大丈夫です、あれは」
動きを見れば、わかる。落鳥ではない、意図的に高度を落としているのだ。見る間にその鳥はふた

たび高度を上げて、矢の届かない上空での旋回飛行に戻った。
——物資の運搬でもしているのだろうか？
むしろ敵船めがけて糞でも落としてやる方が、士気低下に繋がってよいのではないか、とあまり美しくない想像をしていると、レイランドがふたたび声をあげた。
「今度は二羽だ！」
「一羽は砦に入るようです」
ジェイサルドが指摘した。たしかに、一羽はそのまま降りたようだ。もう一羽は、すぐに高度を戻した。低く飛んで、囮をつとめたのだろう。
「……なにか運んだのだろうか？」
氷以外の、もっと確実に届けねばならないものがあった、としか思えない。
——まさか。
「王から、ほかにご伝言は」
伝達官に視線を戻すと、彼女は少し固い表情を見せた。
「うまくやるから、信じて待て、と」
——あの、じゃじゃ馬！
さすがに皇女に禿げろという呪いをかけるのは気の毒に思ったので、ヤエトはそれ以外の言葉を探した。とっさのときに困らぬよう、罵倒のための語彙は、もう少し補充しておいた方がよさそうだ。



「どういうことだ」
レイランドが伝達官に食ってかかりかけたが、警護の騎士が即座に割って入った。
「お静まりを」
「答えろ、どういうことなんだ！」
伝達官は無言である。動じた様子すらない。
ジェイサルドはといえば、気を変えたレイランドがヤエトに摑みかからないよう、ふたりのあいだに移動している。深呼吸をひとつしてから、ヤエトは伝達官に尋ねた。
「なぜ、王が行かれたのです」
「見捨てないと、お示しになるためです」
「あの砦を？」
「はい」
ヤエトは視線を河に戻した。
少し前まで、存在すら曖昧にしか知らなかった場所だが、ひと通りは調べたから、今ではだいたいの規模はわかっている。中州といっても面積は広い。常駐する将兵の数は六百名、戦時とあって増員されているかもしれないが、それでも千名いるかどうか。
上陸したければ、対岸は空いている——流血の女王、ジャヤヴァーラの都の跡があるため、住み着こうなどという奇特な者はいない。もちろん、略奪するものもなにもないから、守備隊もいない。

――中州の砦に、なにか意義があるのか？

「しかし、陸からの攻撃では、あの船団にさほど痛手は与えられないだろう」

レイランドが口を挟んで来た。ヤエトがジェイサルドを見ると、老騎士が代わりに答えた。

「いかにも。だからこそ、あそこを陥落させたいのでしょうな。初手として、都まわりの水上を完全に支配する心づもりなのでしょう。補給物資の略奪も見込んでいるはず」

レイランドは眉根を寄せた。

「なんとかできないのか」

「王のご決断です」

ほとんど諦めの境地で答えたヤエトに、レイランドはさらに語調を荒げた。

「隠居がとやかく口を挟むものではない、とでも思っていそうだな。だが、尚書卿は姫君の副官ではないのか！　なにかあれば、身を挺してでも止めるべきだろう！」

「お説の通り。ですが、お止めできる段階は過ぎてしまったようですね」

こうなってしまった以上、皇女は戻って来ないだろう。こうなる前に説得の時間が貰えたとしても、皇女の決意をひるがえさせることができたとは、あまり思えない。

最近、皇女には、いらない知恵がついて来たのではないか。無茶をやるときほど、ヤエトに止めさせる隙を与えない傾向があるようだ。つまり、無茶をやっていることは自覚しているはずだから、それなりに気をつけてはくれるだろう……とは思うのだが。

それにしても、今回はまた、ひときわ危機的な状況である——第四皇子の扉の前で頑張った経験で懲りただろうと思っていたが、間違いだったようだ。皇女の辞書には、懲りるという言葉は載っていないに違いない。不良品だ。交換したい。

「だが、あのままでは……あれでは、姫君は……無駄死にになってしまう」

「不祥を口にするのは、おやめなさい」

「……失礼」

公子も動揺しているのだろうが、ヤエトにも、あまり余裕はない。

——ただの戦略上の拠点ではないのかもしれない。

昨今、彼を襲うさまざまな奇想天外なできごとから考えると、これだけ古く、巨大な都の近くにあるあの砦に、なにか呪的な意味があっても、おかしくはない気がする。

ジェイサルドの出自は南方王国ではなく、長く悪名をとどろかせていたのは沙漠でのことだ。彼が知らなくても不思議はない。レイランドもまた、とくに思い当たるところはなさそうだ。先ほどからの発言から察するに、ただの砦という認識でしかないだろう。

ヤエトは伝達官を見た。見返す眸は静かである。

——皇女は無事だ。

それだけは、確実なのだ。少なくとも今は、という注釈は必要であるにせよ。

ヤエトは大きく息を吐いて、気もちを切り替えた。

「王になにかあれば、すぐにわかると思っていて大丈夫ですね、伝達官殿」
「はい」
「わかりました。せっかく王が開戦を伝えてくださったのです、なすべきことを終わらせてしまいましょう。ジェイサルド、公子の安全の確保を。大河での戦闘を陽動にして、城内でなんらかの作戦が始まっている可能性もある。城内が不穏であれば、わたしの邸へ移れるよう、準備を」
「心得ました」
「公子には、すぐ、お部屋にお戻りいただきます」
「しかし――」
「ここから眺めていても、戦の趨勢（すうせい）の詳細はわかりません。下にいた方が、報せが届きやすい。わたしは迎えが来るまでここで待ちます。脱出路が空しかないといった事態に陥っていた場合、下った階段をまた上るのは、隠居の身には堪えるのでね。では公子、また後ほど」
だが、レイランドは動かなかった。そればかりか、とんでもないことをぬかした。
「……わたしを、始末するわけではあるまいな」
「まさか。公子は北嶺王よりお預かりした、大事な客人。無事にお返しするのが、わたしのつとめです。命を守る理由は百もありますが、失わせてもよい理由はありませんね。そもそも、そこから突き落とせば済むものを、わざわざご自分の足で下りていただく必要もないでしょう。公子の命を狙う輩が、戦に紛れてどうこうしようと画策することを恐れているのみで、他意はありません」

虫が好かないというだけで、死なせるわけにはいかないのだ。
ヤエトの言葉をどう受け取ったのか、レイランドは中州の方を指さして叫んだ。
「尚書卿は、なんとも思わないのか。姫君が、あんな危険なところへ行かれているのだぞ！」
――そういうことか。
レイランドは、見ていたいのだ。どうにもならないと知ってはいても、せめて、見ていたいのだ。皇女が戦っている場所を。
ヤエトは視線を高空へ流した。自分とレイランドの気を落ち着けるためでもあったが、同時に、彼に戦場を見る時間を与えてやるためでもあった。ほんのわずかでも。
「思っているつもりです、いろいろと。公子――あなただって、ご存じでしょう。戦は最前線でだけ起きるものではない。後方で待ち、祈ることしかできぬ者にもまた、戦はあるのです。先年、あなたの一族が北嶺を襲撃したとき、あなたはなにをなさっていたのです？」
「……わたしは、出撃に反対したのだ」
その答えを予想していたような、そうでもないような、微妙な気分でヤエトは聞いた。
かなりの死者が出た戦の後だというのに、無傷の若者がいるのは、奇妙なことだとは思っていた。必要があるまで、詮索することもないだろう、と。それでも、いくつか考えた可能性の中に、レイランドは主戦派に属していなかったのではないか、というものはあった。
戦いたくないなら、おまえが人質になれ、などという流れで北嶺へ来ることになったのだとしても、

おかしくはない。敗戦でレイランドの地位が上昇していれば別だが、ルス公はその座を譲る気など微塵もなかったのだから。

「囚われてでもいたのですか」

「そうだ。わたしと、親しい友が、……残された」

セルクと双六で遊んでいた若者たちが、その親しい友とやらなのかもしれない。

「なるほど。やはり、あなたはご存じのはず。敵の手が届かないことの安全と安心は、味方になにもしてやれぬ歯痒さや罪悪感と、表裏一体。わたしたちはそれと戦い、そして、できることを探すしかない。今のあなたにできることは、無事に生き延びる、それだけです」

公子はくちびるを噛み、さっと顔をそむけると、騎士たちとともに階段を下りて行った。

少し待ってから、ヤエトはジェイサルドに声をかけた。

「ほかの騎士も下がらせてくれ。人払いがしたい」

老騎士が目線だけで部下を自在に動かし、命令を果たしたことを確認してから、ヤエトは伝達官に向き直った。

「さて、なにかご存じではありませんか。王がみずから、あそこに行かれた理由を」

「ですから、見捨てぬと」

「絶対に見捨てぬ態度を示すのは重要ですが、竜種ひとりの命を賭けるほどのものですか。なにか、あるのでしょう、あの場所に」

伝達官の視線が揺れた。
もうひと押し、とヤエトは彼女の手を握り、声を強めた。
「わかっていれば、効果的に援助することができます。あなたの目や耳には、もう、あの場所の様子が伝わっているはずだ。煙にまかれて喉が痛むと錯覚したりはしないのですか。たとえ幻でも、煤が手についたと感じはしませんか」
ゆっくり、伝達官は息を吐いた。
「今は、姫様と、繋がっていませんから」
「今はね」
「お言葉は賜っています。もし、尚書卿がご心配なさったら」
「もし？」
思わず、訊き返してしまった。あの小娘は、自分をなんだと思っているのだ。かなり口調がきつかったのだろう、伝達官は一瞬、口ごもった。それから、実に珍しいことに、微笑を浮かべた。
「賜ったお言葉の通りに、お伝えします――もし、尚書卿が心配するようなら、こう伝えよ。一の兄上も、陛下も、中州の砦が落ちれば皇宮が落ちるのも同然とお考えだ。それゆえ、味方の援護が途絶えることはない、案ずるな」
伝達官は、皇女の口ぶりまで真似た。少なからずおどろかされたのは事実だが、うっかりごまかされるわけにもいかない。ヤエトは質問をつづけた。

「皇宮が落ちるのと同じ？」
なにかの勘違いではないかと思ったが、伝達官は、うなずいた。
「はい。皇宮が落ちるのと同じ――姫様は、そう仰せでした」
「どういうことです。ほかに、なにかご存じではないのですか」
「言葉にはできないのです、尚書卿。恩寵の力でならやりとりを許されていますが、声にすることはできません」
ヤエトはジェイサルドを見た。
「おまえも、なにも知らないのだね？」
「は……申しわけありません」
「いや、気にするな。今はよい」
どうせ期待はしていない。ジェイサルドが拷問しますかと提案しないように、機先を制しただけだ。伝達官のこの口ぶりだと、たとえ痛めつけられても言葉にはしないだろう。いや、しないのではない。彼女の言葉通り、不可能であるに違いない。
――いったい、なにがあるんだ。
ふたたび、ヤエトは砦の方を見た。今も、黒い影がいくつか、上空を旋回している――少なくとも、脱出の手段はあるのだと、ヤエトは波立つ心を宥めるしかなかった。

4

皇妹に面会を求めてすぐ、本人がやって来たのにはおどろいた。多忙をきわめているだろうと思ったのだ――彼女ほどの恩寵の力の持ち主ともなれば、放っておかれるはずがないからだ。

――むしろ、予測すべきだったな。

どうも忘れがちなのだが、皇妹は実に気軽に動く。思い返してみれば、初対面のときもそうだったではないか。あんな僻地にやって来たのは、皇妹が皇妹だからだ。おそらく、性分なのだろう。

忙しいかどうかなど、彼女にとっては問題ではないと、わかっておくべきだった。

「わざわざお運びいただくまでもございませんでしたのに……」

立ち上がって出迎えたヤエトに、皇妹は笑顔を向けた。

「いいのよ、わたしが来たかったの。こうして話すのは久しぶりね、尚書卿。思っていたよりお元気そうで、なによりだわ」

彼女が来ただけで、室内の空気も一変した。それまでは、どこか陰鬱な雰囲気がただよっていたのに、曇り空から太陽が顔を出したかのようである。うまく説明できないが、とにかく違う。

それにしても、思っていたよりとは、どういう意味か。もっと死にかけていた方が適切なのか。

「いつぞやは、ご心配をおかけしてしまうこととなり……」

不可抗力だったとはいえ、第二皇子と皇妹の前から、つまりふたりの竜種の庇護下、あるいは統制下から、忽然と消え失せてしまったのである。ここまで正式に謝罪を申し出る機会もなかったが、皇妹はぞんざいに手をふって、その話題を終わらせた。

「心配はしたけれど、そこまでもなかったわ。ジェイサルドが一緒だったし。そちらが噂の北方の公子かしら。紹介してくださらない？」

ヤエトはあわててレイランドを手招きした。水を向けられてから紹介するという、いかにも不調法な流れになってしまったが、そういえば初対面のはずだ。

「これは失礼。あちらは北方ルス公家の公子、レイランド殿です」

返事がないのでふり返ると、レイランドは壁際に立ったまま動いていなかった。

口がぽかんと空いている。

――無理もないか。

戦時なので、皇妹のいでたちは、いつもほど華美ではない。装飾品も控えめだし、ひらひらとした布の量もかなり少ないのだが……却って、ヤエトより何歳か上だというのは嘘ではないのかと問い詰めたくなるようなその美貌が、非常にわかりやすくなっているのだ。

十人や二十人の敵なら、眸ひとつで足止めできそうなほどだ。

「公子、こちらは皇妹殿下にあらせられる」

低く声をかけると、レイランドははっとして進み出た。

「ご無礼を……」
跪拝したレイランドを見下ろして、皇妹はあっさりと告げた。
「はるばる来たのに、窮屈な思いをさせることになってしまいましたね。残念だわ。さらに残念なお願いなのだけれど、わたしは尚書卿とお話があるの」
そのまま視線を上げ、ちらと騎士たちを見る。ヤエトは急いで命じた。
「わかりました。人払いを」
公子もろとも移動する騎士たちを見送りながら、皇妹はさりげなく告げた。
「ジェイサルド、おまえも行きなさい」
「それは――」
「心配しないで。尚書卿を殺したり傷つけたりは、絶対にしないわ」
これには、ヤエトも黙っていることができなかった。
「……そう宣言されると、むしろ怖いことが起きそうで嫌なのですが」
「そういう種類の怖いことなら、外で起きているわよ。戦争がね」
「殿」
ヤエトの判断を待つ老騎士に、彼はうなずいて見せた。
「仰せの通りにしてくれ」
退室するジェイサルドにはもう視線もくれず、皇妹はヤエトの背後に語りかけた。

「おまえはここにいるつもり？」
「いてもらうつもりです」
問われたのは皇女の伝達官だが、答えたのはヤエトである。
「伝達官なんて、いてもなんの役にも立たないのよ？　わたしがその気になれば」
「おっしゃる通りであることには、なんら疑義をさし挟み得ません」
「だったら――」
「ですが、理由もなく無体なことをなさるかたでもないでしょう。皇女殿下よりお預かりしている伝達官に無理を押し通されるよりは、その前に、伝達官の退席を強くお求めになるはずです」
皇妹はわずかに眼をほそめ、笑みを深めた。
「おもしろい男ね、やはり」
「それはどうでしょう、おもしろみのない人間であるという評価を受けることの方が多くて」
「ああ、そんな評価をくだす人間の方こそ、つまらないに決まっているじゃないの。おもしろくない、なんて言葉は、ただの自己紹介よ」
笑いながら、皇妹は椅子に腰かけた。伝達官の同席について云々するのは、終わったらしい。
やれやれ、と胸を撫で下ろしつつ、ヤエトも椅子に落ち着いた。今日の皇妹は、あまり竜気を抑えていないようだ。たまに、輪郭が光に霞むように感じる。机を挟んで距離があるのは、ありがたい。そうでなくても目も眩むような美貌なのである、これ以上光らなくてよいのだ。

「あなたはすぐ、信頼を担保にするわね」
「……は？」
「人に期待をかけるの。そんなもの、と投げ捨てられない人間が、あなたに引っかかるのよ。だから、真心をもって頑張れる者だけが残るの」
「はぁ……」
「怠惰な人間は、あなたに耐えられなくなるわ。あなたに好意を抱くほどに、期待を裏切りたくないとは思う、でも怠惰だから頑張れない、頑張ればいいなんて思いつきもしないの。そのうちに、ごまかしに堕していくでしょう。無理だといえば、あなたは許してくれるのに。けれど、許されることは諦められることだし、それはあなたの視界に映らなくなること……それでは意味がないのね」
「なんのお話でしょう」
皇妹は笑みを消した。
「姪は、頑張り屋さんね、という話よ。あの子は知っているわ、頑張れば頑張っただけ、あなたが認めてくれることを」
「皇女殿下は、わたしのために動いておられるわけではありません」
「そうね、あなたのためだけ、ではないわ。でも、少なからざる部分を、あなたという存在に依拠しているのよ、尚書卿。それは覚えておいてね。あの子のまっすぐな性根を肯定して、さらに先へ伸ばそうとしたことがないわけではないでしょう？」

そこで、皇妹はヤエトから視線をはずした。
ヤエトは彼女の視線を追い、背後に控えている伝達官を見た。まさか、皇女が臨の状態で――と想像したからだが、それはなかった。伝達官はいつも通り、静かに座っているだけだった。
ほっとして前に向き直ろうとしたとき、伝達官が口を開いた。
「姫様より、ご伝言です。帰ったら叔母上をしばき倒す、と」
皇妹は声をあげて笑った。
「それを目標にして、無事帰っていらっしゃい。ただし、おとなしく待ってるとは思わないでね」
「お伝えします」
「上等よ。さて、尚書卿――あの子に話が漏れている前提でお話ししましょう。あの子がなぜ、今いる場所へ行ったのかを、あなたは知りたいのよね」
ずいぶん率直な確認である。その上、気前がよさそうな雰囲気だ。
ほとんど反射的に、ヤエトは用心深くなった。人生、うっかり生き延びて来て学んだことはなにかといえば、都合がいいだけの話など、この世には絶対に存在しないということくらいである。
「はい。教えていただくことが、可能であれば」
「大丈夫よ。わたしには禁忌は課されていないから。ただし、教えれば、あなたには課さなければならなくなるわ」
「それは、どういうことでしょう」

「それに関する話ができなくなるの。どうしても口にしようとすれば、命が断たれるくらいの強制力を有する禁忌……と説明すればいいかしら？」

口にしようとしたら声が出なくなるとか、そういう方向に抑制がはたらけばよいのに、いきなり最終手段である。これは相当に性質が悪い、とヤエトは思った。

ただ秘密を守るためのものではない、裏切りを阻止するための措置だろう。

「凄いですね」

「ええ、凄いのよ。だから、少し考える時間をあげる」

「構いません」

「即答？　教えてあげていいのかしら」

「いえ、禁忌を課されない範囲で情報をいただければ、それで結構です」

禁忌をおかせば命にかかわるような呪いが実在するのか、それはヤエトにはわからない。だが、呼び名が禁忌であり、行為が呪力によるものであるというだけで、実態は、ただの脅迫ではないか。

選べないならともかく、選べといわれたら迷いはない。たとえば、知ったとしても、誰かに伝えることでしか活用できなければ、どうすればよいのか。知識を握ったまま無言でいる、あるいは握ったまま伝えようとして死ぬ——どちらにせよ、不毛過ぎる。

脅迫に応じるなど、馬鹿らしいにもほどがある。

皇妹の表情が、かたまった。

怒ったかなにかしたのかと思えば、純粋におどろいていたようだ。いや、正確には違う。

「——呆れた」

呆れられていたのだった。

「ご期待に添えなかったようですね」

「ええ、そうね……でも、やっぱりおもしろいわね、あなたは」

答えながら、皇妹はくすくす笑いだした。

ヤエトは話の先を急かすことにした。無駄に時間をとって倒れたり、皇妹の前で嘔吐（おうと）などしたくはないではないか。いや、誰の前であろうとなかろうと、したくないのだが。

「秘すべき内容であることは、理解しましたが、それだけで引き下がるわけにも参りません。わたしは皇女殿下の副官です。あるじが命を賭すだけの価値があるものであるのも、たしかなのでしょうから、そこも追求はしません。ただ、その賭けが分のあるものなのかどうか、お考えをお聞かせ願いたいのです」

「考え？」

「そうです」

「わたしの？」

「はい」

皇妹は眼を伏せた。長い睫毛だなぁ、と思う。無駄に長いわけではなく、有用なんだよな、とも思

う。つまり、表情を見せなかったり、目元に影を落としたり、大きな眼をさらにぱっちり見せたりという重要な役目を担っているのだ。

その睫毛の下から、皇妹はヤエトを見た。やや俯いているから、上目遣いになっている。

「あなたのたいせつな王様の命を、わたしなどの判断にまかせていいの？」

「かけがえのない姪御さんのお命ですので、本来、わたしなどが踏み入らずとも守ってくださるとは心得ておりますが、これも職責です。ある程度の説明も保証もなしに、納得はできません」

「わたしは簡単に人を殺せるのよ、その気になれば」

「その気におなりあそばすときには、それだけの理由をお持ちだと存じております」

「信じない方がいいわよ？」

「わたしは、あなたをそのように理解しているのです。それが間違っていたなら、おのれの不明を呪うことになるでしょう。ですが、わたしはわたしの知見の限りで考え、判断するしかない。そして、あなたは意味もなく殺す人ではない、というのがその判断なのです」

皇妹は顔を上げた。

「……そうね。意味もなくは殺さないわね、たしかに」

「王は、陛下や一の君がお見捨てになることは絶対にない、と仰せでした。確信をお持ちのようでしたし、おそらく、それは事実なのだと思います。お考えは？」

「見捨てるかどうかでいえば、そうね、見捨てないでしょうね」

「ありがとうございます」
「これだけでいいの？」
まさか、とヤエトは思った。こんなものは、基本的な確認に過ぎない。
「いえ。その上で、お尋ねします。あの砦を守りきれると、お考えですか？」
「守りきれるかどうかではなく、守る必要があるの」
「わたしがお尋ねしたのは、それが可能であるか否かについて、どうお考えなのかという点です」
どうしても守らねばならないと思えば守れるなら、籠城戦で守備側が負けることはない。そんな理屈がまかり通るのであれば、沙漠越えの計画も、開始と同時に頓挫していたはずだ。守らねばならないかどうかと、守り得るかどうかは、別の問題なのだ。
「……未来に絶対はないわ。あの預言者のように恩寵の力があれば別だけれど」
一瞬、心の隅が痛んだ。絶対の未来を手に入れていたからこそ、逃げることのできなかった女。
「事情を知悉しておいでのかたの、妥当な推測をうかがいたいのです」
皇妹は、ため息をついた。
「戦の実際は、よくはわからないのよ。全力で支援することは保証するし、陛下がそうお考えなのだから、やり遂げられるとは思うわ。不安材料があるとすれば——一の君よ」
「一の君？」
「あの子はね、容貌は父親にそっくりよ。頭も悪くないし、剣の腕もそう。ただ、決断力の面では、

陛下には遠く及ばないでしょう」

ああ、とヤエトは思わず声を漏らした。それはそうだろう。皇帝には、凄まじいまでの果断さがある。あれと比べるのは酷というものだ。

「わたしなどが申し上げるまでもないことですが、陛下は傑物と呼ばれるべきおかたです」

「そうよ」

「姫もです」

皇妹は笑いもせずに答えた。

「そうかもしれないわね。でも、あの兄と比べられるのは、わたしは御免だわ」

「一の君は、どうしても比べられてしまう……と？」

「そんなことは、どうでもいいの。そうねぇ……甥たちは果断過ぎる傾向があるとは思うのよ……沙漠越えを決意なさった陛下の血筋だから、無理もないのだけれど。ただ、一の君にだけは、それがないのね。盤石を求め過ぎる傾向が強いのかしら」

皇女はもちろん、目の前にいる皇妹も、さっきから話に出ている皇帝も、そして多少は人となりを知る第二皇子も、決断力は、あり余り過ぎるほどにそなえている。竜種なら皆そういうものかと思っていたが、実はそうでもないらしい。

「意外です」

「でしょう？　とにかく、あの子にまかせておくと、いろいろ後手にまわる危険性があるの。それで

しくじる、という可能性は残るわ。だから、必ずとは思えないのよ」

戦に詳しくないという皇妹が、こんな感想を抱くならば、ほかの皇子たちはどうだろう。いや、皇子に限らない。皇女もだ。

——あ、それでか。

「……だから、王が行かれたのですね。後手に回り過ぎないように」

絶対に守らねばならない場所に皇女がいれば、事情を知らない将兵にも、そこを落としてはならない、という意識はできる。上の指示が間に合わずとも、皇女の命がかかっているとなれば、前線の兵が主体的に動くだろう。

皇女は、自分という駒をその場所に移動させることで、盤上の意識を変えたのだ。秘密を明かすことなく、守備力を高めさせるために。

「そういうことだと思うけれど、本人が宣言したわけではないし」

「一の君は、それをわかっておいでなのですか」

「どうかしら。判断が遅そうだから先に行っておくなんて発想は、あの子には、ないかもしれないわね。すべてを完璧に仕上げてから次の一歩を踏み出そうと計画する子だから……この戦が長引くとしたら、一の君が采配を握っているからかもしれないわ。そもそも、初手を打ったのも七の君の方でしょう？　それまでにやっていたことといえば、叛逆側の財産の没収とか、差し押さえとか、防備を固めるとか、……とにかく足場を踏み固めるのが大好きなのよねぇ、あの子は」

となると、第一皇子に特別の配慮を期待するのは無理だろう。皇女ごと中州の砦を守るために、ヤエトはできる限りの方策を考える必要がありそうだ。

問題は、ヤエトもまた、戦の実際については疎いという点である。

先年、第二皇子の砦での戦闘に巻き込まれたときもそうだが、前線に行っても足手まといになるだけだ。といって、軍師になれるほどの軍略もない。物資の入出管理とか、配給表の作成とか、そういう仕事ならば、経験もあるのだが。

「七の君はご存じなのですか、その秘密を」

「知らないはずよ。あの子はもう《天地輪》に入れないわ。あの子が入れないように、術式を組み直したし……皇宮にいた伝達官は、神殿に戻されたわ」

「神殿に？」

「七の君との繋がりを断つ操作を受けるか、あるいは処分されるかでしょうね」

同情的な口ぶりではあったが、同時に、自分の知ったことではないという雰囲気もあった。

――すると、第七皇子が広間を出て行った後のことか、その秘密が明かされたのは。

おそらく、都を守る上で必要不可欠な要素として、皇帝の子どもたちに説明されたのだろう。

「中州の砦にそんな重要な意味があるとは存じませんでした。まさか、真帝国創建前から？」

「いいえ。砦に意味ができたのは、創建後よ」

「では、……その意味をあの砦以外の場所へ移すことも、可能なのですか」

「簡単にはできないわね、時間がかかるの」

――やはり、呪物か……そういうものである可能性が高そうだ。

ひょっとすると、沙漠の西から持って来たものかもしれない。

そもそも、沙漠越えという無謀を達成し得た背景に、それがあるのだとしたら？　少しずつ強さを増していた不思議の力が、皇帝の東征を後押しし、今はこの帝国の礎石となっているのだとしたら？

第七皇子に横取りされるわけにはいかない、なにか――それが、あの中州の砦にあるのではないか。

――帝国の、神宝のたぐいか。

真皇帝、当時は旧帝国の皇弟だった男は、みずからの正統性を示すために、そういったものが必要と考えたかもしれない。持ち出した時点では、形骸に過ぎないと思っていたかもしれないが、神宝の効力が現実を左右していることに気づいて、前面に出すより隠したのかもしれない。皇帝はそういう点では慎重な男だ。見せびらかすことの危険性は、知っているはずだ。

ヤエトには、帝国の神宝が実際にどういうものであったかは、わからない。知っているのは、神宝というものがある、ということだけだ。一介の官吏風情には、詳細は明かされていなかった。沙漠のこちらで四大公家という名を与えられた今でさえ、容易には知らされることのない知識なのだ。

――このへんが妥当そうだ。

なにも解決はしないが、なんとなく納得はいく。たとえ神宝でなくとも、それと同じくらいの重要性があるものが、あの砦に安置されているのだ。しかし、あまり存在を喧伝したくはない。奪われて

は困るからだ。
「では、この戦が終わるまでずっと、皇女殿下はあの砦に」
「そうなると思うわ」
考えただけで、胃が痛いし、胸がむかつく。いくら援護が途絶えることはないといっても、最前線中の最前線である。そんな危険なところに、自分から飛び込むとは。
どう説得しても移動しないのだろうし、一刻も早く戦を終わらせてもらうしかない。
「七の君を暗殺でもしたら、早く終わりますかね」
思わず口走ると、皇妹は眉を上げた。
「どうかしら。転がる方向が、うまく読めないわ。あの子はたしかに、今のかれらの旗印になっているけれど、……戦を終わらせたとして、あちらが得られるものが、なさ過ぎるでしょう。今さら、門地の回復など望めないし。へたをすると、却って長引くだけということになりかねないわ」
「なるほど。それは、そうですね」
しかし、なにか手段があるに違いない。戦を早く終わらせるための、なにかだ。考えていると、皇妹が顔を近づけて来た。
「おどろいたわ、尚書卿」
「なにがでしょう」
「あなたが、あんな言葉を口にするとは思わなかったわ」

なにをいわれているかわからず、ヤエトは少し当惑した。それから、ああ、と首をふった。
「ご放念ください。愚かな思いつきを口走ったに過ぎません」
「暗殺なんて……容易にできるものなら、とうに一族は途絶えているわよ」
これもまた、皇妹の指摘通りだ。暗殺は、容易ではない。比較的安全なはずの皇女でさえ狙われている以上、皇子たちは数限りなく狙われ、そしてすべて失敗しているのだ。そうでなくても備えは万全であろうところに、戦である。混乱に乗じる手もなくはないだろうが、警戒の程度は上がりこそすれ、下がりはしないはずだ。
「まったく、おっしゃる通りです」
「なぜ、そんなに必死なの？」
「自分がなにかの役に立つと考えておかないと、身がもたないからですよ」
正直に答えると、皇妹は眉根を寄せた。よくわからなかったらしい。彼女なら、理解してくれるのではないかと思ったのだが。
しかたなく、ヤエトは説明をくわえた。
「戦の結果が報じられるのを待つしかないのは、非常に疲れるものです。自分が無力であることを、少なくとも今この局面でできることがなにもないという事実を認めるのが、つらいのです。わたしたちを守るために、誰かが戦っている。その戦っている誰かは、二度と生きては戻らないかもしれない。なのに、かれらのためにできることは、なにもない——それが、許しがたいのです。馬鹿げた計画で

あっても、なにか考えずにはいられない程度にはね」
「そう……。ところで、もうひとつ用件があるの。二の君に伝言をたのまれていて」
ヤエトは眼をしばたたいた。
「二の君？」
「博沙に置いて来た伝達官が、報せて来たそうよ。あなた宛て」
「ファルバーンですか」
「そう。あの緑の眼の給仕から、あなたに伝えてほしいと」
「畏れ多いことを……」
「母親をみつけたそうよ」
どう反応すればよいものか。
竜種の恩寵を使ってヤエトに連絡を寄越すのも、たいがいだと思う。だが、それが可能だったということは、第二皇子が事前に命じてあったか、ファルバーンの願いを受けた留守居の部下が、必要なことだと判断したか、だ。そこはまぁ、よしとしよう。
それより、ファルバーンの母親である。たしか預言者は、ファルバーンがヤエトに同行しないなら、教えてやれることもある、と語っていたはずだ。それも、今すぐでないと意味がないというような前提だったような記憶がある。
――あのとき、まだ事態は動いていたのだ。

ともあれ、ファルバーンはヤエトに同行することを選んだ。預言者が、彼の姿は視えないと告げていたにもかかわらず、である。そしてたしかに、シンリールではファルバーンを必要とするような事件はなかった――ヤエトは預言者とともに異界へ行き、戻って来たときには、ファルバーンの姿はなかった。浄化を継続するためにアルハンへ行くことになった……という説明は、受けていた。

だが、説明を受けただけで、なにもしてはいない。

正直いって、それどころではない事態がつづいていたためだが、すっかり失念していたといってもよい。後手に回る、どころの騒ぎではない。

「どのような状況で」

「赤子を産んでいたらしいのだけれど……よくわからないの」

「わからない？」

「とにかく、腹はひらたくなっていたそうよ」

「赤子の姿はなし、ですか」

「赤子は真源にいるというの。穢れてしまった自分たちには、もはや浄化の神にお仕えする資格もない、あとは奇跡の子にまかせよ、と」

「では、その赤子が、浄化を引き継ぐと？　しかし――」

生まれたての赤子が、どうやって？　しかも、話の流れを聞いたところでは、産みの母たる女性は赤子を置き去りにして来たとしか思えない。

常識的に考えて、それでは赤子は死んでしまうのだが、それをいえば、この元王妃に関係する話は、どこまでも非常識きわまりないのだ。ふつうではない世界に片足を踏み入れている存在なのだろう、と今さら実感するしかない。

できれば、その赤子とやらも、現世の常識を超越した存在であってほしいものだ……と思っていると、皇妹の口から、意外な言葉がこぼれ落ちた。

「あなたに来てほしいそうよ」

「わたしが行っても、なんの役にも立ちません」

ほとんど考えもせずに即答してしまった。が、間違ってもいないだろう。浄化の恩寵に関する知識など、ヤエトはほとんど持ち合わせていない。アルハン王家に関する知識も、ごく大雑把なところを偏った関係者から聞いただけだ。

「二の君の部下と、あの緑の眼の給仕とで、なんとかなると思うの？」

「二の君の配下には、優秀な人材しかいないでしょうから」

無能な人間が、あの高速展開する家臣団の中にいられるはずがない。皇妹は、肩をすくめた。

「優秀は優秀でしょうね。でも、かれらになにか知識や手だてがあると思う？」

「知識がなければ学んでもらいますし、手だては考えてもらいます」

ヤエトだって、こんなびっくり展開に応じて出せる知恵など、持ち合わせてはいないのだ。

「でも――」

「それに、交通手段がありません。気軽に、鳥を使えばとお考えなのでしょうが、わたしの鳥はもう北嶺に戻らせました。次に使えるのは、あちらで休養をとって数日後。ほかの鳥では、本来の乗り手と同乗することでしか使えませんし、そもそも、鳥の絶対数が少ないのです。戦で消耗する可能性がある以上、役に立つかどうかも不明なことに、使うわけには参りません」

「ああ、強情な男ね」

「偏屈です」

なんとなく、胸を張って答えてしまった。対する皇妹は肩を落とし、残念そうに息を吐いた。

「しかたないわね。でも、話くらいは聞いておあげなさいな」

「二の君のお手をわずらわせることになるのでは？」

「わたしが仲介するから大丈夫よ」

要は、伝達官を乗っ取るといっているのである。相変わらず、無茶だ。いよいよ光を増しはじめた皇妹の輪郭を眺め、ヤエトは控えめにたのんだ。

「申しわけありませんが、少し、距離をとっていただけませんでしょうか」

「なぜ？」

眉を上げた皇妹に、ルーギンならここで、あなたが美し過ぎてどうとかいう台詞がすらすらと出て来るのだろう、と思った。だが、ヤエトにはできない。偏屈で結構である。

彼は、端的に事実を告げた。

「吐きそうなのです」

皇妹は、凄い勢いで身を引いてくれた。皇妹に連れ出された博沙国への旅程で、一回、倒れて吐いたことがある。いや、吐いて倒れたのだったか。……そのへんはどうでもよいとして、皇妹は、彼が吐くときは吐く男であることを知っているのである。

気の毒なことだ。

5

第二皇子の伝達官に連絡をとり、その伝達官を介してファルバーンと会話できるようにはからうには、少し、時間がかかった。皇妹の意向がどうであれ、第二皇子本人の許可をとらないわけにはいかない、とヤエトが常識を発揮した結果である。

自分の役目は沙漠に接した博沙の守護である、この内紛には巻き込まれる気がない——そう明言していた第二皇子だが、さすがに目の前で戦が始まってしまっては、さっさと帰ることもできなかったのだろう。自分の部下を中心に警邏部隊を編成し、都の治安維持と監視強化につとめているらしい。しかも、皇子みずから馬に乗って回っているというのだ。

もちろん、そんな状況であるにしては、かなり早めに連絡がとれたのは、皇子の部下たちが有能過ぎるほど有能だからである。第二皇子からは、自分も立ち会うので暫し待て、という返事が届いた。

妥当なところである、そもそも、博沙の伝達官が繋がっているのは彼なのだから。

おかげで、ヤエトにもわずかばかりの休憩時間が生じた。

休ませてくださいと隣室に移動して、皇妹の相手はレイランドにまかせた。少しは役に立ってもらおうではないか。

休憩用の部屋なので、皇宮にしては小ぶりな作りで、壁も厚い。

仮病でもなんでもなく、ヤエトは気分が悪かった。室内がやけに薄暗く感じられるのは、疲労のせいだろう。経験がなくもない症状だ。

窓の外に見える中庭も、今は光を失って見える。すべての色彩は淡く、徐々に黒へと沈んでいくようだ——まるで夏から冬へといきなり季節が変わったかのように。

ふと、タナーギンのことを思い出した。

北向きの部屋を与えられても、夏場の涼しさをまずは喜ぶべし、とうそぶいていた彼は、冬をどう凌いだのだろう。

新年祭の後、まだ都にいるようならと人をやって探したが、あの尚書官は姿を消していた。捕縛されたわけでもなく、こうなる前に、覚悟を決めて都を去ったらしい。保身に役立ちそうな唯一の人物と連絡がとれなくなったのだ、身を守るためには、都を出るのが賢明と判断しても無理はない。

遅い、といわれた気がした。

あの鬱陶しくも暑苦しい表情で、大声で。ヤエトを見上げ、彼は断じる。君はいつも遅い、と。

——第七皇子の陣営に紛れ込んでいる、という可能性もあるが……。

尚書官という道を選んだ彼は、一族の中では異端だったろうし、命が惜しいといい、彼我の勢力差を客観的に分析していたことを考えても、第七皇子につくとは思えない。だが、呼ばれて皇宮へおもむくことがあったほど、センヴェーラ妃と親しかったのだから、彼女を見捨てるのも難しいのではないか。

かつて、センヴェーラ妃を評したタナーギンの声音に、軽侮の響きはなかったと思う。いささかの失望は含んでいたにせよ、彼の口調は情愛深いものだった。

——あの子は無邪気なまま大きくなり、みんな仲良くしましょうね、というような漠然とした呼びかけしかできなかったのだよ。

仲良くしましょう、という言葉をヤエトは頭の中でくり返した。

子どもたちは、そう教えられて育つものではないのか。仲良くしましょう、喧嘩はよくない、と大人たちに諭されながら、歳をかさね、そして……。

——辿り着くのが、これなのか。

情けない、とヤエトは思った。

あまりにも、情けない。争うなと教えられるのは、人は争う性質をそなえているからだ。それは、諦めよう。だが、生まれ持った性質を押さえ込む理性を育ててこその、人ではないのか。

友よ、と目蓋の裏でタナーギンが真面目な顔をして告げた。

——君は、正しさを愛する。それはわかる。しかしな、残念ながら、正しさだけでは勝てないぞ。理想は捨てるな。だが、戦うときには、それにしがみつくな。

北嶺に飛ばされる前の記憶だ。タナーギンのせいで無駄な争いに首を突っ込んだヤエトに、彼が、最後にかけた言葉だ——誰のせいでこうなったと思っているのか、と苛立ちながら聞き流したはずなのに、今になって、克明によみがえったのも不思議だ。

案外、実際にあったことではなく、ヤエトの疲れた脳が勝手に捏造した発言かもしれない。

気を抜くと、このまま意識を失ってしまいそうだ。

——そんな場合ではないのに。

ヤエトは、脆弱過ぎる自分の身体を呪った。ほかに、できることがなかったからだ。

すっとする芳香が鼻先をかすめたのに気づいて視線を向けると、茶の準備ができていた。いつの間に、と思う。少し、意識を失っていたのだろうか。

なんとか身を起こして茶を啜っていると、ジェイサルドと視線が合った。老騎士は、難しい表情をしている。

「なにか問題でも？」

「もう少し、お休みいただかねばと考えているところです」

「ああ……二の君は、もう？」

「いえ、まだです」

首を捻って隣室の方を確認しようとしたヤエトの前に、ジェイサルドは、さりげなく立ちはだかった。気にしないで休め、という意味だろう。

黙って、ヤエトはふたたび身体を横にした。起きているのがつらい。汗ばんでいるが、暑さは感じない。むしろ、寒い。これは冷や汗だ。

「殿がお元気でいらっしゃらないと、姫様も甲斐がないでしょう」

「甲斐？」

「戦より戻られましたら、殿が褒めたり叱ったりなさることをお望みでしょうから」

少し考えてから、ヤエトは答えた。

「叱る方かな」

「では、姫様がお戻りあそばしたとき、しっかりと叱り飛ばして差し上げてください」

そのために体力を温存しておけ、という意味だろうが、どうしろというのだ。ファルバーンの話はそちらでよろしいように……と、皇妹と第二皇子にまかせてしまえと？

――そうできればなぁ。

ふたりとも有能だとは思う。倒れてばかりのヤエトより安定して活動できるし、権力もある。

だが、竜種である。

かれらは帝国の、皇家の利害を第一に考えるだろう。自分は――と考えて、ヤエトは苦笑した。

――尚書官には不向きでおられる。

タナーギンの言葉は、当たっていたのかもしれない。
ヤエトは、官吏になりきれないままだ。つねに、自分の正義でしか動けない。俸禄に応じた仕事をするつもりで着手して、しかし、どうしても優先順位の上に来るのは自分の満足だ。
身勝手なのだ、とヤエトは思った。
遠くで中庭が揺れる。いや、揺れているのは木々の葉だ。白くなっているのは日差しのせいだろうと理解はできるのに、なぜか明るくは思えない。黒く影になっているのは、ねじれた樹の幹のようだ。眺める内にその幹が揺れ、どこか人のような形になった。
遠いはずなのに、はっきりと。顔だちまで見分けられる。きょろりと眼が動き、口が開いた。
――仕込みは完璧です。
不意に、その周辺が明るくなった。
樹は樹でなくなり、人になった。人になった樹は、少し動いた。そして、ふたたび言葉を発した。
――人の胎を借りることで、あの魔物は地上に生を享け、殿下の配下となります。
――ほんとうに、我が命をなんでも聞くのだな。
答えた声に、覚えがあった。姿は視えないが、聞いたことのある声だ。
――はい、殿下。月が満ちる頃合いに、殿下のもとへ女を連れて参ります。魔物めが生まれ落ちてすぐに、殿下が魔物めの名をお呼びになれば、魔物は応え、殿下にその名を預けることになるのです。
――応えなければ、どうなる。

――ご案じめされますな、魔物めは、かならず応えます。そのように術をかけておりますれば。

淡彩の風景の中で、男の頭だけが異様にあざやかな赤にいろどられていた。まるで、燃えているようだ。眼は、漆黒の闇だった。なにもかもを吸い取る黒だ。

視界の外から、声がつぶやいた。

――名前ひとつで意のままになるか。

――はい。三本角の魔王とも恐れられた魔物です、力はかなりのもの。それでも、この世に生を享けるに至った経緯を無視はできません。殿下の御名のもと、わたしが魔物めを召喚しましたこと、誰よりも彼奴はよく存じております。

――しかし、もう少し近場で術をほどこすことはできなかったのか。

――は。力不足と申し上げるほかないのは、慚愧の念に耐えませんが、沙漠でなければ魔物に声が届かず……また、魔物を身ごもることに耐え得る女も、彼の地でしかみつかりませんでした。

――その時が来るのが待ち遠しいものよ。

――もはや、遠からぬことをお約束いたしましょう。

――その約定、違えるでないぞ。……陛下の御命がくだった。明日には出陣する。この伝達官は、今まで以上に陛下のお側に付き随うことになるであろう。軽々には連絡できぬ。

――必要あらば、こちらより使い魔を殿下のもとまで……。

――そなたにまかせる。

足音が、聞こえた。それはヤエトのすぐ頭の後ろからはじまり、そのまま遠ざかった。
庭に残った呪師の姿が、ゆらりと揺れた。赤い布の輪郭が滲む。滲んであたりを染める。
――仕込みは完璧。
つぶやきながら、少しだけこちらに近寄る。
――そう、薄汚い侵略者どもを洗い流してやるための仕込みはな。おまえらの命を贄に、都を浄化する。絶望を贄に、《百の塔》を再建する。おまえの戦が長引けばいいな、皇子。そうしたら、少なくともこの都が洗い流されるときには、おまえは死なずに済むだろう。それもいい、ゆっくり看取ってやろう。いろいろ便宜をはかってもらった恩もあれば、縁もある。おまえの憎しみと絶望も、無駄にせぬよう使ってやるさ。俺はおまえの名前を知っているからな……。仕込みは完璧だよ、皇子。
凄まじい憎悪を叩き付けられ、ヤエトは喘いだ。息が、喉に入って来ない。
助けを呼ぼうとして、手を摑まれた。
「殿？」
ヤエトははっとして眼を開けた。
声は遠ざかり、庭の輪郭も、なにもかもが闇に消えた。
気がつくと、ヤエトはまた眠っていたようだ。
ジェイサルドに飲まされた茶に薬効があったのだろう、視界はかなり正常に戻っていた。気がつくと、つぶやいていた。

「……魔物は皆、あのように強いのか。智慧の扉にいた、あれのように」
「いえ、あれは魔物の内でも、格別に力ある存在かと。ごくふつうの魔物であれば、それなりの扱いようもございますれば。なんと申しましても、彼奴らはこの世に出て来るために、生身をそなえる必要がございます。生きているということは、殺せるということです」
そうか、とつぶやいてヤエトは天井を見た。さっきは暗くてほとんど見えなかったが、今ははっきりと見えた。世界は思っていたほど暗くはないようだ。
「魔物との戦いかたを、周知させる必要があるかもしれないな」
――魔物？
なぜ自分が魔物のことなど考えたのかを思いだし、ヤエトははっとした。
「ここは、五の君の部屋だったのか？」
「わかりかねます。調べさせますか」
「いや、……」
――あの声は、第五皇子だった。
間違いない。対面したのはたった一回、かわした言葉はわずかだったが、はっきり覚えている。
――呪師が出入りしていたのか。
南方の古い術を便利に使っていたのは、第三皇子に限らなかった、ということだ。
今のは、体調が悪くなると暴走しがちな恩寵の力が、久しぶりにその本領を発揮したのだろう。と

くに視ようともしていないのに視えてしまうとき、それはしばしば、ヤエトが直面している問題にかかわりが深い内容である——ひょっとして、干渉しないはずの神、すべての祈りを聞きながら応じるということはないといわれているオルムストなりの、これが、啓示なのかもしれない。預言者が、タ—ンから未来を預かっていたように。

それにしても、どう解釈すればよいのか。

——胎を借りて魔物を生ませるなどということが、あり得るのか。

呪師の説明がたしかなら、人の胎を——アルハンの元王妃の胎を借りて魔物を生み出し、それを第五皇子の支配下に置く計画だったようだが、にわかには信じがたい話だ。

たしかに、ある程度は筋が通る。

アルハンには真源があり、例の母神の心臓がある。たやすく異界の力にふれ得る場所なのだ。元王妃は、ああいった術者が好む、魂魄の重みが大きい人物であるに違いない。人の世にはうまく適合できないようだったが、そういう人物こそ異界とは親和性が高いのだ。少なくとも、歴史はそう語っている。

元王妃の存在が知れたのは、例の、世話役の夫婦者からだろう。アルハンを滅ぼした無能な王家への、復讐のつもりだったのかもしれない……。

頭がうまく回らないまま、ヤエトは考え込んだ。考えられなくても、考えるしかなかった。

——これは、どういうことだ？

呪師が口にした通りのことが起きたとして、今、なにがどうなっているのか。皇子は死んだ。だが、呪師は？　庇護者を失い、企図も頓挫したと見るべきか。しかし、術はすでにほどこされている。取り消しはできないだろう……。

――それに、はじめから呪師は皇子を裏切るつもりだった……。

ジェイサルドが、殿、と低く呼んだ。

「二の君がおいでになりました」

「わかった」

相性の悪い第二皇子と皇妹が同じ部屋にいるという不具合も、あまり気にならない。厭味の応酬が開始されたとしても、今のヤエトなら、素で受け流せる自信があった。

ただでさえ具合が悪いところに、さっきの幻視で完全に混乱している。ものごとの優先順位も、今は判断できなかった。頭がいっぱいで、なにが起きたのか、起きているのか、把握できない。

ヤエトには、寝椅子が用意されていた。本来なら、竜種の前で横たわるのは不敬きわまりない……と一応は主張する流れだということすら念頭に浮かばず、ヤエトはさっさと身を横たえてしまった。横になってから無礼であることに気づいたが、効率を重んじる第二皇子が、無駄な言葉のやりとりを喜ぶとは思えないし、蒸し返すのは諦めた。ついでに、お運びいただいてどうも、のような挨拶もすべて省略することにした。

「ファルバーンは……誰がいるか、知っているのですか？」

「事前に、ファルバーンの申し述べるところは確認しておいた。そのときに、これから誰に話すかは教えてある。人払いは済ませた。ファルバーンは伝達官とともに控えさせている。だが、まずはわたしが経緯を話す。それを聞いた上で質問があれば、あらためて本人に質す、とする」

相変わらず無駄のないことだ。

感心しているあいだに、第二皇子は本題に入った……まさに第二皇子、である。

「ここまでの事実確認を兼ね、前提から説明する。直截な表現をとることは、容赦願いたい。ファルバーンなる者、及びその母親である女は、沙漠の穢れた水源を浄化する恩寵の力を持つ一族だ。女の方は、水源浄化の任にあたらせていた。去年、女の妊娠が発覚したが、もとから正気を失っている態だったため、父親については追求を怠った。その後、女は失踪。ファルバーンがアルハンに赴いて、浄化を引き継いだ。女を発見したとの一報が届いたのは、昨夕だ。アルハンの地下で、出会ったそうだ。三日ほど前だと申しておる。女は、赤子をアルハンの地下で産み落とした、穢れの浄化は今後、その赤子にまかせるべき、と申し述べていたそうだ。女の身柄は、アルハンで確保している。本人はすでに浄化の力は使っていないと主張しており、ファルバーンもとくに浄化はしていないが、水源の汚染は進んでいないと感じたそうだ。ただ、別の力を感じるともいっている。その力の正体は、特定できていない。また、赤子の父親についても、女は話そうとしないそうだ」

淡々とした第二皇子の言葉に、皇妹が割り込んだ。

「赤子を見た者はいるの？」

「いない」
「ファルバーンも見ていないの？　母親だけみつけて、すぐ引き返したというわけ？」
皇子の返答までに、少し間があったのは、伝達官を通じてファルバーンに確認したのだろう。
「ファルバーンは、地下には母親しかいなかった、と報告している。少しは探したようだが、母親を見失わないよう、まず地上への送還を優先し、その後は伝達官と連絡をとろうと博沙に戻ったため、母親ともろくに話していない、とのことだ」
「地下へは、探索の兵を遣ったの？」
「まだだ。わたしは女が発見されたという一報だけを聞き、優先順位は低いと判断していた。先ほど、尚書卿からの連絡があった後で、あらためて仔細を質したところ、今述べたような内容を知った。兵は派遣するつもりだが、都と博沙を繋ぐ街道筋の警備を厚くしたばかりで、あまり人員が豊富とはいえない。叔母上や尚書卿の智慧を拝借したい」
皇妹が眉を上げた。
「わたしだって、ここから動けはしないわよ？」
「それは承知している。尚書卿も、動かすわけにはいかないだろう」
「そうね、別の意味でね」
「別の意味でだ」
なぜか意気投合してくれたようだが、まったく嬉しくない。

第二皇子は、やれやれ、というように肩をすくめた。彼にしては珍しい仕草だ。
「いっしょに考えてくださいとお願いしているだけですよ、叔母上」
「そうねぇ……興味津々であることは否定しないけれど、だからって、役に立てそうな気はしないわね。そういえば、あの曰くありげな南方人の夫婦者とやらは、みつかったのかしら？」
「残念だが、まだですね。潜伏先を突き止めるまでは、一回、行ったのだが……逃げられた」
「あら、あなたの部下が間に合わないなんて、よほどの逃げ足ね」
閉じた目蓋の裏で、見たこともない南方人の夫婦を想像してみる。かれらは、なんのためにアルハンの元王妃に近づいたのか。かれらは知っていて近づいた――そして元王妃は子を身ごもった。
――魔物だ。
呪師の口ぶりから、かなり力ある存在だと推測できた。
生まれたのは、魔物だ。元王妃の胎を借りたことで、清浄神の恩寵の力にふれたのかどうか――そこまでは、わからない。だが、その魔物は浄化のまねごとができるのだろう。おそらく、借りた胎と無関係ではあるまい。
「この皇宮の近くに、彼奴らは隠れていたのだ」
「そうだったの。博沙からは遠いわね」
「博沙は遠い……」
つぶやいて、ヤエトは眼を開けた。いつの間に眼を閉じていたのかもわからない。周りも、ヤエト

は気を失っているとでも思っていたのだろう、彼の方を見る顔は、一様におどろきを浮かべていた。
ゆっくりと、ヤエトは身を起こした。視界が霞んでいる。ずっと横になっていたのに、なぜまた悪化しているのだろう。
「ひどい顔色よ。なにかわかったの？」
皇妹の声に、ヤエトはふたたび眼を開いた。どうして、気がつくと眼を閉じてしまっているのか。
「五の君のもとに、呪師が出入りしていたことを、ご存じですか」
皇妹は第二皇子の方に視線をやった。第二皇子はかぶりを左右にふった。
「胡乱な輩とつきあいがあるようだ、という報告は受けているが、詳細なところは記憶にない」
第五皇子は、ほとんど眼中にない存在だったのだろう。今度は第二皇子が皇妹に視線を向けた。
「叔母上は、なにかご存じでは？」
「そうねぇ……具体的に知っているというわけではないけれど、でも、そういうつきあいがあってもおかしくはないと思うわ。あの子はわりと、身分や出自にこだわらない方だったの。ほら、四の君が、そういうところにうるさかったでしょう。だから、逆を行ったんだと思うわ」
なるほど、とヤエトは思った。なるほど——それで、あの太守とも手を結べたのだ。自分の視たものが、ただの幻でないことを確信しながら、ヤエトは告げた。
「五の君は生前、呪師を介し、魔物を配下にしようと企てておいでだったようです」
「なんで——ああ」

皇妹が、納得いったというようにうなずき、第二皇子がそれを言葉にした。
「ここは五の部屋だったからな」
「部屋割りを決めた者は、馬鹿だと思うわ。さすがに四の君の部屋を避けるだけの常識はあったようだけれど……でも、配慮のなさが、今回は幸運だったわね。それで尚書卿、なにを視たの？」
先をうながされて、ヤエトはなんとか言葉を並べた。
「沙漠の方で、女の胎を介して、魔物を生み、その魔物の名を皇子が抑える、と」
皇妹と第二皇子は顔を見合わせた。
「そんなことができるの？」
「ジェイサルド」
第二皇子が、こういう事情に詳しそうな人物に発言をうながした。
「おそらく可能でしょう、その呪師が、しかるべき魔物の名を知っていれば、ですが」
「では、その魔物が生まれて――今、水源を浄化していると？　でも、五の君は亡くなったのよ。誰の命令で――」
皇妹は口を抑えた。その指のあいだから、いやだ、と声が漏れた。
「――まさか、彼女が」
「そうだとしても、魔物の名は知りますまい」
冷静に告げたのは、ジェイサルドだった。たしかに、元王妃なら、生まれて来た魔物を神からの賜

物と解釈し、水源の浄化を依頼しかねないが、魔物がそれに従う義理は、あるのだろうか？
「服従させているわけではない、ということか」
第二皇子が眉根を寄せた。一気に部屋の温度が下がった気がする。寒気がひどい。
気が遠くなりそうなヤエトをよそに、三人は交互に話し合っている。
「魔物が状況をおもしろがっているだけやも。あるいは、ほかの主人がいるか」
「呪師がどうしているかを確認する必要があるわね」
「あの世話人たちが、というのはどうか」
「魔物を使うというのは、名を抑えていても難しいことです。素養のない者がおこなえば、食われて終(しま)いです」
「試してみたいわね」
「叔母上」
「冗談よ……でも、呪師が抑えていた場合、その者はなにを考えるかしら？　五の君の弔い合戦？だったら水を浄化したりはしないわね。少なくともその部分は、彼女の影響だと思うし、呪師が健在なら、そんなことは許さないのではないかしら」
「では、あの女が魔物を使っているのか」
「強制力はないでしょう。くり返しになりますが、魔物の名を知っているとは思えません。呪師が、事前に明かすはずがないですから」

「危険です」
なんとか話に割り込むと、全員がまた、おまえまだ起きていたのか、という顔でヤエトを見た。なぜ責められているような気分になるのだろう。
だが、まだ伝えきれていない部分に、重要な事実が残っているのだ。ヤエトは自分を励まして、声を絞り出した。
「呪師は、皇子を利用しただけです。おそらく、都に水害を、もたらし、沈めるつもりです」
「どうやってだ」
「そんな力がある魔物なのね」
もうひとつ、ヤエトは伝えねばならないことを思い出した。
「三本角の魔王、と」
「そう……なんだか凄そうな名前ね。魔物の名を抑えれば、配下にできるのかしら？」
皇妹が興味深そうに、こころなしか楽しげに尋ねると、ジェイサルドが答えた。
「素養のある者が、然るべく対峙すれば——しかし、危険過ぎます。三本角の魔王は、通称に過ぎません。魔物の本質をあらわす名ではないでしょう。聞き覚えがありますし、かなり力のある魔物かと存じます。戦うにせよ、引き入れるにせよ、名は明かすべきでしょう。魔物と名の繋がりは、人と名の繋がりよりもずっと深く、本質的なものですゆえ」
「まことの名は、隠されているのか？　では、どうやって名を明かす」

「シンリールだ」
ようやく割って入ったヤエトに、またしても、三人の視線が集中した。今度は全員が、痛ましいものを見るような表情である。
先刻同様、気を失ったとでも思われていたのか――あるいは一歩進んで、もう気を失っておくべきだと判断されているのか。後者のような気がする。
はじめに我に返ったジェイサルドが、ヤエトの言葉を後押しした。
「たしかに、シンリールなら魔物の名が記録されている可能性はあります」
「どうやって行くの。博沙以上に遠いわよ。使うなら、あの大きな鳥でしょうけれど……誰を遣るの？　まさか尚書卿を行かせるわけにはいかないでしょうし」
「無理です」
ジェイサルドが断言した。異論はなかったので、ヤエトは黙っていることにした。
ふたたび、皇妹が喋りだした。
「浄化の恩寵の力がいつ必要にならないとも限らないけれど……彼女には、わたしたちの理屈は通じないだろうから、ファルバーンを味方にしなければならないわ。でも、あなたの母親は魔物を生みました――なんて伝えて、信じて協力してくれるかしら」
「信じさせるしかないと思うが」
「だって荒唐無稽過ぎるわ。それにね、人っておどろくほど、自分が信じたくないものは信じないで



いられるのよ。どんなに明白な証拠があってもね。伝達官を通じて尚書卿に口添えをたのむのは、もちろんだけど……難しいと思うわ。直接ならともかく」
「無理です」
ジェイサルドが無礼すれすれの速度で反応し、皇妹がうなずいた。
「わかっているわよ、大丈夫、無理よね」
「なんとか抜け出せなくもないだろうから、わたしが行こう」
第二皇子が申し出ると、皇妹は鼻で笑い飛ばした。
「たまに、あなたはお馬鹿さんね。あの緑の眼の若者が、わたしたちを信じると思うの？　あの子は竜種なんか信じない、そういう顔をしてるわ。利害が一致する限りは、つきあえるわよ。だけどね、それだけ。また帝国の都合でなにかたくらんでいるんじゃないか、と思われて終わりだわ」
「では、放置しろというのか」
「誰もそんなこといってないわよ。問題は、水害云々だけじゃないでしょう。いつ気を変えるかわからない魔物に、水源の浄化をまかせておくなんて、無謀に過ぎるわ。さて、尚書卿、教えてちょうだい。あの緑の眼の給仕の信頼を、すみやかに得られる人物に心当たりがあって？」
なぜか、その名はするりとヤエトの口からこぼれ出た。
「スーリヤを」
ほかに思い浮かばなかったのだ。

たしか、ファルバーンは、スーリヤに茶の淹れかたを教わったといっていた。彼が馴染んでいるのは北嶺よりも《黒狼公》領の方だ。そして、これも重要なのだが——スーリヤなら恩寵の力を介して、皇妹といつでも連絡がとれる。

立場上、皇妹はこの皇宮を動けないが、竜種の恩寵を持つ者を派遣すれば、皇妹が同行するも同然である。皇妹がみずから心を繋いだスーリヤならば、同調力はきわめて高いはずだ。

「ああ……そうね。あの子なら」

「誰です？」

「伝達官の素養があって、わたしと連絡がとれて、尚書卿の領地にいる、かわいい女の子よ」

「なるほど」

そんな説明で、第二皇子は納得したらしい。いや、単にそれ以上の情報をもぎ取るのを諦めただけだろうか。

「まず、北嶺に連絡して鳥を調達。スーリヤを《黒狼公》領で拾ってシンリールへ。魔物の名を明かしてから、アルハンへ……かわいい子、ちゃんと聞いていた？」

皇妹がふり返るのを見るまで、ヤエトはすっかり忘れていた——そこには、皇女がいた。つまり、皇女の姿をした伝達官が。

「はい、叔母上。北嶺に連絡し、鳥を手配します」

「鳥と騎士よ。口が固くて、現場の判断が必要な任に耐える者を選んでね」

「わかりました。留守居と相談します」
「あなたが中州にいてよかったわ。でないと、自分が行くとでもいいだしかねないもの」
——危険なことに違いはないのではないか？
ヤエトの心を読んだように、皇妹は莞爾（かんじ）と笑んだ。
「中州の砦で戦う相手は人ですもの。まだしも先が読めるし、そもそも、援護が尽きることはないと約束されているのだし。魔物相手の方は、なにが起きるか見当もつかないし、ひっそりと処理しなければならないし、危険の質が違うわ」
——そんなところに、スーリヤを行かせるのか。
よかれと考えてのことだったが、やはり間違っていたのではないか——皇妹と心を繋いでいなければ、さっき、スーリヤの名を出しはしなかっただろう。皇妹も同意はしなかったはずだ。
ふ、と頬に吐息がかかった。皇妹が、ヤエトを覗き込んでいるのだった。おどろくほど近い距離で、皇妹はささやいた。
「……そんな顔をしないで、尚書卿。なにがあっても、あなたのせいではないし、なにも起こさせやしないわ。お願いだから、わたしたちを愚弄しないで」
皇妹の笑みは深く、するどかった。

6

当然のように、ヤエトは人事不省の状態に陥った……らしい。

気がつけば、また同じ部屋に寝かされていた。覚醒と同時にかなりひどい頭痛に見舞われ、なるほど、これのせいで目が覚めたのか、と思う。

——仕込みは完璧。

気を抜くと、呪師の言葉が思い出される。あの赤が、視界の隅をかすめる。

「あれから何日たった？」

「まだ三日です。……失礼ながら、このお尋ねにお答えするのも、三回目です」

「そうか……」

ジェイサルドがそんなことを言うのも、反応を見て、今度こそヤエトが正気付いたかどうかを確認するためかもしれない。ヤエト自身は、それなりに正常な思考ができる状態のつもりだが、確約できるわけでもなかった。なにしろ、この頭痛である。

「薬湯です」

いつの間に準備したのか、ジェイサルドが供するにしては刺激臭の少ない液体が入った椀を示され、ヤエトは老騎士の助けを借りて半身を起こした。

口の中がべたついているせいか、味は、まったくわからない。苦労して流し込んでいると、視界の

隅に伝達官の姿が映った。いつものように静かに、とくに表情もなく座っている。
——皇女は無事か。
安堵の息を吐き、ヤエトはジェイサルドに尋ねた。
「今、どうなっている」
「シンリールで魔物の名を探し当て、アルハンに向かった、とは聞いております」
「そうか……」
寝ているヤエトにこまごまと教えてくれるほど、皇妹も暇ではないということだ。意識を失わなければ逐次報告が得られたのだろうとは思うが、三日も寝ていたのだ。魔物の名が発見されたとわかっただけでも、上等である。
しかし、名さえわかればそれで解決、という話でもないはずだ。
アルハンの地下で待ち受けているのは、三本角の魔王だけではないかもしれない。そういえば、ヤエトが預言者とともに訪れたときも、魔物の姿はあった。
——あの襲撃は、計画の露見を恐れた呪師の仕業だったのかもしれない。
皇妹や第二皇子まで姿を見せたのだ、問題の呪師がアルハンに潜んでいたのなら、さぞ焦ったことだろう。預言者がファルバーンに提示した、母の行方を追うなら……という言葉の真実味も増す。今でなければ意味がないとは、元王妃がその場にいたという意味だったのだ。あれだけの騒ぎがあれば、呪師はより深く、慎重に身を隠すだろう。容易には再会もかなわなかったに違いない。

元王妃の奇妙な置き手紙は、魔物を産み落とすため――本人は奇跡の子と教えられていたのだろうが、実際には、神の奇跡ではなく呪師の術によるものだったのだ――地下へ隠れることを示していたのだろう。おそらく、自分は人の世界を離れるという暗示でもあったに違いない。

呪師といえば第三皇子に仕えているものとしか想像しなかったが、ほかの可能性も考えるべきだった。自分の想像力の貧困さを呪いながら、ヤエトはジェイサルドに尋ねた。

「アルハンの地下は、どういう状態なのだろう」

「あのときの戦闘で壁の一部が崩れ、地上に退却した後は、暫く、出入りも困難になっていたとか。殿をお探しするため、捜索隊が送り込まれたそうですが、補修工事をしてもすぐにまた崩れてしまい、今もまだ危険な状態だと聞いております」

「……それも、呪師のしわざだろうか」

「大いに、あり得ることだとは存じます」

叩き付けられた、あの憎悪を想起し、ヤエトは額に手を当てた。思いだしたくないものを思いだしたせいで、頭痛がひどくなってしまった。

侵略者という言葉を、久しぶりに聞いた、と思う。そういう立場であることを、忘れてはいないつもりだったが、それでも実感が遠のいていたことを知った。

帝国の統治に文句を唱える者は、さほど多くなかった。皇帝は、沙漠を渡り終えてからは、可能な限り穏便にことを進めた。殺し尽くして来たという事実は、沙漠のこちら側の人々を――とくに情報

に通じた支配者層を震え上がらせていたため、実力行使が必要な場面は少なかった。領土の大部分を占める旧南方王国の藩王たちを、当初はそのまま安堵したのも大きい。施政方針だけは帝国に準じるよう指導、監督官による査察を入れ、是正がなされない場合は藩王からその地位を剝奪……といった流れで、徐々に除いてはいるのだが。

民からは恨みもあまり買わず、不正がはびこっていた藩王の治下より住みやすいという評もあるほどで、侵略王朝にしては、奇跡的なまでにうまくいっていたのだ。

だが、だからといって不満を持つ者が存在しないわけではない……。

――三の君のところに出入りしている呪師は、どうなのだろう。

同じように考えているなら、第三皇子との化かし合いになる。かなり大変そうな勝負だが、今は第三皇子の身を案じている場合ではないし、そんな義理もない。

大きく息を吐き、ふたたび身体を横たえながら、ヤエトは思い起こしていた。

――わたしたちを愚弄しないで。

そういわれても、案じないわけにはいかない。自分に責任がないと思うことも、不可能だ。

しかし、魔物を相手になにができるというのか。呪師が第五皇子に語った言葉のいくつかは、あきらかに偽りであろう。皇子が名を呼べば意のままになるという契約など、呪師は魔物の召喚に織り込んではいない。

自分は混乱しているのだ、と思う。できることといえば、心を落ち着け、見落としがないかを冷静

に考えながら、待つことだけ――そんなことはわかっているのに、できない。

どうせ顔には出ていないのだろうな、とヤエトはなんとなく不満に思った。皇女あたりに見られたら、ちっとも動じておらぬではないかと詰られるに違いない。ひどい誤解である。吐きそうなほどの恐慌を来しているのに。しかも、吐いてもただ体調が悪いだけだと思われるに決まっているのだ。

また、少し寝ていたようだ。そっと揺り起こされて、気がついた。

「殿、皇妹殿下より、危急のお知らせです。上階へ、移動していただきます」

御免、と声をかけられると同時に脇の下に手を入れられ、布団から引きずり出された。見れば、ジェイサルドの背中が寝台のすぐ横にあって、どうやら老騎士は膝をついて待っているらしい。背負われろ、ということのようだ。

ヤエトがおとなしく背負われると、ジェイサルドはすぐに立ち上がり、歩きだした。走っているといってもいい速度だが、背中の荷物であるヤエトに揺れが伝わらない。つまり、上下左右のどちらにも、ほとんど揺れないまま運ばれている。現実味がなさ過ぎる動きである。実は、これは夢なのかもしれない。夢であってほしいと思う。

――魔物を抑えそびれたのか。

皇妹が上階への移動を指示したのだから、そうだろう。用心は必要という判断かもしれないし、そうであってほしいが、性格が性格なので、ヤエトの想像はどんどん悪い方へと傾斜していく。

スーリヤの身に、なにかあったのではないか。ファルバーンも一緒にいるなら、魔物の暴虐を看過

はしないだろう。水の支配権をもぎ取ろうとして、彼の身にも危険が及ばないとも限らない。元王妃だとて、産み落としたものが神の奇跡などではなく、魔物だと知ったら……。

視界の端を流れ去って行く景色から考えると、ジェイサルドは階段を駆け上っているようだ。相変わらず揺れないので、移動の実感は、まるでない。

やがて視界が明るくなった。塔の屋上に出たと気づくまでに、少しかかった。

――ここまで高く上らなくても。

思ったことを、そのまま口にしなかったのは、今さら過ぎるからだ。労をねぎらうどころか、否定するような言葉を、伝えるべきでもない。

それは呑み込んで、ヤエトは尋ねた。

「現状は？」

大雑把過ぎる質問ではあるが、ほかにどう訊けばよいかもわからない。

「邸には報せをやりました。使用人一同、大塔に退避させるよう、伝えてあります。皇宮からは騎士を出し、大河氾濫（はんらん）の気配ありと報じて、民にも避難をうながしているとのことです」

ラングールは塔の都である。上ろうと思えば、塔はいくらでも建っている。高さや堅牢（けんろう）性に多少の差はあるが、どこにも逃げ場がないより、ましであろう――そもそも、こんなにも塔が多いのは、ここが大河のほとりに開けた都市だからなのだ。ラングールという名自体が、南方の言葉で塔を意味するらしい。

帝国がラングールを首都に据えてからも、小規模な洪水はたびたびあった。魔物一匹で、それがどこまで大きなものになるかは予測がつかないが。

「下ろしてくれ。逃げ遅れている者がいないか、見て来なさい」

「しかし――」

「ここにいれば、わたしは安全だ。おまえの力が必要なのは、ここではない」

ジェイサルドは無言でヤエトを下ろし、屋上の縁を囲む石壁にもたれかけさせた。ヤエトは頭を巡らせ、矢狭間から下を覗いてみたが、見える範囲には人影はないようだった。

彼のかたわらに片膝をつき、老騎士は静かに告げた。

「ここより下は、階段を上る者でいっぱいです。適宜、監視を置いて抑えねばならぬほどです。そうしなければ、上る者の勢いで屋上の縁から人がこぼれ落ちることになります」

「だが、上れなければ――」

「階段自体を、現在、封鎖しております。ある程度の高さまでは上がらせましたが、そこより下は無人にしてあります。過去の洪水で届いたことがあると伝わる高さより大人ふたりは立てる余裕をもって到達水位を想定し、そこより上の階段にだけ、人を入れてあります。少なくともこの塔は、救い得る限りの人を救えるよう、手配しました」

「……そうか。よくやってくれた」

ほかに、なにがいえるだろう。自分が寝ているあいだに、ジェイサルドは最善を尽くしてくれたの

だ。ヤエトが手配するより、ずっとうまくやっていると思う。
不意に、自分がここにいる理由がわからなくなった。
――なんの役にも立たないばかりか、ただの足手まといではないか。
目蓋の裏に、皇女の真面目な表情がよみがえる。
――そなたの判断で民を守れ。
すぐに都を離れた方が、ずっとよかったのではないか。役者を雇って人気の台詞でも口にさせ、尚書卿が先導すると告知を打てば、それなりの人数は同行しただろう。烏合の衆となり、各所に迷惑をかけはしただろうが、それでもだ。どうせ剣も持てない、戦えない、そればかりか邪魔になるだけなのだ。はた迷惑な自己満足のために我を張って、結果がこれだ。
なさけない、と声に出さずにつぶやいたはずが、ジェイサルドの耳にとまったらしい。
「殿、儂は殿がお望みになると信じたからこそ、手配したのです。おわかりいただけますか」
重たい目蓋を開けると、ジェイサルドの真剣な顔が間近にあった。
低い声で、老騎士は言葉をつづけた。
「民が死ねば殿が悲しまれるだろうと思えばこそ、多くを救おうと尽力いたしました。殿にお仕えしているのでなければ、儂は指一本動かすことはなかったでしょう」
思わず、ヤエトは尋ねていた。
「おまえはもう人ではないのか、ジェイサルド？　人が死んでも平気なのか」

率直過ぎる問いに、老騎士もまた言葉を飾らず答えた。
「儂が人であるか否かは、わかりません。人が死んでも平気かと問われれば、もとより気にとめたことなどないのだと、お答えするしかないでしょうな。殿はお忘れかもしれませんが、儂は、たくさん殺して参りましたし、そのことに、後悔も自責の念もございません。必要がなければ、救うこともしないでしょう。儂が誰かを救うとき、そうさせているのは殿なのです。儂のしたことを善しとしてくださるなら、どうか、末永く殿にお仕えできるよう、御身御大切になさってください」
「……ずいぶん重大な使命を背負わされたものだ」
思いついたままを口にすると、ジェイサルドは微笑んで答えた。
「それが、主君になるということです」
「なるほど」
彼の笑顔を見るのは、久しぶりかもしれない、と思った。
人でなくなっても、ジェイサルドは笑いを失うことにはならないだろう——それをなにかの救いのように感じつつ、ヤエトは大きく息を吐いた。頭痛はずいぶん遠のいているが、隙あらば復活せんと様子を窺っている気配がある。
「公子は？」
「確保してあります」
倒れているあいだに、なにかあったのだろうか。ジェイサルドが、説明を追加してくれた。不審の

念が表情に滲んだに違いない。
「お部屋におられなかったので、ここまでお連れすることはできませんでしたが、部下が身柄を確保していることは確実です。ご安心ください。公子にとっては幸いだったかもしれません。殿のお加減を鑑みず、暴言でも吐かれれば、わたしがうっかり、塔から突き落としかねませんので」
「……それは危険だな」
「かなり危険です」
「王にお会いしたいとでも口走っているのか」
「姫様を、早く皇宮にお連れしろ、と」
気もちはわからないでもない。ヤエトだって、命じてそれがかなうなら、と思う。
そして、不意に気がついた。
「王はまだ砦に？　中州の砦には、塔が……」
「ございます」
たしかに、あるにはある。だが、この塔とは比べるべくもない。戦が始まったときに遠望した限りでは、軍船に隔てられれば見えなくなる程度の高さであるに過ぎなかった。
いざとなれば鳥が使えはするが、皇女が自分だけ逃れる道を選ぶだろうか。
――一緒にいるのは、誰だ。
皇女を気絶させてでも鳥に乗せ、上空に逃がしてくれ、とヤエトは希った。一瞬、頭痛も気もち悪

さも完全に忘れるほどに、全身全霊で祈った。

こんな馬鹿なことで死なれるなんて、冗談ではない。そんな結末を迎えるために、身を粉にして仕えて来たわけではないのだ。粉どころか、何回死にかけたことか。ただでさえ死にそうなのに、皇女の副官になったおかげで、無駄にその回数が増えたのは確実だ。やたらと苦労させられて、それでもうっかり生き延びているのだから、皇女はその責任をとるべきだ。

なるほど、と不意に納得した。

――ジェイサルドがいっていたのは、これか。

主君に先に死なれるわけにはいかない。……実感してしまった。

「ヤエト」

不意に、皇女の声がした。

はっとしてそちらを見ると、紫の衣の裾が見えた。それが、ちらちらと揺らいでは黒い靴と入れ替わり、また戻るのをくり返している。

ジェイサルドが立ち上がって後ずさり、今まで老騎士が俥(かしず)いていた場所に、皇女がひざまずいた。そのまま、ヤエトの手をとる。

「死ぬ気ではなかろうな」

いきなり、そんなことをいわれた。

「死ぬ気があったら、おとなしくここまで運ばれません」

それよりも、皇女は大丈夫なのか。
見かけはどうあれ、ここにいるのは伝達官だ。だから、ここにいない皇女の身になにが起きているのか、これから起き得るのかを知りたい。そう思いながら、ふたたび口を開いた。
「おそばに控えているのは、誰です」
「タルキンだ」
――よりによって、皇女にやりたい放題やらせる小僧か。
皇女が眉根を寄せた。
「大丈夫か、ヤエト」
「絶望のあまり、死にそうです」
「死ぬ気はないと申したではないか」
「我があるじが軽々に命を抛(なげう)つようなお心づもりでいらっしゃるならば、わたしもそれに倣います」
「ああ、それは案じずともよい。わたしは誰より安全だと思う」
ヤエトは眼をしばたたいた。これは、夢ではないのか。それか、皇女が適当なことをいっているかだが……恩寵の力を使っている以上、あからさまな嘘はつけないはずだ。
「それは――」
「安全だが、安全を確保するためには、決断が必要でな。少し、そなたの声が聞きたくなった」
「すぐに、ご決断を」

「あわてるな。偵察の話では、水が来るまでには、まだ時間がある。物見の報告は、陛下と同時にわたしのところにも届くのだ。わたしが決断せずに済むよう、陛下も心をくだいてくださっている」
ヤエトがゆっくり息を吐くと、皇女は首をかしげて尋ねた。
「なぜ、ため息を？」
「あわてるなとの仰せでしたので、深呼吸をしただけです」
「なるほど」
おかげで、少しではあったが、頭がはっきりした。
「安全なのに、危険な決断なのですね」
皇帝が、皇女に決断を避けさせようとしているのだから、間違いない。
「……そういうことに、なるかな。我が身の安全は決まるのだが」
「危険を前提では、安全とは申せません。御身のご安全は、タルキンに殴らせて確保してください」
「なんだそれは？」
「殴ってでも鳥にお乗せしてお逃がしせよ、とタルキンに伝えていただきたいのですが」
「それはな、おそらく、ルーギンによく含められていると思うぞ」
同志よ、と叫びたいところだが、生憎（あいにく）、肝心の同志はここにはいない。ここにいなくても、せめて皇女のところにいてくれればよいのだが、そこでもないようだ。
「彼は今、どこに？」

「叔母上の護衛をたのんだ」
馬鹿かこの小娘は。なぜ、自分のところに来させないのだ。
「王よ……それは、気前が良過ぎます」
「叔母上は、臨の状態で、休みなくはたらいておられる。誰かが伯母上のお身体をお守りせねばならぬ。騎士団も、戦のため一の兄上の指揮下に編入され、自由には動けないと聞いた。それゆえ――」
「陛下の部下から、お借りすればよいでしょう。王の乏しい戦力から、それも将軍を引っこ抜く理由にはなりません。今すぐ、呼び戻してください」
「だって」
――だって？
珍しい接続詞を聞いた、と思っているあいだに、皇女は彼の手をとった。そして、思いつめた表情でその手を見下ろし、つぶやいた。
「……だって、声を聞いたり、こうして手を握れたりする相手が、叔母上にも必要だ」
――それはどうだろう。
あの皇妹が、そんなかわいらしいことを口走りはじめたら、裏がありそうで怖い。なにしろ、へたに心配しようものなら、愚弄と見做されてしまうのだ。
それにしても、そんな命令に応じるルーギンもルーギンだ。皇女がどんな手段をもちいたのか、あとでじっくり確認すべきである。

「とにかく、タルキンでは不安です。奴には、王の理不尽なご命令に従ったり、御身を第一に考えるのを忘れたりしたという、けしからぬ前例があります。もっと容赦なく御身をお守りする者を、今の内に呼び寄せてはいただけませんか」

「タルキンは信用がないのだな」

むしろ、信用ならないのは皇女なのだが、反発されないように伝えるのは難しい。

「……王がほんとうにおひとりでいらっしゃるなら、逆に、安心できるのです。ですが、砦には兵もおりましょう。それを捨て置いても逃げてくださると、確信できません」

「なるほど」

「なるほど、ではございません」

「そなたも以前、申したことがあるな。無駄死にする気はない、と。それと同じだ。わたしだとて、無駄に死にたがっているつもりはないのだ。信じてくれぬか」

「無駄かどうかは後でいいですから、さっさと殴られて気絶して鳥に乗せられてください」

「……乱暴だな。ここには、わたしを殴るような不届き者などおらぬし、わたしもおとなしく殴らせる気はない。そんなに殴りたければ、そなたがここへ来ればよい」

「畏れ多くも、わたしが王を殴ろうとしたとしましょう。どうなるとお思いですか？」

「どうなるのだ？」

「突き指します」

「突き……」
皇女が絶句したので、ヤエトは自分の発言に信憑性を持たせるべく、言葉を継いだ。
「ルーギン殿が、誰かを殴っても突き指するのがせいぜいだから、やめるようにと」
「……まぁ、突き指で済めばよいな」
「それに、王は皇妹殿下をしばき倒すというご予定がおありのはずです」
「うん、そんなのもあったな」
「王ならば、突き指はなさらないでしょう」
「それは自信がある」
「では、無事にお戻りになって、皇妹殿下をしばき倒してください。それから、おとなしく、わたしに叱られてください。可及的速やかに、お願いします」
妙な音がしたと思ったら、皇女がふきだしていた。こらえかねたのだろう、大声をあげて、皇女は笑いだした。
「おかしいだろう、なにか、いろいろと」
「おかしくてもなんでも、王に死なれると困るのです」
「今度こそ、隠居できるかもしれんぞ」
皇女はおもしろそうだが、ヤエトはもう、うんざりしていた。だいたい、声を出すだけで疲れるのに、なんでこんなに喋らねばならない羽目に陥っているのだ。

こうなったら、実力行使しかない。
「いや、隠居はもうしているらしいので、これ以上は無理でしょう。致し方ありません、これより突き指しに参ります。ジェイサルド、わたしを王のところまで連れて行ってくれ」
「待て、ジェイサルド、この男は今、正気ではない」
皇女の声が、少し慌てたものになったので、溜飲が下がった。ジェイサルドの方は、淡々としたものである。
「それは承知しておりますが、これ以上、押し問答をつづけられては、殿の御身に障ります。それくらいでしたら、いっそ、お連れした方が……」
本気のようだ。できるのか！　と尋ねたいところだが、できます、という答えが来そうで怖い。
皇女も、同じことを思ったのではないだろうか。
「わかった、もう喋らせぬ。ただ、……もう少しだけ、手を握っていてもかまわぬか」
「それだけでしたら」
勝手に許可されてしまった。
「王――」
「そなたは黙れ」
ぎゅっと握って来た手は、ひんやりとしていた。緊張しているのだろうか。
俯いた顔も、心なしか、こわばっているように見える。頬がまた、少し削げたようだ。大人の輪郭

になりつつあるために、少女らしいやわらかさが失われたのかもしれない——皇女ももう十六歳だ、出会った頃と比べて変わるのは当然だ。

それでも、まだ子どもだ、とヤエトは思った。皇帝に、訴えたかった。信じていないとほざいておいて、娘になにを背負わせるのですか、と。

なにを、皇女は選択させられようとしているのだろう。

——禁忌を課されても、聞いておくべきだったか。

わずかに迷いが生じたが、それは今は考えるまいと思った。必要なら、いずれ皇女から聞かされることになるだろう。あるいは、そんな日は来ずに終わるかもしれない。

今、皇女に必要なのは決断力でもなく、決断を左右するための知識でもない。心の支えだ。

ヤエトのように、ぐんにゃりした男がその役を果たせるのかどうか、本人は非常に心もとないのだが、皇女には彼で十分らしい。それなら、黙って信じるしかないではないか。

皇女を。その判断と、行動を。

「大丈夫です、あなたは正しい……」

くちびるを動かすだけで、音を乗せずに、ヤエトは皇女の名を呼んだ。一瞬、皇女の顔が歪んで、それから引き締まったものになった。

「無論だ。わたしには、諫めてくれる臣がいる。間違っていようはずもない」

諫めても聞かないくせに、皇女は堂々と宣言した。ここまで悪びれていないと、いっそ清々しい。

暫し、屋上には風の音だけが残った。
戦況はどうなっているのだろう。案じねばならないのは、魔物だけではない。第七皇子の水軍も、その攻勢をまず引き受ける形になった中州の砦にとって、十分以上の脅威である。砦の兵たちが、今のヤエトたち同様に高所に上ってしまえば、防戦も困難になるのではないか――そう考えていたとき、上空を、黒い影が過った。
はっとして身体を捻り、影が飛び去った方を視線で追う。鳥だ。
だが、戦うには数が少ない。高空から打ち込む矢の威力がどれほど高かろうと、あの数では劣勢をくつがえすことはできないのではないか。
ヤエトの動きで察したのだろう、皇女も視線を上げて鳥を見、低く告げた。
「消火のために、呼んだ。火矢を射かけられているのでな」
皇女の逃走手段として用意されたわけではない、当然だ。あれにルーギンが乗っていて、皇女に当て身を食らわせた上で、ここに配達してくれればよいのだが、それはあり得ない。
「消火……ああ、氷を落とすのですか？」
もうじき水浸しになるかもしれないのに、燃やされる心配をせねばならないとは。皮肉な話だが、水が来るのを座視して待つわけにもいかないのは、自明である。増水しても確実に逃れ得る鳥たちならば、増援として適切だろう。
「そうだ」

不気味な音が聞こえてきたのは、そのときだ。

もっと前から、実は聞こえていたのかもしれない。だが、ヤエトが気づいたのは、皇女がうなずいた直後だった。

それが水の音であるとわかったのは、暫くたってからだ。轟々と響くその音は、次第に大きさを増して、やがて大気をはげしく震わせながら、都に達した。

気がつくと、ヤエトは身を捻り、大河を見ていた。皇女もまた、彼の横から大河を見守っていた。おそらく、屋上にいる全員が、音のする方向を見守っていた。

大河は今や水の壁だった。高く立ち上がった水は、それ自体が異界の存在であるかに思われた。ただの水ではないことは、一目瞭然だった。

その水は大河の幅を一筋たりとも変えることなく、ただ高く、高く、伸び上がっているのだ。水煙が一帯を覆い、雲が地上に降りてきたようでもあった。空もまた、地上を映す鏡であるかのように乱れていた。逆巻く雲は、青灰色から黄味がかった鈍色までさまざまに色を変えながら天穹（てんきゅう）を覆い、凄まじい速さで流れていく。

あたかも世界の終わりが訪れたかのような情景である。

だが、その水は都を襲わなかった。

海賊王たちの軍船だけを、水は的確に狙い、覆した。轟音とともに崩落した水の壁は、何本もの腕を持つようだった。水の腕は船を高々と持ち上げ、叩き潰した。



水音が激し過ぎて、ほかに聞こえるものはなにもない。これだけの光景を見て誰も悲鳴をあげないはずがないのだが、声という声は、いや、声に限らずすべての音が、水音にかき消されてしまっていた。軍船が砕かれる音さえ、しなかったのだ。なにもかも、水音に呑み込まれた。何回も、水は船を潰した。浮かび上がる破片を捕えては、くり返し、潰しつづけた。咀嚼しようとしてでもいるかのようだった。

少しずつ低くなる水の壁の向こうに、やがて見えた中州の砦は、乾いた色のままだった。低い塔の上を、鳥たちが旋回している。煙の筋もいくつか、たなびいていた。

ヤエトはかたわらの皇女を見た。決然とした横顔は、この光景のすべてを胸に刻み込もうとしているかのようだった。

やわらかいな、と思った。皇女の心は、若い。それゆえに、柔軟性がある。ヤエトにはもう、これを受け入れられない。硬直した彼の精神は、自分が見ているものを否定したくてたまらなかった。あまりにも非現実的で、夢をみているようにしか思えない。

水音が笑い声のように聞こえたのは、さすがに現実ではないと思いたいが、どうだろう。波頭にかがやく銀の泡のあいだに、人影のようなものが見えたのも——距離を考えればあまりにも大きく、不自然なほどくっきりとした輪郭をそなえたそれは、呵々大笑しつつ、波頭から波頭へと渡り歩いていた。のけぞらせた頭には、ねじれた角が見えた。

ここまでの経緯を考えれば、あれが三本角の魔王と呼ばれる魔物なのだろうと理解すべきなのだが、

なにもかもが、圧倒的に過ぎた。真帝国の基盤をおびやかすに足る軍勢が、わずかのあいだに塵芥に帰してしまったのだ――たった一匹の魔物のせいで。

にわかには認めがたかったが、同時に、来るべき危機の大きさが身に染みた。魔界の蓋が開くのを看過してしまえば、これが日常になりかねないのだ……。

その段階になっても、水は大河の幅を変えていなかった。はみ出さないまま動きつづけて、巨大な水の壁はやがて大きな波になり、それも静まって、やがていつも通りの大河に戻った。

いつの間にか、魔物の姿も消えていた。

「……終わったな」

皇女はつぶやくと、ヤエトの手をはなして立ち上がった。急に強くなった風が、皇女の髪を散らした。雲間から射す光が、その小柄な輪郭を黄金に燃えたたせていた。

――やはり、夢なのではないか。

皇女は邪魔そうに手で髪を払うと、顔を上げて遠くを見た。

「わたしは砦に戻る。思う存分、突き指しに来るがよい。タルキンを迎えにやる」

そのまま、皇女の姿は薄れて消え、後には憔悴した伝達官が残された。そのまま頽れそうになった彼女を、あやういところでジェイサルドが支えた。

気が抜けて、少しばかりヤエトは意識を失っていた……と、思う。自分では、よくわからない。我に返ったときには、タルキンとジェイサルドが口論していた。どうやら、ジェイサルドが鳥に同

乗しようと頑張っていたようだが、タルキンはジェイサルドには厳しい。無視して自分のやりたいことをやった。つまり、ヤエトだけを、中州の砦へ運んだのだ。

攻め手が姿を消した後も、火はくすぶりつづけており、守備兵たちは消火に追われていた。一方で、敵軍の生き残りを探して救い上げようと、大河に竿を差し入れている者の姿もあった。破壊の規模を考えれば、漂流物は少なかった。人の姿もほとんど見えない——生死にかかわらず。

「歩けますか」

「試してみるよ」

「……背負いましょうか？」

ヤエトはタルキンを見下ろした。そして、前ほどは、頭の高さが違わないと感じた。成長しているのは皇女だけではないのだ——もっとも、皇女は身長の方はあまり伸びていないようだが。

「難しいだろう」

「快適に、とはいかないかもしれません。ですが、お運びすることはできます」

「……肩を貸してくれるだけでかまわない。王はどちらに？」

タルキンにかなり体重を預けて、ヤエトは砦の内部を歩いた。道順を覚えるのは、すぐに諦めた。どうせ無駄である。

下り階段の前に案内されたときには、目を疑った。

——まさかとは思うが……。

「王は、ずっとこちらに？」
「はい」
塔に上らなかったどころか、地下にいたというのか。
ヤエトは凄まじい衝撃を受けた。実際に誰かに殴られたのと変わらないほど、つまり頭に血がのぼったのかそれとも引いたのか、とにかく平衡感覚が失われて身体が傾ぐほどのものであった。はじめからタルキンに寄りかかっていたのでなければ、間違いなく倒れていただろうし、運が悪ければそのまま階段を転がり落ちていたはずだ。
これは、突き指の危険をおかしても、どついておくべきではないのか。しかし、おとなしく、どつかれてくれるとも思えない。そもそも本人が、おとなしくしていないと宣言済みである。不毛だ。
そんなことを考えながら下りていくと、ほどなく階段は終わった。
地階はかなり広く作られていたが、天井は低く、身を屈めねばならないのではないかと感じるほどであった。実際には、ヤエトが背筋をのばしても問題ない高さがあるが、圧迫感は凄まじい。柱の数も多い。そのすべてに砕いた陶片が貼りつけられており、明るければ、おそらく美しい文様が浮かび上がるのだろうと想像できた。
だが、実際には暗い。
ヤエトはもちろん、タルキンも、なにも灯りを持っていなかった。それでもまったくの暗闇ではないのは、林立する柱の奥に、光源があるからである。

「お連れしました！」
タルキンがひと声叫ぶと、即座に皇女の声が応じた。
「ご苦労」
それだけで、動く気配はない。
少し迷うように、タルキンはヤエトを見上げた。
「姫様は、あちらでお待ちです。おひとりで、大丈夫ですか？　早く、鳥のところに戻ってやらないと……火がまだ消えていないので、不安がっています」
「行きなさい。鳥にも、ありがとうと伝えてくれ」
「はい」
タルキンは、すぐさま身をひるがえした。その背を見送る余裕もなく、湿った空気をかきわけるように、ヤエトは歩きはじめた。柱から柱を伝うように。なにしろ暗いので、注意深く、ゆっくりと。
業を煮やしたらしい皇女が彼を呼んだ。
「どうした。大丈夫か」
「今は。つい先ほど、かなりの衝撃を受けましたが」
「うん？」
「まさか、水面下にいらっしゃるとは、思いもよらず」
皇女の笑い声が聞こえ、同時に、姿が見えた。

ひときわ太い柱に囲まれたその場所は、さらに一段低くなっていた。中央に、皇女の腰ほどの高さの台座がある。大きさは、寝台程度といったところか。石造りの台座の表面には、やはり砕いた陶器の破片が無数に埋込まれていた。沙漠の都市に見られる祈りの文様のように幾何学的ではなく、混沌そのものの螺旋と渦。曲線が絡み合う意匠は、あきらかに南方の古い時代のものだ。十分な光量があれば、さぞ美しいのだろう。だが、今は表面の凹凸と、わずかな色の違いが感じ取れるのみである。

皇女はその台座の前に立っていた。

先ほどまで、臨の姿で視えていたのと同じだ。しかし、表情は少し冴えない。おそらく、気が抜けて、疲れが表面化したのだろう。怪我などはないようだが、精神的な負担は、かなりのものだったに違いない。なにしろ、あの凄まじい大河の有様を見ていたあいだ、その身は砦の地下にあったのだ。

――勘弁してくれ。

知らなくてよかった、とヤエトは思った。知っていたら、自分の精神状態がどうなったかを考えると、恐ろしい。そして同時に、知らなかったことを呪わずにいられなかった。ぐったりしている場合ではなかったのだ。皇女を説得し、なにがなんでも高所へ逃げさせるべきだった。本気で論を戦わせることもせず、あっさり諦めてはいけなかったのだ。

なにかの間違いがあれば、苦しみもがきながら皇女が溺れるところを見ることになっていただろう。彼の目の前で。しかも、塔の屋上で……。

なんと声をかけようか迷い、結局、ヤエトははじめに思いついた言葉を口にした。

「魔物を抑えることは、できたのですね」
皇女は眉を上げた。
「そうだぞ。伝達官を通じて伝えたはず――」
皆までいわず、皇女は口をつぐんだ。ヤエトも、おそらく皇女自身も、なにが起きたかを悟っていた。倒れていた三日間のどこかで連絡が来て、夢うつつに聞き流したに違いない。
「申しわけありません。不調を来していたもので」
「ああ、無理もなかろう。今、自分で歩いているのが不思議なほどだったからな、一時は」
どうやら意識不明になるどころか、死にかけていたらしい。我ながら、いくらなんでも死に瀕し過ぎである。そのくせ死なないあたりも、なにか釈然としない。
気まずさを押しやるように、皇女は早口に言葉を継いだ。
「ただ、あまりにうまくいったので、魔物にたばかられていることも想定しようと、それで避難の指示が出されたのだが……実際、あそこまでのものとは、誰も予測していなかった。あの水の量も、船団を覆したこともそうだが、被害の及ぶ範囲を、ここまで限定できるとはな」
「水の魔物なのですか？」
「詳しいことはわからんが、魔物が、水妖というものを配下に抱えているそうだ。水を動かす力を持っているのはそちらで、魔物はそれに命令する立場、ということだな」
「なるほど……短期間に、よくそこまでわかりましたね」

皇女は、なんでもないことのように答えた。
「三の兄上の呪師に助力させたゆえ、そのあたりは、どうとでも」
「……あの呪師に、そんな力を与えたのですか？」
少なからずおどろいて尋ねると、皇女は首を左右にふった。
「違う、違う。魔物のあるじは、叔母上だ」
もとより力のある存在だった皇妹が、あれだけの実力を見せつけた魔物の支配者となるとは……それはそれで怖いが、呪師の自由にさせるよりは……ましだと思いたい。残念だが、自信はない。
「では、そもそも魔物を現出せしめた――五の君のところに出入りしていた呪師は？」
「始末した、とだけ聞いている」
やはり生きていたのか、と思い、しかしもう生きてはいないのだな、と思う。忙しいことだ。
「魔物を抑えたなら、水も止まると思っていました」
「止めても得にはならない、と陛下が仰せになったのだ」
皇妹も、反対はしなかったのだろう。あの兄妹は、中途半端で満足したりはしない。どうせやるなら徹底的かつ迅速に、だ。沙漠越えが好例である。魔物の狙いを都から船団へ変えるだけなのだし、できるならやる、やるなら後日の機会を待ったりはしない。そして、ひとたび手に入れた力を無駄にすることもないだろう――やはり、魔物の処置を皇妹に託すのは無謀だったとも思うが、そうしなければ、あれが都を襲ったのだ。しかたがないな、とヤエトは思った。

——不可抗力だ。
「スーリヤや、ファルバーンの消息はわかりますか」
「無事だとは聞いているが、これも、仔細はわからぬな」
「そうですか……」
無事、という言葉はあまりに曖昧だ。あのとき、ファルバーンがヤエトに同道することを選ばず、母親を救いに行っていれば——スーリヤと皇妹の心を繋ぐなど、思いついていなければ。こんな大事に巻き込まれずに済んだはずだ。
「どうした。そなたのおかげで皆が救われたというのに、浮かぬ顔だな」
ヤエトは眼をしばたたいた。
「わたしの？」
「そなたの、その……恩寵の力が絡むことゆえ、おおやけにお褒めの言葉を賜ることはなかろうが、陛下もご存じだぞ。都が守られたのは、そなたが呪師のたくらみを暴いてくれたおかげだ。もちろん叔母上も、そなたの手柄だとおっしゃっている」
「……わたしは、寝ていただけです」
「魔物の名も、そうだ。シンリールで探せばよいと思いつく者など、そなたを除いて誰がいよう？」
ヤエトの否定や謙遜を許さない力が、皇女の声にはあった。
——そうか。

ただの役立たずの病人ではなかったのだ。

力及ばぬ部分を後悔するのは、いつでもできる。これからも、そうした考えからは逃れ得ないだろう。だからこそ、認めるところは認めよう。せめて、主君の評価を否定はするまい。

「お役に立てたようで、幸甚の至りに存じます」

「そなたの言葉を借りればな、そなたは寝ているだけでも役に立つ男なのだ。今後も心して養生せよ。それより、今を逃すと、そなたに見せる機会がないと思う。よく見ておけ」

そう告げながら、皇女はヤエトを手招いた。なんだか変なことをいわれた気がするが、そこを追求している場合でもなさそうだ。

皇女の足下にいくつか並べた灯火は、光をもたらすよりも、長く黒い影を作る役に立っているようだった。ヤエト自身も長い影を引きながら、一段下がったところまで下りた。

すると、それまでぼんやりとしか見えていなかった台座の輪郭が、不意に明瞭になった。

ヤエトを見上げ、皇女は告げた。

「用のない者の注意を惹かぬように、術をかけてあるそうだ。それゆえ、滅多なことでは動かせぬ」

見せたいものとやらは、その台座の上に置かれていた。

さっきまで、これも見えていなかった。台座は台座であり、とくになにが置いてある風でもなかったのだ——だが、今やはっきりと見えている。

それは、抜き身の剣だった。

磨き上げられた刃はぎらぎらと光り、ヤエトに強烈な印象を与えた。
「……これは？」
「見ておけ」
まばゆ過ぎて目を向けるのもはばかられる刀身を、ヤエトは無理に凝視した。青鉄だろうか。刀身には、見たことがある文字が刻まれている。
わざわざ見せるからには、この剣こそが、皇女が中州の砦にいた理由なのだろう。帝国にとって、非常に重要なもののはずだ。
――青鉄ということは……。
ひょっとすると、これは神との契約の剣なのではないか？
ヤエトが問うように見ると、皇女は苦笑した。そして、くり返した。
「答えられぬし、教えられぬのだ。許せ」
黙って、ヤエトは視線を剣に戻した。はじめは光だけがまばゆく、刀身の輪郭も曖昧で、目を背けたいという衝動にかられる――が、こらえる内に光は薄れ、次第にその形が見えてくる。そうなると、今度は刻まれた文字が、剣を背景に貶めるほどの存在感を帯びて、ヤエトに問いかけて来る。
読め、と。
見たことがあるといっても、読めるわけではない。字形から、帝国の古い文字とされるものであることは理解できたが、それ以上のことは、なにもわからなかった。



――だが、これが契約の剣なのだとしたら、西の帝国が放っておかないのでは？

契約の剣にどんな力があるのかは知らないが、重要なものであろうとは想像がつく。皇帝がこれを持ち出した裏には、挑戦があったのかもしれない。

取りに来られるものなら来てみろ、と。

いずれ雌雄を決するつもりなのだろうか。だから、あそこまで沙漠の監視に気をつかい、第二皇子に博沙をまかせ、国内よりも沙漠からの敵に注意するように指示しているのか。

――ただの想像だ。

そう思いながら、ヤエトはその剣から視線をそらすことができずにいた。

「これがなんであれ、王の御身を危険にさらすものなら、今すぐ壊してしまいたいです」

「おかしなことを申すな。むしろ、これは我が身の安全を保障してくれよう」

「危険な選択と対になっているはず」

ヤエトの答えに、皇女は小さくため息をつき、これだから、とつぶやいた。

「そなたは手に負えぬな。仔細はいえぬが、ともかく、戦乱の中でこれを失うわけにはいかなかった。術をかけているゆえ、ここから動かすことも望ましくない。動かすなら、我が一族の誰かがやらねばならぬ……と、そういったところだ」

砦が水没の危機にあったからこそ、皇女はここを動けなかったのだ、とヤエトは理解した。

危急の折りには、これを抱いて逃げることが、皇女に与えられた使命だったのだ。

ヤエトがよほど険しい表情をしていたのだろう、皇女は足下に置いてあった灯火をとると、さあ、と彼に差し出した。

「敵軍の主力は壊滅状態だ。水軍もこのあたりには残っておらぬであろうから、わたしの身に危険はない、むしろ案じるべきはそなたの体調であろう。見せるものは見せた、もう行け」

「……王にはまだ、お約束を果たしていただいておりません」

「約束？」

「わたしの理想の国を作っていただきませんと」

「ああ、そのことか。まかせておくがよい。その代わり、そなたもわたしが約束を果たすまで死んではならんぞ」

「最善を尽くします」

答えながら、第四皇子や第五皇子の部下も、そんな夢をみたのだろうか、と思った。自分が仕える皇子が、どんな国を作るか、夢想しただろうか。

今となっては、もうわからない。

センヴェーラ妃だけは、確実に夢をみていた――兄弟が仲良く暮らす、和やかな未来を。

左の袖が重くなった。皇女が、彼の袖を引いていた。

「なにを考えている」

「理由はともかく、偏見なく土地の民を起用できることは、五の君の強みになり得たのに、と」

「……そうだな」
「それと、お仕えするのが皇女殿下でよかった、と」
「え？」
「三の君にあれほどのことをされてもまだ、足を引っ張ろう、呪ってやろう、というお考えはお持ちにならなかった。もし、復讐をお考えになっていれば、どうだったでしょう……今、こうしてご無事でいてくださったかどうか」
そのときは、甘いと思った。だが、皇女が第三皇子になんら報復をなさなかったことは、間違いではなかったのではないか。足を引っ張り合って自滅した双子皇子や、家族の崩壊を食い止めようとしなかったばかりか、それを拗ねて戦にまで発展させてしまった第七皇子とは、比較にもならない。
皇女はなにか答えようと口を開きかけ、そして、閉じた。
そのまま、こくりとうなずいた姿を妙に幼く感じ、ヤエトは苦笑した。
幼いなどというのは、気のせいだ。皇女は成長している。時は進み続け、戻ることはない。死者は地上から消え、これも二度とよみがえりはしないのだ。
「では戻りましょう。王が送ってくださるのですよね？」
「えっ？　いや……うん、そうしたいが、先にここを閉じねばならぬ。いろいろ準備がいるのだ」
「では待ちますので、早くお手配を」
「いや、そなたは加減がよくなかろう、早く皇宮へ戻れ。でないと、ジェイサルドが河を泳いで渡っ

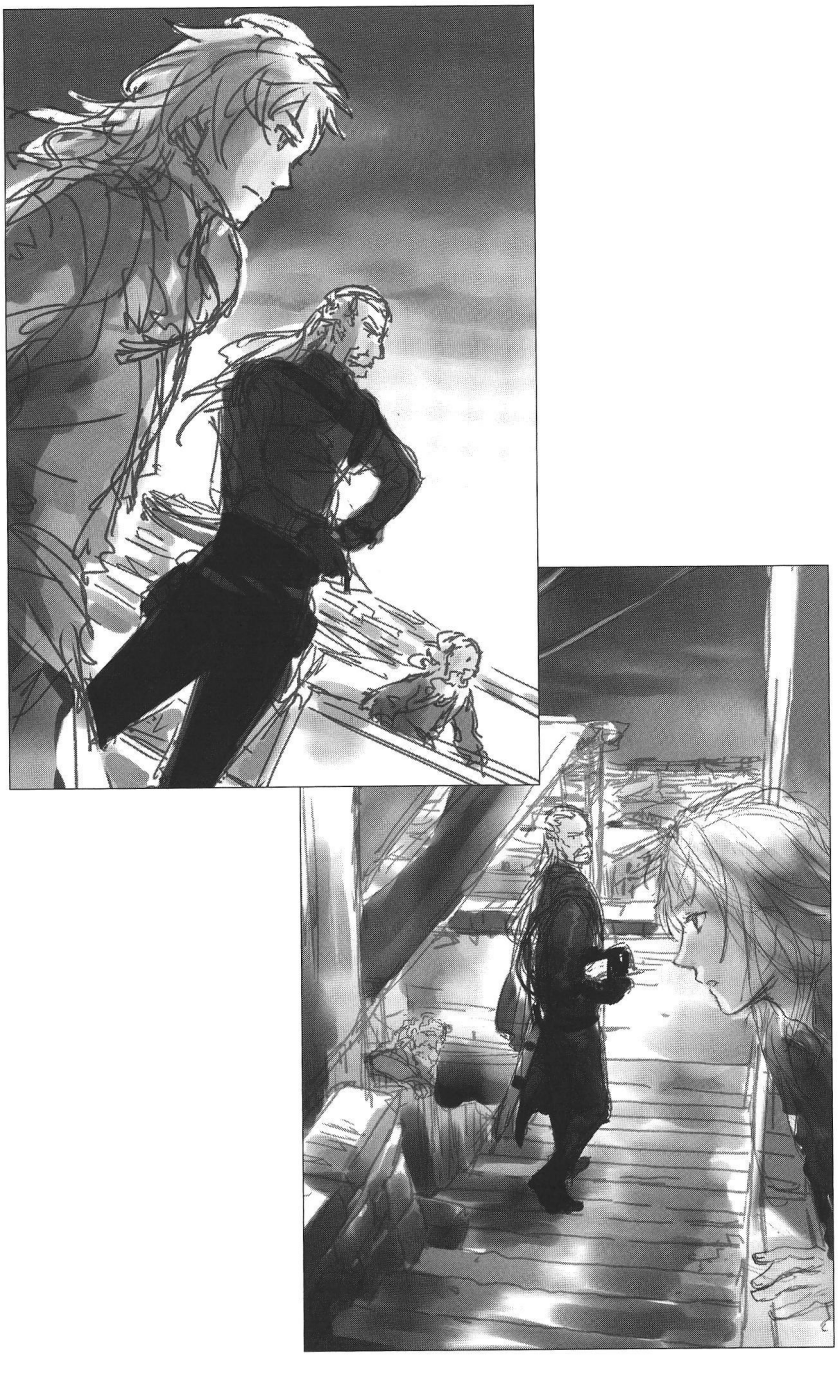
て来るぞ」
「待ちます」
なんとなくではあるが、この場所に、皇女を長居させたくなかった。
「しかし――」
不敬ではあったが、ヤエトは皇女の言葉を遮った。
「わたしが王のお側に侍(はべ)っていても、なんのお役にも立たないかもしれません。ですが、敵の矢や剣に害されておいでではないかと、遠くから御身のご無事を案じるのは、疲れました。生身の王が、生きて動いていらっしゃるのを見ていたいのです。離れたくありません」
皇女はまず硬直し、それから赤面した。
「そなたは……たまに、恥ずかしいことを真顔で申すな」
「たまにでしたら、我慢してください」
「うむ……いや、つまり……ああもうよい、わかった、すぐ手配する。少し待て」
「はい」
とりあえず床に座り込んだヤエトは、ぼんやりと、自分の人生の行く末に思いを馳せていた。
時間こそが、この世を支配するもっとも強く、無慈悲な力かもしれない。
わずかな持ち時間を使い切って、かならず、命は尽き果てる。
だが、その時間が生命を生み、人の絆を育てもするのだ。ほんのひとときかもしれないが、せめて

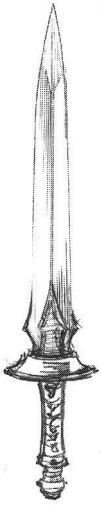
今は隣り合わせた幸運を喜び、ともに生きてみよう、とヤエトは思った。
いずれ、避けがたい別離は訪れるだろうが——せめて、それまでは。

了

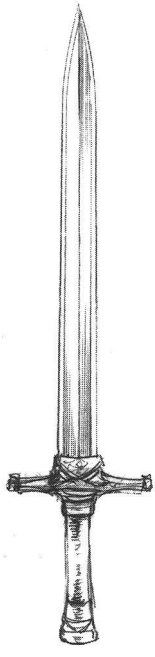




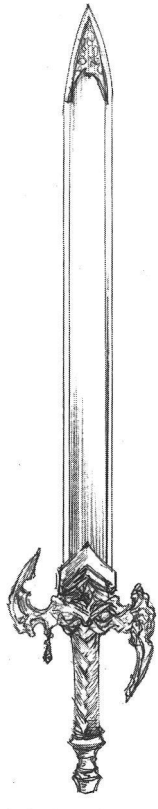




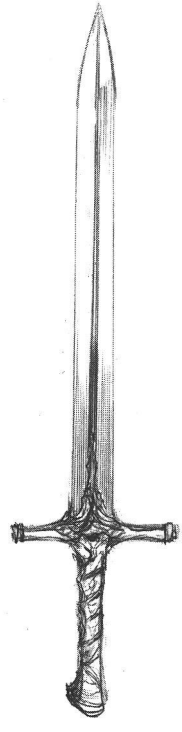
皇女（新年祭）



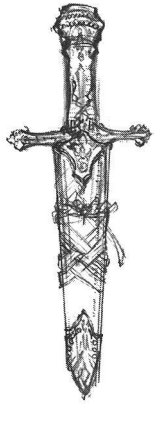
第七皇子



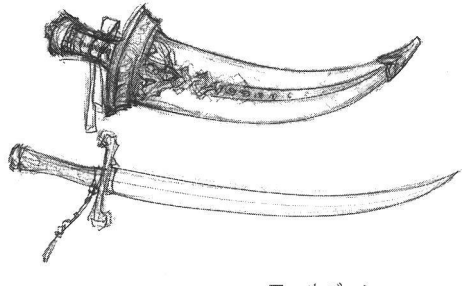
皇帝（第一皇子へ）



ジェイサルド（直剣）



皇女（契約の剣）



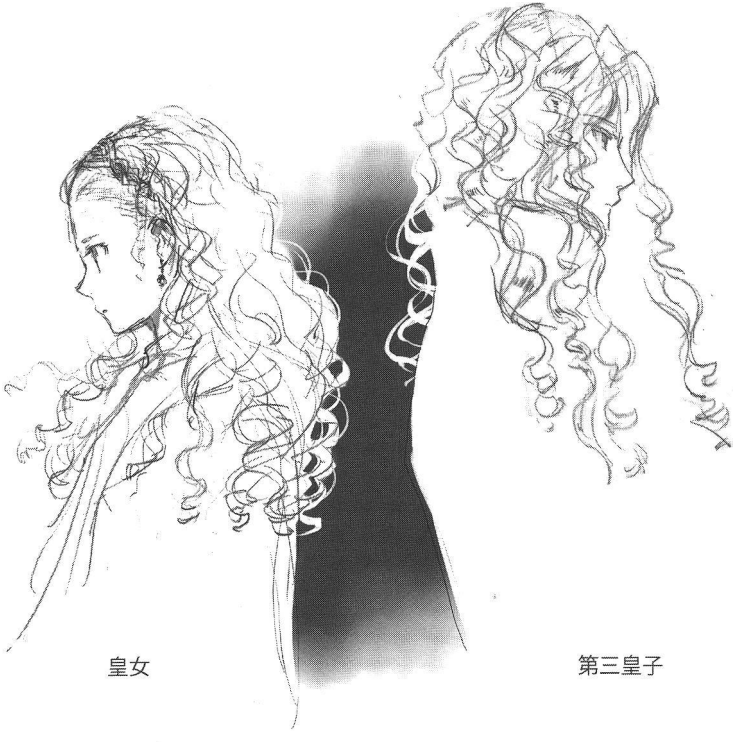
ファルバーン

第七皇子



第六皇子

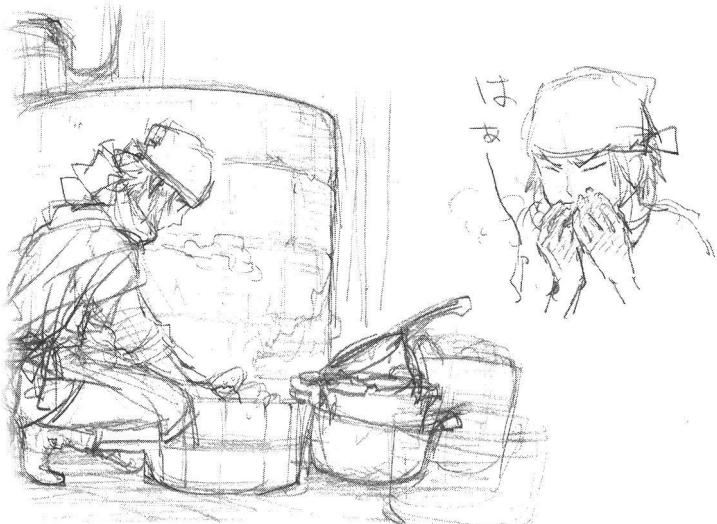




皇女

第三皇子




はぁ


てのひらに
のるくらい
ピヨ
ふくわ～
ドスッ

翼の帰る処（ところ）

THE HOME OF THE WINGS



シリーズ最終作
完結編
２０１４年秋頃
刊行予定！！

妹尾ゆふ子（せのおゆふこ）

三月九日生まれ。神奈川県在住。
漫画家のめるへんめーかーを姉に持ち、アシスタントをつとめる。
白泉社「花丸」にて、小説家デビュー。
「真世の王」（エニックス）、「ロマンシング　サガ―ミンストレルソング―　皇帝の華」（スクウェア・エニックス）、「パレドゥレーヌ　薔薇の守護」（コナミデジタルエンタテインメント）、「鋼鉄三国志　呉書異説」（コナミデジタルエンタテインメント）、「翼の帰る処」シリーズ（幻冬舎コミックス）他

【初出】
「翼の帰る処4 ―時の階梯― 下」――――――― 書き下ろし

翼の帰る処4 —時の階梯— 下

2013年11月30日 第1刷発行

著者……妹尾(せのお)ゆふ子(こ)

発行人……伊藤嘉彦

発行元……株式会社　幻冬舎コミックス
〒151-0051
東京都渋谷区千駄ヶ谷4-9-7
電話 03-5411-6431（編集）

発売元……株式会社　幻冬舎
〒151-0051
東京都渋谷区千駄ヶ谷4-9-7
電話 03-5411-6222（営業）
振替 00120-8-767643

印刷・製本所……株式会社　光邦

検印廃止

万一、落丁乱丁のある場合は送料当社負担でお取替致します。幻冬舎宛にお送り下さい。
本書の一部あるいは全部を無断で複写複製（デジタルデータ化も含みます）、
放送、データ配信等をすることは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。
定価はカバーに表示してあります。

©SENOWO YUFUKO,KOTOKI,GENTOSHA COMICS 2013
ISBN978-4-344-82969-5 C0093
Printed in Japan

本作品はフィクションです。実在の人物・団体・事件などには関係ありません。

幻冬舎コミックスホームページ
http://www.gentosha-comics.net

9784344829695

1920093012003

ISBN978-4-344-82969-5

C0093 ¥1200E

定価：本体1200円＋税
発行＝幻冬舎コミックス
発売＝幻冬舎

